山形県埋蔵文化財センター調査報告書第200集

高瀬山遺跡（HO）3期発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

# 高瀬山遺跡（ＨＯ）３期

## 発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 200 集

２０１２

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

# 高瀬山遺跡（ＨＯ）３期

（たかせやま）

## 発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 200 集

平成 24 年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

高瀬山遺跡遠景（東から）

高瀬山遺跡（ＨＯ）３期近景（南から）

第３次調査Ｊ 15 トレンチテストピットより出土した約１万８千年前の杉久保ナイフ形石器群

第２次調査Ｈ１トレンチＳＸ 241 より出土した縄文時代中期末葉に位置付けられる石器群

# 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、高瀬山遺跡の調査成果をまとめたものです。

高瀬山遺跡は、山形県のほぼ中央に位置する寒河江市にあります。寒河江市は、西に月山、朝日の山々を連ね、北に葉山、南に蔵王連峰を望みます。南部には、山形県内を貫流する最上川が悠然とした流れを見せてくれます。

この度、最上川ふるさと総合公園整備事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、高瀬山遺跡（ＨＯ）３期の発掘調査を実施しました。調査では、旧石器時代・縄文時代・古墳時代・平安時代・中世に属すると考えられる遺構や遺物が見つかりました。特に旧石器時代では、1200点を超える石器群の集中ブロックが検出され、石器製作跡と考えられます。また、縄文時代では、多量の縄文土器や石器とともに、複式炉を伴う竪穴住居跡や埋設土器などが複数検出され、大規模な集落が営まれていたものと思われます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成24年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　相馬周一郎

# 凡　例

1　本書は、最上川ふるさと総合公園整備事業に係る「高瀬山遺跡（ＨＯ）３期」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、速報会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は山形県村山総合支庁建設部西村山道路計画課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　本書の執筆分担は、以下のとおりである。柏倉俊夫、小笠原正道、斉藤敏行、安部実、黒坂雅人、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。

第Ⅰ章　今正幸
第Ⅱ章　今正幸
第Ⅲ章　第１・２節　今正幸　第３節　大場正善
第Ⅳ章　今正幸
第Ⅴ章　第１～３節　大場正善　安部将平　第４・５節　大場正善
第Ⅶ章　第１節　今正幸　第２節　安部将平　第３・４節　大場正善

5　遺構図に付す座標値は、公共座標（日本測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＫ…土坑　ＳＤ…溝跡　ＳＴ…竪穴住居跡　ＳＰ…ピット　ＥＵ…埋設土器
ＥＬ…炉・カマド跡　ＳＸ…性格不明遺構　ＲＰ…登録土器　ＲＱ…登録石器

7　遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。

8　遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。また、石器実測図のうち、黒塗り部分はガジリ痕を表す。石器の接合資料については、写真上に色付き線で製作工程の各段階を区分けし、三角マークで剥離方向を図示した。

9　基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

10　発掘調査、整理作業および本書を作成するにあたり、下記の方々から御指導と御助言をいただいた。（敬称略）

東北大学大学院　佐野勝宏　津南町教育委員会　佐藤雅一

# 調査要項

| | | | |
|---|---|---|---|
| 遺跡名 | 高瀬山（たかせやま）遺跡 | | |
| 遺跡番号 | 206－430 | | |
| 所在地 | 山形県寒河江市大字寒河江字高瀬山 | | |
| 調査委託者 | 山形県 | | |
| 調査受託者 | 財団法人山形県埋蔵文化財センター | | |
| 受託期間 | 平成 20 年 4 月 3 日～平成 24 年 3 月 26 日 | | |
| 現地調査 | 第 1 次調査　平成 20 年 5 月 13 日～6 月 27 日 | | |
| | 第 2 次調査　平成 21 年 5 月 12 日～7 月 15 日 | | |
| | 第 3 次調査　平成 22 年 6 月 1 日～8 月 18 日 | | |
| 調査担当者 | 平成 20 年度 | 調査課長 | 長橋至 |
| | | 課長補佐 | 伊藤邦弘 |
| | | 専門調査研究員 | 槇綾（調査主任） |
| | | 調査研究員 | 今正幸 |
| | 平成 21 年度 | 調査課長 | 阿部明彦 |
| | | 課長補佐 | 伊藤邦弘 |
| | | 主任調査研究員 | 高橋一彦 |
| | | 調査研究員 | 今正幸（調査主任） |
| | 平成 22 年度 | 調査課長 | 阿部明彦 |
| | | 課長補佐 | 伊藤邦弘 |
| | | 調査研究員 | 今正幸（調査主任） |
| | | 調査員 | 安部将平 |
| | 平成 23 年度 | 整理課長 | 斉藤敏行 |
| | | 考古主幹 | 黒坂雅人 |
| | | 調査研究員 | 今正幸（整理主任） |
| | | | 大場正善 |
| | | 調査員 | 安部将平 |
| 調査指導 | 山形県教育庁文化遺産課（平成 20 年度） | | |
| | 山形県教育庁文化財保護推進課（平成 21 ～ 23 年度） | | |
| 調査協力 | 寒河江市教育委員会 | | |
| | 山形県教育庁村山教育事務所 | | |

業務委託　基準点測量業務（第１次調査）　株式会社菅野測量設計事務所
遺構測量及び図化業務（第１次調査）　株式会社寒河江測量設計事務所
基準点・遺構測量及び図化業務（第２次調査）　株式会社寒河江技術コンサルタント
基準点・遺構測量及び図化業務（第３次調査）　株式会社朝日測量設計事務所
空中写真撮影業務（第３次調査）　日本特殊撮影株式会社
遺物実測図化業務（完形土器と縄文石器の一部）　株式会社シン技術コンサル
理化学分析業務（土器の内容物分析　火山灰分析）　パリノ・サーヴェイ株式会社
理化学分析業務（放射性炭素年代測定）　株式会社加速器分析研究所

発掘作業員　明石謙也　阿部賢一　岩田正雄　大泉芳子　大江國廉　大谷健吾　岡崎定由
沖津みさ子　小野隆　工藤貞次郎　後藤勝人　小林正一　佐藤武　渋谷志保子
田中寛一　布川冨夫　布施勝彦　真木義友　松田竹雄　村山良三
（五十音順）

整理作業員　青木昭一　岩瀬順子　加藤道雄　加藤慶則　車塚千賀子　佐野麻知子
高木孝純　髙橋美法　武田彩　東海林正裕　深瀬美智子　三原朋子　吉田寛子
（五十音順）

# 目　次


Ⅰ　調査の経過
　　1　調査に至る経緯…… 1
　　2　発掘調査の経過…… 2
　　3　整理作業の経過…… 3
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　　1　地理的環境…… 5
　　2　歴史的環境…… 5
　　3　高瀬山遺跡の概要…… 6
Ⅲ　調査の概要
　　1　調査の方法…… 10
　　2　調査区の立地と層序…… 12
　　3　調査区ごとの成果…… 13
Ⅳ　遺構
　　1　第１次調査の検出遺構…… 17
　　2　第２次調査の検出遺構…… 23
　　3　第３次調査の検出遺構…… 43
Ⅴ　遺物
　　1　第１次調査の出土遺物…… 52
　　2　第２次調査の出土遺物…… 56
　　3　第３次調査の出土遺物…… 69
　　4　ＳＸ 241 出土石器資料…… 70
　　5　Ｊ 15 出土旧石器資料 …… 76
Ⅵ　理化学分析
　　1　土器内白色物質の由来推定…… 116
　　2　Ｊ 15 出土旧石器資料の機能分析 …… 120
　　3　放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）…… 125
　　4　テフラ分析…… 128
Ⅶ　総括
　　1　遺構の時期と分布について…… 132
　　2　土器型式から見た「ムラ」の存在…… 134
　　3　ＳＸ 241 出土石器資料…… 135
　　4　Ｊ 15 出土旧石器資料 …… 136

報告書抄録…… 巻末

# 表


表1　遺跡分布図　付表 …… 9
表2　出土土器・土製品観察表 …… 86
表3　遺構出土石器観察表 …… 93
表4　ＳＸ241出土石器観察表 …… 95
表5　Ｊ15出土旧石器資料・母岩観察表 …… 98
表6　Ｊ15出土旧石器観察表 …… 99
表7　使用痕分析結果 …… 122
表8　処理方法、$\delta^{13}$Ｃ値、$^{14}$Ｃ年代値とｐＭＣ …… 126
表9　$\delta^{13}$Ｃ未補正の$^{14}$Ｃ年代値とｐＭＣ、および暦年代（1） …… 126
表10　テフラ分析結果 …… 129


# 挿　図


第1図　調査概要図 …… 2
第2図　地形分類図 …… 7
第3図　遺跡分布図 …… 8
第4図　調査区・グリッド設定図 …… 11
第5図　基本層序　土層断面図 …… 12
第6図　ＳＴ3　ＥＬ19平面図・断面図 …… 19
第7図　ＥＵ145・171　ＳＫ53・91・109・119・132平面図・断面図 …… 20
第8図　ＳＫ114　ＳＸ108・157　Ｂトレンチ包含層平面図・断面図 …… 21
第9図　ＳＤ25平面図 …… 22
第10図　ＳＴ238・240　ＥＬ260平面図・断面図 …… 30
第11図　ＳＴ242　ＥＬ243・499　ＥＵ262・514・515・517平面図・断面図 …… 31
第12図　ＳＴ242　ＥＬ247平面図・断面図 …… 32
第13図　ＥＵ211・244・269　ＳＫ254平面図・断面図 …… 33
第14図　ＳＰ265・266・271　ＳＫ268・330平面図・断面図 …… 34
第15図　ＳＫ355・358・364・397平面図・断面図 …… 35
第16図　ＳＫ220・246・270・302平面図・断面図 …… 36
第17図　ＳＫ304・310・319・329　ＳＰ316平面図・断面図 …… 37
第18図　ＳＸ203・218平面図・断面図 …… 38
第19図　ＳＤ282　ＳＫ286　ＳＸ212平面図・断面図 …… 39
第20図　ＳＸ241・277平面図・断面図 …… 40
第21図　ＳＸ277　ＳＫ406～413　ＳＰ414・415平面図・断面図 …… 41
第22図　ＳＸ288　Ｈ5・10トレンチ包含層平面図 …… 42
第23図　Ｊ15トレンチテストピット　ＳＤ560平面図・断面図 …… 46
第24図　ＳＤ566・658　ＳＸ527平面図・断面図 …… 47
第25図　ＳＤ575　ＳＰ569～572・654～656平面図 …… 48
第26図　ＳＤ575　ＳＰ569～572・654～656断面図 …… 49
第27図　ＳＰ678　ＳＫ694・710～712平面図・断面図 …… 50
第28図　周溝・ピット列配置図 …… 51
写真図版1　Ｊ15トレンチテストピットでの作業風景　3層上面石器出土状況①　3層上面石器出土状況②　3層中部石器出土状況　3層中部～下部石器出土状況①　3層中部～下部石器出土状況②　3層中部～下部石器出土状況③　3層下部石器出土状況 …… 104
第29図　Ｊ15出土旧石器平面分布図 …… 105
第30図　トゥール平面分布図 …… 106
第31図　石刃・細石刃製作関連資料平面分布図 …… 106
第32図　被熱・非被熱石器平面分布図 …… 106
第33図　全母岩平面分布図 …… 107
第34図　母岩Ｐ1平面分布図 …… 107
第35図　母岩Ｐ2平面分布図 …… 107
第36図　Ｐ1ａⅠ接合関係平面分布図 …… 108
第37図　Ｐ1ａⅡ接合関係平面分布図 …… 108
第38図　Ｐ1ｂ～ｆ接合関係平面分布図 …… 108
第39図　Ｐ2ａ～ｂ接合関係平面分布図 …… 109
第40図　Ｐ3ａ～ｄ接合関係平面分布図 …… 109
第41図　Ｐ4ａ～ｅ接合関係平面分布図 …… 109
第42図　Ｐ5ａ接合関係平面分布図 …… 110
第43図　Ｐ6ａ接合関係平面分布図 …… 110
第44図　Ｐ8ａ～ｃ接合関係平面分布図 …… 111
第45図　Ｐ9ａ接合関係平面分布図 …… 111
第46図　Ｐ10ａ～ｂ接合関係平面分布図 …… 111

第47図　P11 a接合関係平面分布図 …… 112
第48図　P12 a～b接合関係平面分布図 …… 112
第49図　P13 a～d接合関係平面分布図 …… 112
第50図　P14 a～d接合関係平面分布図 …… 113
第51図　P15 a～b接合関係平面分布図 …… 113
第52図　P16 a～c接合関係平面分布図 …… 113
第53図　P18 a接合関係平面分布図 …… 114
第54図　P19 a接合関係平面分布図 …… 114
第55図　P20 a接合関係平面分布図 …… 114
第56図　P22接合関係平面分布図 …… 115
第57図　P27 a接合関係平面分布図 …… 115
第58図　2次調査H3トレンチSK358出土土器（RP137）内灰白色物質の粉末X線回折図 …… 118
第59図　珪藻プレパラート中に認められた化石 …… 119
第60図　J15出土旧石器資料の顕微鏡写真（1）…… 123
第61図　J15出土旧石器資料の顕微鏡写真（2）…… 124
第62図　［参考］暦年較正年代グラフ …… 127
第63図　火山ガラスの屈折率 …… 129
第64図　検出されたテフラ …… 131

# 図　版

巻頭写真1　高瀬山遺跡遠景　高瀬山遺跡（H0）3期近景
巻頭写真2　J15トレンチ出土石器群　SX241出土石器群

**＜第1次調査　遺構写真＞**

写真図版2　EL19完掘状況　SK119完掘状況　RP72・76出土状況　SK132完掘状況　RP83出土状況　EU171完掘状況　SK53完掘状況
写真図版3　ST3検出状況　ST3完掘状況
写真図版4　SK91完掘状況　SK109完掘状況　SK114完掘状況　SX108検出状況　RP28出土状況　SX157完掘状況　RP48出土状況　RP53出土状況
写真図版5　F区西側完掘状況　SD25検出状況　SD25土層断面

**＜第2次調査　遺構写真＞**

写真図版6　H7・8トレンチ掘り下げ状況
写真図版7　ST238土層断面　RP92出土状況　ST240土層断面　RP97・98出土状況　EL499完掘状況　RP147土層断面　RP148土層断面　RP153出土状況
写真図版8　EL243焼土検出状況　RP88出土状況　RP100出土状況　RP103出土状況　RP99出土状況　EL247焼土・石組検出状況　RP86出土状況　RP93出土状況
写真図版9　RQ89・RP90出土状況　SK254完掘・RQ104・111出土状況
写真図版10　SP265完掘状況　SP266完掘状況　SK267・268土層断面　RQ91出土状況　SK286完掘状況　SK330完掘状況　RP128・129・130出土状況　RP139出土状況
写真図版11　SK358完掘状況　RP121出土状況　RP137出土状況　RP122・123・127出土状況　SK396・397完掘状況　SK220完掘状況　SK246完掘状況　SK246土層断面・RP95出土状況
写真図版12　SK270土層断面・完掘状況　SK302完掘状況　SK302焼土検出・RP112出土状況　RP114出土状況　SK310完掘状況　RP107出土状況　SP315・316完掘状況　SK319土層断面・完掘状況
写真図版13　SK329完掘状況　RP113出土状況　SX203土層断面　SX218土層断面　SD282・SK284・285土層断面　RP109・110出土状況　SX212土層断面　SX241完掘状況
写真図版14　SK407～409完掘状況　SK409・411・SX412土層断面　SK410土層断面　SK413土層断面・完掘状況　SP414土層断面　SP415土層断面　RP141出土状況　RQ146出土状況
写真図版15　RP143出土状況　RQ105出土状況　SX288焼土検出状況　RQ131・132・133出土状況　RP134・135出土状況
写真図版16　RP149出土状況　RP152出土状況

**＜第3次調査　遺構写真＞**

写真図版17　第3次調査区全景　K区活断層
写真図版18　K4トレンチ北壁（断層面）土層断面　J15トレンチテストピット南壁土層断面　J15トレンチテストピット完掘状況
写真図版19　旧石器出土状況①　旧石器出土状況②
写真図版20　SD560完掘状況　SD566完掘状況　SD658土層断面
写真図版21　SK694完掘状況　RQ160出土状況　SP678完掘状況
写真図版22　SP570～572　SK573・574　SD575検出状況　SP569～572・SP654～657完掘状況

＜遺物図版＞

第 65・66 図　C 4 下部トレンチ出土遺物
第 66 ～ 68 図　F区出土遺物
第 69 図　C 3 Dトレンチ出土遺物
第 69 図　A斜面トレンチ出土遺物
第 69 図　Bトレンチ出土遺物
第 70 図　F区出土遺物
第 71 図　Bトレンチ出土遺物
第 72・73 図　A上部西トレンチ出土遺物
第 74 図　Bトレンチ出土遺物
第 74 図　C 4 下部トレンチ出土遺物
第 75・76 図　F区出土遺物
第 77・78 図　H 1 トレンチ出土遺物
第 78 図　H 5 トレンチ出土遺物
第 79 ～ 82 図　H 7 トレンチ出土遺物
第 83 図　G 3 トレンチ出土遺物
第 83 ～ 86 図　H 7 トレンチ出土遺物
第 86 図　H 8 トレンチ出土遺物
第 87 図　H 7 トレンチ出土遺物
第 88 図　H 2 トレンチ出土遺物
第 88 ～ 95 図　H 3 トレンチ出土遺物
第 95 図　H 4 トレンチ出土遺物
第 95・96 図　H 7 トレンチ出土遺物
第 96 ～ 100 図　H 8 トレンチ出土遺物
第 100 図　G 2 トレンチ出土遺物
第 101 図　H 8 トレンチ出土遺物
第 102 図　H 1 トレンチ出土遺物
第 102 図　H 4 トレンチ出土遺物
第 103・104 図　H 4 トレンチ出土遺物
第 104・105 図　H 8 トレンチ出土遺物
第 105 ～ 110 図　H 5 トレンチ出土遺物
第 110 ～ 112 図　H 10 トレンチ出土遺物
第 113 ～ 115 図　H 1 トレンチ出土遺物
第 116 図　H 2 トレンチ出土遺物
第 116・117 図　H 3 トレンチ出土遺物
第 118・119 図　H 4 トレンチ出土遺物
第 119・120 図　H 5 トレンチ出土遺物
第 120・121 図　H 6 トレンチ出土遺物
第 122 ～ 124 図　H 7 トレンチ出土遺物
第 125 ～ 130 図　H 8 トレンチ出土遺物
第 131 図　H 9 トレンチ出土遺物
第 131 図　H 12 トレンチ出土遺物
第 132・133 図　J 5 トレンチ出土遺物
第 133 図　J 16 トレンチ出土遺物
第 133 図　J 14 － 5 区間出土遺物
第 133・134 図　K区出土遺物
第 135 図　I 2 地点出土遺物
第 135 図　I 4 地点出土遺物
第 135 図　I 6 地点出土遺物
第 135 図　J 10 トレンチ出土遺物
第 135 図　J 17 トレンチ出土遺物
第 135 図　J 8 トレンチ出土遺物
第 136 図　J 3 － 10 区間出土遺物
第 137・138 図　S X 241　トゥール
第 139 ～ 142 図　S X 241　J 1
第 143・144 図　S X 241　J 2
第 145・146 図　S X 241　J 3
第 147 ～ 149 図　S X 241　J 4
第 150 図　S X 241　J 5
第 151 図　S X 241　J 6
第 152・153 図　S X 241　J 7
第 153 図　S X 241　J 8
第 154 ～ 156 図　S X 241　石刃核
第 157 図　S X 241　稜付き石刃
第 157・158 図　S X 241　打面再生剥片
第 158・159 図　S X 241　石刃
第 160・161 図　S X 241　J 9
第 162・163 図　S X 241　J 10
第 164 ～ 166 図　S X 241　J 11
第 167・168 図　S X 241　J 12
第 169・170 図　S X 241　J 13
第 171・172 図　S X 241　J 14
第 172 図　S X 241　J 15
第 173・174 図　S X 241　J 16
第 174 図　S X 241　J 17
第 175・176 図　S X 241　J 18
第 177・178 図　S X 241　J 19
第 179 図　S X 241　J 20
第 179・180 図　S X 241　J 21
第 181・182 図　S X 241　J 22
第 183・184 図　S X 241　J 23
第 185・186 図　S X 241　J 24
第 187 図　S X 241　J 25
第 188 ～ 192 図　S X 241　短形剥片石核
第 193 図　S X 241　短形剥片
第 194・195 図　J 15　トゥール

第 196 ～ 213 図　J 15　母岩Ｐ 1
第 214 ～ 219 図　J 15　母岩Ｐ 2
第 219 ～ 226 図　J 15　母岩Ｐ 3
第 227 ～ 232 図　J 15　母岩Ｐ 4
第 232・233 図　J 15　母岩Ｐ 5
第 234 図　J 15　母岩Ｐ 6
第 234 図　J 15　母岩Ｐ 7
第 235 ～ 246 図　J 15　母岩Ｐ 8
第 247 ～ 252 図　J 15　母岩Ｐ 9
第 253 ～ 259 図　J 15　母岩Ｐ 10
第 259・260 図　J 15　母岩Ｐ 11
第 261 ～ 267 図　J 15　母岩Ｐ 12
第 267 ～ 269 図　J 15　母岩Ｐ 13
第 270 ～ 272 図　J 15　母岩Ｐ 14
第 272・273 図　J 15　母岩Ｐ 15
第 274 ～ 276 図　J 15　母岩Ｐ 16
第 276 図　J 15　母岩Ｐ 17
第 277・278 図　J 15　母岩Ｐ 18
第 279 図　J 15　母岩Ｐ 19
第 279 図　J 15　母岩Ｐ 20
第 280・281 図　J 15　母岩Ｐ 22
第 282 図　J 15　母岩Ｐ 23
第 282・283 図　J 15　母岩Ｐ 24
第 283 図　J 15　母岩Ｐ 25
第 284 図　J 15　母岩Ｐ 26
第 284・285 図　J 15　母岩Ｐ 27
第 285 図　J 15　母岩Ｐ 28
第 285 図　J 15　母岩Ｐ 29
第 286 図　J 15　母岩Ｐ 30
第 287 図　J 15　母岩Ｐ 31
第 287 図　J 15　母岩Ｐ 32
第 287 図　J 15　母岩Ｐ 33
第 287 図　J 15　母岩Ｐ 34
第 287 図　J 15　被熱石器
第 288 図　J 15　ハンマーストーン

**付図**

付図１　第１次調査区・Ｇ３・Ｈ１トレンチ遺構配置図
　　Ａ斜面トレンチ土層断面図
付図２　第１次調査区・Ｇ区・Ｉ区遺構配置図
付図３　第１次調査区・Ｈ区遺構配置図
　　Ｃ４斜面・Ｈ６トレンチ土層断面図
付図４　Ｈ区遺構配置図
付図５　Ｊ区・Ｋ区・Ｄトレンチ遺構配置図
　　Ｋ１～４トレンチ土層断面図
付図６　高瀬山遺跡　調査区全体図

**付録 DVD**

第１～３次調査　遺構全体図　１：80
高瀬山遺跡　調査区全体図　１：2500
遺構・遺物出土状況写真（jpg）
遺構出土遺物写真（jpg）
ＳＸ 241 出土石器資料写真（jpg）
ＳＸ 241 出土石器資料の解説（pdf）
Ｊ 15 出土旧石器資料写真（jpg）
Ｊ 15 出土旧石器資料の解説（pdf）
Ｊ 15 出土旧石器資料の器種別分布図（tiff）
Ｊ 15 出土旧石器資料の母岩別分布図（tiff）
Ｊ 15 出土旧石器資料の接合関係平面図（tiff）
Ｊ 15 出土旧石器資料出土座標値一覧（xls）

# Ⅰ　調査の経過

## 1　調査に至る経緯

高瀬山遺跡は、旧石器時代～中世にわたる複合遺跡で、約90haに及ぶ県内屈指の規模を誇っている。高瀬山古墳は、1932年に石棺と副葬品の直刀が発見され、1955年に県史跡に指定されている。集落跡としては、1963年の山形県による「山形県遺跡地名表」作成のための調査において、縄文時代中期末葉に属する集落跡の存在が確認されている。1965年には寒河江市により、山形大学柏倉亮吉教授の指導で高瀬山遺跡における本格的な発掘調査が初めて実施された。1980年には温泉湧出を契機とする高瀬山地区の大規模な開発計画に先立ち、寒河江市により高瀬山遺跡群の分布調査が行われた。1982年以降、高瀬山Ｊ・Ｂ・Ｋ遺跡をはじめ、各種開発に伴う発掘調査が寒河江市教育委員会や山形県教育委員会により行われている。1989年には東北横断自動車道（山形道）の建設計画に伴って、山形県により寒河江・大江・西川地区の分布調査が行われた。これにより高瀬山遺跡は高瀬山遺跡群として、現状の東西1600ｍ・南北600ｍの範囲（付図６）に大きく修正されることとなった。その後、1994～1997年にかけて高速道路建設事業に係る大規模な発掘調査が山形県埋蔵文化財センターによって実施された。調査面積約15haの広範囲に及ぶことから、調査区域は高瀬山遺跡１期・高瀬山遺跡２期・高瀬山遺跡ＳＡ（サービスエリア地区）の３地区に分かれている。併せて調査が行われた三条遺跡・落衣長者屋敷遺跡も、高瀬山遺跡と一連の遺跡群として捉えることができる。

高速道路のサービスエリア周辺では、今回の調査原因となった最上川ふるさと総合公園整備事業が計画された。遺跡範囲に含まれる全体面積28.9haについて、平成７～23年度の期間で整備が進められてきた。平成14年度までに県道天童寒河江線の西側約17.1haの供用が行われ、会場となった第19回全国都市緑化やまがたフェアでは期間中に約73万人が訪れた。その後も、寒河江市主催の花咲かフェアが毎年６月頃に開催されており、約28万人の来場者で賑わっている。残りの県道から東側の「歴史の丘」区域については、平成15年度から住民とのワークショップを重ねつつ、住民参加型の公園づくりを行っている。2008年４月までにコミュニティー広場・スケートパーク・ドッグランの供用を開始し、供用面積は合計20.9haとなっている。公園整備事業に伴う発掘調査は、事業主体である山形県土木部（現県土整備部）からの委託を受け、同センターが実施してきた。1997～2001年には県道を挟んだ西側約９haの範囲を対象として、高瀬山遺跡（ＨＯ地区）発掘調査が実施された。なお、「ＨＯ」地区の名称は、同事業の旧称「ハイウェイ・オアシス」事業に由来する。2004・2005年には県道東側を対象とする高瀬山遺跡（ＨＯ）２期発掘調査が実施され、高瀬山遺跡（ＨＯ）３期発掘調査へと引き続いている。以下に、その経緯や分布調査の経過について詳述する。

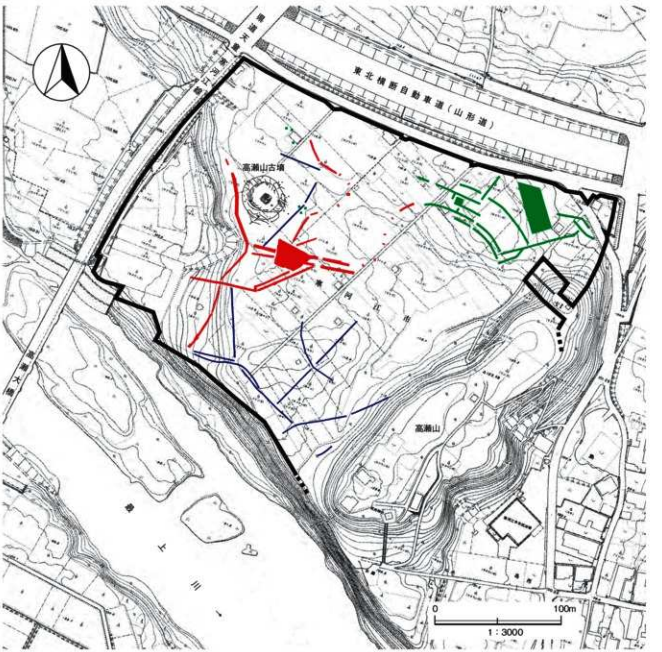
2002～2008年にかけて、県教育委員会は公園東側の整備事業に係る分布調査を実施している。2002年４月には試掘坑19か所（面積23㎡）の試掘調査を行い、縄文時代と奈良・平安時代の竪穴住居跡を検出した。2003年10月には面積160㎡の試掘調査を行い、平安時代の須恵器が出土した。翌11・12月には事業区内に所在する高瀬山古墳の現地確認・試掘調査が行われた。古墳の範囲確認のため、外周に向けて放射状に試掘トレンチ８か所（面積116㎡）を設定した。調査の結果、外径約34ｍの円形に廻る周溝が検出された。2007年４月～2008年２月には、果樹移植や植栽、給排水など公園設備の埋設工事に伴う立会調査が実施された。計９次にわたる調査は、実働29日間・総面積約1,188㎡に及び、縄文時代と平安時代に属する遺構・遺物を中心として、まとまった成果が得られている。これらの分布調査の結果、記録保存調査による対応が必要との判断がなされたことにより、2008年からは同センターによる高瀬山遺跡（ＨＯ）３期発掘調査が、３か年にわたり実施されることとなった。

## 2　発掘調査の経過

高瀬山遺跡（ＨＯ）３期発掘調査は平成 20 ～ 22 年度の第１～３次にわたって実施された（第１図）。総面積 3,780㎡で、調査日数は実働 139 日間を要した。なお、調査区や調査工程などの都合により、一般対象の現地調査説明会は行っていない。また、遺構図の記録にあたっては、写真測量によるオルソ画像の作成とデジタルトレースを外部に委託して行った。以下に、調査年次ごとの経過について概略を記しておく。

**第１次調査**

2008 年５月 13 日～６月 27 日（実働 34 日間）の期間で、面積 1,500㎡の調査を実施した。始めに、工事ラインが集中するＦ区以外の調査区設定を行い、重機の使用が困難なＤ延長トレンチとＣ４斜面トレンチの表土除去を手掘りで行った。併行して、西側の段丘縁辺から重機による表土掘削を開始した。その後は、表土除去が終了した調査区から順次、遺構の検出・精査と写真や測量による記録作業を進めていった。５月中旬、Ｃ４下部トレンチの遺構検出において、竪穴住居跡とみられる遺構（ＳＴ３）の一部を検出したため、遺構の形状に合わせてト




第１図　調査概要図

レンチの一部を拡張した。５月下旬、Ａ上部トレンチとＢトレンチの表土掘削の際、縄文土器を多数出土する遺物包含層を確認した。このため、一部手掘りに切り替えて包含層の掘り下げを行っている。６月からは、Ｆ区に面調査区を設定し、調査は調査区域の中央へと移行する。６月中旬、既に完成しているドッグラン施設周辺のＣ３・ＥトレンチとＤトレンチの数箇所に試掘坑を設けて、工事盛土の堆積状況を確認した。県教育委員会による試掘確認の結果、試掘部分に係る調査は不要との判断がなされた。６月下旬、残る調査区域の東側の調査と埋め戻しを行って、第１次調査を終了した。

**第２次調査**

2009年５月12日～７月15日（実働48日間）の期間で、面積780㎡の調査を実施した。始めに、事業側による雑木伐採が予定されるＨ11・12トレンチ以外の調査区設定を行い、重機による表土掘削をＧ区から開始した。Ｈ区については、地表面において多数の縄文土器片や石器剥片の散布が認められたため、試掘坑等により遺物の包含状況を確認しながら慎重に掘削を進めていった。遺物の出土が顕著な部分については、手掘りによる包含層の掘り下げを行った。併行して、表土除去が終了した調査区から順次、遺構の検出・精査と写真や測量による記録作業を進めていった。６月上旬までにＧ区の調査を終了し、埋め戻しを行った。６月中旬、段丘縁辺のＨ１・６・７（斜面）トレンチの調査を終了し、埋め戻しを行った。また、雑木伐採を終えたＨ12トレンチの表土掘削を行った。Ｈ７（上部）・８トレンチで縄文時代の竪穴住居跡（複式炉跡）・埋設土器・焼土堆積土坑を始めとする遺構が密集して検出された。包含層からの出土遺物や遺構数の増加などにより、当初の調査計画を変更する必要性が生じたため、調査期間の延長と作業員の増員を行うことで事業者との調整が図られた。さらに、フェンス設置を予定するＨ９～11トレンチについては、遺物包含層の掘り下げまでで調査を終了し、工事の一部中止や盛土による工法変更で対応することとした。調査延長に伴う工事工程との調整が図られ、それ以降の調査はＨ２～４トレンチを先行して行い、７月上旬にはＨ12トレンチとともにほぼ完了した。７月中旬、残るＨ５・９～11トレンチの調査と埋め戻しを行って、第２次調査を終了した。

**第３次調査**

2010年６月１日～８月18日（実働57日間）の期間で、面積1,500㎡の調査を実施した。工事工程との調整により調査区を大きく前半と後半の２つに分け、工事用道路のかからない東側の調査区から調査を開始した。なお、Ｊ13トレンチについては、事業側による残土除去と雑木伐採が完了してからの実施となる。また、活断層調査に係るＫ区では、段丘斜面を縦断する４本のテストトレンチを設定し、断層範囲の確認を行った。６月中旬、工事工程の都合により、遺構検出まででＪ区の前半部分の調査を中断し、植栽が行われるⅠ区の調査に移行する。６月中にⅠ区とＫ区のテストトレンチの調査を終了し、遺構精査からＪ区の調査を再開する。６月末、事業側にⅠ区を引き渡すとともに、山形大学山野井徹名誉教授を交え、今後のＫ区の面調査等の進め方について現地協議を行う。７月上旬、調査と併行して進められていた公園工事が完了し、工事用道路の引き渡しを受ける。Ｊ区の前半部分の調査終了とともに、７月中旬からはＪ区の西側の後半部分の調査に移行する。７月下旬、Ｋ区の調査範囲がほぼ全域にわたる面積600㎡に決定し、重機による表土掘削から開始した。また、Ｊ15トレンチにおいて、地山の表層から多量の石器剥片・砕片を出土する石器集中出土地点を検出した。調査の終盤において想定外の作業量が見込まれる状況となったことから、事業側と協議した結果、全体的な調査は予定通り終了するが、石器集中出土地点の調査と埋め戻しについては、一部期間を延長して実施することで調整が図られた。８月上旬、Ｋ区の面調査は遺構検出までで終了し、８月５日に山形大学山野井名誉教授による高瀬山活断層地形見学会（参加約50名）が現地で開催された。８月中旬、残るＪ15トレンチの調査と埋め戻しを行って、第３次調査を終了した。

## 3　整理作業の経過

整理作業は平成20～23年度の４か年にわたって行われた。作業の工程は、写真や図面などの記録整理・洗浄・注記・接合・復元・実測・拓本・トレース・写真撮影・版組・原稿執筆・収納などの順で行われる。なお、遺構測量・図化の委託業務に係る校正作業なども図面整理に含めて行っている。発掘調査が実施された平成20～22年度については、公園整備計画に応じた現地調査に重点

が置かれたことから、遺物整理は各年次の調査で出土した遺物の基礎整理（洗浄・注記）段階で留まっている。それ以降の作業については、公園整備事業が完了する平成23年度に第１～３次までの整理作業を行って、報告書を刊行する計画である。以下に、各年度の経過について概略を記しておく。

**平成20年度　整理作業**

2008年７月１日～12月26日の期間で実施した。第１次調査の写真・記録類整理と遺構測量・図化業務及び出土遺物35箱の洗浄・注記を完了する。一個体となる縄文土器（ＲＰ73）１箱がそのままの状態で保管される。

**平成21年度　整理作業**

2009年９月１日～９月30日の期間で実施した。第２次調査の写真・記録類整理と遺構測量・図化業務及び調査時に番号（ＲＰ・ＲＱ）を登録した出土遺物25箱の洗浄・注記を完了する。登録外の出土遺物167箱が未洗浄のまま残った。

**平成22年度　整理作業**

2010年８月２日～８月31日と2011年１月４日～３月31日の期間で実施した。第３次調査の写真・記録類整理と遺構測量・図化業務及び出土遺物16箱の洗浄・注記を完了する。後半は、石器集中出土地点から出土した1200点を超える石器群の分類・接合を行った。

**平成23年度　整理作業**

2011年５月11日～2012年３月26日の期間で実施した。まずは、それまでに完了していなかった第２次調査の登録外遺物の基礎整理に着手した。注記については、作業の効率化を図るため、注記機械を導入して作業を行った。それ以降は、第１～３次までの出土遺物について、接合・復元から報告書作成に至る作業を順次進めていった。なお、復元土器や定形石器など主要な遺物については、実測・デジタルトレースを外部に委託して行った。さらに、第２次調査で出土した縄文土器の内容物分析、第３次調査で出土した旧石器の使用痕分析とその年代を特定するための放射性炭素年代測定・火山灰分析などの理化学分析についても外部に依頼した。報告書に掲載する遺物の抽出にあたっては、第２次調査の遺物包含層の出土遺物が量的に大きな割合を占めていたものの、復元可能な土器は少なく、時間的な制約もあることから遺構の出土遺物を中心に取り上げることとした。また、今回の調査で確認された旧石器・縄文時代の２時期にわたる石器の接合資料についても、希少な事例として検討・報告を行っている。Ｊ15トレンチから出土した杉久保型ナイフ形石器群については、杉久保遺跡を始めとして同様の石器群が確認されている新潟県津南町の遺跡から出土した資料との比較検討を行っている。その概略と成果について、以下にまとめておく。

11月18～20日の日程で新潟県中魚沼郡津南町に所在する農と縄文の体験実習館「なじょもん」に出張して資料を実見する。高瀬山遺跡と津南町出土の石器資料における石器組成や石器製作技術を比較して、その類似性や差異について検討することで、高瀬山遺跡出土石器群の特質を見出すための参考とすることが目的である。高瀬山遺跡では細石刃が製作されているが、津南町内の遺跡では細石刃を素材にした小型ナイフ形石器の生産がより顕著である。これは石材の産地が隣接する高瀬山遺跡とは違って、遠隔地に立地することに起因するものと思われる。

**参考文献**


寒河江市教育委員会　1966　『寒河江市高瀬山縄文時代遺跡調査報告書』
寒河江市教育委員会　1981　『高瀬山遺跡群分布調査報告書』　寒河江市埋蔵文化財調査報告書第１集
山形県教育委員会　1990　『分布調査報告書（17）』　山形県埋蔵文化財調査報告書第148集
山形県教育委員会　1990　『高瀬山Ｋ遺跡第１・２次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第158集
山形県教育委員会　1992　『高瀬山Ｋ遺跡第３次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第179集
山形県教育委員会　2004　『分布調査報告書（30）』　山形県埋蔵文化財調査報告書第204集
山形県教育委員会　2005　『分布調査報告書（31）』　山形県埋蔵文化財調査報告書第205集
山形県教育委員会　2009　『分布調査報告書（35）』　山形県埋蔵文化財調査報告書第210集
山形県教育委員会　2010　『分布調査報告書（36）』　山形県埋蔵文化財調査報告書第212集
山形県埋蔵文化財センター　2000　『高瀬山遺跡（２期）第２・３次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第80集
山形県埋蔵文化財センター　2001　『高瀬山遺跡（ＳＡ）第２・３次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第94集
山形県埋蔵文化財センター　2004　『高瀬山遺跡（１期）第１～４次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第121集
山形県埋蔵文化財センター　2005　『高瀬山遺跡（ＨＯ地区）発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集
山形県埋蔵文化財センター　2008　『高瀬山遺跡（ＨＯ）２期発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第167集

# Ⅱ　遺跡の位置と環境

## 1　地理的環境

高瀬山遺跡が所在する寒河江市は、山形県内陸部のほぼ中央に開けた山形盆地の西部に位置し、東の天童市、西の大江町、北の河北町、南の中山町に隣接する。面積約139km²のおよそ３分の２を山林が占める寒河江市の北西部には、標高約1,500～2,000mの葉山や月山などの山々が連なる。寒河江市の地勢は、山地・火山地、丘陵地などがおよそ60%を占めるが、約40%は台地・段丘または低地が占める。全県下では前者が75%以上の割合を占めるのに対して、比較的バランスがとれていると言える。

山形県内を貫く最上川は、本流の長さが229km、流域面積は7,040km²に及び、長さでは全国第７位、水量では第４位を記録する。寒河江市は、この最上川のほぼ中流域に位置する。最上川は寒河江市西部から市の南端を廻るように流れた後、再び流れを北に転じ、その後市北部を東流する寒河江川が合流する。平地の大部分は寒河江川扇状地と低位段丘、河間低地が占めている。東部は最上川が自然堤防と後背湿地を形成し、この２つの河川が造り出した平地に市街地が広がっている。

高瀬山遺跡は、ＪＲ左沢線寒河江駅の南西方向約１kmにあり、遺跡からは周辺に広がる果樹園や水田、住宅街、そして最上川を見渡すことが出来る。遺跡東端に位置する高瀬山は、周辺との比高差が約20～30mで標高122mの断層地塁であると指摘されてきた。1997年の東北横断自動車道建設工事では、遺跡東端の段丘を東西に掘削した際に断層路頭が現れた。詳細な観察の結果、沖積世に活動している活断層であることが報告された（阿子島1999）。

高瀬山の周囲の段丘面に高瀬山遺跡は立地する。落衣長者屋敷遺跡はその西側に隣接し、旧河道を随所に残す低位段丘面に位置している。

また、東に隣接する三条遺跡で検出された水田跡は河間低地に営まれたものと考えられる。最上川の現河床面の標高は約93mを測り、中世の竪穴状遺構が検出されたＨＯ２期Ｄ区との比高差は６m程となる。川底は浅く、渇水期には川底が現れることも少なくなく、高瀬山の「高瀬」名の由来となったことが想定される。なお遺跡直下の河原では、良質の珪質頁岩を採取することができる。

## 2　歴史的環境

高瀬山遺跡を中心とした半径５km程の中に、約40ヶ所の遺跡が分布する。時代は旧石器から近世までと幅広く、種別も集落跡、生産跡、城館跡など多様である。

旧石器時代の遺跡は６ヶ所発見されている。この中では富山遺跡、金谷原遺跡、そして高瀬山遺跡などが調査され、金谷原遺跡から出土した石器により、東北日本の石刃技法やナイフ形石器などの研究が進められた。

縄文時代に入ると遺跡数は急増し、23遺跡を数える。しかし、周辺では草創期、早期の遺跡は発見されておらず、前期の調査例も現在のところ高瀬山遺跡（１期地区）のみである。中期以降は、柴橋遺跡、うぐいす沢遺跡、富沢Ⅰ遺跡などが調査されている。弥生時代の遺跡は非常に少なく、周辺では３遺跡しか発見されていない。高瀬山遺跡に隣接する石田遺跡では前期の再葬墓が検出されており、後期の土器も採集されている。古墳時代では、高瀬山遺跡以外は非常に少ない。

高瀬山遺跡の主要な時代である奈良・平安時代では周辺地域に16の遺跡がある。東に隣接する三条遺跡は奈良・平安時代を主体とした遺跡で、500点以上もの墨書土器・刻書土器や木製品が出土し、合わせて東側には水田が営まれていたことも確認され、高瀬山遺跡群に住んでいた人々が依存していた耕地であったと推定されている。西に隣接する落衣長者屋敷遺跡では、西に行くにつれて竪穴住居跡などの遺構が希薄になり、集落の西端部の印象を与える。代わって石組井戸跡など中世の所産である遺構が顕著に現れるようになる。遺跡名は、室町期の築城と考えられる一辺約100mの方形短郭の落衣長者屋敷に近接することに由来する。中世では、三条遺跡で竪穴建物跡・掘立柱建物跡が合わせて30棟以上検出されている。

## 3　高瀬山遺跡の概要

高瀬山遺跡は、寒河江市南西部の最上川左岸一帯に位置する規模約 90ha に及ぶ山形県屈指の大規模遺跡である。昭和初期に高瀬山古墳が発掘調査され、高瀬山周辺が遺跡地帯であることは良く知られていた。この高瀬山周辺での市の開発計画に伴い、1980 ～ 1981 年に寒河江市教育委員会により分布調査が実施された。この時に山形県教育委員会と共同で方形周溝墓と旧石器の調査が行われている。

1982 年、各種開発に伴い、寒河江市教育委員会により高瀬山Ｊ遺跡が調査され、次いで 1984 ～ 1986 年には高瀬山Ｂ・Ｋ・Ｌ遺跡が調査された。また、高瀬山Ｋ遺跡は 1988・1989 年に河川改修事業に伴い山形県教育委員会により発掘調査が行われている。その後、東北横断自動車道酒田線建設工事に伴い山形県教育委員会が 1989 ～ 1992 年に分布調査を実施した結果、計画路線中約 1.6 ㎞に渡って、遺構や遺物が確認され、高瀬山遺跡の範囲は大幅に修正されることになった。

**旧石器時代**

遺跡の東側、標高約 112 ｍの上位段丘面で検出されている。石刃石器群、細石刃石器群、槍先形石器群、縄文草創期石器群が寒河江市教育委員会、山形県教育委員会、山形県埋蔵文化財センター等の調査により地点を変え検出されている。

**縄文時代**

上位段丘面の１期地区では、大木５式～６式の前期後葉～末葉の環状集落跡が検出されている。集落は直径 120m の範囲内に住居群や土坑群が配置され、竪穴住居跡は径３ｍ～４ｍを測るものが 37 棟、長軸約 15m ～ 20m 超の大型住居跡 12 棟が検出されている。大型住居跡は主軸を放射状に配置されている。大規模集落であることから、山形盆地の拠点集落であったことがうかがえる。

縄文中期では１期・SA・HO 地区で中期中葉～末葉の大木８式・９式・10 式の竪穴住居跡が合計 15 棟と土坑多数が検出されている。

縄文後晩期では HO（１期）地区で後期中葉の竪穴住居跡 15 棟、配石遺構２基、土坑多数が検出されている。特に後期の水場遺構２基と晩期の水場遺構３基が検出され注目された。

**古墳時代**

終末期の高瀬山古墳の所在する遺跡東側の段丘縁辺部で古墳時代の墳墓が検出されている。寒河江市教育委員会、山形県教育委員会、山形県埋蔵文化財センターそれぞれの調査で方形周溝墓 11 基、円墳５基が検出されている。遺物の出土は非常に少ないが前期～中期の時期が推定される。集落跡は遺跡西側のＨＯ地区（１期・市調査）で前期の竪穴住居跡が地点を変えて 14 棟が検出されている。前期前半と後半の二時期が想定されている。

高瀬山古墳は 2003 年に県教委により範囲確認調査が行われ、幅約５ｍの周溝を検出し、内径約 23 ｍ外形約 34 ｍの規模が確認されている。

**奈良時代～平安時代**

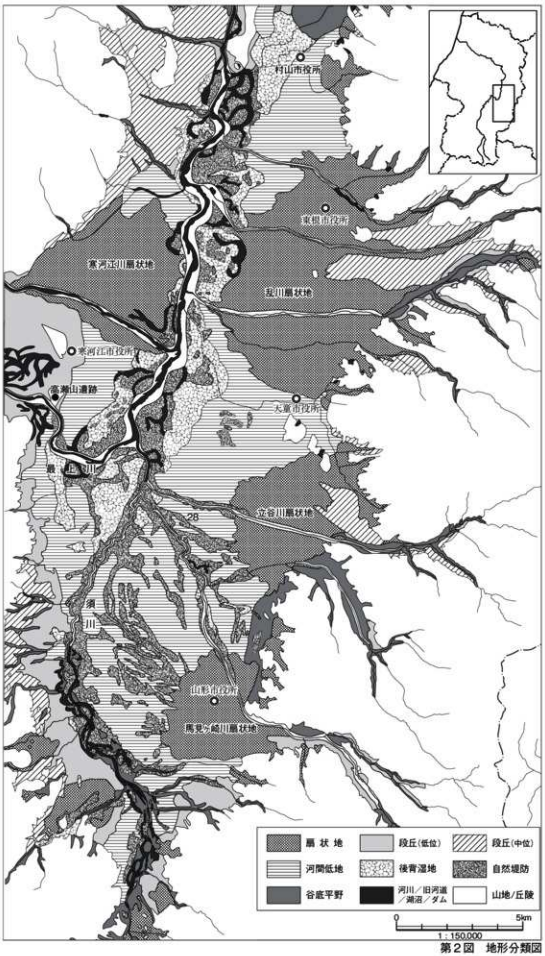
高瀬山遺跡で最も多量に、広範囲に遺構・遺物が検出されている。８世紀の後半から９世紀中頃が主体である。高瀬山Ｂ遺跡、高瀬山Ｋ遺跡、高瀬山遺跡１期・２期・ＳＡ・ＨＯ地区等で多数の竪穴住居跡群、掘立柱建物跡群、土坑、井戸、溝跡などが密集して広範囲から検出されている。高瀬山遺跡内で寒河江市教育委員会・山形県教育委員会・山形県埋蔵文化財センターが発掘調査した竪穴住居跡の総数は 528 棟以上、掘立柱建物跡は 245 棟以上を数える。これに隣接する落衣長者屋敷遺跡、三条遺跡調査の建物を加えると竪穴住居跡約 600 棟、掘立柱建物跡約 300 棟を数え、長さ 2.3 ㎞に渡り途切れることなく続く大集落であったことが明らかにされた。

**中世**

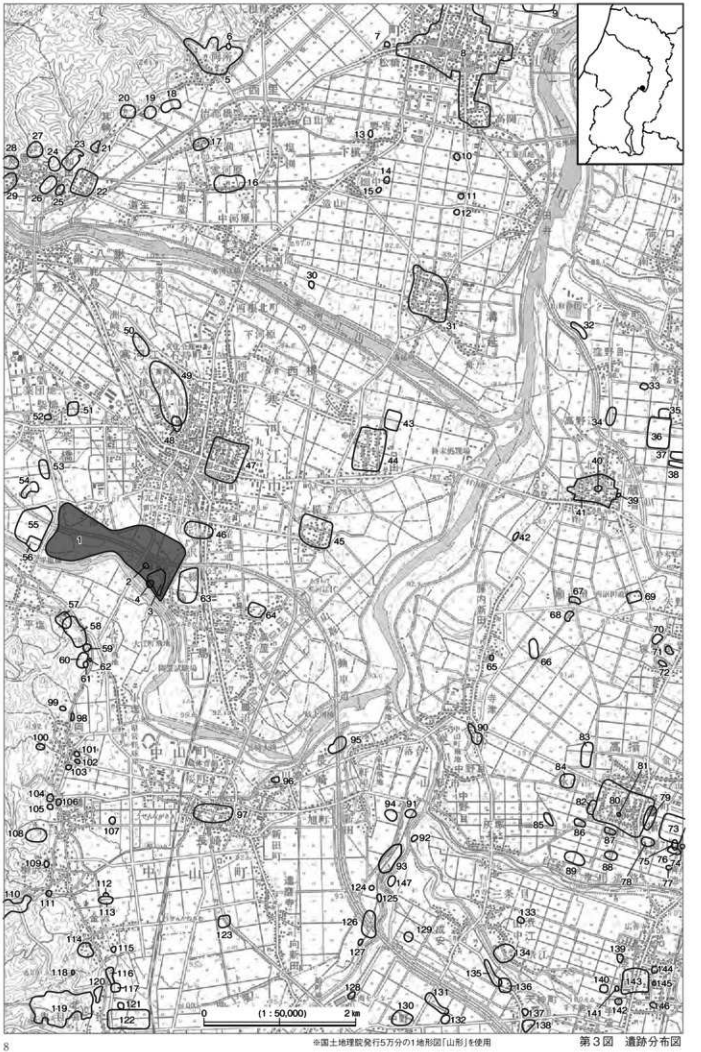
高瀬山の所在する高位段丘の両所神社付近には４基の経塚があり、昭和 20 年代初めに２個の経筒が完形で出土している。ＳＡ地区及び２期地区・ＨＯ（１期）地区では竪穴建物跡２棟、掘立柱建物跡 22 棟、井戸跡 10 基、墓坑 42 基が検出され、ＨＯ（２期）の調査ではＤ調査区から中世の竪穴状遺構が多数検出されている。１期地区の東側緩辺部６区では２本一組の柱穴跡で構成される柵列跡や集石遺構が、２期地区では中世～近世の幅４～８ｍの道路状遺構が長さ 500 ｍ以上確認されている。

**近世**

２期地区では墓坑の周囲を溝が方形に巡る方形周溝状遺構が５基検出され、溝内から石塔が出土している。江戸時代初頭の時期が想定されている。


村山市役所
東根市役所
寒河江川扇状地
荒川扇状地
寒河江市役所
高瀬山遺跡
天童市役所
最上川
28
立谷川扇状地
須川
山形市役所
馬見ヶ崎川扇状地
扇状地
段丘(低位)
段丘(中位)
河間低地
後背湿地
自然堤防
谷底平野
河川／旧河道／湖沼／ダム
山地/丘陵
0
5km
1：150,000

第２図　地形分類図




※国土地理院発行5万分の1地形図「山形」を使用

第３図　遺跡分布図

表1　遺跡分布図　付表

| | 遺跡名 | 市町村 | 時代 | 種別 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 高瀬山遺跡 | 窯河江市 | 旧石器～近世 | 集落跡 |
| 2 | 高瀬山古墳 | 窯河江市 | 古墳 | 墳墓 |
| 3 | 高瀬山館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 4 | 高瀬山経塚遺跡 | 窯河江市 | 鎌倉 | 経塚 |
| 5 | 和橋山館跡 | 河北町 | 中世 | 城館跡 |
| 6 | 眞田遺跡 | 河北町 | 縄文・平安 | 遺物包含地 |
| 7 | 若宮八幡遺跡 | 河北町 | 平安 | 遺物包含地 |
| 8 | 谷地城跡 | 河北町 | 中世 | 城館跡 |
| 9 | 大塚館跡 | 河北町 | 中世 | 城館跡 |
| 10 | 月山堂遺跡 | 河北町 | 平安 | 遺物包含地 |
| 11 | 馬場遺跡 | 河北町 | 平安 | 遺物包含地 |
| 12 | 間野台遺跡 | 河北町 | 古墳・奈良・平安 | 遺物包含地 |
| 13 | 下楯遺跡 | 河北町 | 古墳 | 遺物包含地 |
| 14 | 畑中Ｂ遺跡 | 河北町 | 平安 | 遺物包含地 |
| 15 | 畑中Ａ遺跡 | 河北町 | 平安 | 遺物包含地 |
| 16 | 小泉館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 17 | 境介次郎屋敷遺跡 | 河北町 | 中世 | 城館跡 |
| 18 | 両所Ａ遺跡 | 河北町 | 平安 | 散布地 |
| 19 | 貫輪遺跡 | 窯河江市 | 平安 | 集落跡 |
| 20 | 貫輪下屋敷遺跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 21 | 貫輪上屋敷遺跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 22 | 日和田館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 23 | 上の寺遺跡 | 窯河江市 | 縄文～近世 | 集落・社寺跡 |
| 24 | 尾山館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 25 | 日和田遺跡 | 窯河江市 | 縄文 | 遺物包含地 |
| 26 | ゴロゼノ館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 27 | 肥前館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 28 | 松蔵館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 29 | 田沢要害遺跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 30 | 天勝寺遺跡 | 河北町 | 奈良 | 遺物包含地 |
| 31 | 溝延城跡 | 河北町 | 中世 | 城館跡 |
| 32 | 今町経塚遺跡 | 天童市 | 江戸 | 納経遺構 |
| 33 | 一条陣遺跡 | 天童市 | 室町 | 陣墓 |
| 34 | 蔵増北Ｂ遺跡 | 天童市 | 平安 | 集落跡 |
| 35 | 的場遺跡 | 天童市 | 古墳・平安 | 集落跡 |
| 36 | 二条条里遺跡 | 天童市 | 奈良・平安 | 条里遺構 |
| 37 | 清池清水遺跡 | 天童市 | 古墳 | 集落跡 |
| 38 | 八反記田遺跡 | 天童市 | 縄文 | 集落跡 |
| 39 | 蔵増北Ａ遺跡 | 天童市 | 中世 | 城館跡 |
| 40 | 智順寺滝之経碑遺跡 | 天童市 | 江戸 | 経内遺構 |
| 41 | 蔵増城遺跡 | 天童市 | 室町～江戸 | 城館跡 |
| 42 | 蔵増南一字一石経塔遺跡 | 天童市 | 江戸 | 経内遺構 |
| 43 | 前田館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 44 | 日田城の内遺跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 45 | 本根館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 46 | 石田遺跡 | 窯河江市 | 縄文・弥生 | 集落跡 |
| 47 | 窯河江城遺跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 48 | 山岸遺跡 | 窯河江市 | 縄文 | 遺物包含地 |
| 49 | 長岡山館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 50 | 石持原遺跡 | 窯河江市 | 縄文 | 遺物包含地 |
| 51 | 柴橋館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 52 | 柴橋里跡 | 窯河江市 | 平安 | 里跡 |
| 53 | 高松館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 54 | 高松Ｉ遺跡 | 窯河江市 | 縄文・平安 | 散布地 |
| 55 | 清衣長者屋敷遺跡 | 窯河江市 | 奈良・平安・中世 | 集落跡 |
| 56 | 清衣長者屋敷遺跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 57 | 平塩横沢山遺跡 | 窯河江市 | 縄文・奈良・平安 | 集落跡 |
| 58 | 山崎館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 59 | 横沢山遺跡 | 窯河江市 | 縄文 | 散布地 |
| 60 | 殿森山遺跡 | 中山町 | 中世 | 城館跡 |
| 61 | 松岡山遺跡 | 中山町 | 縄文・平安 | 遺物包含地 |
| 62 | 塩ノ原遺跡 | 中山町 | 縄文 | 遺物包含地 |
| 63 | 三条遺跡 | 窯河江市 | 縄文～近世 | 集落・城館跡 |
| 64 | 高屋館跡 | 窯河江市 | 中世 | 城館跡 |
| 65 | 中原遺跡 | 天童市 | 平安 | 集落跡 |
| 66 | 鍋田遺跡 | 天童市 | 古墳 | 集落跡 |
| 67 | 願正堂遺跡 | 天童市 | 室町 | 寺院跡 |
| 68 | 願正堂遺跡 | 天童市 | 縄文・平安 | 集落跡 |
| 69 | 西沼田遺跡 | 天童市 | 古墳 | 集落跡 |
| 70 | 矢口遺跡 | 天童市 | 縄文 | 集落跡 |
| 71 | 沼田遺跡 | 天童市 | 縄文 | 集落跡 |
| 72 | 塚野目Ａ遺跡 | 天童市 | 弥生～平安 | 集落跡 |
| 73 | 扎井戸条里遺跡 | 天童市 | 平安・室町 | 条里遺構 |
| 74 | 清池西遺跡 | 天童市 | 平安 | 集落跡 |

| | 遺跡名 | 市町村 | 時代 | 種別 |
|---|---|---|---|---|
| 75 | 扎井戸遺跡 | 天童市 | 縄文 | 集落跡 |
| 76 | 高瀬東古墳 | 天童市 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 77 | 火矢塚２号古墳 | 天童市 | 古墳 | 古墳 |
| 78 | 入水遺跡 | 天童市 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 79 | 高瀬東浦遺跡 | 天童市 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 80 | 高瀬城遺跡 | 天童市 | 南北朝～江戸 | 城館跡 |
| 81 | 西新遺跡 | 天童市 | 南北朝～江戸 | 城館跡 |
| 82 | 高瀬西浦遺跡 | 天童市 | 縄文 | 集落跡 |
| 83 | 中袋遺跡 | 天童市 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 84 | 餅子田遺跡 | 天童市 | 縄文・弥生・平安 | 集落跡 |
| 85 | 影沢北遺跡 | 天童市 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 86 | 松葉遺跡 | 天童市 | 平安・奈良 | 集落跡 |
| 87 | 高瀬南浦遺跡 | 天童市 | 縄文・平安 | 集落跡 |
| 88 | 桜江遺跡 | 天童市 | 縄文～奈良 | 集落跡 |
| 89 | 高瀬南遺跡 | 天童市 | 古墳 | 集落跡 |
| 90 | 寺津城遺跡 | 天童市 | 室町～安土桃山 | 城館跡 |
| 91 | 中野目Ⅱ遺跡 | 山形市 | 平安 | 集落跡 |
| 92 | 若宮遺跡 | 山形市 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 93 | 川前２遺跡 | 山形市 | 古墳・奈良・平安 | 集落跡 |
| 94 | 中野Ⅱ１遺跡 | 山形市 | 古墳・奈良・平安 | 集落跡 |
| 95 | 物見台遺跡 | 中山町 | 古墳・中世 | 集落・城館跡 |
| 96 | 川端遺跡 | 中山町 | 平安 | 集落跡 |
| 97 | 長船館跡 | 中山町 | 南北朝～戦国 | 城館跡 |
| 98 | 竹ノ花遺跡 | 中山町 | 中世 | 城館跡 |
| 99 | 松荷遺跡 | 中山町 | 平安 | 遺物包含地 |
| 100 | 影遺遺跡 | 中山町 | 縄文・平安 | 遺物包含地 |
| 101 | 八幡前遺跡 | 中山町 | 平安 | 遺物包含地 |
| 102 | 堰の腰遺跡 | 中山町 | 平安 | 遺物包含地 |
| 103 | 岡境遺跡 | 中山町 | 縄文・平安 | 遺物包含地 |
| 104 | 流Ｚ遺跡 | 中山町 | 平安 | 集落跡 |
| 105 | 流３遺跡 | 中山町 | 縄文・平安 | 遺物包含地 |
| 106 | 流１遺跡 | 中山町 | 旧石器・縄文・平安・中世 | 遺物包含地 |
| 107 | 金屋敷遺跡 | 中山町 | 中世 | 城館跡 |
| 108 | 館京・館戸遺跡 | 中山町 | 中世 | 城館跡 |
| 109 | 墓ノ上遺跡 | 中山町 | 縄文 | 遺物包含地 |
| 110 | 谷大平遺跡 | 中山町 | 室町 | 城館跡 |
| 111 | 御屋敷社遺跡 | 中山町 | 縄文 | 遺物包含地 |
| 112 | 柳沢条里遺跡 | 中山町 | 奈良・平安 | 条里制跡 |
| 113 | 竹ノ花遺跡 | 中山町 | 中世 | 城館跡 |
| 114 | 御屋敷遺跡 | 中山町 | 中世 | 城館跡 |
| 115 | 前田遺跡 | 中山町 | 平安 | 遺物包含地 |
| 116 | 新館遺跡 | 山辺町 | 平安・鎌倉 | 集落跡 |
| 117 | 前館跡 | 山辺町 | 不明 | 城館跡 |
| 118 | 東中山遺跡 | 山辺町 | 弥生 | 遺物包含地 |
| 119 | 坊主屋古墳群 | 山辺町 | 古墳・飛鳥・奈良 | 古墳 |
| 120 | 西光山遺跡 | 山辺町 | 戦国 | 城館跡 |
| 121 | 良実塚遺跡 | 山辺町 | 平安 | 墳墓 |
| 122 | 山辺北条里遺跡 | 山辺町 | 奈良・平安 | 条里制跡 |
| 123 | 松ノ原敷遺跡 | 中山町 | 戦国 | 城館跡 |
| 124 | 川前遺跡 | 中山町 | 平安 | 遺物包含地 |
| 125 | 川前飛び地遺跡 | 中山町 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 126 | 遠慶寺遺跡 | 中山町 | 奈良・平安・中世 | 集落跡 |
| 127 | 遠慶寺３遺跡 | 中山町 | 平安 | 集落跡 |
| 128 | 春日寺遺跡 | 山形市 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 129 | 八幡川遺跡 | 山形市 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 130 | 中野遺跡 | 山形市 | 古墳 | 集落跡 |
| 131 | 馬洗場Ｂ遺跡 | 山形市 | 古墳・奈良・平安 | 集落跡 |
| 132 | 馬洗場Ａ遺跡 | 山形市 | 平安 | 散布地 |
| 133 | 三条ノ目遺跡 | 山形市 | 古墳 | 包蔵地 |
| 134 | 漆江遺跡 | 山形市 | 弥生～中世 | 集落跡 |
| 135 | 向河原遺跡 | 山形市 | 弥生～中世 | 集落跡 |
| 136 | 岡ノ原敷遺跡 | 山形市 | 不明 | 城館跡 |
| 137 | 新井田遺跡 | 山形市 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 138 | 天神遺跡 | 山形市 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 139 | 漆山遺跡 | 山形市 | 弥生 | 集落跡 |
| 140 | 井森塚遺跡 | 山形市 | 弥生 | 集落跡 |
| 141 | 衝守塚２号古墳 | 山形市 | 古墳 | 古墳 |
| 142 | 衝守塚４号古墳 | 山形市 | 奈良・平安 | 古墳 |
| 143 | 漆山館跡 | 山形市 | 室町～戦国 | 城館跡 |
| 144 | 柴崎古墳群 | 山形市 | 古墳 | 古墳 |
| 145 | 北海上Ａ遺跡 | 山形市 | 弥生 | 集落跡 |
| 146 | 北海上Ｂ遺跡 | 山形市 | 奈良・平安 | 集落跡 |
| 147 | 上柴免遺跡 | 山形市 | 奈良・平安 | 集落跡 |

# Ⅲ　調査の概要

## 1　調査の方法

高瀬山遺跡（ＨＯ）３期発掘調査は通常の面的な調査とは異なり、給排水・電気・フェンスなど公園設備の埋設工事に沿った幅１～２ｍほどのトレンチ調査を主体としている。

**調査区設定**

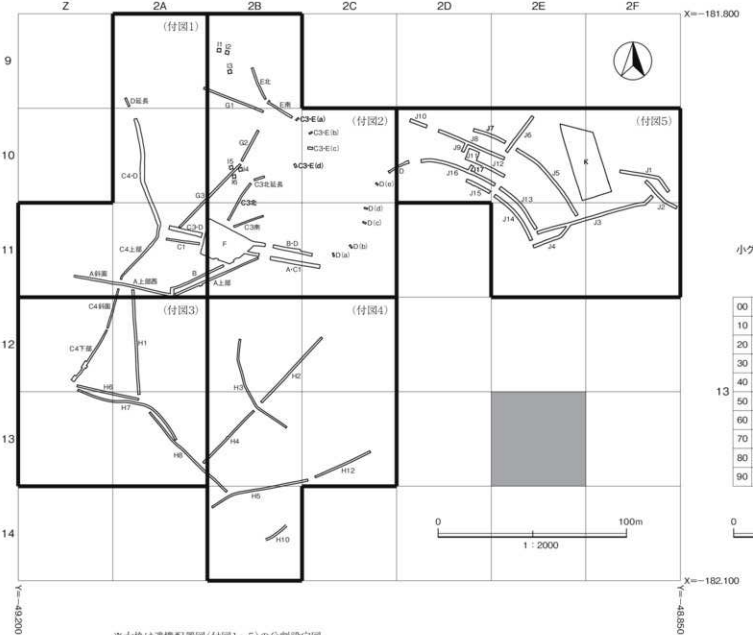
第１次調査区は、事業区域の西側の段丘縁辺から高瀬山古墳やドッグラン施設周辺に至る範囲にある。第１次調査では、事業側の工事種別によるＡ－１～Ｅ－２までの掘削ラインの名称に基づいて、調査区名が設定されている。２本の工事ラインが並走する区間については、幅広の１本のトレンチが設定されるが、その場合は２つの工事ライン名を併記した調査区名が付けられている。なお、調査後の整理において、ハイフン（－）で数字が付される部分について、区別が可能な場合は省略して簡素化を図っている。調査区域の中央では、工事ラインが集中する範囲をまとめて、400㎡の面調査区（Ｆ区）を設定した。また、Ｃ３・ＥトレンチとＤトレンチの一部の区間では、数箇所の試掘坑により工事盛土の厚い堆積を確認したことから、その後の調査は実施していない。第２次調査以降は、前年度に続くアルファベットで調査区を大きく分け、各トレンチには当該区のアルファベットに数字を付して調査区名とした。第２次調査区は、高瀬山古墳周辺のＧ区（Ｇ１～３トレンチ）と事業区域の南側の段丘斜面から高瀬山西麓に至るＨ区（Ｈ１～12トレンチ）がある。なお、事業側との調整により、Ｈ９～11トレンチの調査は遺物包含層の掘り下げまでで終了し、遺構検出などは行っていない。第３次調査区は、高瀬山古墳とドッグラン施設に挟まれたＩ区（Ｉ１～６地点）、やや離れて事業区域の北東側、段丘斜面に至るＪ区（Ｊ１～10・12～17トレンチ　Ｊ11地点）とＫ区がある。Ｉ区は植栽箇所で、２×２ｍの坪掘りを行った。Ｋ区は活断層地形の確認と公園施設における保存・活用を目的とする約600㎡の面調査区で、遺構の掘り下げなどは行わず、遺構検出までで調査を終了している。

**グリッド設定**

調査区のグリッドは、これまで同事業区における高瀬山遺跡（ＨＯ地区）と高瀬山遺跡（ＨＯ）２期の調査で採用されてきた大グリッド制を踏襲し、公共座標（日本測地系）を基準とする。大グリッドは50×50ｍを１単位とし、西から東へアルファベット・北から南へ算用数字を用いて組み合わせる。なお、東西軸のＡ～Ｚの続きは、便宜的に頭に数字を付した２Ａ～２Ｚとなる。さらに、大グリッドを５×５ｍを１単位とする小グリッドで100分割し、00～99の数字を配した。大グリッド番号と小グリッド番号をハイフン（－）でつなぐことで、グリッドを表記する（第４図　例：２Ｅ13－55グリッド）。高瀬山遺跡（ＨＯ）３期の大グリッド設定はＺ９の北西角が起点となり、座標Ｘ＝－181.800・Ｙ＝－49.200を示す。なお、第２・３次調査では、グリッドとは別にトレンチを５ｍごとに区切って区間番号を設定し、遺構外の遺物などを取り上げる単位としている。区間番号は、トレンチ名の後に、端から順にハイフン（－）で数字を付していくことで表記される（例：Ｇ１－１区間）。現地では、トレンチの片側に５ｍごと基準杭を打設し、向かって左側の区間番号に帰属することとした。

**遺構・遺物番号**

遺構・遺物の登録番号は、第１～３次までの通し番号となっており、調査の進行に従って順に登録を行った。ただし、第３次調査の石器集中出土地点における石器の取り上げにあたっては、作業の継続性や記録点数を考慮し、調査が併行する他の調査区の登録遺物と区別するため、200番台からの登録となっている。第１次調査では、遺構番号１～202と遺物番号１～85を登録した。第２次調査では、遺構番号203～517と遺物番号86～154を登録した。第３次調査では、518～712と遺物番号155～163・201～1457を登録した。なお、遺構番号については、調査後における遺構の整理・検討によって、一部登録の抹消や遺構記号・番号の修正を行っている。




小グリッド設定図　(例:2E13~55グリッド)

2E

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 00 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 | 07 | 08 | 09 |
| 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
| 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |
| 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 |
| 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 |
| 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 |
| 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 |
| 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 |
| 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 |
| 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 |

※太枠は遺構配置図(付図1~5)の分割設定図

第4図　調査区・グリッド設定図

## 2　調査区の立地と層序

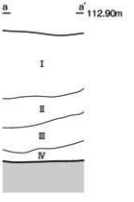
高瀬山遺跡（ＨＯ）３期の調査区は、寒河江市街の南西、寒河江市大字寒河江字高瀬山に所在する。広大な遺跡範囲の東端にあたり、最上川左岸（標高 90.1ｍ）に面した段丘崖と高瀬山（標高 122.5ｍ）西麓の中位段丘面（標高 113.4ｍ）に立地する。以前は、湿地帯が広がっていた荒蕪地を開墾し、畑地や果樹園として利用されていたが、現況は公園造成地となっている。

**基本層序**

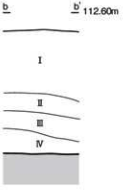
第１次調査で各トレンチの端に設定したサブトレンチから、調査区の特徴的な土層を示す２地点（Ｃ３北延長トレンチ東壁・Ｃ３南トレンチ東壁）の土層断面図（第５図）を抽出した。調査区における基本層序は、大別して、以下の４層にまとめることができる。

Ⅰ層：褐灰色・黒褐色シルト～粗砂
（工事盛土による砕石層）
Ⅱ層：黒褐色シルト
（畑地・果樹園の耕作土層）
Ⅲ層：黒褐色・黒色粘土質シルト
（黒ボク土層　縄文～平安時代の遺物包含層）
Ⅳ層：にぶい黄褐色シルト
（地山　旧石器時代の遺物包含層）

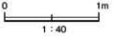
Ⅰ層は公園工事に伴う人為的な盛土である。重機の転圧で硬くしまる。Ⅱ層は本来の表土であり、畑地や果樹園を開墾した際の耕作土である。下層の黒ボク土層に比べてやや褐色を呈し、その境目は波状に撹拌された状況が認められた。Ⅲ層は腐植質の所謂黒ボク土層で、やや粘性がある。第２・３次調査区では黒色を呈し、層厚の厚い箇所が認められる。Ｇ３トレンチの埋設土器（ＥＵ 211）の包含状況やＫ区の活断層に係る年代測定の結果から、縄文時代早期以降の生活面は黒ボク土層の中～上位に位置するものと推定される。Ⅳ層は褐色ローム質土の所謂地山である。最上川に面する段丘崖に位置するＡ斜面トレンチ（付図１）では、河川堆積とみられる砂礫層になっている。調査では、Ⅳ層上面を遺構検出面としており、現地表面からの深さは両トレンチにおいて 130cm 前後を測る。Ｊ 15 トレンチでは、地山（ローム層）上位の約 30 ～ 40cm の範囲で後期旧石器時代に属する石器群が出土している。




**C3北延長トレンチ東壁　a–a'**（付図2）
Ⅰ．7.5YR4/1 褐灰色シルト～粗砂　拳大の砕石を多く含む。（盛土）
Ⅱ．10YR3/2 黒褐色シルト　炭化物を少し含む。
Ⅲ．5YR3/1 黒褐色シルト　炭化物を少し含む。
Ⅳ．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　（地山）




**C3南トレンチ東壁　b–b'**（付図2）
Ⅰ．7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗砂　1～5cm 大の砕石を含む。（盛土）
Ⅱ．5YR3/1 黒褐色シルト
Ⅲ．5YR2/1 黒褐色粘土質シルト
Ⅳ．10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　（地山）




**第５図　基本層序　土層断面図**

## 3　調査区ごとの成果

高瀬山遺跡（ＨＯ）３期では、調査の性格上、細分された多数の調査区において、調査が実施されることとなった。第１次調査では、登録数で202基の遺構を検出し、整理箱で36箱の遺物が出土した。第２次調査では、登録数で315基の遺構を検出し、整理箱で192箱の遺物が出土した。第３次調査では、登録数で195基の遺構を検出し、整理箱で16箱の遺物が出土した。以下に、各調査区における成果の概略をまとめておく。

### （1）第１次調査

**Ａ・Ｃ１トレンチ**　土坑ＳＫ184～192・ＳＰ193を検出した。出土遺物はない。

**Ａ上部トレンチ**　土坑ＳＫ104・ＳＰ94～97・100・103・105・106、炉跡ＳＬ101、性格不明遺構ＳＸ93・98・99・102・108を検出した。土坑ＳＰ94より大木７式土器、遺構外より大木６式・７ａ式・７ｂ式・縄文前期末～中期・後期前葉・晩期の土器が出土した。

**Ａ上部西トレンチ**　土坑ＳＫ84・91・ＳＰ82・83・85～87、溝跡ＳＤ88、性格不明遺構ＳＸ89・90を検出した。土坑ＳＫ91より大木７ａ式・７ｂ式土器、性格不明遺構ＳＸ89より錐形石器、性格不明遺構ＳＸ90より大木６式・７式土器、遺構外より土製円盤が出土した。

**Ａ斜面トレンチ**　土坑ＳＫ78・79・91・92・107・ＳＰ80・81を検出した。出土遺物はない。

**Ｂトレンチ**　土坑ＳＫ110・112・114・117・126～128・ＳＰ109・111・113、性格不明遺構ＳＸ115・116・118・125を検出した。土坑ＳＰ109より大木６式土器、土坑ＳＫ114より石鏃、土坑ＳＫ127・性格不明遺構ＳＸ116より大木７ａ式土器、遺構外より大木５式・６式・７ａ式・７ｂ式・縄文前期前葉・晩期の土器が出土した。

**Ｂ・Ｄトレンチ**　土坑ＳＰ194～197を検出した。出土遺物はない。

**Ｃ１トレンチ**　土坑ＳＫ26～28・ＳＰ29～33を検出した。出土遺物はない。

**Ｃ３南トレンチ**　土坑ＳＫ59・ＳＰ57・60～63、性格不明遺構ＳＸ56・58を検出した。出土遺物はない。

**Ｃ３北トレンチ**　土坑ＳＫ77・ＳＰ67・68・73・76、溝跡ＳＤ72を検出した。出土遺物はない。

**Ｃ３北延長トレンチ**　土坑ＳＫ182、性格不明遺構ＳＸ183を検出した。出土遺物はない。

**Ｃ３・Ｄトレンチ**　土坑ＳＰ53・54、溝跡ＳＤ25、性格不明遺構ＳＸ34を検出した。土坑ＳＰ53より縄文早期の土器、溝跡ＳＤ25よりエンドスクレイパーが出土した。

**試掘坑Ｃ３・Ｅ（ａ）**　検出遺構、出土遺物はない。

**試掘坑Ｃ３・Ｅ（ｂ）**　検出遺構、出土遺物はない。

**試掘坑Ｃ３・Ｅ（ｃ）**　検出遺構、出土遺物はない。

**試掘坑Ｃ３・Ｅ（ｄ）**　検出遺構、出土遺物はない。

**Ｃ４・Ｄトレンチ**　土坑ＳＰ37・38・40・41・43～48、溝跡ＳＤ52、性格不明遺構ＳＸ39・42・49～51を検出した。出土遺物はない。

**Ｃ４上部トレンチ**　土坑ＳＰ22、溝跡ＳＤ10、性格不明遺構ＳＸ４・５・７～９・11・21・23を検出した。性格不明遺構ＳＸ23より大木10式土器・両面加工石器、遺構外より大木９ａ式・９ｂ式または10式土器・須恵器が出土した。

**Ｃ４斜面トレンチ**　性格不明遺構ＳＸ６を検出した。出土遺物はない。

**Ｃ４下部トレンチ**　竪穴住居跡ＳＴ３、土坑ＳＫ12・13・ＳＰ14～20・35・55、性格不明遺構ＳＸ24を検出した。竪穴住居跡ＳＴ３より須恵器・土師器・石鏃、土坑ＳＰ15より須恵器、遺構外より須恵器が出土した。

**Ｄ延長トレンチ**　土坑ＳＰ１、性格不明遺構ＳＸ２を検出した。出土遺物はない。

**Ｄトレンチ**　土坑ＳＫ198・199・201・202、溝跡ＳＤ200を検出した。出土遺物はない。

**試掘坑Ｄ（ａ）**　検出遺構、出土遺物はない。

**試掘坑Ｄ（ｂ）**　検出遺構、出土遺物はない。

**試掘坑Ｄ（ｃ）**　検出遺構、出土遺物はない。

**試掘坑Ｄ（ｄ）**　検出遺構、出土遺物はない。

**試掘坑Ｄ（ｅ）**　検出遺構、出土遺物はない。

**Ｅ南トレンチ**　土坑ＳＫ181を検出した。出土遺物はない。

**Ｅ北トレンチ**　土坑ＳＫ180、溝跡ＳＤ179を検出した。出土遺物はない。

**Ｆ区**　埋設土器ＳＸ121～123・132・141・ＳＫ140・146・ＥＵ145・171、土坑ＳＫ129～131・136～139・

147・148・158・166・168・169・ＳＰ120・159・160～162・164・167・174、性格不明遺構ＳＸ119・124・133～135・142～144・149～157・163・165・170・172・173・175～178を検出した。埋設土器ＳＸ132より大木10式土器、埋設土器ＳＫ140・ＳＸ141より大木７ａ式土器、埋設土器ＳＫ146より石匙、性格不明遺構ＳＸ119より縄文中期末の土器、遺構外より大木７ｂ式土器・ハンマーストーン・土師器が出土した。

## （2）第２次調査

**Ｇ１トレンチ**　土坑ＳＰ205、性格不明遺構ＳＸ206を検出した。出土遺物はない。

**Ｇ２トレンチ**　土坑ＳＫ204溝跡ＳＸ203を検出した。溝跡ＳＸ203より大木７ａ式土器が出土した。

**Ｇ３トレンチ**　土坑ＳＫ207・208・214～217・ＳＰ209・210、埋設土器ＥＵ211、溝跡ＳＤ213・ＳＸ218、竪穴状遺構ＳＸ212を検出した。埋設土器ＥＵ211より縄文後期前葉の土器が出土した。

**Ｈ１トレンチ**　竪穴住居跡ＳＴ238・240、土坑ＳＫ230・231・233・234・237・258・ＳＰ235・261・263・264、竪穴状遺構ＳＸ232・241、性格不明遺構ＳＸ236・239を検出した。竪穴住居跡ＳＴ238・ＳＴ240・ＥＫ259より土師器・須恵器、竪穴状遺構ＳＸ241より大木６式・７ｂ式・10式土器・縄文後期前葉の土器・石器、性格不明遺構ＳＸ239より大木９式土器、遺構外より楔形石器・石核・半両面加工石器が出土した。

**Ｈ２トレンチ**　土坑ＳＫ330・332・336・337・339～342・344・346・348・ＳＰ333・335・338・343・345・347・381、性格不明遺構ＳＸ331・334・379・380を検出した。土坑ＳＫ330より大木10式土器・後期前葉の土器、土坑ＳＫ337より縄文中期末～後期初頭の土器、性格不明遺構ＳＸ331より大木１式土器・石核が出土した。

**Ｈ３トレンチ**　土坑ＳＫ350・352・354・355・358・359・360・363～371・374～376・ＳＰ351・353・357・361・362・372・373、溝跡ＳＤ356、性格不明遺構ＳＸ349を検出した。土坑ＳＫ355より大木７ａ式・10式土器、土坑ＳＫ358より大木７ａ式・10式土器・半両面加工石器、土坑ＳＫ360より後期前葉の土器、土坑ＳＰ362よりヘラ形石器、土坑ＳＫ364より大木７ａ式・７ｂ式・10式・時期不明の土器・円盤形石器・石核、土坑ＳＫ366より大木７ａ式・後期前葉の土器、土坑ＳＫ367より後期前葉の土器、土坑ＳＫ368より石刃、性格不明遺構ＳＸ349より大木７ａ式・10式・堀之内式土器、遺構外より大木５式・縄文晩期の土器・磨製石斧が出土した。

**Ｈ４トレンチ**　土坑ＳＫ392・396・397・400・406～413・416・ＳＰ382・383・385～391・394・398・402～404・414・415・417～419・512・513、溝跡ＳＤ399、竪穴状遺構ＳＸ384、性格不明遺構ＳＸ393・401・420を検出した。土坑ＳＰ390・402より大木９式土器、土坑ＳＫ392より大木９式・10式土器、土坑ＳＫ396・397・400・411・ＳＰ414より大木10式土器、土坑ＳＫ401より大木９式・10式・縄文後期前葉の土器、土坑ＳＫ406より縄文中期末の土器、土坑ＳＫ407より扁平礫、土坑ＳＫ408より大木10式・縄文中期後葉の土器・土偶、土坑ＳＫ412より大木９式・10式・縄文後期前葉の土器・ヘラ形石器、土坑ＳＫ413より縄文後期前葉の土器、土坑ＳＫ416より大木10式土器・縄文中期末～後期の土器、性格不明遺構ＳＸ384より大木７ａ式・10式土器、性格不明遺構ＳＸ401より石鏃・スクレイパー、遺構外より凹石が出土した。

**Ｈ５トレンチ**　複式炉跡ＥＬ499、埋設土器ＥＵ514・515・517、土坑ＳＫ439・440・466・459・460・465～467・474・481・482・496・497・516・ＳＰ441～450・452～458・461～464・468～473・475～480・483～492・494・495・498・500・501・503～506・508・511、性格不明遺構ＳＸ493・451・502・507を検出した。複式炉跡ＥＬ499より大木10式・縄文後期前葉の土器、埋設土器ＥＵ515・517・土坑ＳＫ439・466・性格不明遺構ＳＸ493より大木10式土器、土坑ＳＰ478より石核、土坑ＳＰ479より大木10式土器・円盤型土製品、遺構外より大木４式・10式・縄文中期末～後期前葉・晩期末の土器・土製耳飾り・円盤型土製品・土製腕輪・石匙・凹石・石核が出土した。

**Ｈ６トレンチ**　土坑ＳＫ220・222・ＳＰ221・223・224、性格不明遺構ＳＸ219を検出した。土坑ＳＫ222より両面加工石器、性格不明遺構ＳＸ219より大木９式土器、遺構外より大木７式・９式・10式・縄文後期前葉の土器が出土した。

**Ｈ７トレンチ**　竪穴住居跡ＳＴ242、複式炉跡ＥＬ243・247、埋設土器ＥＵ244・269・262・269、土坑ＳＫ249・253・254・268・ＳＰ265・266・271・ＳＸ255、土坑ＳＫ229・243～246・267・270・272・273・ＳＰ225・226・248・250・251、溝跡ＳＤ256、性格不明遺構ＳＸ227・228・252を検出した。竪穴住居跡ＳＴ242より大木５式･10式･縄文後期前葉の土器･錐形石器･エンドスクレイパー・石核・ハンマーストーン、複式炉跡ＥＬ247より大木９式・10式・中期末～後期の土器・円盤型土製品・半両面加工石器、埋設土器ＥＵ244より大木10式土器、埋設土器ＥＬ262より縄文中期末の土器、埋設土器ＥＵ269より縄文後期初頭の土器、土坑ＳＫ249より大木10式・縄文中期末～後期前葉の土器、土坑ＳＫ253より大木７式・10式土器・円盤型土製品、土坑ＳＫ254より縄文後期前葉の土器・スクレイパー・石刃・棒状礫・石皿、土坑ＳＸ255より大木10式・縄文中期末～後期初頭の土器・円盤型土製品・石核、土坑ＳＫ268より縄文後期前葉の土器・土製品・円礫、土坑ＳＫ286より錐形石器、土坑ＳＰ271より錐形石器･石皿、土坑ＳＫ243より大木７ｂ式・10式土器、土坑ＳＫ246･ＳＫ272より大木10式土器､土坑267より大木10式･縄文後期前葉の土器、土坑ＳＫ270より縄文中期末～後期初頭の土器･半両面加工石器、溝跡ＳＤ256より石刃、性格不明遺構ＳＸ228より大木10式・縄文後期前葉の土器・石刃・石核・須恵器、性格不明遺構ＳＸ252より大木10式･縄文後期初頭の土器､遺構外より土製耳飾り･円盤型土製品が出土した。

**Ｈ８トレンチ**　ＳＫ286、土坑ＳＫ274・276・277・283・284・285・287・290・291・295・299・300～302・304～306・308・313・314・319・325・326・329・377・ＳＰ275・280・281・293・294・297・298・303・307・309・312・315～318・320・321・323・324・327・328・378・ＳＸ310、溝跡ＳＤ282、竪穴状遺構ＳＸ277・288、性格不明遺構ＳＸ278・279・289・292・296・311・322を検出した。土坑ＳＫ274より大木10式土器・鋸歯縁石器、土坑ＳＫ276より大木９式・10式土器、土坑ＳＫ302・ＳＰ297より大木９式土器、土坑ＳＫ277・ＳＫ299より大木10式土器、土坑ＳＰ294・295・ＳＫ314・性格不明遺構ＳＸ289より縄文後期前葉の土器、土坑ＳＫ300より縄文中期末の土器、土坑ＳＫ302より大木９式・10式・縄文後期初頭の土器、土坑ＳＫ304より大木10式・縄文中期末～後期初頭の土器・石鋸状石製品、土坑ＳＫ308より縄文中期後半の土器、土坑ＳＸ310・性格不明遺構ＳＸ278より大木10式・縄文後期前葉の土器、土坑ＳＫ329より後期初頭の土器、溝跡ＳＤ282より大木９式・10式・縄文後期初頭の土器・時期不明の無文土器・スクレイパー・石核、竪穴状遺構ＳＸ277より扁平礫、竪穴状遺構ＳＸ288より縄文後期初頭～前葉の土器・鋸歯縁石器、性格不明遺構ＳＸ279より縄文中期末～後期前葉の土器・エンドスクレイパー・半両面加工石器・石刃・石核、性格不明遺構ＳＸ292より大木10式土器・石刃、性格不明遺構ＳＸ296より大木９式・縄文後期前葉の土器、性格不明遺構ＳＸ322より大木10式土器・スクレイパー・石刃・石核、遺構外より縄文中期末の土器・棒状礫？が出土した。

**Ｈ９トレンチ**　検出遺構はない。遺構外より縄文後期の土器が出土した。

**Ｈ10トレンチ**　検出遺構はない。遺構外より縄文後期前葉の土器・凹石・石棒が出土した。

**Ｈ12トレンチ**　土坑ＳＫ424・ＳＰ421～423・425～438を検出した。遺構外より大木６式・９式・10式土器が出土した。

## （3）第３次調査

**Ｉ１地点**　土坑ＳＰ653を検出した。出土遺物はない。

**Ｉ２地点**　土坑ＳＰ649～652を検出した。遺構外より須恵器が出土した。

**Ｉ３地点**　検出遺構、出土遺物はない。

**Ｉ４地点**　検出遺構はない。遺構外より須恵器が出土した。

**Ｉ５地点**　検出遺構、出土遺物はない。

**Ｉ６地点**　検出遺構はない。遺構外より須恵器が出土した。

**Ｊ１トレンチ**　土坑ＳＫ552・554～556・ＳＰ561、周溝ＳＤ560、溝跡ＳＤ553・559を検出した。出土遺物はない。

**Ｊ２トレンチ**　土坑ＳＫ573・574・576・577・ＳＰ567・654～657、ピット列ＳＰ569～572・ＳＰ654～656、周溝ＳＤ566・ＳＤ575、性格不明遺構ＳＸ564を

検出した。出土遺物はない。

**Ｊ３トレンチ**　土坑ＳＫ636・646・647・ＳＰ628・629・634・635・640、周溝ＳＤ658を検出した。遺構外より半両面加工石器が出土した。

**Ｊ４トレンチ**　土坑ＳＫ622・ＳＰ617・623・626を検出した。出土遺物はない。

**Ｊ５トレンチ**　土坑ＳＰ518・525・528・531・536・ＳＸ527を検出した。土坑ＳＸ527より石核・棒状礫が出土した。

**Ｊ６トレンチ**　土坑ＳＫ542・545・546・ＳＰ542・547、性格不明遺構ＳＸ540を検出した。遺構外より大木10式土器が出土した。

**Ｊ７トレンチ**　土坑ＳＫ664・665・ＳＰ660・662を検出した。出土遺物はない。

**Ｊ８トレンチ**　土坑ＳＫ668を検出した。出土遺物はない。

**Ｊ９トレンチ**　検出遺構、出土遺物はない。

**Ｊ10トレンチ**　土坑ＳＫ681・ＳＰ678～680を検出した。遺構外より須恵器が出土した。

**Ｊ11地点**　検出遺構、出土遺物はない。

**Ｊ12トレンチ**　性格不明遺構ＳＸ691を検出した。出土遺物はない。

**Ｊ13トレンチ**　土坑ＳＰ580・581・585、性格不明遺構ＳＸ594を検出した。出土遺物はない。

**Ｊ14トレンチ**　土坑ＳＫ615・ＳＰ595～597・614、性格不明遺構ＳＸ600・606を検出した。遺構外よりヘラ形石器が出土した。

**Ｊ15トレンチ**　石器集中ブロックを検出した。旧石器時代の石器が出土した。

**Ｊ16トレンチ**　土坑ＳＫ694・695・ＳＰ706を検出した。土坑ＳＫ694より石錐が出土した。

**Ｊ17トレンチ**　検出遺構はない。遺構外より須恵器が出土した。

**Ｊ18トレンチ**　検出遺構はない。遺構外より縄文後期前葉の土器・須恵器が出土した。

**Ｋ区**　土坑ＳＫ710～712を検出した。遺構外より石匙・ヘラ形石器が出土した。

**参考文献**

山野井徹・門叶冬樹・加藤和浩・庵下稔・和泉彰紘・設楽理恵　2011「山形県寒河江市『高瀬山活断層』の発掘と発生年代調査」『山形応用地質　第31号』p.60～62　山形応用地質研究会

# Ⅳ　遺　　構

## 1　第１次調査の検出遺構

第１次調査では登録数で202基の遺構を検出した。主な遺構は、竪穴住居跡・埋設土器・土坑・溝跡などである。時期は概ね縄文・平安時代に属するものと考えられる。このほか、Ｂトレンチで縄文時代の遺物包含層を検出した。以下に、種別ごと主要な遺構の概要を述べる。

なお、出土遺物に付記した（　）内の数字は、報告書掲載の遺物番号を示す。

### （1）竪穴住居跡

Ｃ４下部トレンチで平安時代の竪穴住居跡１棟を検出した。調査の性格上、遺構の全体プランを検出することができなかったため、平面プランやカマド・貼床との関連から住居跡と判断した。

**ＳＴ３　ＥＬ19**（第６図　写真図版２・３）

ＳＴ３はＣ４下部トレンチ（Ｚ12－67･76･77グリッド）に位置し、調査区北西壁に一部接する。遺構プランや焼土の広がりを確認するため、トレンチの両壁を一部拡張してある。（長）方形を呈する平面プランの南東角部分と推定され、検出部分で東辺3.1ｍ・南辺2.1ｍを測る。床面は概ね平坦であるが、検出面の表層で壁の立ち上がりは判然としない。２層は黒ボク土と遺構覆土との区別が難しく、自然堆積によるものと思われる。３層の上面はしまりのある粘土で斑状を呈することから貼床とみられるが、地山との境界は明瞭でない。南壁東寄りの床面から、カマドの燃焼部とみられる焼土を径48～76cmの範囲で検出した。遺構検出時には、右袖部分とみられる硬質の白色土塊も確認されている。その傍らには土師器の甕が正位で据えられており、カマドの構築材と思われる。煙道は認められず、壁外に張り出す位置には径約30cmの不整円形を呈する小ピット（ＳＰ55）が検出された。住居跡との重複関係は不明である。検出状況はあまり良好とは言えないものの、カマド（ＥＬ19）が住居に付設していた可能性が高い。覆土から赤焼土器の甕・壺（１～３）と須恵器の坏（５）・横瓶（４）の破片が出土した。平安時代（９世紀中葉）に属する竪穴住居跡と考えられる。

### （2）埋設土器

埋設土器は地中に設置した土器及びその施設である。縄文時代の屋外埋甕は、乳幼児を埋葬した土器棺墓などの説がある。正位又は逆位で埋設された土器以外に、底面付近に土器を据えて埋めたとみられる土坑についても取り上げる。いずれもＦ区で検出され、時期は概ね縄文時代中期末葉に属する。

**ＳＫ119　ＥＵ145**（第７図　写真図版２）

ＳＫ119はＦ区（２Ａ11－59　２Ｂ11－50グリッド）に位置し、調査区南西壁に一部接する。凹凸のある浅い落ち込みに重複して掘り込まれる。平面形は円形と推定され、調査区壁上で径1.2ｍを測る。底面直上から１個体の縄文土器（８）が横位に潰れた状態で出土した。

ＥＵ145はＳＫ119の北西30cm（２Ａ11－59グリッド）に隣接する。径約20cmの縄文土器（ＲＰ76）が正位で埋設されていた。検出面の表層で掘り方は判然とせず、検出面から上部は重機による表土掘削で削平された可能性がある。

ＳＫ119・ＥＵ145ともに縄文時代中期末葉に属する埋設土器と考えられる。

**ＳＫ132**（第７図　写真図版２）

Ｆ区（２Ｂ11－50グリッド）に位置し、南西にＳＫ119・ＥＵ145が近接する。平面形は径60cmの円形を呈する。底面直上から10cm大の礫片とともに、ほぼ完形の縄文土器（７）が横位で出土した。縄文時代中期末葉に属する埋設土器と考えられる。

**ＥＵ171**（第７図　写真図版２）

Ｆ区（２Ｂ11－20グリッド）ではあるが、他の埋設土器群（ＳＫ119・132　ＥＵ145）とは離れた位置関係にある。底部を打ち欠いた径約25cmの縄文土器（ＲＰ83）が正位で埋設されていた。掘り方の平面形は径60cmの不整円形を呈する。なお、図は出土位置を保つため、土器の周囲のみ掘り残した状況である。検出面

から上部は重機による表土掘削で削平された可能性がある。縄文時代中期後半に属する埋設土器と考えられる。

## （3）土坑

主要な遺物が出土した土坑を取り上げる。

**ＳＫ 53**（第７図　写真図版２）

Ｃ３・Ｄトレンチ（２Ａ 11 － 39 グリッド）に位置する。平面形は径 70cm の不整円形を呈し、検出面からの深さは 30cm を測る。底面は平坦である。覆土から縄文土器片（９）が出土した。概ね縄文時代早期に属する土坑と考えられる。

**ＳＫ 91**（第７図　写真図版４）

Ａ斜面トレンチ（２Ａ 11 － 81・82 グリッド）に位置し、調査区南壁に一部接する。平面形は円形と推定され、調査区壁上で径 1.72 m・検出面からの深さ 80cm を測る。東壁面は中位で傾斜が変化し、開口部が直立ぎみに立ち上がる。覆土２層で切られる可能性もある。覆土から多量の縄文土器片（10・11）が出土した。縄文時代中期前葉に属する土坑と考えられる。

**ＳＫ 109**（第７図　写真図版４）

Ｂトレンチ（２Ｂ 11 － 60・61・70・71 グリッド）に位置する。平面形は長径 70cm・短径 60cm の楕円形を呈し、検出面からの深さは 20cm を測る。ほぼ平坦な底面に、２つの小ピットが掘り込まれる。縄文土器（12）が底面に貼り付いた状態で出土した。縄文時代（前期末葉？）に属する土坑と考えられる。

**ＳＫ 114**（第８図　写真図版４）

Ｂトレンチ（２Ａ 11 － 96 グリッド）に位置し、調査区東壁に一部接する。平面形は不整円形と推定され、調査区壁上で径 1.46 m・検出面からの深さ 22cm を測る。南壁面は中位で傾斜が変化し、底部まで湾曲して掘り込まれる。覆土３層は遺構を切り、複数の大礫を含む人為的埋土である可能性も考えられる。覆土から縄文土器片（13）が出土した。概ね縄文時代中期前葉に属する土坑と考えられる。

## （4）溝跡

Ｃ３・Ｄトレンチで検出した溝跡１条を取り上げる。

**ＳＤ 25**（第９図　写真図版５）

Ｃ３・Ｄトレンチ（２Ａ 11 － 27・28・37・38 グリッド）に位置し、調査区北壁と南壁に一部接する。平面プランから、北西方向にやや湾曲する溝跡と推定される。規模は北西－南東方向で幅約２ｍを測る。覆土から須恵器の壺１片が出土しており、奈良・平安時代に属する可能性が考えられる。なお、Ｇ３トレンチで検出したＳＸ 218（第２次調査）が北東に近接し、連続する溝跡となる可能性がある。形状・規模からは、近接する高瀬山古墳群に属する周溝である可能性も示唆される。

## （5）その他

土器がまとまって出土した性格不明遺構・遺物包含層を取り上げる。

**ＳＸ 108**（第８図　写真図版４）

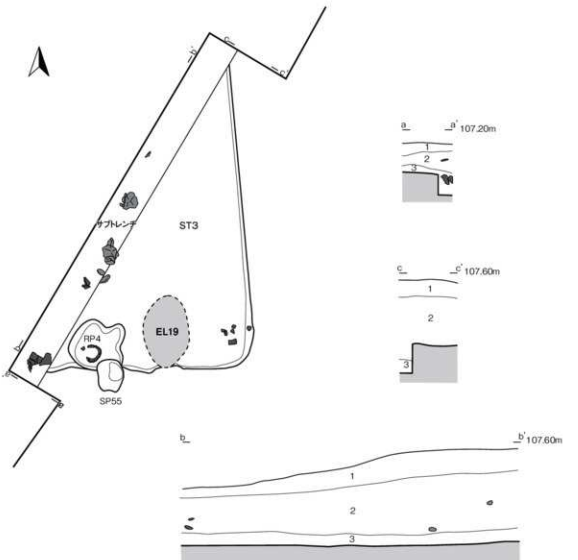
Ａ上部トレンチ（２Ａ 11 － 89 グリッド）に位置する。調査区の壁面に遺物がかかるため、調査区南東壁を一部拡張してある。15cm 大の礫石とともに、１個体の縄文土器（ＲＰ 28）が斜位に形状を留めた状態で出土した。検出面の表層で掘り方は判然としないが、縄文時代中期後半の埋設土器？に伴うものである可能性が高い。

**ＳＸ 157**（第８図　写真図版４）

Ｆ区（２Ｂ 11 － 53 グリッド）の南東壁に接し、浅い落ち込み状を呈する。調査区壁際のため遺構の広がりを捉えることはできなかったが、遺構検出時には周囲全体の落ち込んだ状況が認められた。底面直上から、１個体の土師器（15）が潰れた状態で出土した。平安時代（９世紀前～中葉）の竪穴状遺構？に伴うものである可能性が高い。

**Ｂトレンチ　遺物包含層**（第８図　写真図版４）

Ｂトレンチ東部（２Ｂ 11 － 70 グリッド）の北壁寄りで、地山上層の黒ボク土層から複数の縄文土器片（19・21・22）が散在して出土した。１個体に復元可能な土器は認められなかった。縄文時代中期前葉に属する遺物包含層と考えられる。

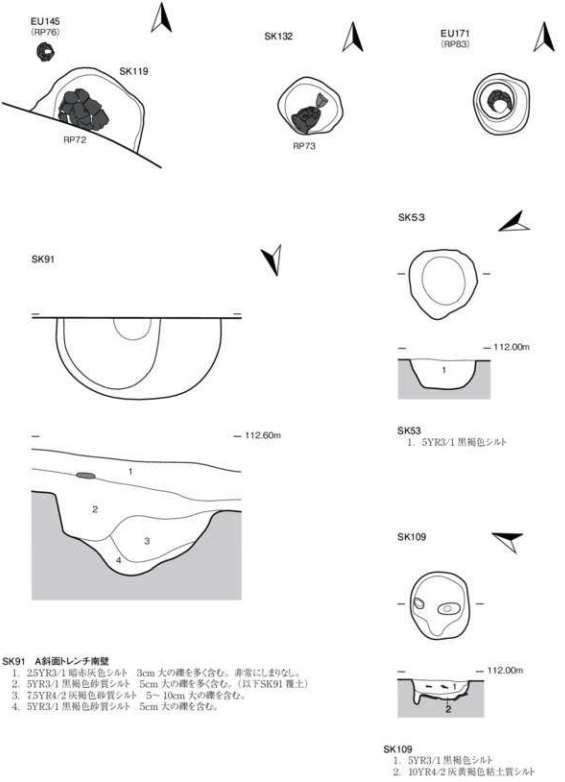



**ST3　C4下部トレンチ北西壁（拡張部）　a−a'　b−b'　c−c'**

1. 5YR3/1 黒褐色シルト～粗砂　しまりあり。
2. 7.5YR2/2 黒褐色シルト　しまりあり。a−a'・b−b'で土器片包含。
3. 7.5YR4/2 灰褐色粘土、7.5YR3/1シルトを斑状に含む。しまりあり。a−a'で非常にしまりのある7.5YR4/1・5YR3/1粘土を斑状に含み、土器片包含。（貼床?）

0　1m
1：40
焼土　土器　礫石

第6図　ST3　EL19

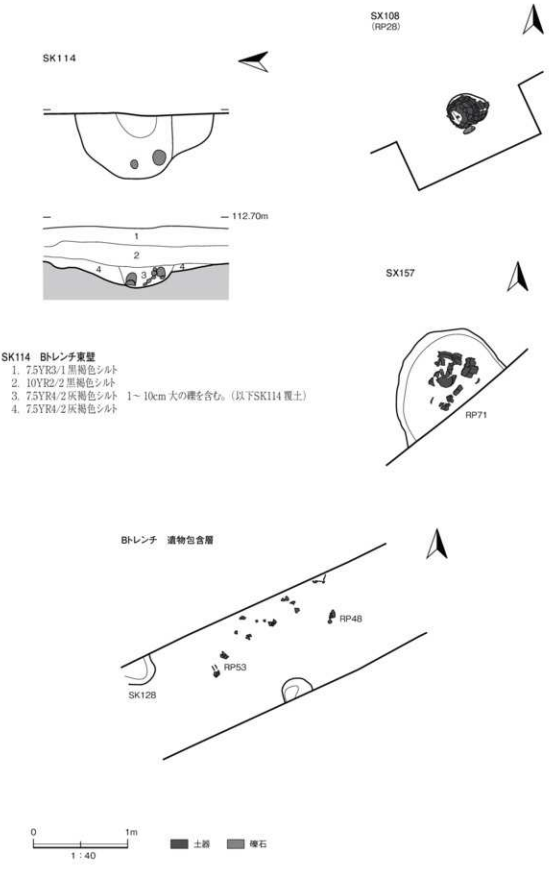



**SK91　A斜面トレンチ南壁**
1. 2.5YR3/1 暗赤灰色シルト　3cm 大の礫を多く含む。非常にしまりなし。
2. 5YR3/1 黒褐色砂質シルト　5cm 大の礫を多く含む。（以下SK91 覆土）
3. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト　5～10cm 大の礫を含む。
4. 5YR3/1 黒褐色砂質シルト　5cm 大の礫を含む。

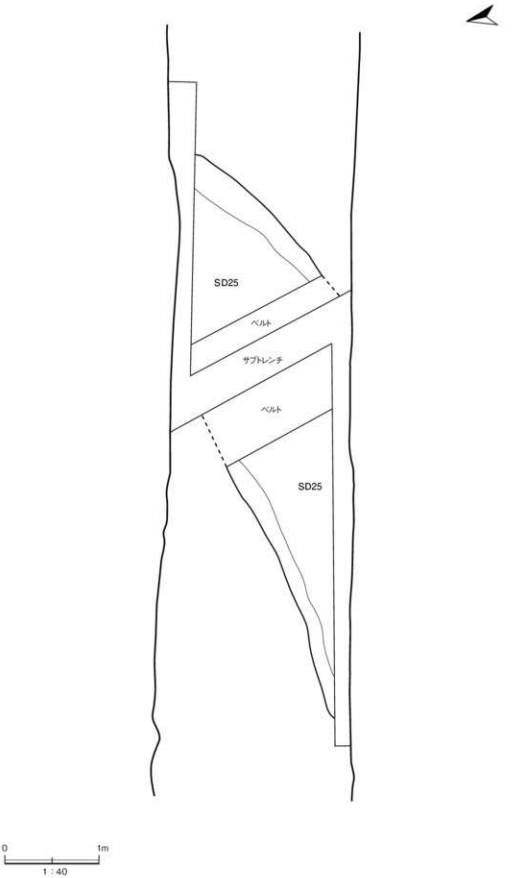
**SK53**
1. 5YR3/1 黒褐色シルト

**SK109**
1. 5YR3/1 黒褐色シルト
2. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト

第7図　ＥＵ145・171　ＳＫ53・91・109・119・132




第8図 ＳＫ114 ＳＸ108・157 Ｂトレンチ包含層




第9図　ＳＤ25

## 2　第２次調査の検出遺構

第２次調査では登録数で315基の遺構を検出した。主な遺構は、竪穴住居跡・複式炉跡・埋設土器・配石（埋石）遺構・袋状土坑・柱穴・溝跡などである。木根による撹乱とみられるものを除き、遺物を伴出する遺構が比較的多く、時期は概ね縄文・平安時代に属するものと考えられる。このほか、Ｈ５・10トレンチを中心に縄文時代の遺物包含層（捨て場？）を検出した。以下に、種別ごと主要な遺構の概要を述べる。

### （１）竪穴住居跡・複式炉跡

Ｈ１トレンチで平安時代の竪穴住居跡２棟、Ｈ５トレンチで縄文時代の複式炉跡１基、Ｈ７トレンチで縄文時代の竪穴住居跡１棟と複式炉跡１基を検出した。調査の性格上、遺構の全体プランを検出することができなかったため、炉・カマド跡など住居構造との関連から住居跡と判断した。複式炉は石囲炉と埋甕炉が組み合わさった炉の形態で、縄文時代中期後半の大木式土器の分布圏内において顕著に見られる。

**ＳＴ238**（第10図　写真図版７）

Ｈ１トレンチ（２Ａ12－62グリッド）に位置し、調査区東壁と西壁に一部接する。南西で撹乱（ビニール混入）を受ける。規模は南北方向で径約3.2ｍを測る。床面は概ね平坦で、地山土を斑状に含む貼床が認められる。遺構内の中央にＥＰ257が位置する。平面形は長径38cm・短径24cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは24cmを測る。遺構プランは床面から検出されており、住居跡に付属する柱穴である可能性も考えられる。床面から調査区東壁上の径26cmの範囲で焼土を検出したが、炉・カマド跡と判断されるものではない。覆土から土師器の塝（67）と甕（68）・須恵器の横瓶（69）・内黒土師器の破片が出土した。ＳＴ３（第１次調査）・240も近接しており、平安時代に属する竪穴住居跡と考えられる。

**ＳＴ240　ＥＬ260**（第10図　写真図版７）

ＳＴ240はＨ１トレンチ（２Ａ12－82グリッド）に位置し、調査区東壁と西壁に一部接する。壁際の数箇所で撹乱（木根による）を受けるため、遺構ラインは判然としない。カマドとの位置関係から、平面プランは北東－南西方向を主軸とする（長）方形又は隅丸（長）方形と推定される。規模は調査区東壁上で径4.26ｍ・検出面からの深さ18cmを測る。床面は概ね平坦で、貼床（覆土11層）が認められる。遺構内の中央にＥＫ259が位置する。平面形は長径1.06ｍ・短径54cmの長楕円形で、浅い落ち込み状を呈する。底面直上から赤焼土器の甕片が出土した。遺構プランは床面から検出されており、住居跡に付属する貯蔵穴である可能性も考えられる。

ＥＬ260は住居の南西壁に構築されたカマド跡と推定される。底面直上から調査区東壁上の径52cmの範囲で、燃焼部とみられる焼土を検出した。その底面からはカマド内に残されたと思われる赤焼土器の甕片（70）がまとまって出土し、右袖に据えられた袖石とみられる礫片も傍らで検出された。調査区壁の土層断面からは、煙道の痕跡（覆土10層）も認められる。

覆土から土師器の甕（71）と須恵器の甕（72）・高台付坏（73）の破片が出土した。平安時代（９世紀中葉）に属する竪穴住居跡と考えられる。

**ＥＬ499　ＥＵ514・515・517**（第11図　写真図版７）

Ｈ５トレンチ（２Ｂ14－20グリッド）に位置し、調査区南東壁に一部接する。規模は調査区壁上で径約1.8ｍ・検出面からの深さ約30cmを測る。調査区壁際において、複式炉の土器埋設部と石組部の一部が検出された。平面プランから掘り方などは確認できず、地山面を住居跡の床面として構築したものと考えられる。土層断面からは、竪穴住居跡とみられる壁の立ち上がりが観察された。その壁面に沿って掘り込まれるＳＸ502（覆土７層）は、調査区外に延びて住居跡の周溝となる可能性が考えられる。規模は調査区南東壁上で幅約20cm・検出面からの深さ40cmを測る。覆土５・６層は下位で灰？や被熱の痕跡が認められることから、炉跡の底面と判断される。

土器埋設部からは、埋設土器３基（ＥＵ514・515・517）とともに、床面の径50～60cmの範囲で焼土を検出した。主体となるＥＵ514は焼土・石組内に位置し、縄文土器（76）を正位に埋設する。残存する土器片から、土器の大きさは径21cm以上と推定される。掘り方の平面形は径34cmの円形を呈し、検出面からの深さは31cmを測る。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に掘り込まれる。埋設された土器と掘り方の差が大きく、土器埋

設部を造り替えた可能性も示唆される。そこから北東へやや離れた位置に、小型の２基（ＥＵ515・517）が補助的に配される。ＥＵ515は径11～13cmの縄文土器（77）を正位、ＥＵ517は径14～16cmの縄文土器（78）を逆位に埋設する。

時期は縄文時代中期末葉に属するものと考えられる。

**ＳＴ242　ＥＬ243　ＥＵ262**

（第11・12図　写真図版８）

Ｈ７トレンチ（２Ａ13－12グリッド）に位置し、調査区北壁と南壁に一部接する。検出プランから東で倒木痕に切られると思われるが、東側の検出状況はあまり判然としない。規模は調査区南壁上の検出部分で径約3.0m・検出面からの深さ36cmを測る。底面は概ね平坦で、西壁の立ち上がりはほぼ垂直である。西壁下で貼床の下層から検出された落ち込みは、調査区外に延びて周溝となる可能性も考えられる。覆土９・10層は貼床の可能性が高く、上面に炉跡（ＥＬ243）の焼土（覆土７層）を堆積することからも、住居の床面と推定される。

焼土範囲は調査区南壁上で径1.3m・厚さ６cmを測る。範囲内の北側中央の位置には、径約19cmの縄文土器（82）が逆位で埋設されていた。焼土面には、礫石がわずかに認められる。埋設土器（ＥＵ262）の時期や炉跡の検出状況から、複式炉（ＥＬ243）である可能性が高く、石組は再利用などの目的で除去されたものと思われる。

焼土面から１個体の縄文土器（79・80）が潰れた状態で出土した。このほか、覆土からミニチュア土器（焼土内　81）・台付鉢の脚台部（83）・錐形石器（88）・エンドスクレイパー（89）・ハンマーストーン（87・92）などが出土した。縄文時代中期末葉に属する竪穴住居跡と考えられる。

**ＥＬ247**（第12図　写真図版８）

Ｈ７トレンチ（２Ａ13－14・24グリッド）に位置し、調査区北東壁に一部接する。南東でＳＫ249を切る。規模は調査区壁上で径3.2m・検出面からの深さ68cmを測る。底面は平坦で狭く、擂鉢状に掘り込まれる。底部付近では、側壁に大礫を敷き詰めた石組と厚さ８cmの焼土堆積（覆土７層）が検出された。覆土全般に焼土や炭化物を含んでおり、覆土下層（７～９層）は炉の底面部分とみられる。底面から中期後葉、覆土から中期末葉に属する縄文土器片（93～102）が多量に出土した。このほか、覆土から半両面加工石器（103）が出土した。調査区壁にかかるため土器埋設部などは検出されていないが、前述したＳＴ242も近接しており、複式炉の前庭部と石組部の一部である可能性が高い。時期は縄文時代中期後～末葉に属するものと考えられる。遺構が複数重複する状況を呈しており、竪穴住居跡の掘り方など平面プランについては判然としない。

## （２）埋設土器

埋設土器は地中に設置した土器及びその施設である。ここでは縄文時代の屋外埋甕を取り上げる。このほか、第２次調査で検出した複式炉の炉体土器については、「（１）竪穴住居跡・複式炉跡」で取り上げた。

**ＥＵ211**（第13図　写真図版８）

Ｇ３トレンチ（２Ｂ10－71グリッド）に位置し、調査区北東壁に一部接する。平面プランにおける掘り方は判然とせず、径約27cmの縄文土器（104）が正位で埋設されていた。検出面から上部は重機による表土掘削で削平されてしまったが、調査区壁の断面に残る遺構覆土と土器の包含状況から、掘り方の深さは50cmを有するものと思われる。遺構は２層の上位から掘り込まれており、当該期の生活面から現地表面（工事盛土を除く）までの堆積は、厚さ３cm程度と推定される。縄文時代（後期前葉？）に属する埋設土器と考えられる。

**ＥＵ244**（第13図　写真図版８）

Ｈ７トレンチ（２Ａ13－13グリッド）に位置し、調査区北壁に一部接する。径約32cmの縄文土器（105～107）が正位で埋設されていた。掘り方の平面形は円形と推定され、調査区壁上で径66cm・検出面からの深さ28cmを測る。土層断面から、開口部の東側に土器片（２層）と厚さ５cmの焼土堆積（３層）が認められる。縄文時代中期末葉に属する埋設土器と考えられる。

**ＥＵ269**（第13図　写真図版９）

Ｈ７トレンチ（２Ａ13－25グリッド）に位置する。径16～24cmの縄文土器（108）が正位で埋設されていた。さらに、土器の上部は径24～42cmの板状の蓋石で覆われていた。南東に大きく傾斜する検出面の上層で掘り方は判然としないが、やや南側に地山の掘り込みが認められる。平面形は長径50cm・短径30cmの長楕円

形を呈し、検出面からの深さは16cmを測る。覆土は地山粒・ブロックを含む人為的埋土と考えられる。縄文時代後期前葉に属する埋設土器と考えられる。

### （3）立石・埋石土坑

柱状の礫石を地面に立てた状態で埋設した立石とともに、石棒と石皿あるいはそれに類した礫石を伴出する土坑を取り上げる。ここでは便宜的に後者を「埋石土坑」と分類して扱う。これらの遺構は覆土に焼土を伴う場合が多く、前述したＥＵ244・269とともに、Ｈ７・８トレンチの隣接する区域に分布が集中する。葬送儀礼などに関わる祭祀的な場といった性格が想起される。このほか、当該区域で焼土を堆積する土坑には、ＳＰ248・298、ＳＫ245・267・274・276・278・291、ＳＸ252・277・279・288等がある。

**ＳＫ254**（第13図　写真図版９）

Ｈ７トレンチ（２Ａ13－35グリッド）に位置し、調査区北東壁と南西壁に一部接する。平面形は不整形を呈し、調査区北壁上で径92cm・検出面からの深さ48cmを測る。形状は概ね袋状を呈する。覆土３・４層は地山粒・ブロックを含む人為的埋土の可能性が高い。覆土下層の径52～74cmの範囲で焼土を検出した。また、底面から凹面を下に向けた石皿の半損品（113）と棒状礫の中間部（112）が２つに折損した状態で伴出した。石棒と石皿の共伴事例は多く、男性的象徴の石棒と女性的象徴の石皿を対にして、生殖行為を隠喩的に表現したものと考えられている（谷口2006）。覆土から後期前葉（109）、底面から中期後半に属する縄文土器片が出土した。縄文時代中期後半～後期前葉に属する埋石土坑と考えられる。

**ＳＰ265・266**（第14図　写真図版10）

ＳＰ265はＨ７トレンチ（２Ａ13－35グリッド）に位置し、北西でＳＸ255を切る。平面形は長径54cm・短径40cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。長さ約34cmの棒状の自然礫を斜めに立てた状態で埋設しており、土層断面から掘り方とみられる掘り込みが確認される。覆土は焼土・炭化物・地山ブロックを含む人為的埋土と考えられる。出土土器から、概ね縄文時代中期末葉に属する立石と考えられる。

なお、南東に隣接するＳＰ266からは、柱痕跡？が検出された。平面プランにおける掘り方はＳＰ265と同程度の大きさであるが、柱痕跡など土坑内の状況については判然としない。遺構の時期や性格を示すような遺物は出土しなかったが、ＳＰ265・266ともに当初の検出面よりも下層で検出されており、時期的には近い関係にあると思われる。立石との関連を考慮すると、石柱（木柱？）などを埋設していた可能性も考えられる。

**ＳＫ268**（第14図　写真図版10）

Ｈ７トレンチ（２Ａ13－46グリッド）に位置し、調査区北東壁に一部接する。北西でＳＫ267を切り、南東でＳＤ256に切られる。平面形は楕円形と推定され、調査区壁上で径90cm・検出面からの深さ56cmを測る。底面は平坦で、壁面は急角度に掘り込まれる。覆土は５～10層に細分される。覆土５・６層に焼土と炭化物を含み、焼土７層は厚さ６cmで堆積する。覆土８・９層は地山ブロックを含む人為的埋土の可能性が高い。底面直上から30cm大の方形の礫石とともに、石皿？（凹みのある円礫　119）が凹面を上に向けて出土した。覆土から縄文土器片（116・117）と土製耳飾りと考えられる土製品（118）が出土した。概ね縄文時代後期前葉に属する埋石土坑と考えられる。

**ＳＰ271**（第14図　写真図版10）

Ｈ７トレンチ（２Ａ13－46グリッド）に位置する。平面形は径20～30cmの不整円形を呈し、検出面からの深さは32cmを測る。２つの浅い皿状の落ち込みに重複して、さらに深く円柱状に掘り込まれる。覆土は炭化物と地山ブロックを含む人為的埋土の可能性が高い。覆土から錐形石器（121）が出土した。遺構の真上にあたる位置からは、30cm大の礫石とともに、焼けた痕跡のある石皿（122）が凹面を上に向けて出土した。検出面の上層で掘り方は判然としないが、炭化物や地山ブロックを含む遺構覆土との関連も示唆される。さらに、遺物の大きさや位置関係からは、石皿を小ピットの上部に蓋石のようにして据えた可能性が考えられる。前述した近隣遺構（ＥＵ269　ＳＫ254・268）との関連性を考慮し、ここで取り上げておく。出土土器から、時期は概ね縄文時代中期末葉に属するものと考えられる。

**ＳＫ286**（第19図　写真図版10）

Ｈ８トレンチ（２Ａ13－45グリッド）に位置し、調査区北東壁に一部接する。北西でＳＤ282に切られる。

平面形は不整円形と推定され、調査区壁上で径80cm・検出面からの深さ36cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は急角度に掘り込まれる。覆土下層から径約10cm・長さ約20cmの角柱状の自然礫が、ほぼ直立した状態で出土した。掘り方は確認しておらず、埋設されたものであるかどうかは不明である。しかしながら、覆土は焼土・炭化物・地山ブロックを含んでおり、人為的埋土である可能性が高い。近隣遺構との関連からも、埋石土坑あるいは立石として取り上げておく。このほか、覆土から錐形石器（120）が出土した。出土土器から、時期は概ね縄文時代中期末葉に属するものと考えられる。

## （4）土坑

袋状土坑・柱穴・主要な遺物が出土した土坑など、顕著な事例を中心に取り上げる。

袋状土坑は開口部が狭く、内部が袋状又はフラスコ状に広がる土坑である。検出された土坑には、上部の崩落により元の形状を留めていないもの（ＳＰ251・280　ＳＫ377等）も含まれる。これらは主に貯蔵や廃棄などの用途が考えられるが、縄文時代の袋状土坑５基（ＳＫ302・304・329・358・364）は、数個体の土器や焼土が幾層にも積み重なった堆積状況を呈しており、廃棄などの行為が重複して行われたものと考えられる。

柱痕跡が検出された柱穴は数基あるが、建物を構成するような規則的配置は認められなかった。

**ＳＫ330**（第14図　写真図版10）

Ｈ２トレンチ（２Ｂ13－05・06・15グリッド）に位置し、調査区南東壁に一部接する。平面形は不整楕円形と推定され、調査区壁上で径12cm・検出面からの深さ46cmを測る。底面はほぼ平坦で、南壁面は中位から大きくオーバーハングする。覆土から多量の縄文土器片（123・124）と18cm大の礫石が出土した。覆土４層は壁崩落土、覆土５・６層は人為的埋土の可能性が高い。概ね中期末葉～後期前葉に属する袋状土坑と考えられる。

**ＳＫ355**（第15図　写真図版10）

Ｈ３トレンチ（２Ｂ12－63グリッド）に位置し、調査区東壁と西壁に一部接する。平面形は径90cm～1.3mの不整楕円形と推定される。南東壁面は中位から大きくオーバーハングする。覆土下層から縄文土器片（125～130）が潰れた状態でまとまって出土した。縄文時代中期前葉に属する袋状土坑と考えられる。

**ＳＫ358**（第15図　写真図版11）

Ｈ３トレンチ（２Ｂ12－73グリッド）に位置し、調査区北東壁と南西壁に一部接する。平面形は径1～1.1mの円形と推定され、概ね袋状を呈する。覆土中層から縄文土器片（133）がまとまって出土した。底面からは１個体の縄文土器（134）が潰れた状態で出土した。このほか、覆土から半両面加工石器（137）が出土した。縄文時代中期中葉～末葉に属する袋状土坑と考えられる。なお、134の内面（口縁～胴部片）において、内容物と思われる白色物質を採取している。詳細については、第Ⅵ章で後述する。

**ＳＫ364**（第15図　写真図版11）

Ｈ３トレンチ（２Ｂ13－04グリッド）に位置し、調査区北東壁と南西壁に一部接する。平面形は不整形を呈し、南北方向で径1.1mを測る。検出面からの深さは64cmを測る。底面は平坦で、北西壁面は中位から大きくオーバーハングする。覆土は１～９層に細分される。砂層が主体で、人為的埋土の可能性が高い。覆土上層から１個体の縄文土器（138）が正位で出土した。底面直上からは４個体の縄文土器（139～141・142）が横位に一部潰れた状態で出土した。このほか、覆土から円盤形石器（145）と短形剥片石核（146）が出土した。縄文時代中期前葉に属する袋状土坑と考えられる。

**ＳＫ397**（第15図　写真図版11）

Ｈ４トレンチ（２Ｂ13－51グリッド）に位置し、調査区南東壁に一部接する。南西でＳＫ396を切る。平面形は不整円形と推定され、調査区壁上で径86cm・検出面からの深さ16cmを測る。形状は概ね浅い皿状を呈する。底面から１個体の縄文土器が潰れた状態で出土した。縄文時代中期中～後葉に属する土坑と考えられる。

**ＳＫ220**（第16図　写真図版11）

Ｈ６トレンチ（Ｚ12－98　Ｚ13－08グリッド）に位置し、調査区南壁に一部接する。平面形は円形と推定され、調査区壁上で径1.46m・検出面からの深さ68cmを測る。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に掘り込まれる。覆土は５～12層に細分される。覆土中・上層（５～10層）は概ね地山ブロックを含む人為的埋土と考えられる。覆土下層（11・12層）は開口部や側壁の崩落土とみられることから、元の形状は開口部が狭い袋状を呈し

ていたものと思われる。遺構の時期や性格を示すような遺物は出土しなかった。しかし、付近には前述したＳＴ３（第１次調査）・238・240がまとまって分布しており、これらの住居に付随する貯蔵穴であった可能性が考えられる。覆土の色調・土質からも、概ね平安時代に属する大型の袋状土坑と考えられる。

**ＳＫ246**（第16図　写真図版11）

Ｈ７トレンチ（２Ａ13－13グリッド）に位置する。平面形は長径56cm・短径32cmの不整隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは７cmを測る。底面は平坦で、浅い皿状を呈する。検出面の径26～52cmの範囲で焼土を検出した。また、１個体の縄文土器（151）が底面に貼り付いた状態で出土しており、覆土１層は土器内の覆土を示すものとみられる。縄文時代中期末葉に属する土坑と考えられる。

**ＳＫ270**（第16図　写真図版12）

Ｈ７トレンチ（２Ａ13－35･45グリッド）に位置し、調査区南西壁に一部接する。平面形は円形と推定され、調査区壁上で径78cm・検出面からの深さ68cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁面はやや上位からオーバーハングする。覆土は焼土・炭化物・地山ブロックを含む人為的埋土の可能性が高い。覆土から縄文土器片（148・149）と半両面加工石器（150）が出土した。概ね縄文時代中期末葉～後期前葉に属する袋状土坑と考えられる。

**ＳＫ302**（第16図　写真図版12）

Ｈ８トレンチ（２Ａ13－78グリッド）に位置し、調査区北東壁に一部接する。平面形は円形と推定され、調査区壁上で径1.18ｍ・検出面からの深さ86cmを測る。底面は平坦で、壁面はオーバーハングぎみに掘り込まれる。覆土は４～10層に細分される。壁崩落土とみられる覆土９層を除き、概ね炭化物と地山ブロックを含む人為的埋土と考えられる。覆土中層の３か所で焼土範囲を検出した。焼土の上層（覆土４層？）からは縄文土器片（152・153）がまとまって出土した。縄文時代中期末葉に属する袋状土坑と考えられる。

**ＳＫ304**（第17図　写真図版12）

Ｈ８トレンチ（２Ａ13－78グリッド）に位置し、調査区北東壁と南西壁に一部接する。北西で浅い皿状の落ち込みと重複する。平面形は径1.1ｍの円形と推定され、検出面からの深さは90cmを測る。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に掘り込まれる。覆土は１～10層に細分される。概ね焼土・炭化物・地山ブロック・砂を含む人為的埋土と考えられる。覆土上層の２面（１・３層）で焼土範囲を検出し、焼土３層は厚さ８cmで堆積する。底面直上からは、36cm大の礫石とともに、縄文土器片（163・164）がまとまって出土した。このほか、覆土から石錐状石製品（171）が出土した。縄文時代中期末葉に属する袋状土坑と考えられる。

**ＳＫ310**（第17図　写真図版12）

Ｈ８トレンチ（２Ａ13－89グリッド）に位置し、調査区南西壁に一部接する。平面形は径1.0ｍの円形と推定される。底面は浅く、ほぼ平坦である。底面直上から、１個体の縄文土器（172）が横位に一部潰れた状態で出土した。縄文時代中期末葉～後期前葉に属する袋状土坑と考えられる。

**ＳＰ316**（第17図　写真図版12）

Ｈ８トレンチ（２Ａ13－89グリッド）に位置し、北でＳＰ315を切る。平面形は径52cmの円形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。底部まで湾曲して掘り込まれる。覆土２層は地山ブロックを含む人為的埋土と考えられる。覆土１層を柱痕跡、覆土２層を掘り方とする柱穴と判断される。出土土器から、概ね縄文時代中期末葉に属するものと考えられる。ＳＫ319（柱穴）が柱間距離で南東約２ｍに近接することから、建物として組み合う可能性も考えられる。

**ＳＫ319**（第17図　写真図版12）

Ｈ８トレンチ（２Ｂ13－80グリッド）に位置し、調査区北東壁に一部接する。平面形は楕円形と推定され、調査区壁上で径80cm・検出面からの深さ30cmを測る。底面はほぼ平坦で、開口部から外側へ緩やかに立ち上がる。覆土７～９層は概ね地山土・ブロックを含む人為的埋土と考えられる。覆土５層は土坑の上面を覆って水平に堆積しており、柱消失後における人為的埋土である可能性が考えられる。覆土６層を柱痕跡、覆土７～９層を掘り方とする柱穴と判断される。出土土器から、概ね縄文時代中期末葉に属するものと考えられ、前述したＳＰ316との関連も示唆される。

**ＳＫ329**（第17図　写真図版13）

Ｈ８トレンチ（２Ａ13－46･56グリッド）に位置し、調査区南西壁に一部接する。ＳＸ288内の中央に位置す

るが、重複関係は不明である。平面形は径1.0ｍの円形と推定される。北西壁面はオーバーハングし、概ね袋状を呈する。検出面の表層から、縄文土器片がまとまって出土した。底面直上からは、12cm大の礫石とともに、縄文土器片（174）がまとまって出土した。縄文時代中期末葉～後期前葉に属する袋状土坑と考えられる。

## （5）溝跡

Ｇ２・３トレンチとＨ８トレンチで検出した大型の溝跡（竪穴状遺構？）３条を取り上げる。

**ＳＸ 203**（第18図　写真図版13）

Ｇ２トレンチ（２Ｂ10－34グリッド）に位置し、調査区北西壁と南東壁に一部接する。規模は調査区南東壁上で径5.26ｍ・検出面からの深さ54cmを測る。底面は平坦で、南西壁面は緩やかに掘り込まれる。土層断面からは確認できないが、北東壁面は急角度で階段状を呈する。覆土は黒ボク土の単層で、色調・土質から時期的にやや新しいと判断される。河川などの自然流路というよりは、人為的な大型の溝跡である可能性が高い。覆土から、混入とみられる少量の縄文土器片（175）・珪質頁岩製の剥片・磨滅した円盤形土製品が出土した。遺構の時期や性格については判然としない。

**ＳＸ 218**（第18図　写真図版13）

Ｇ３トレンチ（２Ａ11－17グリッド）に位置し、調査区北西壁と南東壁に一部接する。平面プランから溝跡あるいは竪穴状遺構と推定されるが、大部分が調査区壁にかかるため判然としない。規模は調査区北西壁上で径3.1ｍ・検出面からの深さ32cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに湾曲して掘り込まれる。遺構の時期や性格を示すような遺物は出土しなかったが、覆土の色調・土質から時期的にやや新しいと判断される。前述したＳＤ25（第１次調査）との関連から、近接する高瀬山古墳群に属する周溝である可能性も示唆される。

**ＳＤ 282**（第19図　写真図版13）

Ｈ８トレンチ（２Ａ13－35・45グリッド）に位置し、調査区北東壁と南西壁に一部接する。北西でＳＫ285、南東でＳＫ286を切る。北東方向に湾曲する溝跡と推定される。周溝状を呈するが、北西側の幅が狭くなり、隣接するＨ７トレンチでも連続するような溝跡は検出されていない。検出プランから、調査区北東壁上で北西側の径34cm・南東側の径1.5ｍを測る。底面は平坦で、調査区北東壁上の南東側で検出面からの深さ38cmを測る。覆土３層は地山ブロックを含む人為的埋土の可能性が高い。覆土（176・177）と底面から、縄文土器片がまとまって出土した。このほか、覆土から尖頭スクレイパー（180～181）と短形剥片石核（182）が出土した。遺構の重複関係からは、時期的にやや新しいと判断される。出土遺物は混入などの可能性があり、遺構の時期や性格は判然としない。

## （6）その他

性格不明の竪穴状遺構や主要な遺物が出土した土坑群・遺物包含層を取り上げる。竪穴状遺構には、遺構プランや焼土などの検出状況から、竪穴住居跡の可能性を有するものが含まれる。

**ＳＸ 212**（第19図　写真図版13）

Ｇ３トレンチ（２Ｂ10－81グリッド）に位置し、調査区南東壁に一部接する。規模は調査区壁上で径3.1ｍ・検出面からの深さ44cmを測る。調査区壁にほぼ直交して切られる南西壁面の断面から判断して、壁面の立ち上がりは急角度で、覆土５層は壁崩落土の可能性が高い。遺構の時期や性格を示すような遺物は出土しなかったが、覆土の色調・土質から時期的にやや新しいと判断される。平面プランからは、隅丸（長）方形を呈する竪穴状遺構（竪穴住居跡？）の北西角部分である可能性が考えられる。

**ＳＸ 241**（第20図　写真図版13）

Ｈ１トレンチ（２Ａ12－92グリッド）に位置し、調査区東壁と西壁に一部接する。南で倒木痕に切られる。規模は調査区東壁上の残存部分で径1.54ｍ・検出面からの深さ34cmを測る。底面は概ね平坦で、壁面はほぼ直立する。覆土は概ね炭化物と地山土・ブロックを含む人為的埋土と考えられ、覆土内には整理箱で縄文土器片１箱と石器資料３箱に及ぶ多量の遺物が包含されていた。土器は縄文時代中期末葉が主体となり、石器資料には、若干のトゥールのほかに、多量の石刃・石刃核・剥片類・石核があり、多数の接合資料が認められる。このＳＸ241出土の石器資料とその製作技術については、次章で詳述する。主に、石器製作に排出された剥片や石核などを一括した、石器一括遺構と言える。

底面からは45cm大の扁平な円礫が検出され、脆くひび割れて焼けた痕跡が認められた。なお、土層断面において柱穴とみられる小ピット（９層）が、覆土11層の上面から掘り込まれる。平面プランや検出状況からは、ＳＸ241は本来円形を呈する竪穴住居跡であった可能性が考えられる。その場合は、住居廃絶後に石器一括が行われたかもしれない。

**SK 406～413　SP 414・415**

（第21図　写真図版14・15）

Ｈ４トレンチ南西部（２Ｂ13－60・70グリッド）において、北東－南西方向で径約５ｍの範囲に重複して、約11基の土坑・ピットが検出された。数個体の縄文土器片と土製品、石器資料などの遺物がまとまって出土した。以下に、土坑ごとの出土状況について詳述する。

ＳＫ406の底面直上から、１個体の縄文土器（191：後期前葉）が潰れた状態で出土した。ＳＫ407の覆土から、石皿（196）が凹面を上に向けて出土した。ＳＫ408の覆土から、土製品（土偶の頭部？　195）が出土した。ＳＫ411の底面直上から、１個体の縄文土器(197)が潰れた状態で出土した。ＳＫ412の覆土からヘラ形石器（201）、底面直上から数個体の縄文土器（198：中期末葉）が潰れた状態で出土した。縄文時代中期末葉～後期前葉に属する土坑の集中域と考えられる。

**ＳＸ277**（第20・21図　写真図版15）

Ｈ８トレンチ（２Ａ13－24グリッド）に位置し、調査区北東壁と南西壁に一部接する。南東でＳＫ278を切り、西でＳＫ377に切られる。規模は北西－南東方向で径約2.6ｍ、調査区南西壁上で検出面からの深さ38cmを測る。南東壁面は緩やかに立ち上がり、底面の３か所で浅い凹みが認められる。覆土は焼土・炭化物・地山粒を含む人為的埋土の可能性が高い。覆土から縄文土器片（205）と扁平礫（206）が多孔面を上に向けて出土した。概ね縄文時代中期末葉～後期前葉に属する竪穴状遺構と考えられる。

**ＳＸ288**（第22図　写真図版15）

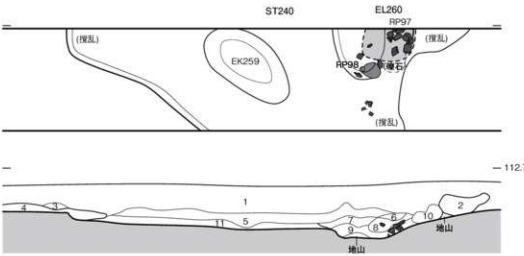
Ｈ８トレンチ（２Ａ13－45・46・56グリッド）に位置し、調査区北東壁と南西壁に一部接する。前述したＳＫ329（袋状土坑）が遺構内の中央に位置するが、重複関係は不明である。規模は北西－南東方向で径約4.5ｍを測る。底面には大小のピットが複数掘り込まれる。検出面の表層で遺構内の５か所に散在して、焼土の分布が認められた。遺構内ピット（ＳＫ329を含む）や焼土については、住居構造（貯蔵穴・柱穴・地床炉など）との関連も示唆される。覆土から縄文土器片（207・208）・鋸歯縁石器（209）・石刃（210）が出土した。概ね縄文時代中期末葉～後期前葉に属する竪穴状遺構（竪穴住居跡？）と考えられる。

**Ｈ５トレンチ　遺物包含層**（第22図　写真図版15）

Ｈ５トレンチ東部の径15ｍ程度の範囲（２Ｂ13－97・98　２Ｂ14－07グリッド　Ｈ５－２・３・４区間）を中心として、黒ボク土の中層（覆土２層）で検出された。段丘南東縁辺にあたり、高瀬山との間のやや低まった地形に立地する。Ｈ５トレンチの検出面で最も低く、黒ボク土の堆積も厚い。範囲内にあるＳＰ450の検出面で、標高110.7ｍ・現地表面からの深さ86ｃｍを測る。Ｈ５トレンチの包含層からは、整理箱で土器片37箱と石器資料６箱に及ぶ遺物が出土した。主要な遺物として、縄文土器（211～213）・土製耳飾（214）・円盤形土製品（218・219）・土製腕輪（220）・緩形石匙（223・224）・石核（229）・凹石（227・228・226）・棒状礫（225・230）・磨製石斧がある。縄文時代後期前葉に属する遺物包含層と考えられる。調査当初は検出面までの堆積が厚く、遺構がほとんど検出されないことから、遺物を包含する黒ボク土の中層に当該期の遺構が内在するものと思われた。しかし、その後の遺物整理で復元可能な土器が希少であったことを考えると、土器などの捨て場である可能性が高い。顕著な凹地や斜面はみられないが、段丘平坦面のより低い地形を利用したものと推測される。

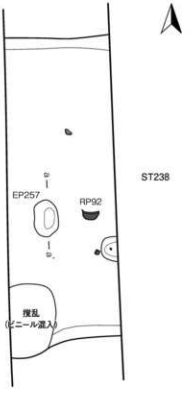
**Ｈ10トレンチ　遺物包含層**（第22図　写真図版16）

Ｈ10トレンチの径10ｍ程度の範囲（２Ｂ14－47・48　２Ｂ14－56・57グリッド　Ｈ10－８・９区間）を中心として、地山上層の黒ボク土層で検出された。高瀬山の西麓斜面と接する段丘北東端に位置する。Ｈ10トレンチの包含層からは、整理箱で土器片14箱と石器資料３箱に及ぶ遺物が出土した。複数の礫石とともに、２個体の縄文土器（231・232）が潰れた状態で出土した。主な石器資料には、凹石（236）・棒状礫（237）・石皿がある。縄文時代後期前葉に属する遺物包含層と考えられる。出土状況や立地からは、集落の外縁における捨て場と位置付けられる。



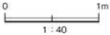

**ST240　EL260　H1トレンチ東壁**

1. 10YR2/2 黒褐色シルト　黄褐色シルト粒を 10%含む。しまり弱。(表土)
2. 10YR3/1 黒褐色シルト　黄褐色シルトブロックを含む。(根による撹乱)
3. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト　しまり弱。(ST240 覆土)
4. 2と同じ　(撹乱)
5. 10YR3/3 暗褐色シルト　黄褐色シルトを斑状に 10%含む。5～ 10mm 大の炭化物を5%含む。しまりやや強。(以下ST240 覆土)
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　黄褐色シルトブロックを含む。しまりやや強。(以下 10 層までEL260 覆土)
7. 10YR3/2 黒褐色シルト　焼土・5～ 10mm大の炭化物を 10%含む。しまり弱。
8. 7.5YR4/3 褐色シルト　焼土ブロック・5～ 10mm大の炭化物を 10%含む。遺物を多く含む。(カマド崩落土)
9. 10YR3/3 暗褐色シルト　黄褐色シルトブロックを 20%含む。しまり強。(カマド底面)
10. 10YR4/2 灰黄褐色シルト　黄褐色シルトを斑状に 50%含む。しまりやや弱。(カマド煙道)
11. 10YR3/2 黒褐色シルト　黄褐色シルトブロックを 50%含む。しまり強。(ST240 貼床)



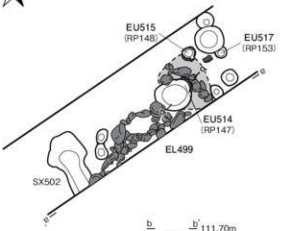
**EP257　a－a'**

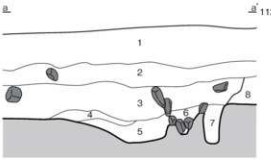
1. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト　しまり強。
2. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト　しまり強。




焼土　土器　礫石

第 10 図　ＳＴ238・240　ＥＬ260



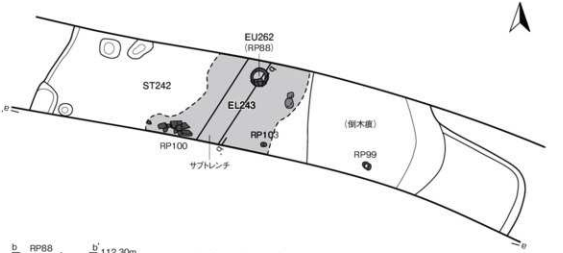

EL499　SX502　H5トレンチ南東壁　a–a'

1. 10YR2/2 黒褐色微砂　(表土)
2. 10YR2/1 黒色シルト　軟らかい。粘性あり。(遺物包含層)
3. 10YR2/2 黒褐色微砂　大きめの礫・炭化粒を少し含む。軟らかい。粘性あり。(以下7層まで住居跡の覆土)
4. 10YR2/2 黒褐色微砂　小礫・炭化物・土器粒を含む。軟らかい。粘性あり。
5. 10YR2/2 黒褐色微砂　層下位で軟らかいシルト灰?を層状に含む。軟らかい。粘性あり。(EL499 前庭部の覆土)
6. 10YR2/1 黒色シルト　層下位の礫が被熱により脆くなっている。軟らかい。粘性あり。
7. 10YR2/3 黒褐色細砂　しまりあり。粘性あり。(SX502 覆土　住居跡の周溝?)
8. 10YR2/3 黒褐色粗砂　小礫を微量含む。軟らかい。粘性なし。




EU514　b–b'

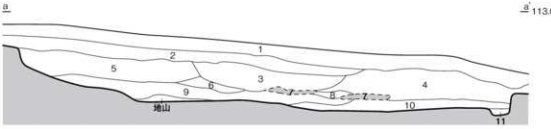
1. 10YR2/3 黒褐色粗砂　軟らかい。(RP147 内の覆土?)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂　地山粗砂を層状に含む。軟らかい。やや粘性あり。
3. 10YR3/1 黒褐色粗砂　軟らかい。



EL243（サブトレンチ）　b–b'

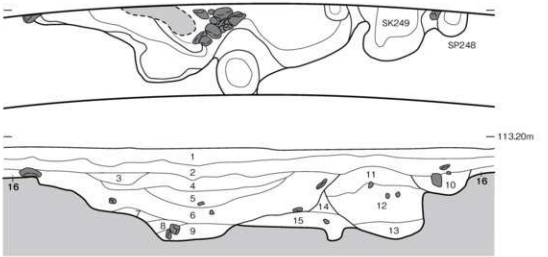
1. 7.5YR4/4 褐色シルト　炭化物を含む。しまり中。粘性中。(焼土)
2. 10YR3/2 黒褐色シルト　地山ブロックを少し含む。しまり中。粘性中。
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　地山ブロックを多く含む。しまり強。粘性強。

第 11 図　ＳＴ242　ＥＬ243・499　ＥＵ262・514・515・517




**ST242　H7トレンチ南壁　a–a'**

1. 10YR2/3黒褐色シルト　（表土）
2. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり中。粘性中。
3. 10YR2/3黒褐色シルト　土器片を含む。しまり中。粘性中。（以下ST242 覆土）
4. 10YR2/2黒褐色シルト　炭化物を少し含む。しまり中。粘性中。
5. 公に類似　地山ブロックを少し含む。
6. 10YR6/6明黄褐色細砂　しまり中。粘性弱。
7. 5YR4/4にぶい赤褐色シルト　しまり強。粘性弱。（焼土）
8. 10YR3/3暗褐色シルト　地山ブロック・土器片を含む。しまり強。粘性中。
9. 10YR3/2黒褐色シルト　地山小ブロックを多く含む。焼土・土器片を含む。しまり強。粘性中。（貼床?）
10. 10YR2/2黒褐色シルト　地山小ブロックを多く含む。焼土・炭化物を少し含む。しまり強。粘性中。（貼床?）
11. 10YR6/6明黄褐色シルト　10YR3/3シルトを斑状に含む。しまり中。粘性中。



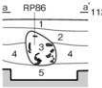

**EL247　SP248　SK249　H7トレンチ北東壁**

1. 10YR2/2黒褐色シルト　（表土）
2. 10YR1.7/1黒色シルト　しまり弱。粘性中。
3. 10YR2/2黒褐色砂質シルト　土器片を含む。しまり弱。粘性中。（以下9 層までEL247 覆土）
4. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト　焼土・炭化物を含む。しまり中。粘性中。
5. 10YR2/2黒褐色砂質シルト　小礫・炭化物を含む。しまり中。粘性中。
6. 10YR3/4暗褐色砂質シルト　中礫・焼土・炭化物を含む。しまり中。粘性弱。
7. 7.5YR3/3暗褐色シルト　焼土粒を多く含む。しまり強。粘性中。
8. 10YR2/2黒褐色シルト　炭化物を多く含む。しまり弱。粘性中。
9. 10YR6/4にぶい黄橙色細砂　10YR2/1シルトを斑状に多く含む。しまり弱。粘性弱。
10. 10YR3/3暗褐色シルト　焼土・炭化物を少し含む。しまり強。粘性中。（SP248 覆土）
11. 10YR3/3暗褐色シルト　地山ブロックを少し含む。しまり中。粘性中。（以下13 層までSK249 覆土）
12. 10YR3/3暗褐色シルト　地山ブロックを多く含む。しまり強。粘性中。
13. 10YR3/2黒褐色シルト　地山粒を含む。しまり強。粘性中。
14. 10YR3/3暗褐色シルト質砂　10YR2/1シルトを斑状に含む。炭化物を含む。しまり中。粘性中。
15. 10YR3/3暗褐色シルト質砂　地山ブロックを多く含む。しまり強。粘性中。
16. 10YR2/1黒色シルト　しまり中。粘性中。

第12図　ST242　EL247

EU211
(RP86)

**EU211（サブトレンチ） b–b'**
1. 10YR2/2 黒褐色シルト　RP86 裾設。（EU211 覆土）
2. 10YR5/6 黄褐色シルト　（地山）

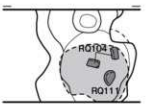


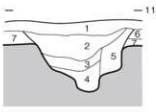

**EU211　G3トレンチ北東壁　a–a'**
1. 10YR3/3 暗褐色シルト～粗砂　2mm ～5cm 大の礫を含む。しまりあり。（盛土）
2. 10YR2/3 黒褐色シルト
3. 10YR2/2 黒褐色シルト　RP86 裾設。（EU211 覆土）
4. 10YR2/3 黒褐色シルト　10YR5/6 シルトを斑状に少し含む。
5. 10YR5/6 黄褐色シルト　（地山）

EU269

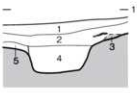
**EU269**
1. 10YR3/3 暗褐色シルト　地山粒を少し含む。しまり中。粘性中。（以下2層までRP90 内の覆土）
2. 10YR3/3 暗褐色シルト　地山ブロックを多く含む。しまり中。粘性中。
3. 10YR3/3 暗褐色シルト　地山粒を少し含む。しまり中。粘性中。
4. 10YR3/3 暗褐色シルト　地山ブロックを多く含む。しまり中。粘性中。

SK254



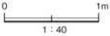




EU244
(RP93)

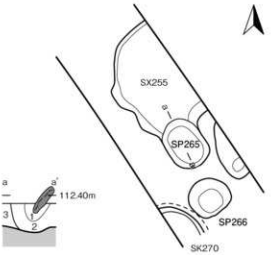



**EU244　H7トレンチ北壁**
1. 10YR2/2 黒褐色シルト・砂　（表土）
2. 10YR2/1 黒色シルト　地山小ブロックを少し含む。しまり中。粘性中。
3. 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト　しまり強。粘性弱。（焼土）
4. 10YR3/3 暗褐色シルト　地山ブロックを少し含む。しまり強。粘性中。（EU244 覆土）
5. 2に類似　地山ブロックを含む。

**SK254　H7トレンチ北東壁**
1. 10YR3/2 黒褐色シルト　（表土）
2. 10YR2/1 黒色シルト　地山粒を少し含む。しまり中。粘性中。（以下5層までSK254 覆土）
3. 10YR3/3 暗褐色シルト　地山大ブロックを含む。しまり中。粘性中。
4. 10YR3/4 暗褐色シルト　地山ブロックを多く含む。しまり中。粘性中。
5. 10YR3/3 暗褐色シルト　しまり中。粘性中。
6. 10YR2/1 黒色シルト　しまり中。粘性中。
7. 10YR6/8 明黄褐色砂質シルト　（地山）

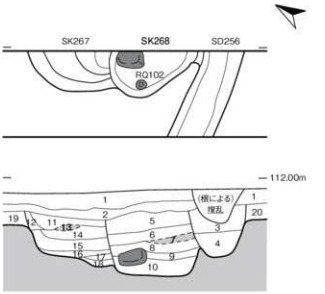



第13図　EU211・244・269　SK254



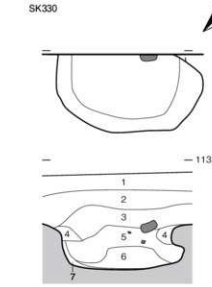

**SX255　SP265**

1. 10YR3/2黒褐色シルト　焼土粒・炭化物を少し含む。しまり中。粘性中。石柱埋設。（以下2層までSP265 覆土）
2. 10YR3/3暗褐色シルト　地山ブロックを多く含む。しまり強。粘性中。
3. 10YR2/2黒褐色シルト　地山大ブロックを含む。しまり弱。粘性中。（SX255 覆土）



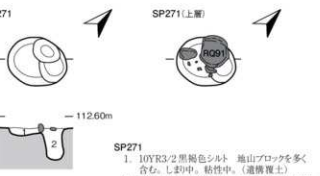

**SD256　SK267・268　H7トレンチ東壁**

1. 10YR2/2黒褐色シルト　（表土）
2. 10YR2/3黒褐色シルト　焼土・炭化物を少し含む。
3. 10YR2/2黒褐色シルト　地山粒を少し含む。しまり中。粘性中。（以下4層までSD256 覆土）
4. 10YR2/3黒褐色シルト　地山ブロックを多く含む。しまり中。粘性中。
5. 10YR3/3暗褐色シルト　焼土・炭化物を少し含む。しまり中。粘性中。（以下10 層までSK268 覆土）
6. 10YR3/3暗褐色シルト　小礫・焼土・炭化物を含む。しまり弱。粘性中。
7. 5YR3/6暗赤褐色シルト　しまり強。粘性中。（焼土）
8. 10YR3/4暗褐色シルト　地山ブロック・土器片を含む。しまり弱。粘性中。
9. 10YR3/3暗褐色シルト　地山ブロックを多く含む。しまり弱。粘性中。
10. 10YR3/2黒褐色シルト質砂　しまり弱。粘性中。
11. 10YR3/2黒褐色シルト　地山ブロック・焼土を多く含む。しまり強。粘性中。（以下 18 層までSK267 覆土）
12. 10YR3/3暗褐色シルト　しまり強。粘性中。
13. 7.5YR4/4褐色シルト　しまり強。粘性中。（焼土）
14. 10YR6/6 明黄褐色シルト　10YR3/2シルトを斑状に含む。しまり強。粘性中。
15. 10YR3/2黒褐色砂質シルト　地山ブロック・土器片を含む。しまり中。粘性中。
16. 7.5YR3/2黒褐色シルト　土器片を含む。しまり中。粘性中。
17. 10YR7/4にぶい黄橙色シルト　しまり弱。粘性強。
18. 10YR3/3暗褐色シルト質砂　土器片を含む。しまり弱。粘性中。
19. 10YR3/4暗褐色シルト　しまり強。粘性中。
20. 10YR2/1黒色シルト　地山ブロックを少し含む。




**SK330　H2トレンチ南東壁**

1. 10YR2/3黒褐色シルト　しまり強。粘性弱。
2. 10YR3/1黒褐色シルト　しまり強。粘性弱。
3. 10YR3/2黒褐色シルト　しまり強。粘性弱。
4. 10YR5/6黄褐色シルト　しまり強。粘性弱。（以下SK330 覆土）
5. 10YR2/2黒褐色シルト　しまり強。粘性弱。
6. 10YR4/4褐色細砂　しまり強。粘性弱。
7. 10YR6/8明黄褐色細砂　しまり強。粘性弱。

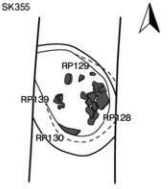


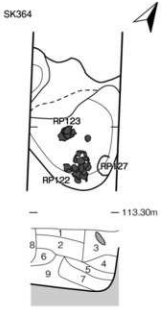

**SP271**

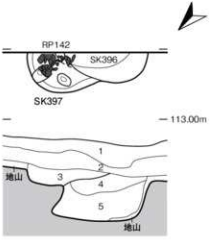
1. 10YR3/2黒褐色シルト　地山ブロックを多く含む。しまり中。粘性中。（遺構覆土）
2. 10YR3/3暗褐色シルト　地山ブロック・炭化物を含む。しまり中。粘性中。（SK271 覆土）

焼土　土器　石器・礫石

第14図　ＳＰ265・266・271　ＳＫ268・330






**SK364**

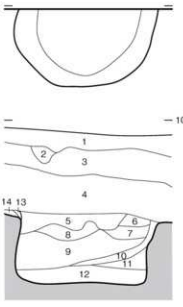
1. 10YR3/3 暗褐色微砂　2.5YR5/8 微砂を少し含む。しまり強。粘性弱。
2. 10YR5/6 黄褐色微砂　しまり強。粘性弱。
3. 10YR2/2 黒褐色微砂　しまり強。粘性弱。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂　しまり強。粘性弱。
5. 10YR6/6 明黄褐色微砂　10YR3/2 微砂を 20%含む。しまり強。粘性弱。
6. 10YR6/8 明黄褐色細砂　10YR3/2 粗砂を 40%含む。しまり強。粘性弱。
7. 10YR3/2 黒褐色微砂　小礫を含む。しまり強。粘性弱。
8. 10YR3/3 暗褐色微砂　10YR6/8 細砂を 30%含む。しまり強。粘性弱。
9. 10YR6/8 明黄褐色粗砂　小礫を含む。しまり強。粘性弱。

**SK396・397　H4トレンチ南東壁**

1. 10YR2/2 黒褐色微砂　（中央部撹乱　表土）
2. 10YR2/1 黒色微砂　軟らかい。（遺物包含層）
3. 10YR2/2 黒褐色微砂　小円礫を微量含む。軟らかい。粘性あり。（SK397 覆土）
4. 10YR2/3 黒褐色細砂　黄褐色シルトブロック・小礫を微量含む。軟らかい。（以下SK396 覆土）
5. 10YR3/3 暗褐色微砂　暗褐色土ブロックを層状に含む。しまりあり。粘性あり。

第 15 図　ＳＫ355・358・364・397

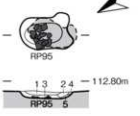
SK220




**SK220　H6トレンチ南壁**

1. 10YR2/2黒色粘土質シルト　（表土）
2. 10YR3/2黒褐色シルト　（撹乱）
3. 10YR2/1黒色粘土質シルト　1～2cm大の礫を40%以上含む。遺物を多く含む。
4. 10YR2/2黒褐色粘土質シルト　1～2cm大の礫を10%含む。しまりやや強。粘性弱。
5. 10YR2/2黒褐色粘土質シルト　黄褐色粘土をブロック状に10%含む。粘性やや強。（以下12層までSK220覆土）
6. 10YR3/2黒褐色粘土質シルト　黄褐色粘土をブロック状に20%含む。粘性やや強。
7. 10YR2/1黒色粘土質シルト　黄褐色粘土をブロック状に40%含む。しまりやや強。
8. 10YR2/2黒褐色粘土質シルト　黄褐色粘土をブロック状に50%以上含む。1～2cm大の礫を10%含む。粘性弱。
9. 10YR2/2黒褐色粘土質シルト　黄褐色粘土をブロック状に70%含む。黄褐色粘土との混合層？（人為的埋土）
10. 10YR2/1黒色粘土　黄褐色粘土を10%含む。粘性強。（人為的埋土）
11. 10YR6/6明黄褐色粘土　9mm～2cm 大の礫を10%含む。粘性やや強。（側壁の崩落土？）
12. 10YR2/1黒色粘土　層下位で5mm大の小礫を含む。（崩落土？）
13. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト　粘性強。
14. 10YR3/2黒褐色シルト　しまり強。

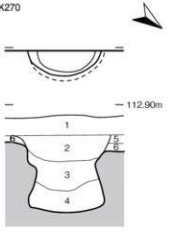
SK246




**SK246**

1. 10YR3/2黒褐色シルト　遺物を多く含む。しまりやや強。（RP95 内の覆土）
2. 10YR3/1黒褐色シルト　黄褐色シルトをブロック状に20%含む。
3. 10YR2/1黒色シルト　黄褐色シルトをブロック状に10%含む。しまり弱。
4. 10YR3/3暗褐色シルト　焼土を20%含む。しまり強。
5. 10YR4/2灰黄褐色シルト　5mm～1cm大の炭化物を10%含む。

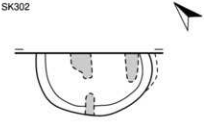
SK270

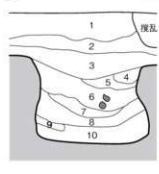



**SK270　H7トレンチ南西壁**

1. 10YR2/2黒褐色砂質シルト　（表土）
2. 10YR3/3暗褐色シルト　地山ブロック・焼土を少し含む。しまり中。粘性中。（以下4層までSK270 覆土）
3. 10YR3/2黒褐色シルト　焼土・炭化物を含む。しまり弱。粘性中。
4. 10YR3/2黒褐色シルト　炭化物を含む。しまり弱。粘性中。
5. 10YR2/3黒褐色シルト　しまり弱。粘性中。
6. 10YR6/6明黄褐色シルト　（地山）

SK302

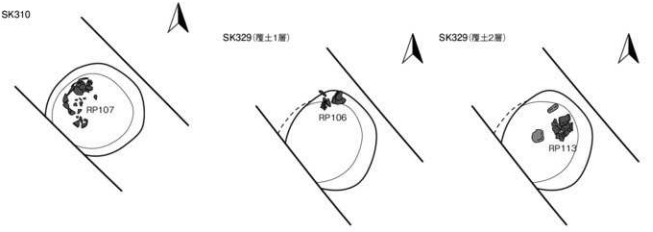


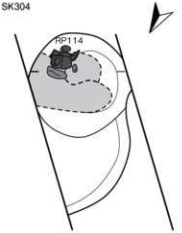



**SK302　H8トレンチ北東壁**

1. 10YR2/1黒色粘土質シルト　（表土）
2. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト　地山粒を10%含む。遺物を微量含む。しまり弱。
3. 10YR3/1黒褐色シルト　1～2mm大の炭化物を10%含む。遺物を少し含む。しまり中。
4. 10YR3/3暗褐色シルト　しまり強。（以下SK302 覆土）
5. 10YR2/1黒色シルト　地山ブロックを10%含む。しまり強。
6. 10YR3/3暗褐色粘土質シルト　地山ブロックを20%含む。1cm大の炭化物・遺物を多く含む。しまり強。粘性中。（人為的埋土）
7. 10YR4/2灰黄褐色粘土　地山ブロックを斑状に30%以上含む。粘性弱。
8. 10YR3/1黒褐色粘土　地山ブロック・1～2mm大の炭化物を20%含む。
9. 10YR6/6明黄褐色シルト　地山ブロック。（崩落土）
10. 10YR3/3暗褐色粘土　地山ブロック・1～2mm大の炭化物を20%含む。粘性強。

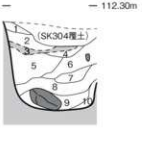
第16図　ＳＫ220・246・270・302

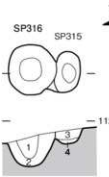



**SK304**

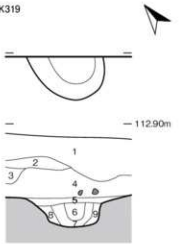
1. 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト　焼土ブロック・1～2mm大の炭化物を20%含む。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト　地山ブロックを10%含む。
3. 5YR3/4 暗赤褐色シルト　しまり強。(焼土)
4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト　褐色シルトを帯状に20%含む。
5. 10YR3/2 黒褐色シルト　地山ブロック・1～2cm 大の炭化物を20%含む。しまり中。粘性弱。(人為的埋土)
6. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト　褐色砂を斑状に10%含む。しまり弱。
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト　黒褐色粘土を斑状に10%含む。しまり中。
8. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト　黒褐色粘土を斑状に10%含む。1～2mm大の炭化物を20%含む。
9. 10YR2/1 黒色粘土質シルト　地山砂を斑状に10%含む。人頭大の礫を含む。しまり弱。粘性中。
10. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　地山ブロックを20%含む。1～2cm大の礫を10%含む。しまり弱。粘性中。




**SP315・316**

1. 10YR3/2 黒褐色シルト　1～2mm大の炭化物を10%含む。しまり中。(柱痕跡　以下2層までSP316 覆土)
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト　灰黄褐色砂をブロック状に30%以上含む。1～2cm大の礫を10%含む。しまり中。(掘り方)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト　1～2mm大の炭化物を10%含む。しまり強。(以下SP315 覆土)
4. 10YR3/3 暗褐色シルト　黄褐色砂をブロック状に20%含む。しまり中。



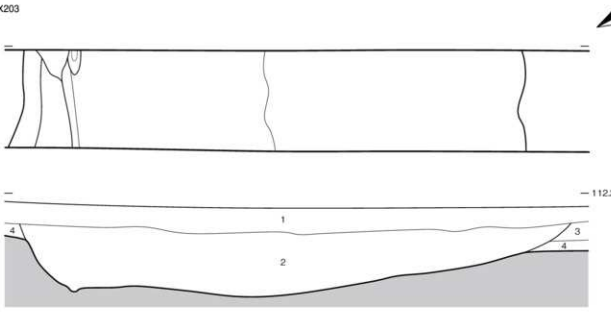

**SK319　H8トレンチ北東壁**

1. 10YR2/1 黒色シルト　(表土)
2. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　1～2cm 大の礫を少し含む。粘性弱。(撹乱)
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト　礫を多く含む。(撹乱)
4. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト　10cm 大の礫を多く含む。遺物を少し含む。しまり中。粘性弱。
5. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト　しまり中。粘性弱。(人為的埋土)
6. 10YR3/3 暗褐色シルト　小礫を20%含む。1～5mm大の炭化物を10%含む。しまり強。(柱痕跡　以下SK319 覆土)
7. 10YR3/2 黒褐色シルト　黄褐色砂質シルトをブロック状に20%含む。しまり中。(人為的埋土)
8. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト　1～2cm 大の礫を10%含む。しまり弱。
9. 10YR6/6 明黄褐色シルト　灰黄褐色シルトをブロック状に10%含む。

0　1m
1：40
焼土　土器　礫石

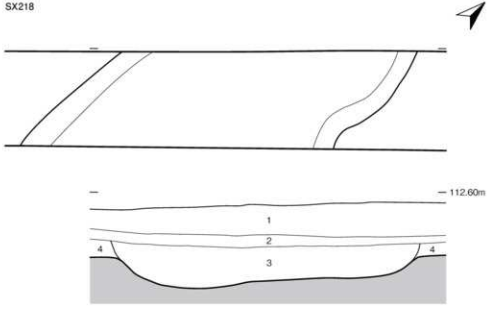
第17図　SK304・310・319・329　SP316

SX203



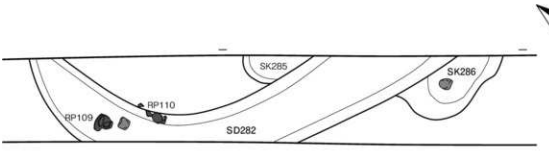

**SX203　G2トレンチ南東壁**
1. 10YR3/3暗褐色シルト
2. 10YR1.7/1黒色シルト　（SX203 覆土）
3. 10YR2/3黒褐色シルト
4. 10YR3/4暗褐色シルト　10YR5/6シルトを斑状に多く含む。（地山）

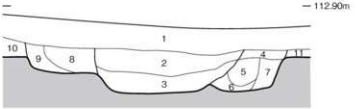
SX218




**SX218　G3トレンチ北西壁**
1. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～粗砂　2mm ～5cm 大の礫を含む。10YR5/8シルトを粒状に少し含む。しまりあり。（盛土）
2. 10YR4/6褐色シルト　10YR2/2シルトを斑状に少し含む。
3. 10YR2/2黒褐色シルト　（SX218 覆土）
4. 10YR2/3黒褐色シルト　10YR4/4シルトを斑状に含む。

第 18 図　S X203・218



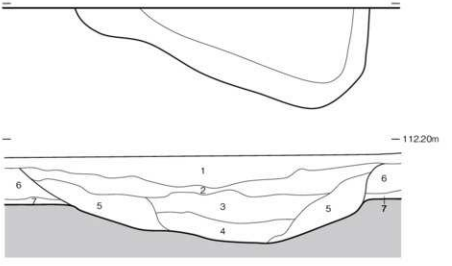

**SD282　SK285・286　H8トレンチ北東壁**

1. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト　ビニール混入。しまり中。粘性中。(表土)
2. 10YR2/1 黒色シルト　しまり弱。粘性中。(以下3層までSD282 覆土)
3. 10YR3/3 暗褐色シルト　地山ブロックを多く含む。しまり中。粘性中。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト　焼土・炭化物を含む。しまり強。粘性中。(以下7層までSK286 覆土)
5. 10YR3/3 暗褐色シルト　地山ブロックを多く含む。焼土・炭化物を含む。しまり強。粘性中。
6. 10YR3/4 暗褐色シルト　地山ブロックを含む。しまり中。粘性中。
7. 10YR3/3 暗褐色シルト　地山ブロックを多く含む。焼土・炭化物を少し含む。しまり強。粘性中。
8. 10YR3/2 黒褐色シルト　地山ブロックを多く含む。しまり弱。粘性中。(以下9層までSK285 覆土)
9. 10YR2/2 黒褐色シルト　しまり中。粘性中。
10. 10YR2/2 黒褐色シルト　地山土を非常に多く含む。しまり弱。粘性中。
11. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト　地山ブロックを少し含む。炭化物を多く含む。しまり中。粘性中。

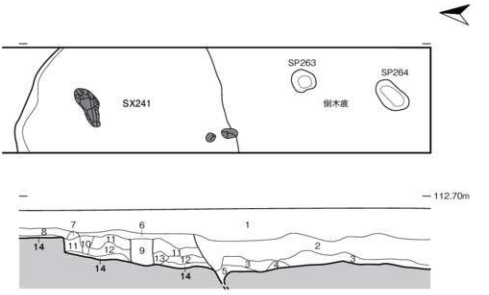
**SX212　G3トレンチ南東壁**

1. 10YR3/2 黒褐色シルト
2. 10YR2/2 黒褐色シルト　10YR5/6 シルトを斑状に多く含む。(以下5層までSX212 覆土)
3. 10YR2/2 黒褐色シルト　10YR5/6 シルトをブロック状に含む。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト　10YR5/6 シルトを粒状に微量含む。
5. 10YR2/2 黒褐色シルト　10YR5/6 シルトを斑状に多く含む。
6. 10YR2/2 黒褐色シルト
7. 10YR3/3 暗褐色シルト

SX212

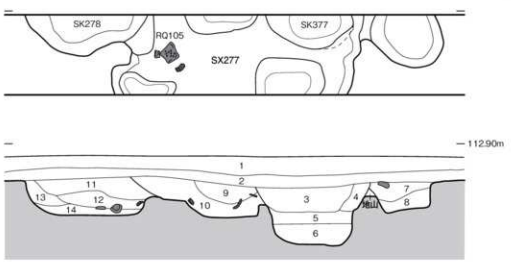


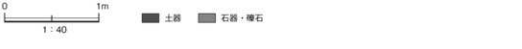
第19図　SD282　SK286　SX212




**SX241　H1トレンチ東壁**

1. 10YR2/2黒褐色シルト　黄褐色シルト粒を10%含む。しまり弱。(表土)
2. 7.5YR3/1黒褐色シルト　遺物を多く含む。しまり強。(以下5層まで倒木痕)
3. 10YR3/3暗褐色シルト　黄褐色シルトを斑状に10%含む。
4. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト　しまり強。
5. 10YR4/2灰黄褐色シルト　5mm～1cm 大の炭化物を10%含む。しまりやや弱。
6. 10YR3/1黒褐色シルト　黄褐色シルトを斑状に10%含む。5mm～1cm 大の炭化物を10%含む。
7. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト　黄褐色シルトを斑状に50%含む。しまりやや強。
8. 10YR3/1黒褐色シルト　黄褐色シルト・5mm～1cm 大の炭化物を10%含む。遺物を含む。
9. 10YR3/2黒褐色シルト　黄褐色シルトを20%含む。しまりやや強。(柱穴)
10. 10YR3/2黒褐色シルト　黄褐色シルトを10%含む。しまりやや強。(ⅡF 13層までSX241 覆土)
11. 10YR4/2灰黄褐色シルト　黄褐色シルトを斑状に10%含む。5mm～1cm 大の炭化物を20%含む。しまり強。
12. 10YR3/2黒褐色シルト　黄褐色シルトをブロック状に20%含む。炭化物を20%含む。
13. 10YR3/3暗褐色シルト　5mm～1cm 大の炭化物を10%含む。しまり強。
14. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト　しまり弱。(地山への漸移層)

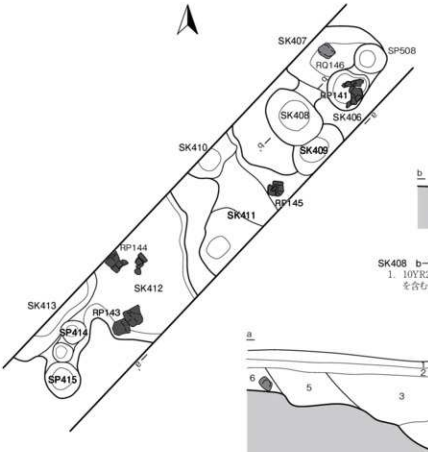



第20図　SX241・277

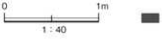
**SX277 SK278・377 H8トレンチ南西壁**

1. 10YR3/3暗褐色砂質シルト ビニール混入。しまり中。粘性中。(表土)
2. 10YR2/2黒褐色砂質シルト 土器片を含む。しまり中。粘性中。
3. 10YR3/2黒褐色砂質シルト 炭化物を含む。しまり中。粘性中。(以下6層までSK377 覆土)
4. 10YR4/4褐色砂質シルト 小礫・炭化物を含む。しまり中。粘性弱。
5. 10YR4/6褐色シルト質砂 小礫を含む。しまり中。粘性弱。
6. 10YR3/4暗褐色シルト質砂 しまり中。粘性弱。
7. 10YR3/3暗褐色シルト しまり中。粘性中。(以下8層まで遺構覆土)
8. 10YR3/2黒褐色砂質シルト 地山ブロック・土器片を含む。しまり中。粘性中。
9. 10YR3/3暗褐色砂質シルト 焼土・炭化粒・土器片を含む。しまり中。粘性中。(以下 10 層までSX277 覆土)
10. 10YR2/2黒褐色シルト 地山粒・焼土・炭化物・土器片を含む。しまり中。粘性中。
11. 10YR2/2黒褐色シルト 焼土・土器片を含む。しまり中。粘性中。(以下SK278 覆土)
12. 10YR3/3暗褐色シルト 地山ブロック・炭化物を含む。しまり中。粘性中。
13. 10YR2/2黒褐色シルト 焼土・炭化物・土器片を含む。しまり中。粘性中。
14. 10YR2/1黒色シルト 小礫・炭化物を多く含む。しまり中。粘性中。

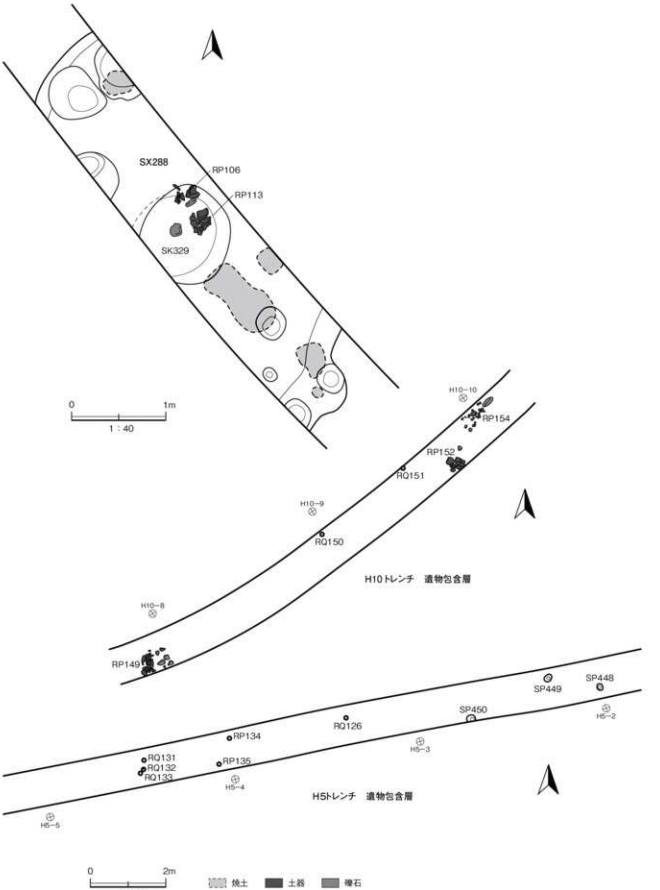



**SK409・411・412 H4トレンチ南東壁 a–a'**

1. 10YR2/2黒褐色微砂 (表土)
2. 10YR2/1黒色微砂 炭化粒・土器片を多く含む。やや粘性あり。
3. 10YR2/3黒褐色シルト 炭化粒・土器粒を含む。軟らかい。粘性あり。(以下4層までSK411 覆土)
4. 10YR3/4暗褐色シルト 地山ブロックを 40%以上含む。やや しまりあり。
5. 10YR3/2黒褐色シルト 小礫を含む。軟らかい。粘性あり。(SK409 覆土)
6. 10YR3/1黒褐色シルト 軟らかい。やや粘性あり。
7. 10YR3/4暗褐色シルト 土器片を多く含む。やや粘性あり。(SK412 覆土)




第 21 図 SX277 SK406～413 SP414・415




第 22 図　ＳＸ288　Ｈ５・10 トレンチ包含層

## 3　第3次調査の検出遺構

第3次調査では登録数で195基の遺構を検出した。主な遺構は、石器ブロック・周溝（墳墓）・ピット列（構）・土坑などである。全般に遺物が伴出する遺構は少なく、近隣遺構との関連などから、時期は概ね旧石器・縄文・古墳時代と中世に属するものと考えられる。以下に、種別ごと主要な遺構の概要を述べる。

### （1）石器ブロック

Ｊ15トレンチで旧石器時代の石器集中出土地点（以下、石器ブロック）1か所を検出し、1.7ｍ×3.5ｍのテストピットを設定して掘り下げを行った。石器ブロックの範囲は、調査区外にも広がることが予測される。

**Ｊ15トレンチ　石器集中出土地点（テストピット）**

（第23図　写真図版18～19）

Ｊ15トレンチ北西部（２Ｄ10－87・88　２Ｄ10－77・78グリッド　Ｊ15－１・２区間）に位置する。遺構検出（面整理）時に、地山（褐色ローム）の表層で石器ブロックを検出した。地山を掘り込む遺構などは認められなかったため、遺物の出土範囲を中心にトレンチを径3.5ｍで区切ったテストピットを設定して、遺物の分布が認められる深さ30～40cmまで掘り下げた。なお、調査区南西壁の壁面に遺物がかかっていたため、北西側の一部を拡張してある。遺物の平面分布はテストピットの北東－南西方向に拡散する状況を呈する。垂直分布は３層中部を中心に５～10cm下のほぼ水平なレベルに集中しており、３層中部が当時の生活面と推定される。２層以下は、３層の粘土質シルトと４層のシルト質細砂とに区分され、３層に包含される石器ブロックは、緩慢な流水環境の中で４層が堆積し、離水後、３層が堆積していく過程で形成されたものと考えられる。出土した石器資料は、2,823点となる。剥片・チップを主体に、杉久保型ナイフ形石器・神山型彫刻刀形石器・小坂型彫刻刀形石器・彫刻刀スポール・細石刃・石刃・石刃核・ハンマーストーンなどの石器組成であり、杉久保型ナイフ形石器群と言える。接合資料や被熱による赤色化・破砕が認められる石器資料も含まれる。石器資料は33種類の同一母岩が認められ、整理作業では接合作業を行った。その結果、43例の接合資料（折れ面接合を除く）を得ている。その母岩と接合資料、製作技術については、次章で詳述する。石器資料とともに炭化物も出土しており、採取した1点の炭化物については、放射性炭素年代測定を行っている。分析試料には、調査成果を補完する目的で、寒河江市による学術調査採取試料を一部使用している。また、その学術調査で採集された２～５層の土壌についても、石器群の年代にたいする蓋然性を深めるためにテフラ分析を行っている。なお、石器資料の使用痕分析と放射性炭素測定・テフラ分析については、第Ⅵ章で詳述する。

### （2）周溝（墳墓）

Ｊ１～３トレンチでひと続きの周溝と推定される溝跡４条を検出した。墳丘や主体部などは未確認であるが、北東に近接する高瀬山遺跡（１期）で検出された古墳時代の円墳・方形周溝墓群に属する可能性が高い。周溝の平面プランは、外径14ｍ程度の円形又は隅丸方形と推定される。溝跡は幅1.5～２ｍ、検出・掘込面からの深さ0.2～0.4ｍを測る。以下に、各溝跡について詳述する。

**ＳＤ560**（第23・28図　写真図版20）

Ｊ１トレンチ南東部（２Ｆ10－77・78グリッド）に位置し、調査区北東壁と南西壁に一部接する。平面プランから、南東方向にやや湾曲する溝跡と推定される。規模は幅1.5ｍ・検出面からの深さ40cmを測る。南東壁面は急角度で深く、北西壁面は比較的緩やかに立ち上がる。底面は概ね平坦である。覆土はレンズ状の自然堆積を呈し、色調・土質から時期的にやや新しいと判断される。遺構の時期や性格を示すような遺物は出土しなかった。

**ＳＤ566**（第24・28図　写真図版20）

Ｊ２トレンチ北西部（２Ｆ10－86・87グリッド）に位置し、調査区北東壁と南西壁に一部接する。平面プランから、南東方向にやや湾曲する溝跡と推定される。規模は調査区北東壁で径1.92ｍを測る。底面は概ね平坦で浅く、壁面の立ち上がりは判然としない。砕石敷きの農道下にかかるため、土層断面は良好な状況で記録することができなかった。遺構の時期や性格を示すような遺物は出土しなかった。

**ＳＤ575**（第25・26・28図　写真図版22）

Ｊ２トレンチ南東部（２Ｆ10－98　２Ｆ11－08グ

リッド）に位置し、調査区北東壁と南西壁に一部接する。検出プランから、ＳＰ571・572とＳＫ573・574に切られる。平面プランから、北西方向にやや湾曲する溝跡と推定される。規模は調査区北東壁上で径2.07ｍ、検出面からの深さ約20cmを測る。底面は概ね平坦で、北西壁面は緩やかに立ち上がる。覆土の色調・土質から時期的にやや新しいと判断されるが、重複関係からは後述するピット列（ＳＰ571・572ほか）より古くなる。遺構の時期や性格を示すような遺物は出土しなかった。

**ＳＤ658**（第24・28図　写真図版20）

Ｊ３トレンチ北東部（２Ｆ10－96・97グリッド）に位置し、調査区南東壁の土層断面で検出された。重機による表土掘削で削平されたため、平面プラン（推定）は検出することができなかった。段丘斜面の下端に位置したため、遺構覆土を傾斜に沿った落ち込みと判断し、表土とともに除去してしまったことによる。規模は調査区南東壁上で径1.96ｍ・遺構の掘込面からの深さ20cmを測る。底面は概ね平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。遺構の時期や性格を示すような遺物は出土しなかった。

## （3）ピット列（柵）

**SP569～572・654～656**

（第25・26・28図　写真図版22）

Ｊ２トレンチ南東部（２Ｆ10－98　２Ｆ11－08グリッド）に位置する７基のピット（柱穴）列である。柱間距離で60cm前後の間隔で、北西－南東方向に直線的に配列される。検出部分の全長は4.27ｍを測り、両端はさらに調査区外へ続くものと思われる。土層断面から前述したＳＤ575（周溝）を切り、ＳＫ573とは同じ覆土（ｂ－ｂ’３層）で覆われる。ＳＰ657は形状・規模や覆土などにやや異質な点がみられるため、ピット列とは区別しておく。各ピットは径約25～50cmの不整（楕）円形を呈し、検出面からの深さは約10～30cmを測る。底面の特徴として、やや括れた長楕円形を呈する傾向があり、３～５cm大の複数の円礫あるいはそれを敷いた痕跡が認められる。柱痕跡などは検出されなかったが、根石を据えた２本組の柱穴である可能性が高い。近接する高瀬山遺跡（１期）からは、集石遺構とともに類似する中世の柱穴列が検出されている。遺構の時期や性格を示すような遺物は出土しなかったが、当該期に属する柵や塀などの区画施設と推定される。中世の館跡や経塚が所在する高瀬山の直下に位置することから、これらに関連した遺構である可能性も考えられる。

## （4）土坑

主要な遺物が出土した土坑・ピットを取り上げる。

**ＳＸ527**（第24図　写真図版21）

Ｊ５トレンチ（２Ｅ10－76グリッド）に位置し、調査区北東壁と南西壁に一部接する。北西でＳＰ528に切られる。北側に遺構の重複や撹乱？があるものの、概ね平面形は長径2.1ｍ以上・短径96cmの長楕円形と推定される。検出面からの深さは52cmを測る。底面から短形剥片石核（377）、覆土上層から棒状礫の中間部（378）が横倒しで出土した。出土土器から、概ね縄文時代（中～後期？）に属する土坑と考えられる。形状・規模などは陥穴に近いと思われるが、遺構の性格については判然としない。

**ＳＰ678**（第27図　写真図版21）

Ｊ10トレンチ（２Ｄ10－11グリッド）に位置し、北で撹乱（下水管埋設）を受ける。平面形は径50cmの円形と推定され、検出面からの深さは16cmを測る。底部に浅い凹みが認められる。底面から微量の縄文土器片が出土した。縄文時代（後期前葉？）に属する土坑と考えられる。

**ＳＫ694**（第27図　写真図版21）

Ｊ16トレンチ（２Ｄ10－54グリッド）に位置し、調査区南壁に一部接する。平面形は径1.28ｍの円形と推定され、検出面からの深さは14cmを測る。南から地山が一段高く張り出し、底面の中央に小ピットが掘り込まれる。底面から凸基石鏃（379）が出土した。出土石器から、縄文時代に属する土坑と考えられる。

## （5）その他

第３次調査では、公園予定地内に残る活断層地形の確認と公園施設における保存・活用を目的として、約600㎡の面調査（Ｋ区）を併せて実施した。調査の性格上、遺構の掘り下げなどは行わず、遺構プランの検出までで終了した。以下に、高瀬山活断層に係る調査の概略と成果についてまとめておく。

**K区　活断層地形**（第27図　写真図版17・18）

高瀬山活断層（断層崖）は、高速道路の建設工事とそれに伴う高瀬山遺跡（1期）の調査において、その存在が確認された。今回の調査対象となった断層崖は、その南側に続く段丘北東斜面（2E10－29・39・49　2F10－40・50・60・70・80・81・90・91グリッド）に立地する。始めに断層崖の範囲を確認するため、斜面を縦断する4本のテストトレンチ（K1～4トレンチ）を設定して掘り下げを行った。K1トレンチの黒ボク土中層から縦形石匙（381）、K4トレンチの黒ボク土下層からヘラ形石器（382）が出土した。その後、断層崖を中心とする幅16m・長さ33～42mの範囲まで調査区（K区）を拡張し、遺構の検出を行った。検出された遺構は、木根による撹乱や倒木痕を除き、やや大型の土坑3基（SK710～712）のみであった。北東に面する斜面という立地によるものか、調査面積に比べて遺構分布は非常に希薄である。

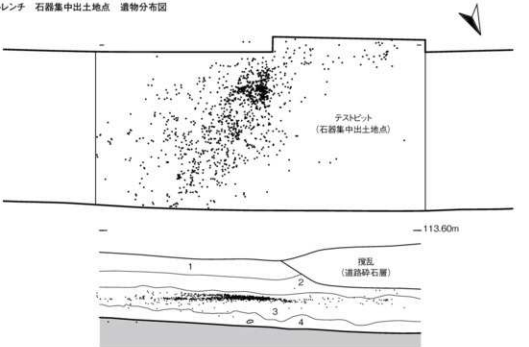
SK710は調査区中央の西寄り（2E10－68・69グリッド）に位置し、長径96cm・短径80cmの楕円形を呈する。SK711は調査区南側のやや西寄り（2E10－79・89　2F10－70・80グリッド）に位置し、径約1.0mの円形を呈する。SK712は調査区中央の東端（2F10－61グリッド）に位置し、径約1.3mの円形を呈する。覆土の色調・土質から、いずれの遺構も時期的にやや新しいと判断される。

このほか、調査区を南北に横断する断層崖（地山の落ち込み）を帯状に検出した。検出部分の全長は約37m、断層崖の高低差は約1～1.2mを測る。横からの圧縮によって断裂した地層が乗り上がる逆断層で、断層崖は北半部においてより顕著となる。今回の調査では、K3・4トレンチに設定したサブトレンチの土層断面から、黒ボク土層に達する断層面の切れ目が新たに確認された。そのラインに沿って採取された土壌サンプルの年代測定により、高瀬山活断層の発生年代（暦年較正年代）は5,722BCから5,483BCまでの間であることが明らかとなった（山野井ほか2011）。

**引用文献**

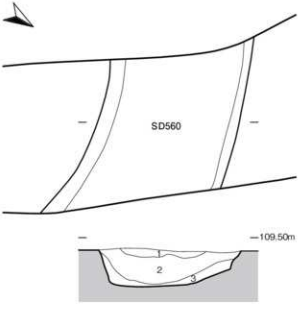
谷口康浩　2006「石棒と石皿－象徴的生殖行為のコンテクスト－」『考古学Ⅳ』p.77～102　安斎正人編集発行
山野井徹・門叶冬樹・加藤和浩・庵下稔・和泉彰紘・設楽理恵　2011「山形県寒河江市『高瀬山活断層』の発掘と発生年代調査」『山形応用地質　第31号』p.60～62　山形応用地質研究会

J15トレンチ　石器集中出土地点　遺物分布図




J15トレンチ南壁（テストピット）

1．10YR2/2黒褐色シルト　ややしまりなし。（表土）
2．10YR2/2黒褐色粘土質シルト　10YR5/6シルトを粒状にやや多く含む。
　ややしまりなし。木根による撹乱が目立つ。（地山への漸移層か）
3．10YR5/6黄褐色粘土質シルト　しまりあり。
4．10YR5/4にぶい黄褐色シルト質細砂　しまりあり。下部に褐鉄分の集積が見られる。



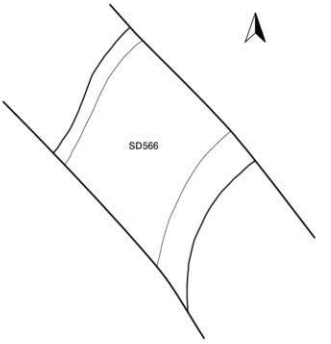

SD560

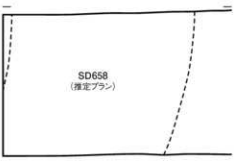
1．10YR2/3黒褐色粘土質シルト　ややしまりあり。
2．10YR1.7/1黒色粘土質シルト
3．10YR2/2黒褐色粘土質シルト　10YR5/6シルトを斑状に含む。

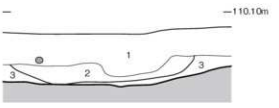
0　1m
1：40

※石器の出土位置を・で表示

第23図　J15トレンチテストピット　SD560

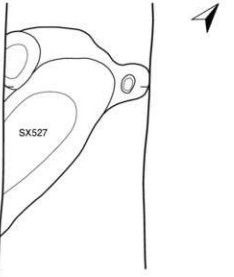


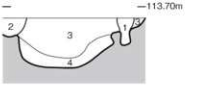

**SD658　J3トレンチ南東壁**

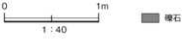
1. 10YR2/3 黒褐色シルト　(表土)
2. 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト　10YR5/6 シルトを斑状に少し含む。(SD658 覆土)
3. 10YR5/6 黄褐色シルト　10YR2/3 シルトを斑状に少し含む。(地山)



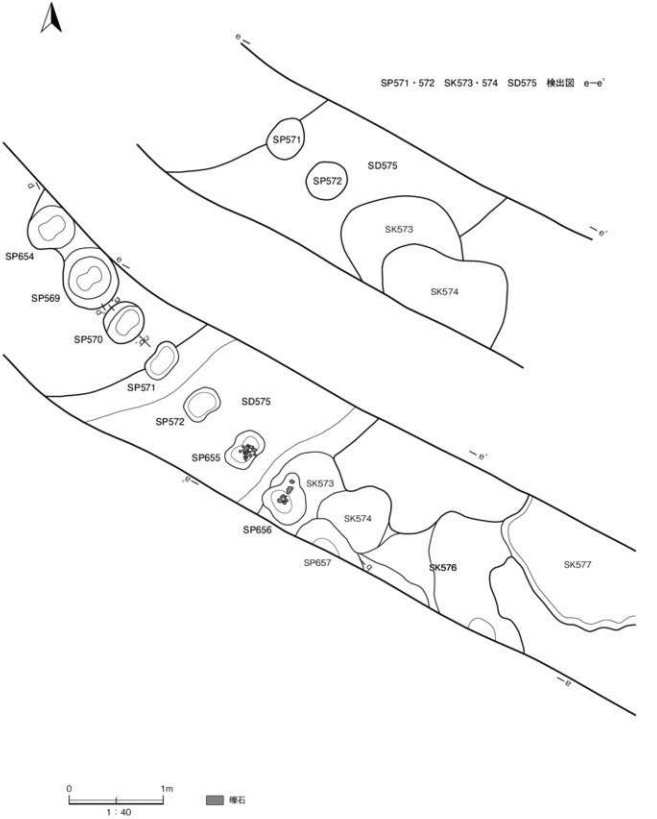

**SX527　SP528**

1. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　ややしまりなし。(木根による攪乱?)
2. 10YR3/3 暗褐色シルト　10YR5/6 シルトと炭化物を粒状に微量含む。(SP528 覆土)
3. 10YR3/3 暗褐色シルト　炭化物を粒状に微量含む。(以下4層までSX527 覆土)
4. 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト　10YR5/6 シルトを斑状に少し含む。

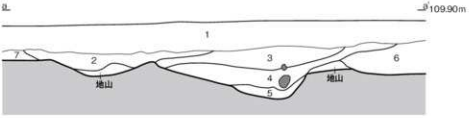


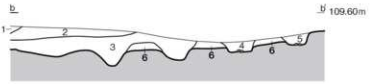

第 24 図　ＳＤ566・658　ＳＸ527




第25図　ＳＤ575　ＳＰ569～572・654～656

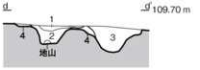



**SK573・574・576　SD575　SP657　J2トレンチ南西壁　a–a'**
1. 10YR3/3 暗褐色シルト　10YR5/6 シルトを粒状に微量含む。（表土）
2. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　10YR5/6 シルトを斑状に少し含む。（SK576 覆土）
3. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト　10YR5/6 シルトを斑状に含む。ややしまりあり。（SK574 覆土）
4. 10YR4/6 褐色粘土質シルト　（SK573 覆土）
5. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト　5YR4/8 粘土質シルトを斑状に少し含む。ややしまりあり。（SP657 覆土）
6. 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト　（SD575 覆土）
7. 10YR2/3 黒褐色シルト　10YR5/6 シルトを斑状にやや多く含む。（地山への漸移層）

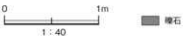



**SP571・572・655 ～ 657　SK573・574・576　SD575　b–b'**
1. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　10YR5/6 シルトを粒状に微量含む。（SK576 覆土）
2. 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト　10YR5/6 シルトをブロック状に含む。（SK574 覆土　人為的埋土?）
3. 10YR4/4 褐色粘土質シルト　底部に3～5cm 大の円礫を含む。（SK573　SP655・656 覆土）
4. 10YR3/4 暗褐色シルト　底部に3～5cm 大の円礫を含む。（SP572 覆土）
5. 10YR3/4 暗褐色シルト　底部に3～5cm 大の円礫を含む。（SP571 覆土）
6. 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト　10YR5/6 シルトを斑状に微量含む。（SD575 覆土）

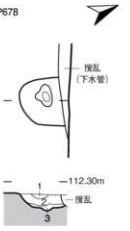
**SP570　c–c'**
1. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト



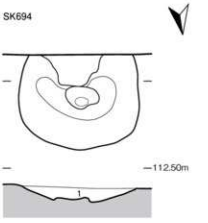

**SP569・654　d–d'**
1. 10YR3/4 暗褐色シルト　一部に 10YR4/4 シルトを含む。（以下2層までSP654 覆土）
2. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　10YR6/6 シルトを斑状に含む。
3. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　10YR5/6 シルトを粒状に微量含む。（SP569 覆土）
4. 10YR4/4 褐色シルト　10YR5/6 シルトを斑状に含む。（地山への漸移層）



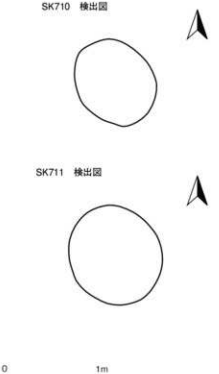

第 26 図　ＳＤ575　ＳＰ569 ～ 572・654 ～ 656



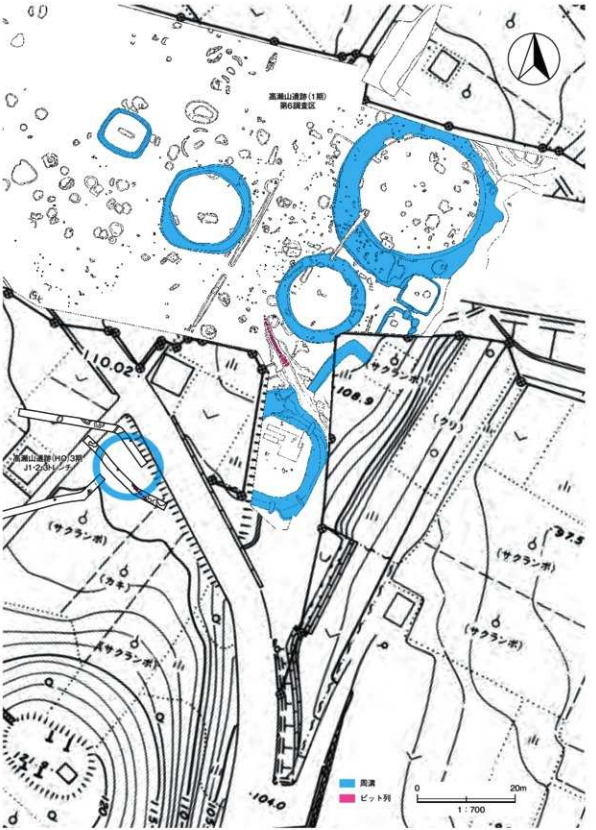

SP678
1. 10YR3/2 黒褐色シルト　ややしまりあり。
2. 10YR2/3 黒褐色シルト　10YR5/6 シルトを斑状に少し含む。しまりあり。
3. 10YR2/3 黒褐色シルト　10YR5/6 シルトを斑状に少し含む。ややしまりあり。




SK694
1. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト　10YR5/6 シルトを斑状に少し含む。ややしまりなし。




第 27 図　ＳＰ678　ＳＫ694・710 ～ 712




第28図　周溝・ピット列配置図

# Ⅴ　遺　　物

3次にわたる高瀬山遺跡（ＨＯ）３期発掘調査では、整理用コンテナ合計244箱分（１次調査:36箱、２次調査:192箱、３次調査：16箱）の遺物が出土した。出土している遺物は、旧石器時代から近現代に至るさまざまな時期の多様な遺物が出土している。本報告では、そのなかでも時期的な判断ができるもの、特徴的なものを抽出し、本章の１節～３節に掲載した。また、特に多くの情報が得られる遺物については、４節と５節で評述した。

## 1　第１次調査の出土遺物

### （1）竪穴住居跡

**ＳＴ３**（第65～66図）

１は、土師器壺。残存部位は口縁部～底部。口縁外面は指・布などによるナデ、ケズリとなる。体部外面はハケメ、ケズリとなり、一部、体部下半にはハケメをする。内面は指・布などによるナデ、一部ケズリとなり、底面は木葉痕である。２は、土師器甕。残存部位は口縁部～頸部。口縁外面はロクロ、タタキと考えられる器面調整をする。頸部は口縁同様、ロクロとなる。口縁・頸部とも内面はロクロとなる。器形から須恵器甕のつくりであることから、須恵器を模倣または代用品か、さらに焼成不良のため褐色を帯びたのか、判断が難しいところである。時期については不明瞭であるが、同遺構内（ＳＴ３）で９世紀頃の遺物出土（４）が確認されることから、同時期または、前後する時期と考えられる。３は、土師器甕。残存部位は口縁部～体部下半。口縁外面はタタキとなる。体部外面はロクロ、カキメ、タタキ、ケズリとなる。口縁内面はロクロとなる。体部内面はロクロ、カキメとなる。時期については不明瞭であるが、同遺構内（ＳＴ３）で９世紀頃の遺物出土（４）が確認されることから、同時期または、前後する時期と考えられる。４は、須恵器横瓶。残存部位は体部。時期は９世紀前半～中頃。体部外面はタタキ（格子）、体部内面はアテ（青海波文）である。外面全面に自然釉が付着する。また、胎土に海綿骨針が確認できることから、寒河江市に所在する平野山古窯跡産のものと考えられる。５は、須恵器坏である。残存部位は口縁部～体部上半。時期は９世中頃と考えられる。内外面ともにロクロ、ナデによる調整である。体部外面に火襷（ひだすき）痕が確認できる。６は、一定程度珪化している珪質頁岩製の凹基石鏃である。全面にわたって、ある程度規則的な細部調整が施されている。基部の抉りは深く、また全体的に華奢な作りとなる。尖端部は欠損している。

### （2）埋設土器

**ＳＫ132**（第66図）

７は、深鉢。ほぼ完形となる。型式は大木10式。口縁上半は、ミガキを施す。口縁下半から底部までを縄文（ＬＲ縦）を施文する。

**ＳＫ119**（第67～68図）

８は、深鉢。残存部位は胴部～底部。型式は、地文のみの土器であるため不明確であるが、中期末と考えられる。今回の調査の中で現存するものの中で最大の土器である。土器全体に縄文（ＲＬ縦）を施文する。

**ＥＵ171**（写真図版４）

ＥＵ171（ＲＰ28）は埋設土器である。残存部位は胴部。中期後半と考えられる。縄文（ＬＲ縦）を施文する。

### （3）土坑

**ＳＫ53**（第69図）

ＳＫ53はＣ３・Ｄトレンチ（２Ａ11－39グリッド）に位置する。９は、深鉢。残存部位は胴部。興津Ⅱ式。横位にＸ字状沈線区画内に櫛歯状工具による連続する刺突を施す。

**ＳＫ91**（第69図）

ＳＫ91はＡ斜面トレンチ（２Ａ11－81･82グリッド）に位置する。10は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７a式。口唇部外面には、縦位に連続する刻みを施す。口縁上半には、横位に４条の沈線を施す。口縁下半には、縄文（結節Ｌ縦）を施した後、横位に１条の波状沈線を施す。11は、深鉢。残存部位は頸部。型式は大

木７ｂ式。頚部上半には、縦位に５条、頚部中半には横位に５条の沈線を施す。頚部下半には、縦位に連続した結節回転文（ＬＲ縦）を施文する。

**ＳＫ 109**（第 69 図）

ＳＫ 109 はＢトレンチ（２Ｂ 11 － 60･61･70･71 グリッド）に位置する。12 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は明確ではないが、大木６式と考えられる。上半には、半截竹管による１条の結節平行押引きを施す。下半には、横位に粘土紐貼付隆帯文を半截竹管で押圧を施す。

**ＳＫ 114**（第 69 図）

ＳＫ 114 はＢトレンチ（２Ａ 11 － 96 グリッド）に位置する。13 は、深鉢。残存部位は底部。中期前葉（大木７式）と考えられる。底面には、網代痕が確認できる（網代底土器）。

## （４）溝跡

**ＳＤ 25**（第 69 図）

14 は、一定程度珪化している珪質頁岩製のエンドスクレイパーである。厚手の剥片を素材とし、腹面側から全周にかけて細部調整が施される。とくに、右側面と裏面との角度は、90 度近くになる。下端部の角度も鈍角である。また、裏面の右側と左側の中央、上端部側からは、末端がヒンジを呈した深さのある剥離がなされる。

## （５）その他

**ＳＸ 157**（第 70 図）

15 は、土師器甕。ほぼ完形。体部上半外面はナデ、タタキ、体部下半外面はケズリである。体部内面はナデである。底部は底面にケズリを施すことで、丸みを帯びている。また、体部と底部の間の稜線が明確であることから、体部・底部という位置づけをしている。時期は９世紀前～中頃と考えられる。16 は、土師器甕。残存部位は口縁部～体部上半。体部外面はナデ、ケズリ、タタキをする。体部内面はナデ、ハケメである。時期については明確ではないが、同地区では９世紀頃と断定できる遺物（15）が確認されることから、同時期または、前後する時期と考えられる。17 は、土師器甕。残存部位は口縁部～体部上半。体部外面はナデ、タタキ、ケズリをする。体部内面はナデ、ハケメをする。時期については明確ではないが、同地区では９世紀頃と断定できる遺物（15）が確認されることから、同時期または、前後する時期と考えられる。18 は、土師器甕。残存部位は口縁部～体部上半。体部外面はナデをする。体部内面はナデ、ハケメをする。時期については明確ではないが、同地区では９世紀頃と断定できる遺物（15）が確認されることから、同時期または、前後する時期と考えられる。

**Ｂトレンチ　遺物包含層**（第 71 図）

Ｂトレンチでは、以下のものが出土している。19 は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。型式は大木７ａ式。口唇部を外周する形で縦位に刻みを配し、口縁部は、横位に３条の沈線を施す。頚部は、横位に沈線を３条、また、１条の隆起線に口唇部同様に縦位の刻みを施す。棒状工具による交互刺突（12 ～ 14 ヶ所＝１単位）を施し、４単位で構成されると考えられる。胴部は結節回転文（Ｌ）を施文する。20 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は明確ではない。縄文（Ｌ斜）による施文をする。21 は、深鉢。残存部位は口縁部。中期前葉（大木７式）と考えられる。口縁部は波状口縁と考えられる。縄文による施文をし、さらに３条の沈線を施す。22 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ｂ式。口縁が内湾し、横位にＶ字状の沈線・隆沈線を２条施す。23 は、深鉢。残存部は胴部。型式は明確ではないが、中期と考えられる。縄文（Ｌ縦）を施文する。24 は、深鉢。残存部位は口縁部～頚部。型式は大木５式。土器全体に縄文（ＬＲ横）を施文する。頚部は強く外反し、頚部下半には、横位に２条の細粘土紐貼付の鋸歯状隆帯文を施文する。25 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は明確ではないが、大木７式と考えられる。口縁は山形状口縁である。口唇部頂上に１条の押引きと、さらに、口唇内外面も同じく横位に１条ずつ沈線を施すが、うち内面は押引き沈線文である。口縁下半には沈線を施す。26 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は明確ではないが、大木７ａ式と考えられる。横位には１条の隆起線文、さらに２条の沈線と、交互刺突を施す。27 は、深鉢。残存部位は口縁部。十三菩提式（十三菩提系）に類似する。口唇部外面には縦位に刻みする。口縁部には結節状沈線文（渦巻文）を施す。28 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木６式。口縁部頂上は縄文（ＲＬ横）、口縁部には縄文（ＲＬ横走）を施す。さらに、横位に１条の波状沈線を施す。29 は、深鉢。残存部位は口縁部～頚部。中期前葉（大木７式）

と考えられる。口唇外面には突起を施す。頚部には、横位に半截竹管による連続する爪形刺突を施す。

## （6）上記以外の遺構出土遺物

### a．A上部西トレンチ

**ＳＫ89**（第72図）

ＳＫ89はA上部西トレンチ（２Ａ11－93グリッド）に位置し、長軸0.5ｍ以上、短軸0.5ｍの円形を呈する遺構である（付図１）。トレンチ南壁にかかるため、全体の１／２程度しか調査していない。埋土から出土した30は、やや粗粒の珪質頁岩製錐形石器である。上部は欠損し、表裏面には素材面を残す。剥片を素材とし、その一端部に尖頭部を作出。

**ＳＸ90**（第72図）

ＳＸ90はA上部西トレンチ（２Ａ11－82･92グリッド）に位置し、長軸1.6ｍ、短軸1.2ｍ以上の不整円形な遺構である（付図１）。31は、深鉢。残存部位は口縁部～頚部。型式は大木６式。口縁部は無文。頚部には横位に連続する刺突と２条の沈線、縄文（ＲＬ縦）を施文する。32は､深鉢。残存部位は胴部。中期前葉(大木７式)と考えられる。上半には、横位に隆帯文、交互刺突文、橋状把手を施す。下半には、楕円形（沈線文様系）の区画内に、縄文（ＲＬ縦）を施文する。縦位に２条の沈線、渦巻文を施す。33は､深鉢。残存部位は胴部。中期前葉(大木７式)と考えられる。縦位には、指頭の押圧による波状隆起線文、交互刺突を施す。土器全体に縄文（Ｌ縦）を施文する。34は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木７ｂ式。横位にはＸ字状に隆沈線を施す。うち１条の沈線は､押引き沈線文を施す。土器全体に縄文（ＬＲ縦）を施文する。

**ＳＰ94**（第72図）

ＳＰ94はA上部トレンチ（２Ａ11－97グリッド）に位置し、長軸0.3ｍ、短軸0.3ｍの円形な遺構である（付図１）。35は、深鉢。残存部位は胴部。中期前葉（大木７式）と考えられる。横位には１条の粘土紐貼付隆帯文、４条の押引きを施す。36は、円盤形土製品である。土器胴部の破片を使用している。土器片には沈線と撚糸文（Ｒ）を施文する。

**遺構外**（第72～73図）

37は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。前期末～中期初頭と考えられる。器形は胴部は口縁部よりやや張り出す。頚部でややくびれ、口縁が外反する。口縁は緩やかな波状口縁となる。土器全体は無文である。38は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ａ式。上半には、横位には平行沈線文で区画し、下半には、縄文（ＬＲ縦）を施文する。39は、深鉢。残存部位は頚部～胴部上半。型式は大木７ａ式。縦位に１条の波状隆帯文、粘土紐貼付隆帯文を２条、さらに、横位に３条の沈線を施す。40は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ａ式。口唇部には、縦位に刻みを施す。口縁部は横位に棒状工具による連続した刺突、さらに２条の沈線を施す。41は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木７ａ式。横位に１条の隆起線文、さらに５条の結節沈線文（平行）押引きを施す。42は、深鉢。残存部位は口縁～頚部。型式は大木７ａ式。口唇部・頚部には横位に１条の粘土紐貼付隆帯文、口唇部から頚部にかけて、縦位に２条の粘土紐貼付隆帯文を施す。これらの粘土紐貼付隆帯文をも含めて、縄文（ＬＲ横）を施文する。43は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ａ式。横位に１条の隆起線文、２条の沈線、交互刺突、さらに、横位に棒状工具による連続した沈線を２条施す。44は、深鉢。残存部位は胴部。型式は明確ではないが、調整が粗雑なことから後期前葉と考えられる。多方向の沈線を施す。さらに縄文（ＬＲ縦）を施文する。45は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木６式。口唇部には、刻みを施す。46は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木７ａ式。縦位に結節状沈線文（平行）、刺突を施す。47は、深鉢。残存部位は口縁部。結束状沈線文を施していることから十三菩提式(十三菩提系）に類似すると考えられる。上半には、ヘラ状工具による幾重に施される結節状沈線文（平行）押引きを施す。下半には同じく結節状沈線文（渦巻文）を施す。48は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ａ式。口縁は波状口縁と考えられ、口唇部頂上に刻みを施し、口唇外面には口縁に沿って、横位に１条の沈線を施す。上半には、縦位に刻みや刺突で、六角形を模ったものを施す。下半には、横位に３条の沈線、さらに１条の隆起線を施す。49は、深鉢。残存部位は口縁部。中期前葉（大木７式）である。口縁は山形状口縁で、波頂部中央には縦位に１カ所刻みを施す。外面に粘土粒貼付により楕円形突起を施す。50は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部

上半。型式は大木７ａ式。口縁部には、折り返し口縁を施し、さらに縦位の押圧縄文を施す。胴部には斜行縄文（Ｌか）を施文する。51は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ａ式。口縁は内湾し、キャリパー状を呈する。横位に連続する縦位の刻みを施す。刻みを挟むかたちで、沈線を２条ずつ施す。52は、浅鉢。残存部位は胴部。型式は大洞Ａ式。横位には５条の沈線を施す。

**ｂ．Ｂトレンチ**

**ＳＫ 110**（第 74 図）

ＳＫ 110はＢトレンチ（２Ａ 11 － 87 グリッド）に位置し、長軸１ｍ、短軸 1.4 ｍ、深さ 0.8 ｍの不定形を呈した遺構である（付図１）。南側の一部は、アンカー設置によって破壊されている。埋土から出土した 53 は、珪化が著しい珪質頁岩製の凸基石鏃である。表裏面を細部調整によって整形。基部は欠損する。表裏面の中央やや基部よりには、タール状の黒色付着物が認められる。

**ＳＸ 116**（第 74 図）

ＳＸ 116はＢトレンチ（２Ａ 11 － 79 グリッド）に位置し、長軸１ｍ以上、短軸 0.9 ｍ、深さ 0.4 ｍの溝状の遺構である（付図１）。54は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木７ａ式。縦位には１条の沈線文、交互刺突を施す。さらに、３本１単位の沈線を施す。

**ＳＫ 127**（第 74 図）

ＳＫ 127はＢトレンチ（２Ａ 11 － 79 グリッド）に位置し、長軸 0.8 ｍ、短軸 0.9 ｍの不定形な遺構である（付図１）。55は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部下半。型式は大木７ａ式。口縁は折り返し口縁である。さらに、口唇部をＷ字状の粘土紐貼付隆帯文を施す。胴部上半にはＶ字状の粘土紐貼付隆帯文を施す。口縁上半から胴部下半にかけて縄文（ＬＲＬ）を施文する。また、口縁部には横方向、胴部には縦方向に縄文を施す。

**ｃ．Ｃ４トレンチ**

**ＳＸ 23**（第 74 図）

ＳＸ 23はＣ４トレンチ（２Ａ 11 － 14・24 グリッド）に位置し、長軸 11.3 ｍ以上、短軸１ｍ以上、深さ 0.8 ｍの溝状の遺構である（付図１）。埋土？から出土した 56 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。下半には楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。57は、深鉢。残存部位は胴部。中期末？と考えられる。横位には１条隆起線文を施す。58は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木９ｂ式。楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。59は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木９ａ式。口縁は透かし彫りで、立体な造形を行い把手を形成する。また、先端部には大木９ａ式に特徴的な渦巻文を施す。60は、一定程度珪化している珪質頁岩製の両面加工石器である。下端部が折損しているが、ヘラ形石器、ないし打製石斧であると考えられる。断面形は、表面が中央で高く湾曲し、裏面が浅く湾曲する、上下非対称のレンズ状を呈する。両側縁部は、細部調整によって整えられている。

**ｄ．Ｆ区**

**ＳＫ 140**（第 75 図）

61は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ａ式。横位の粘土紐貼付隆帯文に縦位に連続した刻みを施す。62は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木７ａ式。横位の１条の粘土紐貼付隆帯文、Ｖ字状の粘土紐貼付隆帯文を施し、さらに両隆帯文に連続した刻みを施す。

**ＳＸ 141**（第 75 図）

63は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ａ式。口唇部頂上には、刻みを施し、横位に１条の粘土紐貼付隆帯文を施す。さらに、この隆帯に半截竹管で連続した刺突を施す。

**ＳＫ 146**（第 75 図）

ＳＫ 146は、Ｆ区（２Ｂ 11 － 30 グリッド）に位置し、長軸 0.6 ｍ、短軸 0.6 ｍの円形な遺構である（付図２）。埋土から出土した 64 は、一定程度珪化している珪質頁岩製の横形石匙である。横長剥片を素材とし、背面側の全周にかけて、腹面側からの細部調整が施されている。また、裏面側、素材のバルブの両サイドには、背面側からノッチが施されて、つまみ部が作り出されている。

**遺構外**（第 76 図）

65は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ｂ式。土器全体を縦位に撚糸文（Ｌ縦）による押圧を多条に施す。66は、石英安山岩製のハンマーストーンである。やや扁平な円礫を素材とし、側面にわずかに敲打痕が見られる。

## 2　第2次調査の出土遺物

### (1) 竪穴住居跡

**ST 238**（第77図）

67は、土師器壺。残存部位は口縁部～体部上半。口縁部内外面はともにロクロとなる。体部外面はロクロ、ケズリをする。体部内面はロクロ、カキメをする。68は、土師器甕。残存部位は口縁部～頚部。口縁外面はロクロ、タタキと考えられる器面調整をする。口縁・頚部とも内面はロクロとなる。器形から須恵器甕のつくりであることから、須恵器を模倣または代用品か、さらに焼成不良のため褐色を帯びたのか、判断が難しいところである。69は、須恵器横瓶。残存部位は体部上半。体部外面はロクロ、タタキ（格子）である。さらに、自然釉が付着する。体部内面はロクロ、アテ（青海波文）である。また、破損面の胎土から海綿骨針が確認できることから、平野山古窯跡産のものと考えられる。

**ST 240　EL 260**（第78図）

70は、土師器甕。残存部位は口縁部～体部上半。口縁部から体部上半内外面ともにナデをする。71は、土師器甕。残存部位は体部～底部。体部外面はロクロ、ケズリである。体部内面はロクロとなる。底面はロクロによる糸切り離し後、未調整となる。9世紀中頃と考えられる。72は、須恵器甕。残存部位は肩部。外面はロクロ、タタキ（板目）である。内面はロクロである。73は、須恵器高台付坏。残存部位は体部下半～底部。時期は9世紀前半のものと考えられる。内外面は共にロクロである。底面は糸切り離し後、未調整となる。また、破損面の胎土から海綿骨針が確認できることから、平野山古窯跡産のものと考えられる。

**EL 499　EU 514・515・517**（第78図）

74は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。沈線文様系区画内に縄文（RLR縦）を施文する。磨消縄文である。75は、深鉢。残存部位は胴部。調整が粗雑なことから、後期前葉と考えられる。縦位に沈線を施す。76は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。型式は大木10式。口縁部から頚部にはミガキを施す。胴部には、楕円形区画内（隆線文様系）に縄文（RL縦）を施文する。磨消縄文である。77は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。楕円形区画内（沈線文様系）に縄文原体（RLR縦）を施文する。磨消縄文である。78は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。口縁部内外面ともにミガキを施す。

**ST 242**（第79～81図）

79は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木5式。口唇部外面には粘土紐貼付隆帯文を山形状に連続して施し、さらに、その山形状隆帯文に刺突を施す。口縁部上半には、粘土紐貼付隆帯文を格子状に施す。80は、深鉢。残存部位は胴部。型式は明確ではないが、中期末と考えられる。縄文（RLR縦）を施文する。81は、袖珍土器（ミニチュア土器）。残存部位は胴部～底部。型式は明確ではないが、中期末と考えられる。胴部外面から底部には、ミガキを施す。82は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。型式は大木10式。口縁上半にはミガキを施す。口縁下半から胴部上半にかけては、楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（LR縦）を施文する。磨消縄文である。83は、台付鉢。残存部位は器台のみである。中期末と考えられる。器台には4単位の円孔を施す。84は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。後期前葉と考えられる。土器全体に多方向の条線を施す。85は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木7b式。横位に1条の押引き、1条のY字状隆起線文を施す。86は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。横位に1条の隆線区画を施し、さらに内外面ともにミガキを施す。円孔を施す。87は、一定程度珪化している珪質頁岩製の、短形剥片石核から転用したハンマーストーンである。下端部に潰れと敲打痕が著しい。88は、珪化が著しい珪質頁岩製の錐形石器である。剥片を素材とし、両面に細部調整が施される。尖端部縁辺の摩耗が著しい。89は、一定程度珪化している珪質頁岩製のエンドスクレイパーである。やや縦長の剥片を素材とし、剥片の左右側縁と末端に細部調整を施して、こけし状に整形。刃部の加工は分散的である。90は、一定程度珪化している珪質頁岩製の単刃スクレイパーである。横長剥片を素材とし、背面側の末端にたいして、腹面側から細部調整が施されている。裏面にある素材剥片のバルブは、被熱によって焼けはじけが生じ、欠損する。91は、一定程度珪化している珪質頁岩製の石核である。やや厚手の石刃と短形剥片が剥離されている。92は、一定程度珪化し、節理面

が発達している珪質頁岩製の短形剥片石核から転用したと考えられるハンマーストーンである。とくに、左側縁と下端部の敲打痕が著しい。

**ＥＬ 247**（第 82 図）

93 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木９式。縦位には、楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。94・95 共に、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。口縁にはミガキを施す。94・95 は同一個体である。96 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。上半にはミガキを施し、下半には隆線文様系区画内に縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。97 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。口縁部にはミガキを施す。98 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。上半には、ミガキを施し、下半は縄文（ＬＲ縦）を施文する。99 は、鉢。残存部位は胴部。中期末と考えられる。胴部は、くの字状を呈し、上半をミガキ、下半には縄文（ＲＬ横）を施文する。磨消縄文である。101 と同一個体である。100 は、器種は明確ではないが、小型土器と考えられる。残存部位は底部。中期末～後期初頭と考えられる。縦位に条線を施す。101 は、鉢。残存部位は口縁部～胴部。中期末と考えられる。口縁上半はミガキを施し、くの字状にくびれ、縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。102 は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。中期末と考えられる。口縁は波状口縁である。また、口縁部から胴部は縄文（ＲＬ縦）を施文する。309 と同一個体である。103 は、粒子がやや粗い珪質頁岩製の半両面加工石器である。大型厚手剥片を素材とし、表裏に浅く細部調整が施される。そのため、両面ともに、素材面を大きく残す。

## （2）埋設土器

**ＥＵ 211**（第 83 図）

104 は、深鉢。残存部位は胴部下半～底部。中期末～後期前葉と考えられる。胴部には、縄文（ＬＲ横走）を施文する。一部、縄文による施文をナデで、消している。

**ＥＵ 244**（第 83 図）

105 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。上半には、ミガキを施し、下半には、区画内（隆線文様系）に撚糸文（Ｌ縦）を施文する。106 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。上半には、ミガキを施す。下半には、隆線文様系区画内に多方向への撚糸文（Ｒ）を施文する。107 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。上半にはミガキを施し、下半には、撚糸文を施文する。調整が粗雑なことから、後期前葉と考えられる。

**ＥＵ 269**（第 84 図）

108 は、深鉢。残存部位は胴部～底部。堀之内Ｉ式に併行するものと考えられる。胴部には縄文（ＬＲ）を多方向へ施す。さらに、４条１単位の沈線で縦位に８の字状などに施す。

## （3）立石・埋石土坑

**ＳＫ 254**（第 85 ～ 86 図）

109 は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉？と考えられる。縄文（ＬＲ横）を施文する。110 は、珪化が著しい珪質頁岩製の単刃スクレイパーである。短形剥片を素材として、右側縁に腹面からの細部調整によって刃部を凸状に整形。左側縁は、被熱によって焼けはじけが生じ、欠損する。111 は、一定程度珪化し、かつ黄灰色の粒状の夾雑物が多量に入る珪質頁岩製石刃である。頭部調整が顕著で、薄手でバルブが発達しない。リップ状の剥離開始部が認められる。112 は、石英安山岩の棒状礫である。加工痕は認められないが、少なくとも３分割された可能性がある。113 は、軟質凝灰岩製の石皿である。扁平な円礫の平坦面に窪みを作出。窪み底面には、わずかに磨滅痕が認められる。下半分は、欠損している。欠損面の状況から、打撃によって欠損した可能性がある。

**ＳＫ 268**（第 86 図）

114 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木 10 式。沈線文様系区画内に縄文（ＬＲ横走）を施文する。充填縄文である。115 は、深鉢。残存部位は胴部。調整が粗雑なことから、後期前葉と考えられる。上半には撚糸文（Ｌ）を施文する。下半にはナデ（縄文を消す）を施す。116 は、深鉢。残存部位は胴部。後期前葉と考えられる。上半には、縄文（ＬＲ横）を施文する。また、上半から下半に多条の沈線を施す。117 は、深鉢。残存部位は胴部。調整が粗雑なことから、後期前葉と考えられる。撚糸文（Ｒ）を施文し、さらに横位に沈線による楕円形区画文を施し、区画内を消す。磨消縄文である。118 は、土製耳飾りと推測され、中期と考えられる。器面に丁寧

な調整を施す。119は、中央部に大きな窪みを残す凝灰質砂岩の円礫を素材とする。加工痕は認められない、あるいは素材の質の関係で痕跡が消滅している可能性があるが、やや扁平な円礫の平坦面に大きな窪みが認められる。石皿の可能性もある。

**S K 286**（第86図）

120は、珪化が著しい珪質頁岩製の錐形石器である。厚手の縦長剥片を素材とし、尖端部を中心に細部調整が施される。尖端部縁辺の摩耗が著しい。

**S P 271**（第87図）　121は、やや粗粒の珪質頁岩製の錐形石器である。幅広剥片を素材とし、末端側の一端に尖頭部を作出。ただし、尖頭部は欠損し、さらに再加工が施されている。122は、石英安山岩製の石皿である。扁平な円礫の平坦面に窪みを作出。窪み底面には、わずかに磨滅痕が認められる。下半部と左下端から右側中央部付近までの縁辺が欠損している。

## （4）土坑

**S K 330**（第88図）

123は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。縦位の楕円形区画内（沈線文様系）には、縄文（R L横）を施文する。さらに、区画外にはミガキを施す。124は、深鉢。残存部位は胴部。調整が粗雑なことから、後期前葉と考えられる。胴部には多方向の沈線を施す。

**S K 355**（第88～91図）

125は、深鉢。残存部位は口縁部。中期前葉（大木7式）と考えられる。口唇部には、ミガキを施す。上半には横位に交互刺突を施し、下半には縄文（L R縦）を施文する。126は、深鉢。残存部位は胴部。中期前葉（大木7式）と考えられる。縦位に結節回転文（L R）を施文する。127は、深鉢で、ほぼ完形である。型式は大木7a式。口唇部にはC字状粘土紐貼付をする。口縁部には、縦位に1条のY字状粘土紐貼付隆帯文、径15mm程度のリング状粘土紐貼付隆帯文を施す。頸部には、Y字状隆帯文につなぐ形で横位に1条の隆帯文を施し、さらに、その隆帯文に交互刺突を施す。また、補修孔を確認できる。胴部には縦位に楕円形状に粘土紐貼付隆帯文を施す。口縁部～底部にかけて縄文（L R・R L結節羽状縄文とL R・L Rの結節回転文）を施文する。128は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木7a式。胴部上半から下半には、縄文（L R縦）を施文する。さらに、胴部上半には縦位に2条の粘土紐貼付隆帯文を施す（懸垂文）。129は、深鉢。残存部位は胴部下半～底部。中期前葉（大木7式）と考えられる。胴部下半は無文である。底面には網代痕が確認できる（網代底土器）。130は、深鉢。残存部位は胴部。大木10式。隆線文様系区画内に縄文（L R横走）を施文する。131は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木7a式。口唇部には、縦位に連続した刻目を施す。口縁上半には、横位に平行沈線文の間に交互刺突文を施す。132は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木7a式。上半は、折り返し口縁で、縦位に多条の押引きを施す。下半には、縄文（R L縦）を施文する。

**S K 358**（第91～93図）

133は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。上半には、ミガキを施す。下半には、楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（R L R縦）を施文する。磨消縄文である。134は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。中期末と考えられる。口縁上半は縄文（L R横）を施し、口縁下半から胴部上半かけては、縄文（L R）を多方向に施文をする。135は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木7a式？と考えられる。胴部は無文である。136は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。上半はミガキを施す。下半には沈線文区画内に縄文原体（L R縦）を施文する。磨消縄文である。137は、粒子がやや粗い珪質頁岩製の半両面加工石器である。大型厚手剥片を素材とし、表裏に浅く細部調整が施される。そのため、両面ともに、素材面を大きく残す。石核の可能性もある。

**S K 364**（第93～95図）

138は、深鉢。残存部位は胴部下半～底部。無文であるため、明確ではないが、中期と考えられる。底面には網代痕が確認できる（網代底土器）。139は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。大木7b式。口縁部には、横位に楕円形の沈線、多方向の沈線を施す。頸部には、結節状沈線文（平行・渦巻文）を施す。胴部上半には、結節回転文（L）、縦位に3条の沈線を施す。140は、深鉢。残存部位は胴部。中期前葉（大木7式）と考えられる。結節回転文（L）を施文する。141は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式？と考えられる。上半には、横位に1条の粘土紐貼付隆帯文を施す。さらに、上半・下半には縄文（L R縦・横）を施す。142は、深

鉢で、ほぼ完形である。型式は大木７ａ式。口縁は折り返し口縁である。頸部には波状の粘土紐貼付隆帯文を３単位施す。口縁部・頸部には、縄文（ＬＲ横）を施文する。胴部には結節回転文（ＬＲ縦）を施す。143は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ａ式。口縁は折り返し口縁である。縄文が磨滅しているため縄文原体が判然としない。144は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ａ式。横位には１条の隆起線文を施し、その隆起線文に連続した刺突を施す。145は、一定程度珪化している珪質頁岩製の円盤形石器である。幅広で厚手の剥片を素材とし、表裏に対して縁辺全体から細部調整が施される。ただし、表裏面ともに中央部に平坦な素材面を残す。146は、珪化が著しい珪質頁岩製の短形剥片石核である。自然面を大きく残す厚手剥片の表裏面から、短形剥片を剥離。

**ＳＫ397**（第95図）

147は、深鉢。残存部位は頸部。型式は大木９式。頸部には、沈線文区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。

**ＳＫ270**（第95図）

148は、深鉢。残存部位は胴部。大木10式に類似するが、中期末～後期初頭と考えられる。沈線文様系区画内には縄文（Ｌ縦？）、刺突を施す。刺突の様相から、大木10式とは言い難い。149は、深鉢。残存部位は胴部。型式は明確ではないが、調整が粗雑なことから後期初頭と考えられる。隆線文様系区画内に縄文（ＬＲ）を施文する。150は、粒子がやや粗い珪質頁岩製の半両面加工石器である。大型厚手剥片を素材とし、表裏に浅く細部調整が施される。そのため、両面ともに、素材面を大きく残す。短形剥片石核の可能性もある。

**ＳＫ246**（第96図）

151は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。型式は大木10式。口縁上半には、ミガキを施し、さらに横位に１条の沈線を施す。口縁下半から胴部上半には縄文（ＬＲ）を多方向へ施文をする。

**ＳＫ302**（第96図）

152は、鉢と考えられる。残存部位は口縁部。型式は大木９式である。縦位に、隆起線渦巻文を施す。153は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木９式と考えられる。胴部には、楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。さらに、区画外には刺突を施す。充填縄文である。154は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。沈線文区画内には縄文（ＲＬ横）を施文する。磨消縄文である。155は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。隆線文区画内に縄文（ＬＲ）を多方向へ施文する。磨消縄文である。156は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。沈線文区画内には、縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。157は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木９ｂ式。沈線文区画内には、縄文（ＬＲ縦）を施文する。沈線渦巻文を施す。磨消縄文である。158は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。型式は大木９式と考えられる。口縁部は無文である。胴部には、楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。区画外には、刺突を施す。159は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。隆起線文で楕円形に施す。区画内外にミガキを施す。160は、深鉢。残存部位は胴部。大木10式？と考えられる。上半には、横位に隆帯文区画を長方形状に施す。下半には、縄文（ＬＲ縦）を施文する。161は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。調整が粗雑なことから、後期初頭と考えられる。口縁は山形状口縁。口縁部から頸部にかけて無文である。胴部には、横位に１条の隆起線文を施す。162は、深鉢。残存部位は口縁部。調整が粗雑なことから、後期初頭と考えられる。上半には、ミガキを施す。下半には縄文（ＲＬ縦）を施文する。磨消縄文である。

**ＳＫ304**（第97～98図）

163は、深鉢。残存部位は口縁部～底部。型式は縄文のみのため、明確ではないが、中期末から後期初頭と考えられる。土器全体に縄文（ＬＲ縦）を施す。164は、浅鉢。残存部位は口縁部。中期末と考えられる。口縁部は粘土紐貼付隆帯文区画を施し、さらに、区画内には突起を２ヶ所施す。165は、須恵器甕。残存部位は体部。体部外面にはタタキ（板目）、体部内面にはアテ（同心円文）を施す。166は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。上半にはミガキを施し、下半には横位に隆線文様系区画内に縄文（ＲＬ縦）を施文する。磨消縄文である。167は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。沈線文様系区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。168は、深鉢。残存部位は胴部下半～底部。胴部には縄文（ＲＬ縦）を施文する。さらに、底

部側面にはミガキを施す。169は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。縄文（ＬＲ縦）を施文する。波とう文を施す。磨消縄文である。170は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。中期末と考えられる。口縁部から胴部上半には、縄文（ＬＲ縦）を施文する。171は、細粒軟質凝灰岩製の石錐状石製品である。右側縁を両面研磨してやや角度を作出している。表面はやや窪み、さらに窪み中央部付近に長軸から右上がりの、直線からやや歪んだ線条痕が認められる。下半部は、欠損している。

**ＳＫ310**（第99図）

172は、深鉢。残存部位は胴部～底部。後期前葉と考えられる。胴部から底部には撚糸文（Ｌ縦）を施文する。胴部下半には被熱により褐色を呈する。173は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。縄文（ＲＬ縦）を施文する。

**ＳＫ329**（第100図）

174は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。後期初頭と考えられる。口縁は緩やかな波状口縁である。胴部上半には縦位の方形区画内（隆線文様系）に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。

## （5）溝跡

**ＳＸ203**（第100図）

175は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木7ａ式。口縁は山形状口縁で、外側に張り出す。波頂部には縦位に3条の刻みを施す。さらに、口唇部外面には横位に粘土粒を施し、隆起線上に縦位に刻みを施す。口縁内外面には、隆帯文を貼りつけ、肥厚させる。胴部には、多方向への結節状沈線文（平行・渦巻文）、交互刺突を施す。

**ＳＤ282**（第100～101図）

176は、深鉢。残存部位は底部。中期末～後期初頭と考えられる。ナデによる調整を施す。177は、深鉢。残存部位は胴部。大木10式に類似するが、調整が粗雑のため後期初頭と考えられる。縦位の楕円形区画内（沈線文）に縄文（ＬＲＬ縦）を施文する。磨消縄文である。178は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木9ａ式。隆起線文、沈線文区画内に縄文（ＲＬＲ横）を施文する。179は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。磨滅しているため、縄文は判然としない。磨消縄文である。180は、一定程度珪化している珪質頁岩製の尖頭スクレイパーである。幅広の石刃を素材とし、素材石刃の下半を腹面側からの細部調整によって凸状に整形。181は、一定程度珪化している珪質頁岩製の単刃スクレイパーである。幅広剥片を素材とし、背面右側縁全体に細部調整が施される。細部調整が施された縁辺は、凸状をなす。182は、一定程度珪化している珪質頁岩製の短形剥片石核である。腹面側を中心に、やや幅広で大型の短形剥片が剥離されている。

## （6）その他

**ＳＸ241**（第102図）

183は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。型式は大木10式。口縁部から胴部上半には楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（ＲＬ縦）を施文する。磨消縄文である。184は、深鉢。中期末と考えられる。土器の把手部分。内外面ともに赤彩を施す。185は、深鉢。残存部位は口縁部。調整が粗雑なことから、後期前葉と考えられる。口縁部には縦位に半截竹管による2条の沈線、撚糸文（Ｒ）を施文する。186は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木7ａ式。口縁は波状口縁と考えられる。横位に2条の有節沈線を施す。187は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木6式。横位に1条の浮線文、半截竹管による連続する押圧を2条施す。188は、深鉢。残存部位は口縁部～頚部。型式は大木10式。口縁部から頚部には隆線文区画を施し、区画内に縄文（ＲＬ）を施文する。189は、深鉢。残存部位は口縁部～頚部。型式は大木6式。口縁は緩やかな山形状口縁である。口唇部に沿う形で、粘土紐貼付隆帯文を1条施し、その上に縦位の刻みを施す。頚部は無文である。190は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉と考えられる。口縁は肥厚し、撚糸文（Ｒ縦）を施文する。

ＳＸ241では、1,204点の石器資料が出土している。その石器資料については、本章第4節にて詳述する。

**ＳＫ406**（第102図）

191は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。後期前葉と考えられる。口唇部には、横位に1条の縄文（Ｌ）を口縁に沿う形で、押圧を施す。口縁部～胴部上半には縄文（Ｌ）を多方向へ施文する。

**ＳＫ408**（第102図）

192は、深鉢。残存部位は口縁部。後期初頭と考えら

れる。口縁は内外面共に立体的造形を施した山形状口縁で、さらに円孔を施す。隆線文様系区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。193は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。194は、小型台付鉢。残存部位は台部。中期後葉と考えられる。無文である。195は、無文で土偶の頭部片と考えられる。指ナデ調整を施す。

**ＳＫ407**（第103図）

196は、凝灰質砂岩の中央に窪みをもつ扁平礫である。表面が崩れやすい素材の性質上、人為的な痕跡は見出すことができない。しかし、遺構からの出土であるため、人為的に持ち込まれた可能性がある。

**ＳＫ411**（第103図）

197は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。口縁上半にはミガキを施す。口縁下半から胴部上半には、縄文（ＲＬ縦）を施す。

**ＳＫ412**（第104図）

198は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部下半。口縁上半にはナデを施す。型式は大木10式。口縁下半から胴部上半には、縄文（ＲＬ縦）を施す。199は、深鉢などの口縁部突起と考えられる。後期前葉と考えられる。外面に刺突を施す。200は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木9式。沈線文区画内に縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。201は、一定程度珪化している珪質頁岩製の細型のヘラ形石器である。上半部は、折れにより欠損する。素材の周囲を細部調整によって平面形を棒状に、側面形を下端部で急に収斂するように成形。折れは、細部調整面を切る曲げ型の折れであるため、使用時の折れの可能性がある。

**ＳＫ413**（第104図）

202は、深鉢。残存部位は口縁部～頚部。後期前葉と考えられる。口縁上半には、ミガキを施す。口縁下半から胴部には横位の条線文を施す。

**ＳＰ414**（第104図）

203は、深鉢。残存部位は口縁部。上半には、ミガキを施す。下半には沈線文区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。204は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。沈線文区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。また、区画外には赤彩を施す。

**ＳＸ277**（第104図）

205は、深鉢。残存部位は胴部。縦位の隆線文区画内に斜行縄文を施す。また、磨滅しているため、縄文は判然としない。206は、凝灰質砂岩の扁平礫である。表面が崩れやすい素材の性質上、人為的な痕跡は見出すことができない。しかし、遺構からの出土であるため、人為的に持ち込まれた可能性がある。平坦面の１面には、５ヶ所程度の浅い窪みがある。

**ＳＸ288**（第105図）

207は、深鉢。残存部位は胴部。調整が粗雑なことから後期初頭と考えられる。縦位の楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（ＬＲ縦）を施文する。208は、深鉢。残存部位は胴部。後期前葉と考えられる。縄文（ＬＲ横）を施文後、沈線文を施す。209は、一定程度珪化している珪質頁岩製の鋸歯縁石器である。自然面をもつ縦長剥片を素材とし、右側縁を鋸歯状に細部調整を施している。210は、一定程度珪化している珪質頁岩製の石刃である。下半部は、折れにより欠損する。頭部調整が顕著で、薄手でバルブが発達しない。リップ状の剥離開始部が認められる。

**Ｈ５トレンチ　遺物包含層**（第105～110図）

211は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉と考えられる。橋状把手や刺突孔を立体的な造形で施す。212は、深鉢。残存部位は口縁部。調整が粗雑なことから後期前葉と考えられる。口縁は緩やかな波状口縁である。縄文（ＬＲ横走）を施文する。213は、深鉢。残存部位は口縁部。称名寺式に併行するものと考えられる。口縁は肥厚する。沈線文区画内に縄文（ＲＬ横）を施文する。214は、土製耳飾りと考えられる。滑車型を呈する。215は、台付鉢。残存部位は脚部。中期末～後期と考えられる。調整は粗雑である。216は、小型深鉢と考えられる。残存部位は胴部～底部。中期末～後期と考えられる。調整は粗雑で、無文である。撚糸文Ｌか。217は、深鉢。残存部位は口縁部。調整が粗雑なことから、後期前葉と考えられる。口縁外面は無文である。口縁内面は半截竹管による多方向への条線を施す。218は、円盤形土製品である。後期初頭と考えられる。土器片には、隆線文区画内に縄文（ＲＬ縦）を施文する。219は、円盤形土製品である。後期前葉と考えらる。土器片には、撚糸文（Ｒ）を施文する。220は、腕輪状土製品である。後期前葉と考えられる。

横位に隆沈線を施す。221は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木４式。口縁外面下半には、横位に粘土紐貼付隆帯文を１条、前者を挟む形で、横位に２条の鋸歯状の粘土紐貼付隆帯文を施す。口唇内面には、横位に２条の鋸歯状粘土紐貼付隆帯文を施す。222は、深鉢。型式は大洞A式。残存部位は口縁部～胴部上半。口縁は波状口縁である。胴部上半には、結節回転文（ＬＲ）を施す。223は、一定程度珪化している珪質頁岩製の縦型石匙である。剥片を素材とし、両面全周にわたって細部調整を施す。折れ面？付近につまみ部を作出し、つまみ部以下は、尖頭器状に整形。224は、一定程度珪化している珪質頁岩製の縦型石匙である。縦長剥片を素材とし、末端側につまみ部を作出。節理面側を背として、その対向する右側縁に腹面側から細部調整が施される。225は、石英安山岩の棒状礫？である。わずかに、長軸と直交する擦痕が認められるが、そのほかの明瞭な加工痕は認められない。下半部と裏面は、大きく欠損する。226は、細粒帆質凝灰岩製の凹石である。扁平な亜円礫を素材とする。表裏両面に平面形が楕円形の擂り鉢状の窪みがある。表面が崩れやすい性質であるため、明瞭な痕跡が確認できない。被熱による赤色変化とみられる部分が確認される。227は、細粒帆質凝灰岩製の凹石である。扁平な円礫を素材とする。右中央から左下部付近まで、大きく欠損する。表面には８ヶ所の円形の窪みが、裏面には８ヶ所の円形の窪みと７ヶ所の溝状の窪みが認められる。表面が崩れやすい性質であるが、窪みの一部には、多数の刻み状の線条痕が認められる。裏面はひび割れが著しく、ひび割れは被熱が原因である可能性がある。228は、細粒帆質凝灰岩製の凹石である。扁平な円礫を素材とする。表面は、２つの円形と１つの長楕円形の窪みが連なる。裏面は、２つの円形の窪みが連なる。表面が崩れやすい性質であるため、明瞭な痕跡が確認できない。229は、粒子がやや粗い珪質頁岩製の石核である。半割した円礫の平坦面に打面を設定し、背部、左側面を整形し、前面に作業面を設定して、縦長剥片を剥離。その後、作業面の打面側中央でヒンジを呈する剥片を剥離して作業が終了している。石核の形態的特徴から、本来は石刃を意図した石核ブランクである可能性もある。230は、石英安山岩製の石棒、ないし棒状礫である。上端部と下端部は欠損する。前後左右面にわたって、わずかに長軸と並行な擦痕が確認される。

**Ｈ10トレンチ　遺物包含層**（第110～112図）

231は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部下半。型式は堀之内Ｉ式に併行するものと考えられる。口縁は山形状口縁である。口縁上半には円孔を施す。口縁下半から胴部下半には撚糸文（Ｌ縦）を施文する。５条１単位の沈線を渦巻文状に施す。232は、深鉢。残存部位は口縁部～底部。型式は堀之内Ｉ式に併行するものと考えられる。口縁はとても緩やかな波状口縁で、４単位で構成されると考えられる。各波頂部に２単位の円孔を施す。土器全体に撚糸文（Ｒ）を施す。さらに、沈線による波頂や弧線文を施す。233は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉と考えられる。口縁は立体的な造形を施す。口縁内外面上半には透かし孔、円孔を施す。口縁下半には、縦位に沈線を施す。234は、深鉢。残存部位は口縁部。後期と考えられる。口縁内外面を押圧し、波状にする。また、口縁外面には横位に１条の沈線を施す。235と同一個体である。235は、深鉢。残存部位は口縁部。後期と考えられる。口縁内外面を押圧し、波状に施す。口縁外面には、多方向への沈線を施す。236は、砂岩製の凹石である。表裏面を研磨したのち、中央部に窪みを施している。左側縁にもわずかな窪みが認められる。右側は大きく切断された可能性がある。237は、石英安山岩製の石棒、ないし棒状礫である。表面にわずかな擦痕や窪みが認められるが、明確な加工痕は認められない。下部は欠損する。

## （7）上記以外の遺構出土遺物

### a．Ｈ１トレンチ

**ＥＫ259**（第113図）

ＥＫ259はＨ１－10区間（２Ａ12－82グリッド）に位置し、長軸１m、短軸0.6 mの長楕円形な遺構である（付図３）。238は、須恵器坏。残存部は口縁部～体部下半。９世紀中頃と考えられる。内外面ともにロクロによる調整である。胎土に海綿骨針が確認できることから、平野山古窯跡産のものと考えられる。239は、土師器甕。残存部位は口縁部～体部上半。口縁部内外面共にナデ、体部外面はロクロ、ケズリを施す。体部内面はロクロである。

**遺構外**（第113～115図）

240は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木９式。沈

線文区画内に縄文（L R）を施文する。充填縄文である。241は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木9式。縦位に、隆起線渦巻文を施す。242は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木9式。縦位の沈線文区画内に縄文（L R縦）を施文する。磨消縄文である。243は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木9式。沈線文区画内に縄文（L R）を施文する。244は、一定程度珪化している珪質頁岩製の石刃である。自然面打面で、やや厚手である。245は、一定程度珪化している珪質頁岩製の楔形石器である。厚手の短形剥片を素材とし、上下両端部、表裏面ともに潰れ状の微細剥離痕が見られる。246は、一定程度珪化している珪質頁岩製の短形剥片石核である。背面側を自然面に、腹面側に節理面が大きくある厚手で大型の剥片を素材とする。腹面側から大小の短形剥片が剥離されている。247は、一定程度珪化している珪質頁岩製の半両面加工石器である。幅広の大型剥片を素材とし、裏面の右側縁部に打面を作出し、その打面から背面の左側縁部に剥離を加えている。

### b．H2トレンチ

**S X 331**（第116図）

S X 331はH 12 － 9区間（2 B 13 － 06グリッド）に位置し、長軸6.3 m、短軸1 m、深さ0.8 mの不定形な遺構である（付図4）。248は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木1式。縄文（L R横・R L横）を施文する。羽状縄文である。249は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木1式。縄文（L R横・R L横）を施文する。羽状縄文である。250は、一定程度珪化している珪質頁岩製の横長剥片石核である。厚手剥片を素材とし、素材剥片の腹面側から横長剥片が剥離されている。

**S K 337**（第116図）

S K 337はH 2 － 6区間（2 B 12 － 88グリッド）に位置し、長軸1.2 m、短軸1.1 m、深さ0.4 mの円形な遺構である（付図4）。251は、深鉢。残存部位は胴部。中期末～後期初頭と考えられる。上半にはミガキを施し、下半には沈線文区画内に縄文（L R縦）を施文する。

### c．H3トレンチ

**S X 349**（第116図）

S X 349はH 3 － 1区間（2 B 12 － 43グリッド）に位置し、長軸1.4 m以上、短軸0.9 m以上、深さ0.5 mの円形な遺構である（付図4）。252は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は堀之内Ⅰ式に併行するものと考えられる。口縁は山形状口縁と考えられ、頂上部には楕円状の窪みを施す。さらに、1ヶ所の透かし孔、円心状の沈線を施す。253は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木7a式。横位に半截竹管による連続する刺突、さらに刺突を挟む形で、2条ずつ沈線を施す。254は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木7a 式。縦位に半截竹管による1条の押引きを施す。255は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。外面に張り出した隆線文区画内に縄文（L R縦）を施文する。磨消縄文である。

**S K 360**（第116図）

S K 360はH 3 － 5区間（2 B 12 － 83グリッド）に位置し、長軸0.7 m、短軸0.4 m、深さ0.6 mの楕円形な遺構である（付図4）。256は、深鉢。残存部位は胴部。後期前葉と考えられる。撚糸文（R）を施文する。

**S P 362**（第116図）

S P 362はH 3 － 6区間（2 B 12 － 94グリッド）に位置し、長軸0.3 m、短軸0.3 m、深さ0.3 mの円形な遺構である（付図4）。257は、一定程度珪化している珪質頁岩製のヘラ形石器である。幅広の縦長剥片を素材とし、背面の周辺部を中心に細部調整が施され、平面形が撥状に整形される。また、裏面の基部周辺にも細部調整が施され、やや円形に整形される。

**S K 366**（第117図）

S K 366はH 3 － 7区間（2 B 13 － 04グリッド）に位置し、長軸1 m、短軸0.8 m以上、深さ0.2 mの円形な遺構である（付図4）。258は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木7a式。沈線文区画内に交互刺突を施し、さらに沈線を沿わせる。259は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大洞$C_1$式または$C_2$式と考えられる。網目状撚糸文（R）を施文する。粗製土器である。

**S K 367**（第117図）

S K 367はH 3 － 8区間（2 B 13 － 15グリッド）に位置し、長軸1.1 m、短軸0.9 m以上の長楕円形な遺構である（付図4）。260は、深鉢。残存部位は胴部。後期前葉と考えられる。縦位の沈線文区画内に撚糸文（R）を施文する。磨消縄文である。

**ＳＫ 368**（第 117 図）

ＳＫ 368 はＨ３－８・９区間（２Ｂ 13 － 15・25 グリッド）に位置し、長軸 2.3 m、短軸 0.8 m以上、深さ 0.8 m の不定形な遺構である（付図４）。261 は、一定程度珪化している珪質頁岩製の加工痕を有する石刃である。やや厚手で、末端側の折れ面から背面側に剥離が入り、厚みが減じられている。腹面側の左側縁中央部に細部調整が見られ、また右側縁全体には微細剥離痕が見られる。

**遺構外**（第 117 図）

262 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木５式。横位に山形状の粘土紐貼付隆帯文を施す。263 は、脚付浅鉢。残存部位は脚部。型式は大洞Ａ式。脚部は４単位の構成と考えられる。264 は、石英安山岩製の磨製石斧である。中間部から基部までは欠損するが、折れ面に打点を確認することができることから、打撃によって切断された可能性がある。全面研磨され、滑らかな表面形となる。刃部の表面側に平坦剥離が入るが、使用による破損の可能性がある。また折れ面から表面側と右側面側に剥離が入る。

### ｄ．Ｈ４トレンチ

**ＳＸ 384**（第 118 図）

ＳＸ 384 はＨ４－２区間（２Ｂ 13 － 23・24・33・34 グリッド）に位置し、長軸５m、短軸１m以上、深さ 0.3 m の円形な遺構である（付図４）。265 は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。型式は大木 10 式。口縁部はミガキを施す。頸部には横位に隆線を施す。胴部上半には沈線文様系区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。266 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木７ａ式。上半には、縄文（Ｌ縦）施文をする。下半には横位に１条の隆起線文を施し、さらに、隆起線文に連続する刺突を施す。

**ＳＰ 390**（第 118 図）

ＳＰ 390 はＨ４－４区間（２Ｂ 13 － 42 グリッド）に位置し、長軸 0.3 m、短軸 0.3 m の円形な遺構である（付図４）。267 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木９式。縦位の沈線文様系区画内に縄文（ＲＬ縦）を施文する。磨消縄文である。

**ＳＫ 392**（第 118 図）

ＳＫ 392 はＨ４－４区間（２Ｂ 13 － 42 グリッド）に位置し、長軸 9.8 m以上、短軸 7.9 m、深さ 2.9 m の隅丸長方形な遺構である（付図４）。268 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木９式。楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。269 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木 10 式。横位の沈線文区画内に縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。

**ＳＫ 396**（第 118 図）

ＳＫ 396 はＨ４－５区間（２Ｂ 12 － 51 グリッド）に位置し、長軸１m、短軸 0.4 m、深さ 0.5 m の円形な遺構である（付図４）。270 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木９式。縦位の沈線文区画内に縄文（ＲＬＲ縦）を充填する。充填縄文である。271 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。上半には、ミガキを施す。下半には、隆線文区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。

**ＳＫ 400**（第 118 図）

ＳＫ 400 はＨ４－５区間（２Ｂ 13 － 51 グリッド）に位置し、長軸１m以上、短軸 0.5 m、深さ 0.4 m の不定形な遺構である（付図４）。272 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。楕円形区画内（隆線文様系）に縄文を施文。縄文が磨滅しているため縄文原体が判然としない。

**ＳＸ 401**（第 118 図）

ＳＸ 401 はＨ４－６区間（２Ｂ 13 － 51 グリッド）、長軸１m以上、短軸１m、深さ 0.6 m の不定形な遺構である（付図４）。273 は、深鉢。残存部位は口縁部で円孔が設けられる。型式は大木 10 式。上半にはミガキを施す。下半には縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。274 は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉と考えられる。口縁は山形状の突起を形成し、口縁に沿う形で隆起線文を施し、それに沿って連続する刺突を施す。内外面ともに丁寧にナデを施す。275 は、深鉢。残存部位は胴部。中期後葉（大木９式）と考えられる。縦位の沈線文区画内に縄文（０段多条Ｒ縦）を施す。磨消縄文である。276 は、一定程度珪化している珪質頁岩製の凸基石鏃である。剥片を素材とする。やや厚みがあり、かつ表裏面に素材面を残すことから、未製品の可能性がある。277 は、一定程度珪化している珪質頁岩製の尖頭スクレイパーである。石刃を素材とし、左右両側縁に腹面からの細部調整により整形。末端側で細部調整面が収斂

する。

**ＳＰ 402**（第 119 図）

ＳＰ 402 はＨ４－６区間（２Ｂ 13－51 グリッド）に位置し、長軸 0.3 ｍ以上、短軸 0.3 ｍ以上、深さ 0.2 ｍの楕円形な遺構である（付図４）。278 は、深鉢。残存部位は口縁部。中期と考えられる。縄文（ＬＲ縦）を施す。279 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木９式。隆沈線文を施す。

**ＳＫ 416**（第 119 図）

ＳＫ 416 はＨ４－８区間（２Ａ 13－79　２Ｂ 13－70 グリッド）に位置し、長軸 0.9 ｍ以上、短軸 0.9 ｍ、深さ 0.5 ｍの楕円形な遺構である（付図３）。280 は、深鉢。残存部位は口縁部。中期末と考えられる。縄文（ＬＲ縦）を施文する。281 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。隆起線文を施す。282 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。口縁は山形状口縁で、楕円形状の円孔を施す。隆起線文区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。283 は、深鉢。残存部位は口縁部。中期末～後期と考えられる。上半はナデを施し、下半には撚糸文（Ｒ）を施文する。

**遺構外**（第 119 図）

284 は、細粒軟質凝灰岩製の凹石である。扁平な円礫を素材とする。上端部は欠損しているかもしれない。表面は、４つの窪みと４つの窪みが連なる。裏面は、２つの円形の窪みが連なる。表面が崩れやすい性質であるため、明瞭な痕跡が確認できない。

### ｅ．Ｈ５トレンチ

**ＳＫ 439**（第 119 図）

ＳＫ 439 はＨ５－１区間（２Ｃ 13－90 グリッド）に位置し、長軸１ｍ以上、短軸 0.3 ｍ、深さ 0.3 ｍの楕円形な遺構である（付図４）。285 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木 10 式。沈線文区画内に縄文（Ｌ縦？）を施文する。

**ＳＫ 466**（第 119 図）

ＳＫ 466 はＨ５－８区間（２Ｂ 14－２・３グリッド）に位置し、長軸 1.4 ｍ以上、短軸 0.5 ｍ、深さ 0.5 ｍの不定形な遺構である（付図４）。286 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。縦位に撚糸文（Ｒ）を施文する。287 は、深鉢。残存部位は胴部。中期後半と考えられる。縄文（ＲＬ縦）を施文する。

**ＳＰ 479**（第 119 図）

ＳＰ 479 はＨ５－９区間（２Ｂ 14－12 グリッド）に位置し、長軸 0.3 ｍ、短軸 0.3 ｍの円形な遺構である（付図４）。288 は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木 10 式。隆線文区画内に縄文（ＬＲ？）を施文する。289 は、円盤形土製品である。中期後葉と考えられる。縄文（ＬＲ縦）を施文する。290 は、円盤形土製品である。後期？と考えられる。外面は磨滅している。

**ＳＰ 478**（第 120 図）

ＳＰ 478 はＨ５－９区間（２Ｂ 14－12 グリッド）に位置し、長軸 0.4 ｍ、短軸 0.3 ｍ、深さ 0.3 ｍの不定形な遺構である（付図４）。291 は、一定程度珪化している珪質頁岩製の短形剥片石核である。厚手剥片を素材とし、表裏面から短形剥片を剥離。棒状の残核形態となる。

**ＳＸ 493**（第 120 図）

ＳＸ 493 はＨ５－10 区間（２Ｂ 14－11 グリッド）に位置し、長軸 0.9 ｍ以上、短軸 1.9 ｍ、深さ 0.7 ｍの円形な遺構である（付図４）。292 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木 10 式。隆線文区画内に縄文（ＲＬ縦）を施文する。磨消縄文である。

### ｆ．Ｈ６トレンチ

**ＳＸ 219**（第 120 図）

ＳＸ 219 はＨ６－７区間（Ｚ 12－98　Ｚ 13－08 グリッド）に位置し、長軸 1.6 ｍ以上、短軸１ｍ以上、深さ 0.6 ｍの不定形な遺構である（付図３）。293 は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木９式。隆帯による渦巻文を施す。

**ＳＫ 222**（第 120 図）

ＳＫ 222 はＨ６－３区間（Ｚ 12－98 グリッド）に位置し、長軸 1.1 ｍ、短軸 0.7 ｍ、深さ 0.4 ｍの隅丸方形な遺構である（付図３）。294 は、やや粗粒な珪質頁岩製の両面加工石器である。両面に剥離が及んでいるが、表裏面ともに素材剥片の背面と腹面を一部に残す。断面形が蒲鉾状に、平面形が棒状に整形される。下端部は欠損する。ヘラ形石器か打製石斧と考えられる。

**遺構外**（第 120 ～ 121 図）

295 は、深鉢。残存部位は口縁部。中期前葉（大木７式）と考えられる。結節回転文（ＲＬ）を施す。296 は、深鉢。

残存部位は口縁部。型式は大木９式。楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。297は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木９式。口縁が内湾する。楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。298は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。上半は無文である。下半は横位に１条の沈線を施す。299は、深鉢。残存部位は胴部。後期前葉？と考えられる。横位に多条の沈線を施す。300は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部。型式は大木９式。口縁上半には、隆帯による渦巻文を施し、さらに楕円形区画内（隆線文様系）に縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。301は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部下半。中期後葉と考えられる。口縁上半には、ナデを施す。口縁下半～胴部下半には、縄文（ＬＲ）を多方向へ施文する。

### g．Ｈ７トレンチ

**ＳＸ 228**（第122図）

ＳＸ228はＨ７－５・６区間（２Ａ13－01・10・11グリッド）に位置し、長軸4.5ｍ、短軸1.2ｍの不定形な遺構である（付図３）。302は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。上半にはナデを施し、下半には沈線文区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。303は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。後期前葉？と考えられる。土器全体に縄文（ＬＲ）を多方向へ施文する。胴部上半には半截竹管による連続する押圧を施す。304は、須恵器甕。残存部位は頚部。内外面ともにロクロによる成形をする。305は、やや粗粒な珪質頁岩製のやや厚手の石刃で、両側縁に微細剥離痕が認められる。平坦打面で、やや幅の広い明瞭なコーンが認められる。306は、短形剥片石核である。節理面で覆われたブロック状の剥片を用い、自然面に覆われた上面からの打撃によって、４枚以上の短形剥片を剥離。

**ＳＫ 249**（第123図）

307は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。上半にはミガキを施し、下半には横位の隆線文区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。308は、深鉢。残存部位は口縁部。中期末と考えられる。上半にはミガキを施す。下半には縄文（ＲＬ縦）を施文する。309は、小型深鉢。残存部位は口縁部～胴部。中期末～後期初頭と考えられる。口縁は波状口縁と考えられる。土器全体には縄文（ＬＲ縦）を施文する。310は、深鉢。残存部位は胴部。後期と考えられる。土器全体に多条の沈線を同心円状に施す。

**ＳＸ 252**（第123図）

ＳＸ252はＨ７－10区間（２Ａ13－25･35グリッド）に位置し、長軸1.6ｍ、短軸0.8ｍの楕円形の遺構である（付図３）。311は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。型式は大木10式。口縁上半にはミガキを施し、口縁下半から胴部上半には隆線文区画下に縄文（Ｌ縦）を施文する。312は、深鉢。残存部位は口縁部。後期初頭と考えられる。口縁内面上半から口唇外面に張り出すかたちで、橋状把手が付く。さらに、環状把手から胴部上半にかけて２本の橋状の支柱を形成する。口縁上半には１ヶ所の円孔、１条の隆起線文を施す。

**ＳＫ 253**（第123図）

ＳＫ253はＨ７－11区間（２Ａ13－25グリッド）に位置し、長軸0.4ｍ、短軸0.5ｍ、深さ0.4ｍの楕円形な遺構である（付図３）。313は、深鉢。残存部位は口縁部。中期前葉（大木７式？）と考えられる。結節回転文（ＬＲ縦）を３条施す。314は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。隆線文区画内に縄文を施文する。縄文が磨滅しているため縄文原体が判然としない。315は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。隆沈線文による文様を施す。316は、円盤形土製品である。後期と考えられる。無文である。

**ＳＸ 255**（第123～124図）

ＳＸ255はＨ７－11･12区間（２Ａ13－35グリッド）に位置し、長軸1.2ｍ、短軸0.7ｍ、深さ0.6ｍの円形な遺構である（付図３）。317は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。口縁部に粘土紐貼付による橋状把手を施す。隆線文区画内に縄文（ＲＬ縦）を施文する。外面全体を丁寧にミガキを施す。さらに、赤彩が確認できる。318は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。沈線文様系区画内に縄文（ＲＬ縦）を施文する。磨消縄文である。319は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。沈線文様系区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。320は、円盤形土製品である。中期～後期と考えられる。縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。321は、深鉢。残存部位は口縁部。中期末～後期初頭と考えられる。口唇部は肥厚し、土器全体に縄文（ＬＲ縦）を施文

する。322は、一定程度珪化している珪質頁岩製の短形剥片石核である。背面が自然面で覆われた厚手剥片を素材とし、単剥離面打面から、7枚程度の短形剥片を剥離。323は、珪化が著しい珪質頁岩製の短形剥片石核と考えられる。前面に剥離が及んでおり、短形～横長剥片が剥離されている。

**ＳＤ256**（第124図）

ＳＤ256はＨ7－12区間（２Ａ13－35･36グリッド）に位置し、長軸0.9ｍ、短軸0.4ｍ、深さ0.5ｍの周溝状の遺構である（付図３）。324は、やや粗粒な珪質頁岩製の石刃である。両側縁の表裏面に微細剥離痕が見られるが、全面的に磨滅しており、転磨されたものと言える。そのため、両側縁の微細剥離痕は、転磨の際に形成された可能性がある。

**ＥＵ262**（第124図）

ＥＵ262はＨ7－8区間（２Ａ13－12･13グリッド）に位置し、長軸0.4ｍ、短軸0.4ｍ、深さ0.4ｍの土器埋設遺構である（付図３）。325は、深鉢。残存部位は口縁部。中期末と考えられる。土器全体に縄文（ＬＲ縦）を施文する。

**ＳＫ272**（第124図）

ＳＫ272はＨ7－13区間（２Ａ13－14グリッド）に位置し、長軸1ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.6ｍの不定形な遺構である（付図３）。326は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。隆起線文によるＹ字状区画を施す。

**遺構外**（第124図）

327は、土製耳飾り？と考えられる。後期と考えられる。器面全体に指ナデを施す。328は、円盤形土製品である。後期前葉？と考えられる。縄文（ＬＲ）を多方向へ施文する。329は、壺。残存部位は胴部。型式は大洞Ａ式。沈線による匹字文状の文様を施す。

### ｈ．Ｈ８トレンチ

**ＳＫ274**（第125図）

ＳＫ274はＨ8－1区間（２Ａ13－24グリッド）に位置し、長軸0.7ｍ以上、短軸0.5ｍ以上、深さ0.3ｍの不定形な遺構である（付図３）。330は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。横位に隆沈線を施す。331は、一定程度珪化している珪質頁岩製の鋸歯縁石器である。短形剥片の右側縁中央部から末端部、左側縁中央部にかけて背面側に鋸歯状に細部調整。332は、やや粗粒な珪質頁岩製の楔形石器である。表面には自然面を残し、裏面は剥離面で覆われている。上下両縁部は潰れており、とくに、上縁部の平面形が窪んでいる。

**ＳＫ276**（第125図）

ＳＫ276はＨ8－1区間（２Ａ13－24グリッド）に位置し、長軸1ｍ、短軸0.2ｍ以上、深さ0.3ｍの長楕円形な遺構である（付図３）。333は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木９式。縦位の沈線文区画内に縄文（ＬＲＬ縦）を施文する。334は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。横位の隆線文区画内に縄文（ＲＬ縦）を施文する。磨消縄文である。

**ＳＫ278**（第125～126図）

ＳＫ278はＨ8－2区間（２Ａ13－34グリッド）に位置し、長軸1.3ｍ、検出短軸0.4ｍ、深さ0.4ｍの不整円形な遺構である（付図３）。335は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉と考えられる。上半には、横位に隆沈線を施し、下半には渦巻状沈線文を施す。336は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。上半にはナデを施し、下半には縄文（ＬＲ縦）を施文する。337は、一定程度珪化している珪質頁岩製の鋸歯縁石器である。厚手剥片を素材とし、背面側右側縁を中心に鋸歯状に細部調整。左側縁も、裏面からの剥離によって直線的に細部調整。

**ＳＸ279**（第126～127図）

ＳＸ279はＨ8－2区間（２Ａ13－34･35グリッド）に位置し、長軸0.7ｍ以上、短軸1.9ｍ、深さ0.4ｍの溝状の遺構である（付図３）。338は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部。中期末と考えられる。土器全体に縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。339は、深鉢。残存部位は口縁部。中期末～後期初頭と考えられる。横位に１条の隆起線文を施す。縄文（ＬＲ）を施文する。340は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉と考えられる。沈線で入組状の文様を施し、縄文（ＬＲ縦）を施文する。341は、一定程度珪化している珪質頁岩製のエンドスクレイパーである。石刃を素材とし、背面側右側縁から、末端、左側縁全体に細部調整。末端側は、さらに裏面を平坦剥離。上部は欠損している。342は、やや粗粒な珪質頁岩製の半両面加工石器である。剥片を素材とし、表面は全体的に平坦剥離が施されるが、裏面は素材剥片のバルブ付近の

みが平坦剥離される。343は、一定程度珪化している珪質頁岩製の石刃である。末端部は欠損する。剥離開始部はリップ形状で、バルブはあまり発達しない。344は、一定程度珪化している珪質頁岩製の短形剥片石核である。大型厚手剥片を素材とし、背面側の上部、左側面、下部にかけて短形剥片が剥離される。また裏面の上部と下部でも数枚の短形剥片が剥離される。

**S X 289**（第127図）

S X 289はH 8 － 5区間（2 A 13 － 56 グリッド）に位置し、長軸0.9 m以上、短軸1.3 m、深さ0.5 mの不定形な遺構である（付図3）。345は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉と考えられる。撚糸文（R縄）を施し、沈線文を施す。調整は粗雑である。

**S P 294**（第127図）

S P 294はH 8 － 6区間（2 A 13 － 67 グリッド）に位置し、長軸0.3 m、短軸0.2 m、深さ0.4 mの円形な遺構である（付図3）。346は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉と考えられる。網目状撚糸文（R）を施す。調整は粗雑である。

**S K 295**（第127図）

S K 295はH 8 － 6区間（2 A 13 － 67 グリッド）に位置し、長軸1.5 m、短軸0.7 m以上、深さ0.2 mの円形な遺構である（付図3）。347は、深鉢。残存部位は胴部。後期前葉と考えられる。撚糸文（R）を多方向へ施文する。2条の沈線を施す。

**S X 292**（第128図）

S X 292はH 8 － 5・6区間（2 A 13 － 57・67 グリッド）に位置し、長軸1.8 m、短軸0.8 m、深さ0.6 mの不定形な遺構である（付図3）。348は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。縦位の隆線文区画内に縄文（L R縦）を施文する。磨消縄文である。349は、一定程度珪化している珪質頁岩製のエンドスクレイパーである。上部は欠損している。石刃を素材とし、右側縁から末端、左側縁にかけて細部調整が施される。刃部の細部調整は、半収斂的である。

**S K 296**（第128図）

S K 296はH 8 － 6・7区間（2 A 13 － 67 グリッド）に位置し、長軸1.6 m、短軸0.9 m以上、深さ0.4 mの不定形な遺構である（付図3）。350は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木9式。粘土紐貼付隆帯文による渦巻文を施す。351は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉と考えられる。口縁は波状口縁である。1ヶ所の円孔、1ヶ所の粘土紐貼付文を施す。

**S P 297**（第128図）

S P 297はH 8 － 7区間（2 A 13 － 67 グリッド）に位置し、長軸0.4 m、短軸0.2 m以上、深さ0.2 mの円形な遺構である（付図3）。352は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木9式。楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（L R縦）を施文する。磨消縄文である。

**S K 299**（第128図）

S K 299はH 8 － 7区間（2 A 13 － 68・78 グリッド）に位置し、長軸1.6 m、短軸0.7 m以上、深さ0.4 mの不整円形な遺構である（付図3）。353は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（R L横）を施文する。磨消縄文である。

**S K 300**（第128図）

S K 300はH 8 － 7区間（2 A 13 － 78 グリッド）に位置し、長軸1.3 m、短軸0.4 m以上、深さ0.8 mの円形な遺構である（付図3）。354は、台付鉢（鉢または浅鉢か）。残存部位は台部である。中期末と考えられる。縄文を施文するが、磨滅しているため縄文原体が判然としない。

**S P 308**（第128図）

S P 308はH 8 － 8区間（2 A 13 － 79・89 グリッド）に位置し、長軸0.6 m、短軸0.3 mの不整楕円形な遺構である（付図3）。355は、深鉢。残存部位は口縁部。中期末と考えられる。土器全体に縄文（L R縦）を施文する。

**S K 314**（第128図）

S K 314はH 8 － 9区間（2 A 13 － 89 グリッド）に位置し、長軸0.8 m、短軸0.3 mの円形な遺構である（付図3）。356は、深鉢。残存部位は胴部。後期前葉と考えられる。横位に2条の沈線と竹管による円形刺突を施す。

**S X 322**（第128 ～ 130図）

S X 322はH 8 － 10区間（2 A 13 － 90 グリッド）に位置し、長軸0.8 m、短軸1.3 m、深さ0.5 mの不定形な遺構である（付図4）。357は、深鉢？と考えられる。残存部位は口縁部。型式は大木10式。上半にはミガキを施し、下半には隆沈線区画内に連続する刺突を施す。

358は、深鉢。残存部位は口縁部～頚部。型式は大木10式。隆線文区画内に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。359は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。口縁は山形状口縁である。直径25mmの円孔を施す。360は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。楕円形区画内（隆沈線文系）に縄文（ＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。361は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。楕円形区画内（沈線文様系）に縄文を施文するが、縄文が磨滅しているため縄文原体が判然としない。362は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木10式。楕円形区画内（隆線文様系）に縄文（ＲＬ）施文をする。363は、深鉢。残存部位は口縁部。大木10式？と考えられる。上半にはミガキを施し、下半には縄文（ＬＲ縦）を施し、さらに隆起線文を施す。364は、深鉢。残存部位は口縁部～胴部上半。中期末と考えられる。土器全体に縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。365は、やや粗粒な珪質頁岩製の単刃スクレイパーである。厚手の縦長剥片を素材とし、素材剥片の背面側左側縁に腹面からの剥離によって細部調整が施される。366は、やや粗粒な珪質頁岩製の複刃スクレイパーである。横長剥片を素材とし、背面側の左側縁と右側縁の一部、腹面側の左側縁にかけて細部調整が施される。また、背面側の右側縁と左側縁の中央部は潰れており、挟み打ちされた可能性がある。さらに、全体的に黒色であり、赤色変化している部分も認められることから、被熱している可能性がある。367は、珪化が著しい珪質頁岩製の石刃である。剥離開始部がリップ形状で、バルブはあまり発達しない。両側縁に微細剥離痕が認められる。368は、一定程度珪化している珪質頁岩製の石刃である。剥離開始部はリップ形状で、バルブはあまり発達しない。

369は、一定程度珪化している珪質頁岩製の短形剥片石核である。背面が自然面で覆われた厚手剥片を素材とし、バルブ付近を中心に短形剥片が剥離されている。表面右側の剥離面打面には、敲打痕が認められる。

**ｉ．Ｈ９トレンチ**

**遺構外**（第131図）

370は、深鉢。残存部位は口縁部。後期初頭と考えられる。口縁は波状口縁である。ヒレ状の隆起線文を施す。371は、深鉢。残存部位は口縁部～頚部。後期前葉と考えられる。口縁部は無文である。頚部には縄文（ＬＲ横走）を施し、さらに、横位に多条の沈線を施す。372は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉と考えられる。口縁は波状口縁である。縄文（Ｌ）を多方向へ施文。さらに、横位に沈線を施す。373は、深鉢。残存部位は口縁部。後期前葉と考えられる。横位に半截竹管による沈線を施す。

**ｊ．Ｈ12トレンチ**

**遺構外**（第131図）

374は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木９式。楕円形区画内（沈線文様系）に縄文（ＲＬＲ縦）を施文する。磨消縄文である。375は、深鉢。残存部位は口縁部。型式は大木６式。口縁は緩やかな波状口縁と考えられる。横位に、半截竹管による３条の連続する刺突を施す。376は、深鉢。残存部位は胴部。型式は大木10式。横位に隆起線文を施す。

## ３　第３次調査の出土遺物

### （１）土坑

**ＳＸ527**（第132～133図）

377は、一定程度珪化し、節理面が発達した珪質頁岩製の短形剥片石核である。やや扁平な亜円礫の上下平坦面に打面を作出し、側面側に作業面を設定して短形剥片を剥離。378は、石英安山岩製の棒状礫である。明瞭な加工痕は認められない。

**ＳＫ694**（第133図）

379は、碧玉製の凸基石鏃である。表裏面ともに細部調整が施される。先端部と基部が欠損する。

### （２）Ｋ区　活断層地形

**Ｋ４トレンチ**（第133～134図）

381は、一定程度珪化している珪質頁岩製の縦形石匙である。幅広の縦長剥片を素材とし、周辺部の表裏面にたいして細部調整を施す。素材剥片の末端側につまみ部を作り出している。382は、やや粗粒な珪質頁岩製のヘラ形石器である。表裏面にたいして平坦剥離を施し、平面形をヘラ状に整形。断面形はレンズ状を呈する。

### （3）上記以外の遺構出土遺物

**a．I2地点**

**遺構外**（第135図）

383は、須恵器甕。残存部位は体部。体部外面はロクロ、タタキ（板目）で、自然釉が付着する。体部内面はロクロ、アテ（同心円文）である。

**b．I4地点**

**遺構外**（第135図）

384は、須恵器甕。残存部位は体部。体部外面はタタキ（板目）で、自然釉が付着する。体部内面はアテ（青海波文）である。

**c．I6地点**

**遺構外**（第135図）

385は、深鉢。残存部位は胴部。大木10式。沈線文区画内に縄文（LR縦）を施文する。386は、須恵器坏。残存部位は口縁部～体部下半。9世紀中頃と考えられる。内外面ともにロクロによる調整である。胎土に海綿骨針が確認できることから、平野山古窯跡産のものと考えられる。

**d．J3トレンチ**

**遺構外**（第136図）

390は、一定程度珪化している珪質頁岩製の半両面加工石器である。厚手の大型剥片を素材とし、表裏面にたいして平坦剥離を施す。ただし、裏面には、素材剥片の腹面を大きく残す。

**e．J8トレンチ**

**遺構外**（第135図）

389は、深鉢。残存部位は胴部。調整が粗雑なことから後期前葉と考えられる。多方向への沈線を施す。撚糸文を施すが、縄文が磨滅しているため判然としない。

**f．J10トレンチ**

**遺構外**（第135図）

387は、須恵器蓋。内外面ともにロクロによる調整である。天井部は回転ヘラケズリによる切り離しである。

**g．J14トレンチ**

**遺構外**（第133図）

380は、やや粗粒な珪質頁岩製のヘラ形石器である。表裏面にたいして平坦剥離を施し、平面形を撥状に整形。断面形はレンズ状を呈する。

**h．J17トレンチ**

**遺構外**（第135図）

388は、須恵器甕。体部外面はタタキ（板目）である。体部内面はアテ（青海波文）である。

## 4　SX241出土石器資料

### （1）概要と方法

**概要**　第2次調査・H1トレンチで検出されたSX241は、全面的な調査を行っていないものの、径約1.5mで、検出面からの深さが34cm、底面が概ね平坦で、壁面がほぼ直交する形状を呈している（第20図）。壁面と床面が直交していることから、本来SX241は住居跡であった可能性もある。ただし、南側の大部分は、倒木痕によって削平を受けている。

そのSX241では、覆土から整理箱1箱分の土器片とともに、珪質頁岩製の石器資料が1,204点出土している（以下、SX241出土石器資料）。調査期間の関係で、個々の石器の出土状況について記録できなかったが、調査所見に依拠すると、覆土は、炭化物と地山土・ブロックが混じる人為的な埋土と考えられる。つまり、SX241から出土した遺物は、深さ約30cm程度で、幅の広い窪地？に入れられた後で、埋積された可能性を示している。

**石器一括遺構と時期**　出土した土器片は、大木6式から縄文時代後期前葉の型式のものが含まれるが、主体をなしているのが大木10式といった中期末葉に位置づけられる土器型式である（第129図－183・188）。本遺跡（HO地区）発掘調査4区・10区（山形県埋蔵文化財センター2005）、同市うぐいす沢遺跡（山形県教委1981）、同市柴橋遺跡（寒河江市教委1989）、大江町橋上遺跡（大江町教委1985）では、土坑などに多量の石器資料を一括した石器一括遺構が発見されており、これらの遺構は、大木10式土器段階に帰属することが判っている。SX241もまた、多量の石器資料とともに出土した土器片の

主体が大木10式土器であることから、上記の遺跡で発見された遺構と同じ時期に残された可能性が高い。

**中期末の原産地近傍での行動**　つまり、大木10式土器段階には、少なくとも現在の大江町～寒河江市（最上川中流域と月布川流域）にかけて、土坑等に多量の石器資料を一括する行為が、頻繁に行われていたことが言えよう。とくに、これらの遺跡は、最上川中流域や月布川といった良質の珪質頁岩が産出する場所に隣接している（秦2011）。大木10式土器段階の当該地域において、土坑などに石器を一括する行為を促したのは、おそらく豊富な石材環境がその要因の一つとしてあったものと予測される。その具体的な要因の追究については、今後の検討課題となろう。

**資料の優位性**　一方では、一部に他時期の遺物の混入が認められるものの、ＳＸ241に一括された多くの石器資料は、時期的に大木10式土器段階、すなわち中期末葉に限定される資料が大半であると考えられる。言い換えれば、ＳＸ241出土石器資料は、混入した資料を除けば、中期末葉という時期的に焦点を絞った技術を復原するうえで、適した資料であると言える。

**目的**　そこで、本節では、このＳＸ241出土石器資料についてより詳細に資料化し、その石器製作技術について若干の分析を行う。分析に際しては、考古資料に残された痕跡から、製作時にヒトがどのように絡んでいたのかを、具体的な姿で捉えようとする“動作連鎖の概念に基づく技術学（Tixier 1967、山中2007）”に依っている。技術学的に分析を進めることは、型式学的に年代の指標となるような類型を求めようとするのでない。考古資料に残る痕跡とヒトのジェスチャーとの対応関係を、実験的手法を用いて復原したうえで、原石から製作、使用、廃棄に至る一連の過程に絡んでいた、一連のヒトのジェスチャーを民族誌学的に記録化することを目的としている。それによって、ＳＸ241出土石器資料が、それを残したヒトとどのような関わりがあったのか、そして資料がどのような性格のものであったのかについて追究を行うのである。

なお、付録DVDに遺物写真画像を添付しており、痕跡の詳細については、それを拡大等を行い、参照されたい。

## （2）母岩

ＳＸ241出土石器資料は、すべて珪質頁岩である。母岩は、整理期間の都合により、石質、色調、自然面の状態などがおおよそ類似しているもので分類している。そのため、今回分類された「母岩」は、厳密な意味での母岩に必ずしも対応しない、あくまでも大枠での分類である。したがって、ここでは、母岩ごとではなく、器種と接合資料ごとに記述を行う。また、接合資料にかんしては、代表的なもののみの記述を行う。各接合資料については、付録DVDにpdfファイルとして掲載した。

なお、分類では、24種類に区分されることから、少なくとも24種類前後の母岩数が用いられている可能性が考えられる。

## （3）トゥール（第137～138図：391～400）

明確な二次加工のある石器は、石鏃未製品２点、凸基有茎鏃１点、再加工された搔先形尖頭器１点、錐形石器１点、細形エンドスクレイパー１点、短形剥片素材のエンドスクレイパー１点、尖頭スクレイパー１点、複刃スクレイパー１点、単刃スクレイパー１点である。このほか、石鏃の未製品２点がある。

**石鏃未製品**　391は、やや粗粒の珪質頁岩製のポイントフレーク状の小型短形剥片を素材とする。突出した末端の表裏面に細部調整が施される。素材剥片のバルブ付近が、腹面側にやや屈曲する。392は、一定程度珪化した珪質頁岩製の小型短形剥片を素材とする。裏面と表面に細部調整が施される。とくに、裏面の細部調整は、表面の剥離にたいする打面を意図して作出されたと考えられる。上半部は、折損している。折れ面は、細部調整面を切り、かつ素材内部にあったわずかな傷も見られることから、製作時に折れた可能性がある。

**石鏃**　393は、一定程度珪化した珪質頁岩製の凸基有茎鏃である。茎部は折損している。全面的に細部調整が施され、薄く仕上げられている。

**錐形石器**　394は、一定程度珪化した珪質頁岩製の厚手の短形剥片を素材とする。背面側の突出した末端左端に若干の細部調整によって、尖頭部を作出。先端部は、若干縁辺の摩耗が認められる。

**エンドスクレイパー**　395は、一定程度珪化し、自然面

を残した珪質頁岩製の細形エンドスクレイパーである。石刃、あるいは縦長剥片を素材とし、刃部、左右側面を腹面側からの細部調整によって整形。左右側面の調整は直線的。細部調整の剥離面は、血瘤状のバルブ、連続的、かつ規則的な剥離面の並びから、押圧による剥離痕の特徴が認められる。刃部は、裏面にもわずかに細部調整が施される。ただし、刃部形状は、焼けはじけによる欠損で不明。被熱痕が顕著に認められ、裏面の左側刃部から上端部まで焼けはじけによって欠損し、また黒色変化が生じている。396は、一定程度珪化した珪質頁岩製の小型短形剥片素材のエンドスクレイパーである。打面と腹面のなす角度が90度の小型短形剥片を素材とし、素材の末端部に腹面側からの細部調整によって刃部を整形。刃部は、やや尖弧状で、分散的に細部調整が施される。刃部縁辺は、微細剥離痕の累積によって鈍化している。

**槍先形尖頭器**　397は、一定程度珪化した珪質頁岩製である。両面を平坦剥離によって薄く仕上げられているが、下半部は折損している。ただし、折れ面からさらに細部調整が加えられており、再加工された形跡が認められる。なお、他の石器資料に比べて、風化が著しい。

**スクレイパー**　398は、一定程度珪化し、かつ部分的に珪化が著しい珪質頁岩製の尖頭スクレイパーである。幅広の石刃を素材とし、素材剥片の背面側左右両側縁に腹面からの細部調整によって刃部を作出。末端で細部調整部が収斂する。なお、素材剥片の腹面側中央から末端にかけて明瞭な稜線が形成されている。399は、一定程度珪化した珪質頁岩製の複刃スクレイパーである。縦長剥片を素材とし、左右両側縁に腹面からの細部調整によって刃部を整形。刃部整形は、連続的ではあるが、左右ともに規則性に乏しい。刃部の細部調整面は、剥離面の深さ、剥離面の不規則性など、直接打撃の特徴が認められる。裏面の右側面には、平坦な微細剥離痕と、その付近の縁辺の潰れが認められる。裏面右側面の微細剥離と縁辺の潰れは、軟質のものがその縁辺に強く接触した特徴と考えられる。400は、珪化が著しい珪質頁岩製の単刃スクレイパーである。打面が自然面に、そして背面が、粒状の水晶の結晶が発達した節理面に覆われた横長剥片を素材とし、末端に腹面側からの細部調整によって刃部を整形。細部調整はやや不規則的。ただし、素材剥片の末端部がヒンジを呈していることから、剥離時に末端が石核に接触したことで生じる偶発剥離の可能性もある。

## （4）石刃製作関連資料

今回、ＳＸ241出土石器資料にたいして接合作業を進め、折れ面接合を除く、46例の接合資料を確認した。本報告では、そのうちの特徴的な25例について取り上げる。これらの接合資料は、おおまかに二つの製作意図が認められる。一つは石刃製作で、もう一つは小型短形剥片製作である。ここでは、まず、石刃製作に関連する接合資料、ならびに非接合資料について記述する。

**Ｊ１**（第139～142図：401～416）　Ｊ１は石刃核背部成形剥片３点、石刃核成形剥片５点、側面調整剥片２点、打面再生剥片４点、石刃核１点で構成。原石から石刃製作の一連の過程を追うことができる良好な資料である。

**Ｊ１の石材**　風化面が発達した扁平な亜円礫で、一端が急角度となっている。やや珪化が劣り、若干粒子が粗いが、質的には石器製作に問題ない。

**Ｊ１の製作工程**　１）打面作出？（未接合）。２）右側面の右側縁より石刃剥離①（未接合）。３）左右側面を打面にして交互に剥離を行い、石刃核下部の成形（Ｊ１－１～５：402～406）。４）礫の平坦面を打面（右側面の右側）にして、素材亜円礫の急角度部分で石刃核背部を成形（Ｊ１－６～８：407～409）。５）正面方向からの打面作出（未接合）。６）上設打面からの石刃剥離②（Ｊ１－９～10：410～411は、石刃剥離の過程で剥離された側面調整剥片）。７）作業面正面からの打面再生（Ｊ１－11～14：412～415）。８）上設打面からの石刃剥離③（未接合）→残核（Ｊ１－15：416）。

416は、作業面正面観がホームベース状を呈し、とくに下部が３）の交互剥離によって尖頭状に仕上げられている。側面観は、打面が約60度に傾斜するも、打面再生によって約80度にまで変異。ただし、打面再生の際に、発達したバルブとヒンジを呈する剥片が剥離されていることから、打面内部が内湾し、前面角付近が60度前後となっている。作業面形状と石刃剥離痕の形状から、先細りの石刃が目的となったと考えられる。

**Ｊ１のテクニックに関する痕跡**　石刃核成形剥片（402～406）、石刃核背部成形剥片（407～409）、打面再生剥片（412～415）ともに厚手で、明瞭なコーン、発達

したバルブといったヘルツ型の割れといった痕跡が認められる。側面調整剥片（410～411）は、やや不明瞭な打点で、バルブは発達せず、薄手である。とくに、411の打点の両端部には、クラックが認められる。石刃剥離については、416の作業面中央に残る石刃剥離痕の打点付近を観れば、剥離開始部がリップ形状、発達しないバルブといった痕跡が認められる。ただし、この剥離面にしか、痕跡を留めていない。

**Ｊ２**（第143～144図：417～422）　Ｊ２は、稜成形剥片２点、石刃２点、稜付き石刃１点で構成され、稜成形の状況を追うことができる良好な資料である。

**Ｊ２の石材**　風化面が発達した扁平な亜円礫と思われる。やや珪化が劣り、若干粒子が粗いが、質的には石器製作に問題はない。

**Ｊ２の製作工程**　１）正面右方向からの連続剥離によって稜左側面の整形（Ｊ２－１～２：418～419）。２）正面左方向からの連続剥離によって稜右側面の成形（未接合）。３）上設打面からの石刃剥離（Ｊ２－３～４：420～421）、および打面調整（未接合）を挟んで上設打面からの石刃剥離（Ｊ２－５：422）。…欠落。

**Ｊ２のテクニックに関する痕跡**　稜成形剥片（418～419）は、明瞭なコーンと発達したバルブといったヘルツ型の割れが認められ、厚手で、とくに419の打面に打点を描くようなクラックが認められるといった痕跡が認められる。稜付き石刃（421）と石刃（420・422）は、不明瞭ながらも幅の広いコーンがあり、バルブがあまり発達しない。比較的薄手であるが、腹面全体に歪みが認められるといった痕跡が認められる。

**Ｊ７**（第152～153図：442～444）Ｊ７は、打面再生剥片２点で構成される。

**Ｊ７の石材**　やや粗粒であるが、一定程度珪化しており、緻密な石材である。

**Ｊ７の製作工程**　断面形が円、あるいは半円形の石刃核から石刃剥離が進んだのち、作業面正面からＪ７－１（443）を剥離。さらに一定程度石刃剥離が進んだのち、Ｊ７－２（444）を剥離。

**Ｊ７のテクニックに関する痕跡**　打面再生剥片２点（443～444）とも明瞭なコーン、発達したバルブ、打点周辺を囲むようなクラックといった痕跡が認められる。

**石刃核**（第154～156図：448～451）　非接合資料で４点。基本的に、作業面形は、石刃核打面側で幅広く、下端側で狭くなる。すべて単設打面で、前面角が60～80度付近に設定。石刃剥離作業面が広い１面に設定され、半回転的に石刃剥離が遂行される。448は、前半段階で石刃剥離に成功しているが、後半段階で前面角の作業面側周辺にステップを起こしてしまっている。449は、全体的に円錐形を呈する。ただし、石刃剥離はあまり成功していない。450は、下部が尖頭状に整形される。451は、幅広の石刃が剥離されている。

**稜付き石刃**（第157図：452～454）　非接合資料で15点。ここで挙げるのは３点。452は、交互剥離でもってジグザグにできた稜線にたいして、さらに石製ハンマーによる擦り落としでできるような、小規模で連続的な剥離でもって、部分的に稜を整えているのが認められる。453～454は、先行の石刃剥離でできたヒンジ部を除去した新稜石刃。ともに、リップ状の剥離開始部、発達しないバルブといった痕跡が認められる。

**打面再生剥片**（第157～158図：455～457）　非接合資料で43点。ここで挙げるのは３点。３点とも、石刃剥離作業面を打面にしていることから、石刃核正面より、打撃が加えられたことが判る。ともに、明瞭なコーン、発達したバルブ、打点周辺を囲むようなクラックといった痕跡が認められる。

**石刃**（第158～159図：458～465）　非接合資料で19点。全体的に、完形の石刃は少ない。また、形の整った石刃がほとんどない。ここで挙げるのは、痕跡をよく留めている８点。458は、剥離開始部がリップ形状で、発達しないバルブ、歪みの少ない腹面形状が認められる。一方で、461は、やや不明瞭な打点形状、発達しないバルブ、やや歪んだ腹面形状が認められる。

### （５）小型短形剥片剥離

ＳＸ241出土石器資料は、上述した石刃製作以外に、小型短形剥片を製作していた意図が認められる。

**Ｊ９**（第160～161図：466～472）　Ｊ９は、厚手剥片２点、折損片２点、同時割れ剥片１点、短形剥片石核２点で構成される。

**Ｊ９の石材**　転磨によるクラック痕が顕著な円礫を素材とする。川で転磨した際に生じたと思われる潜在割れ（節理）が、表皮近くでやや発達している。一定程度珪化し、細粒で、緻密な石材である。

**Ｊ９の製作工程**　Ｊ９－２（468）とＪ９－６（472）の間に節理面が認められ、Ｊ９－１（467）がその節理面を打面にして剥離されている。したがって、Ｊ９は、節理によって分割された、①Ｊ９－１～２、②Ｊ９－３～７の２個体の接合資料となる。①は、分割面からＪ９－１～２（467～468）を剥離。それ以外は、未接合のため不明。②は、打面位置を変えながら、Ｊ９－３（469）とＪ９－４～７（470）を剥離。とくに後者は、内部で発達した潜在割れや節理の影響により、４つに分裂。そのうち、Ｊ９－７（472）の腹面を作業面として、数枚のヒンジを呈する横長～短形剥片を剥離。短形剥片を剥離した打面上には、複数の明瞭な打撃痕が認められる。またＪ９－３（469）も、腹面の末端側から、縦長剥片とステップを呈する短形剥片を剥離した可能性がある。

**Ｊ９のテクニックに関する痕跡**　厚手剥片（467～471）は、明瞭なコーン、発達したバルブ、打点周辺を囲むようなクラックといった痕跡が認められる。短形剥片（472）については、明瞭な痕跡が認められないことから、判断を保留する。ただし、472の短形剥片を剥離した打面には、複数の打撃痕と、小さく輪を描く、あるいは爪状のクラックといった痕跡が認められる。なお、短形剥片を剥離した打面上では、剥離に至らなかった複数の打撃があったことが窺われる。

**Ｊ11**（第164～166図：478～482）　Ｊ11は、分割剥片１点、厚手剥片１点、短形剥片石核の素材剥片石核１点、短形剥片石核１点で構成される。

**Ｊ11の石材**　転磨によるクラック痕が顕著な円礫を素材とする。川で転磨した際に生じたと思われる節理が、発達している。一定程度珪化し、細粒で、緻密な石材である。

**Ｊ11の製作工程**　節理面によって、①Ｊ11－１（479）と②Ｊ11－２～４（480～482）に分裂。①Ｊ11－１（479）は、節理面を打面にして、剥離面と自然面とがなす稜線上を一度打撃しているが、剥離には至っていない。②分割面を打面にして、連続的にＪ11－２～３（480～481）を剥離。そのうち、Ｊ11－３（481）を利用して、腹面を作業面にして短形剥片を剥離。Ｊ11－４（482）は、短形剥片石核の素材剥片を剥離した石核となる。

**Ｊ11のテクニックに関する痕跡**　分割剥片（479）は、剥離開始部が残されていないので、不明。厚手剥片（480）は、明瞭なコーン、比較的発達したバルブ、打点周辺のクラックといった痕跡が認められる。短形剥片を剥離した剥離面（481）は、剥離開始部が砕けているので不明。

**Ｊ15**（第172図：495～496）　Ｊ15は、折損した短形剥片石核２点で構成される。

**Ｊ15の石材**　転磨によるクラック痕が顕著な円礫を素材とする。川で転磨した際に生じたと思われる潜在割れ（節理）が、表皮近くで顕著に発達している。一定程度珪化し、細粒で、緻密な石材である。

**Ｊ15の製作工程**　背面の右側に、直線的な稜線が認められることから、石刃核の再利用、あるいは再調整で剥離された剥片を素材にしたと思われる。その素材剥片は、発達した節理面によって折れており、その節理面を打面に、腹面を作業面にして、腹面側の左方向からの打撃で短形剥片を剥離。その際、石核の方に打点からの縦の亀裂が生じ、節理面にぶつかって縦割れとなる。しかしＪ15－１（496）は、さらに上方向からの打撃で短形剥片が剥離される。その打面には複数の打撃痕が認められる。

**Ｊ15のテクニックに関する痕跡**　厚手剥片は、剥離開始部が欠落しているため不明。短形剥片を剥離した剥離面（495～496）には明瞭なコーン、比較的発達したバルブ、打点周辺のクラックといった痕跡が認められる。

**Ｊ19**（第177～178図：507～510）　Ｊ19は、打面再生剥片２点、短形剥片石核１点で構成される。

**Ｊ19の石材**　転磨が顕著な円礫を素材とする。一定程度珪化し、細粒で、緻密な石材である。

**Ｊ19の製作工程**　打面再生剥片と作業面の位置的関係から、Ｊ19は本来石刃を意図していた可能性がある。石刃剥離に成功しなかったのは、内部に発達する節理面により、剥離がスムーズに進まなく、節理付近でステッ

プになったためと思われる。石刃剥離？と打面再生（J 19－1～2：508～509）を3～4回程度繰り返したのち、作業面の左、下方向からの剥離で短形剥片を剥離。

**J 19のテクニックに関する痕跡** 打面再生剥片（508～509）の打面には、明瞭なコーン、比較的発達したバルブ、打点周辺のクラックといった痕跡が認められる。短形剥片を剥離した剥離面（510）は、剥離開始部が欠落しているため、不明。

**J 21**（第179～180図：516～518） J 21は、厚手剥片2点で構成される。

**J 21の石材** 転磨によるクラック痕が顕著な円礫を素材とする。川で転磨した際に生じたと思われる潜在割れ（節理）が、表皮近くでやや発達している。珪化が著しく光沢を帯び、細粒で、緻密な石材である。

**J 21の製作工程** 2点とも、原石の表皮を除去した際に剥離したもので、両者とも、腹面側に割れに至っていないヒビが確認できる。ヒビの形状からは、短形剥片を剥離しようとしていた意図が看取される。とくに、J 21－2（518）の背面側右側面に、複数の打撃痕が認められる。

**J 21のテクニックに関する痕跡** 厚手剥片（517～518）は、明瞭なコーン、発達したバルブ、打点周辺のクラックといった痕跡が認められる。短形剥片を意図したヒビ、及び打撃痕からは、明瞭なコーン、発達したバルブといった痕跡が認められる。

**J 22**（第181～182図：519～521） J 22は、折損した短形剥片石核2点で構成される。

**J 22の石材** 転磨が顕著な亜円礫を素材とする。一定程度珪化し、細粒で、緻密な石材である。

**J 22の製作工程** J 22（519）は中間部で背面側に大きく外反した、厚手剥片を素材にした短形剥片石核である。剥片の背面右側を打面に、その中間部で短形剥片を剥離。打面から推定される短形剥片剥離の際の打撃位置より、打撃は石核打面のやや奥を打撃したことが考えられる。打撃位置は、外反した縦断面形の頂点付近となるのであるが、その場合は、おおかた石核が折れてしまう危険性がある。事実、J 22－1（520）の折れ面の起点は、短形剥片剥離面の打点と重なる。J 22－2（521）は、さらに、6枚程度の短形剥片が剥離される。

**J 22のテクニックに関する痕跡** 素材となった厚手剥片（519）は、明瞭なコーン、全体的に厚手であるといった痕跡が認められる。

**J 23**（第183～184図：522） J 23は、厚手剥片3点で構成され、短形剥片石核はないが、その素材剥片生産に関連することが考えられる。

**J 23の石材** 転磨によるクラック痕が顕著な円礫を素材とする。川で転磨した際に生じたと思われる潜在割れ（節理）が発達している。一定程度珪化し、細粒で、緻密な石材である。

**J 23の製作工程** 打面と作業面を変えながら、表皮付近を厚く剥離している。ただし中間部になるJ 23－2は、腹面全体が潜在割れに起因した節理面であり、打点も認められないので、事故的に割れたものであると考えられる。

**J 23のテクニックに関する痕跡** 厚手剥片（J 23－1～3）は、明瞭なコーン、発達したバルブ、打点周辺のクラックといった痕跡が認められる。

**短形剥片石核**（第188～192図：525～540） 非接合資料で51点。ここでは、そのうち16点掲載する。短形剥片石核は、基本的に厚手剥片を素材とし、素材の腹面側を作業面に設定する（525～534）。打面調整は、基本的にせず、素材剥片の背面や折れ面を生かすか、1枚程度の剥離で作出するかである。一方で、535～538は、素材剥片の腹面側を打面とし、残核が船底形を呈するように短形剥片の剥離を進めている。539～540は、分割した際に出た厚手剥片を素材としている。ともに、打面部に多数の打撃痕が認められる。

**短形剥片**（第193図：541～550） 非接合資料で144点。ここでは、そのうち11点掲載する。短形剥片は、背面に素材剥片の打点部を残すもの（541～542）、素材剥片のポジ面を残すもの（543～547）、厚手で小型の石刃状のもの（548～550）がある。とくに、短形剥片は、石刃核の打面再生剥片と形態的に類似する傾向があるが、その違いは、打面が平坦打面であることにある。

## 5　J 15出土旧石器資料

### (1) 概要と方法

J 15トレンチテストピットでは、3層中部を中心として、2,823点の珪質頁岩製旧石器がまとまって出土している（以下、J 15出土旧石器資料）。ここでは、このJ 15出土旧石器資料について記述を行う。

**一括性**　またJ 15出土旧石器資料のなかには、掲鉄が付着する鉄製工具による接触痕を留め、かつ風化度が浅い1点の剥片（852）を除いて、型式学的に、あるいは風化度の浅い石器といった、縄文時代などの他の時期の所産と考えられる石器はまったく認められない。つまり石器群は他の時期の石器が混入した形跡もなく、時期的に限定される一括性の高い資料群であると考えられる。

**分析方法**　資料整理に際しては、このJ 15出土旧石器資料について、第4節のS X 241出土石器資料と同様に、動作連鎖の概念に基づく技術学（Tixier1967、山中2007）に依っている。

**出土層位と出土状態**（第23図　写真図版1・18）　石器ブロックは、3層の黄褐色粘土質シルト層より出土し、3層中部を中心に濃密な出土状況を示す。一部で埋没後に生じた浮き上がりや、後世の耕作などによる土地改変、果樹などの植物の根の成長による土壌の動きの影響を若干受けている。しかし、分布が濃密な3層中～下部付近から出土した石器の大多数は、面的に出土していること、背面や腹面等の平坦な面が層理面と並行的である、すなわち“自然な状態”であること、ほとんどの石器の薄い縁辺や尖端部に微細剥離痕や転磨痕といったダメージがないこと、土層中に流水を示す砂礫などの堆積物が目立って認められないことから、ブロックが形成された当時の原位置に近く留めている可能性が高い。

**平面分布**（第29図）　J 15トレンチのうち、旧石器が出土したトレンチの中央から西寄りで、南北約1.7 m×東西約3.5 mのテストピットを設定（第23図）。石器ブロックは、北東～南西方向で約3 m×1.5 mの範囲に集中し、その中でもとくに南側に密集している。またブロックの西側には、飛び地的な石器分布がみられる。　今回の調査では、事業範囲の関係で調査範囲が限られており、調査区を拡張することができなかったため、今回検出した石器ブロックは、本来のブロックのなかの一部分であることが容易に想定される。2011年5月、資料の重要性に注目した寒河江市教育委員会は、高瀬山遺跡発掘調査団を結成し、この石器分布の全体を把握することを目的とした、当該地点の学術調査を実施している（寒河江市教委2012）。

### (2) 原石と母岩

**原石**　原石は、すべて珪質頁岩である。自然面の状態から判断される原石形状は、自然面が認められる母岩から、少なくとも転磨によるクラックが顕著に見られ、やや凹凸感のある亜円礫、風化面がやや発達し、わずかに凹凸感のある表面形状の亜円礫、風化面が発達し、滑らかな表面形状の円礫が認められる。選択された大きさは、9～15cm大。いずれも、自然面の状態から、近隣の河川、あるいは段丘礫層からの採取が考えられる。

**母岩**（表5）　J 15出土旧石器資料は、石質、色調、粒子の粗細、自然面の状態、節理や潜在割れの有無とその状態、接合関係などを基準に、子細な観察を行い母岩別分類を行っている。その結果、P 1～P 34（P 21は欠番）までの33母岩が認められる。上述したように、単独母岩のP 34は、新しい時期のものであると考えられる。したがって、分析では、P 34を除く、上記の基準で分類できた32母岩を基本として進めている。

ただし、ブロックの完掘には至っていないので、欠落している部分が多い。32に分類できたとあっても、まだ1つの母岩の一部分を観ているに過ぎないかもしれないし、未発見の母岩が存在する可能性も否定できない。

なお、第33～62図に全母岩、および各母岩の平面分布図を掲載した。

**搬入品**　一方で、分類の結果、P 6は双面彫刻刀形石器1点と神山型彫刻刀形石器ブランク1点のみで構成され、そのほかの石刃や剥片などは認められない。そのため、P 6は、本地点で製作されていない可能性が高い。したがって、P 6は、他所で製作され、製品として本地点に持ち込まれた搬入品であることが考えられる。

### (3) トゥール（第30・194～195図：551～565）

**石器組成**（第30図）　J 15出土旧石器資料の石器組成は、杉久保型ナイフ形石器4点（ほぼ完形が2点、尖端

部のみが1点、基部のみが1点)、裏細部調整切り面彫刻刀形石器6点(典型的な神山型彫刻刀形石器1点、彫刀面を作出していないブランク4点)、細部調整切り面彫刻刀形石器(小坂型彫刻刀形石器)2点、双面彫刻刀形石器1点、無調整面彫刻刀形石器3点、彫刻刀スポール41点(そのうち、神山型彫刻刀のスポールも含まれる)、細石刃21点、石刃118点(稜付き石刃なども含む)、剥片798点、チップ1,635点(抽出できた二次加工チップ13点)、石刃核7点、石刃核ブランク1点、石核1点(素材生産の石核ではなく、一打で内部の節理や潜在割れに響き、破砕したもの)、原石1点(ただし、試し割りと考えられる1面の剥離痕あり)、被熱痕を有する石器184点、石英安山岩製ハンマーストーン1点(珪質頁岩よりもやや軟質)。このほか、石器に付着するように出土した炭化物1点、自然礫10点も出土している。

**ナイフ形石器** 551は、典型的な杉久保型ナイフ形石器である。細身で薄手で、やや湾曲する先細りの石刃を素材とする。基部側の左右に裏面側からのブランティングを施し、基部の縁辺角を急角度に仕上げている。さらに、素材腹面のバルブ付近を基部側の左右両側縁から剥離。バルブ除去は、左右両縁辺付近が崩れていること、6mm程度の狭い範囲を打撃することを考慮すると、両極打撃であった可能性がある。なお、ブランティングに際しても、ブランティング面が急角度であること、一部のブランティング剥離面の末端にごく薄いヒンジが認められることから、台上での加工の可能性がある。先端側は未加工であるが、最先端部は表面側から折れている(曲げ折り)。表面側左側縁は、不連続であるが全体的に微細剥離痕が認められる。552は、典型的な杉久保型ナイフ形石器である。背面が縦2稜、細身で、やや短めで先細りの石刃を素材とする。両側縁の中央付近から基部にかけてブランティングが施される。表面側左側縁は裏面側から、右側縁は表面側からの加工となる。さらに右側縁は、表面側の基部から上に7.5mmの範囲に縁辺からの細部調整が入る。左側縁のブランティング面は、急角度となり、一部の剥離面末端にヒンジが認められる。右側縁のブランティング面は、基部付近で急角度となり、中間部付近の角度がやや浅くなる。裏面は、表面の右側面からバルブ除去がわずかに行われる。先端側は未加工であるが、最先端部は裏面側から折れている(曲げ折り)。553は、ナイフ形石器の欠損品である。先端部のみが残存。背面が縦1稜で、先細りの石刃を素材としていると思われる。中間部から基部にかけて欠損している。欠損面は、3面で構成され、ともに3面が重なり合う欠損面の裏面側中央付近から、リングが発生している。また、欠損面の右側の面の上部、すなわち表面側の中間部には、打点が観察される。したがって、欠損は、挟み撃ちによってなされた可能性が高い。表面の先端側左側縁に、裏面からの細部調整が施される。最先端部は裏面側から折れている(曲げ折り)。554は、ナイフ形石器の欠損品である。基部のみが残存。素材は、背面が縦2稜、ないし中間部付近で縦1稜に収斂する石刃であったと思われる。折れ面には、石材内部に存在していた傷が認められる。裏面の左右両側縁に細部調整が施されており、とくに裏面左側縁側が急角度となる。なお、後述するが、553と554は、P5に母岩分類され、かつ表面構成や厚さから554は、553の基部であった可能性がある。

**裏細部調整切り面彫刻刀形石器** 555は、典型的な神山型彫刻刀形石器である。背面が中間部付近で縦1稜に収斂する石刃を素材とし、石刃の末端に裏面から弧状に細部調整を施したのち、右方向から彫刻刀スポールを剥離。素材石刃の剥離開始部は、リップ状で、バルブはあまり発達していない。前面角は、ステップを呈した微細剥離の重複によって、鈍角になっている。556は、神山型彫刻刀形石器ブランクである。ただし、後述するが、ブランクではない可能性もある。背面が縦1稜で、末端側で2稜に分かれる細身で、比較的整った形態の石刃を素材としている。背面側基部から中間部付近まで裏面からのブランティングにより、縁辺を急角度に、平面形を尖頭状に仕上げている。基部側裏面にも、右側縁からバルブ除去の細部調整が入る。細部調整面には、左側縁の一部、すなわち細部調整の末端の一部に潰れが認められること、潰れのない部分が触ると感じられるくらいのごく薄い突起(ヒンジ)があることから、台上での挟み撃ちの可能性が考えられる。また、右側面、すなわち細部調整の打面上から剥離開始部を見ると、強く湾曲しているのが確認できる。上部は、被熱による焼けはじけが部分的にあるために、ブランティング部がやや不明瞭である。判る範囲では、右側縁に腹面側への細部調整によって、浅い弧状の縁辺が作られる。そののち、表面側左上

部を弧状に、かつ急角度になるようにブランティング。彫刀面と思われる剥離面もあるが、焼けはじけにより、はっきりとしない。この資料は、そののち中間部で折れて、上半部の資料のみが被熱する。折れ面の剥離方向は、予定された彫刀面打撃方向と同一方向であり、彫刀面打撃時の事故による欠損であった可能性がある。この種の折れは、彫刀面打撃時に、打面調整が適切でなかったときなど、打撃しても彫刻刀スポールが剥離されなかったときに、指で押さえていた付近で生じることがよくある。557は、神山型彫刻刀形石器ブランクの欠損品である。上部のみが残存。右側縁に腹面側への細部調整によって、浅い弧状の縁辺が作られる。そののち、表面側左上部を弧状に、かつ急角度になるようにブランティング。折れ面は、割れの始まりが裏面側にあり、ブランティング時の剥離事故の可能性もある。558は、神山型彫刻刀形石器ブランクの欠損品である。上部のみが残存。右側縁に腹面側への細部調整によって、浅い弧状の縁辺が作られる。そののち、表面側左上部を弧状に、かつ急角度になるようにブランティング。折れ面の剥離方向は、予定された彫刀面打撃方向と同一方向であり、彫刀面打撃時の事故による欠損であった可能性がある。560は、裏細部調整切り面彫刻刀形石器である。幅広石刃の末端裏面側に浅い剥離でもって細部調整を施して、縁辺を凹形に仕上げる。その細部調整面から左側縁にかけて彫刻刀スポールを剥離。基部側にも彫刀面打撃がなされるが、基部側の彫刀面打面が欠落している。

**双面彫刻刀形石器**　561は、双面彫刻刀形石器である。背面が、縦2稜から途中で1稜に収斂する石刃を素材とする。背面側基部から中間部付近まで裏面からのブランティングにより、縁辺を急角度に、平面形を尖頭状に仕上げている。基部側裏面にも、右側縁からバルブ除去の細部調整が入る。細部調整面には、左側縁の一部、すなわち細部調整の末端の一部に潰れが認められることから、台上での挟み撃ちの可能性がある。彫刀面打撃は、まず右側縁側に沿って、ついで左上にたいして、左下がりになるように、それぞれ1撃ずつ剥離。左上の彫刀面、すなわち新しい彫刀面の打点は、砕けているものの、幅1.5mm程度の凹状の窪みとして残されている。このことから、彫刀面打撃には、石製ハンマーの直接打撃の可能性が考えられる。

**細部調整切り面彫刻刀形石器**　559は、小坂型彫刻刀形石器である。幅広石刃を素材とする。石刃の末端側を裏面から細部調整を施し、平面形が弧状で、裏面と調整面が急角度になるよう仕上げている。その細部調整面を打面にして、左側縁から1枚程度の彫刻刀スポールを剥離。素材石刃の剥離開始部は、明瞭なコーンが認められるが、バルブは発達しない。彫刻刀面の剥離開始部は、開始部付近の砕けとともに、打面上から剥離開始部を見たときに強く湾曲しているのが確認できる。その細部調整面を打面にして、左側縁から1枚程度の彫刻刀スポールを剥離している。563は、小坂型彫刻刀形石器である。背面が縦3稜で構成され、末端が幅広くなった石刃を素材とする。末端を裏面から細部調整を施し、平面形が直線的で、裏面と調整面が急角度になるよう仕上げている。その細部調整面を打面にして、左側縁から2枚程度の彫刻刀スポールを剥離。背面側の左側縁には、不連続であるが微細剥離痕が認められる。基部は折れにより欠損している（曲げ折れか？）。

**無調整面彫刻刀形石器**　562は、無調整面彫刻刀形石器であるが、裏細部切り面彫刻刀形石器の可能性もある。背面が縦4稜で構成され、バルブ付近で幅広くなり、中間部から急に幅が狭くなり、かつ側面観が大きく歪んだ石刃を素材とする。素材石刃の剥離開始部は、やや幅の広いコーンが認められる。素材石刃の打面部は、折れにより欠損する。彫刀面打撃は右方向から行い、右上がりの彫刀面を作出。564は、無調整面彫刻刀形石器であるが、裏細部切り面彫刻刀形石器の可能性もある。背面が縦4稜で構成され、やや幅広で厚手、側面観が大きく歪んだ石刃を素材とする。素材石刃の打面部は、折れにより欠損する。彫刀面打撃は右方向から行い、右上がりの彫刀面を作出。565は、無調整面彫刻刀形石器である。表面左側に大きく自然面を残し、かつ裏面の右側を縦割れにより欠損した縦長剥片を素材としている。旧打面を彫刀面打撃の打面とし、右側縁上部に裏面からの細部調整（後調整）ののち、彫刻刀スポールを剥離。また左側縁の中央部には、裏面からの打撃により、ノッチが入る。

**トゥールの素材**　注目されるのは、杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器、双面彫刻刀形石器、無調整面彫刻刀形石器の一部は、細身で薄手の石刃を素材としている。背面が縦1稜、あるいは2稜の石刃が用いられて

いる。一方で、裏細部調整切り面彫刻刀形石器（典型的な神山型彫刻刀形石器以外のもの）、細部調整切り面彫刻刀形石器は、幅広で厚手の石刃を素材としている。背面については、縦２稜、あるいはそれ以上で、自然面が残存するものも用いられている。

**杉久保型ナイフ形石器群**　Ｊ15トレンチテストピット出土の旧石器資料は、石器組成のなかに杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器があることから、杉久保型ナイフ形石器群であると言えよう。本県において、まとまった杉久保型ナイフ形石器群の発掘調査は、1960年の小国町横道遺跡以来となる（加藤・佐藤1963）。しかも、横道遺跡では資料総数が324点であるのにたいし、Ｊ15出土旧石器資料は2,823点で、格段と数が多い。つまり、技術復原をするうえで、Ｊ15出土旧石器資料は、横道遺跡の石器資料よりも多くの情報をもたらすと考えられ、有効な資料であると言えよう。

そこで、以下にＪ15出土旧石器資料におけるその石器製作技術についてまとめる。

## （4）各母岩の構成

ここでは、Ｊ15出土旧石器資料について、母岩ごとに、接合資料と特徴的な石器資料について、製作工程を中心に記述を行う。

なお、母岩中に確認できた折れ面接合以外の、剥片（石刃）＋剥片（石刃）、剥片（石刃）＋石刃核（石核）、トゥール＋トゥールの接合資料については、アルファベットの小文字記号を付し区別している。また、Ｐ１ａについては、個体同士の接合が確認できたので、個体ごとにローマ数字を付している。接合資料の記述については、代表的なもののみを行う。各接合資料については、付録DVDに添付したpdfファイルを参照されたい。また、石器資料それぞれの痕跡についても付録DVDに添付した画像を参照されたい。

**Ｐ１**（第34・36～38図、第196～213図：566～615）

Ｐ１は、総数442点。その内訳は、彫刻刀スポール３点、石刃16点、石刃核１点、細石刃２点、稜調整石刃１点、打面再生剥片１点、剥片251点、チップ167点。接合資料は７例。

**Ｐ１ａ**（566）　扁平な亜円礫にたいして、少なくとも３つ以上に分割。そのうち、２つの個体が接合作業によって確認された。それらの個体にたいしては、Ｐ１ａⅠとＰ１ａⅡに区別。

**Ｐ１ａⅠ**（第36図、第198～203図：567～577）　石刃核１点、石刃２点、剥片７点で構成される。縦断面形が逆三角形を呈し、上面がおおよそ長方形を呈する分割礫が素材となる。１）はじめに、自然面が残る上面にたいして、一方向からの打撃でもって幅広剥片（568～571）を剥離。自然面が除去されるも、内部に夾雑物が発達。２）夾雑物により、側面にたいして上面からの打撃により剥片（573）を剥離。縦断面形の上面と右側面のなす角度を、より急角度になるように整形。３）上面を打面にして、前面の右側から石刃（572・574～576）を剥離。最終剥離であるＰ１ａⅠ－８（576）は、大きくヒンジを呈しており、石刃核Ｐ１ａⅠ－９（577）の作業面の下端部に大きな凸部を形成。また石刃剥離は、多量の夾雑物が出現する手前付近、すなわち均質な石質で行われている。

**Ｐ１ａⅡ**（第37図、第204～205図：578～583）　剥片５点で構成される。石核が存在しないため、石核素材の形態については判然としない。Ｐ１ａⅠとの接合状態からは、おそらく直方体のような分割礫が素材となったと思われる。Ｐ１ａⅡは、１）打面の作出がなされたのち、２）自然稜を利用して縦長剥片（579～580）が剥離され、３）それに引き続き、縦長剥片（581～583）が剥離されている。これらの剥片の背面構成からは、自然面除去を目的としていたかもしれない。

**Ｐ１ｂ**（第38図、第206～207図：584～590）　石刃４点、剥片２点で構成される。扁平な礫の小口面を作業面に設定。１）上面に上設打面を作出したのち、２）右側面の節理面から、一枚だけ短形剥片（585）を剥離（稜調整を意図していたのか？）。３）上設打面から、前面の自然面を大きく除去する大型剥片（586）を剥離。４）その後、下設打面を作出し、５）下設打面より、作業面の縦稜を整えるための稜整形石刃（587）を剥離。６）下設打面より石刃（588）を剥離。７）上設打面の再生。８）上設打面より、幅広の石刃（589～890）を剥離。

**Ｐ１ｃ**（第38図、第208図：591～598）　剥片７点で構成される。石刃剥離の前半段階か。１）上面を厚手の短形剥片（593）を剥離して、打面作出剥片を剥離する

ための調整。2）打面作出剥片（592）の剥離。3）前面角の調整？（594～595）。4）作業面の作出（596～597）。5）石刃（598）の剥離。

**P1非接合資料**（第213図：612～615）　612は、彫刻刀スポールである。スポール剥離以前の稜調整が認められる。613は、細石刃である。614～615は幅広石刃である。614は下半部が、615は末端が欠損する。

**P2**（第39図、第214～219図：616～629）　P2は、総数38点。その内訳は、神山型彫刻刀形石器1点、無調整面彫刻刀形石器1点、彫刻刀スポール3点、石刃8点、石刃核1点、新稜石刃1点、細石刃2点、剥片17点、チップ4点。接合資料は2例。

**P2a**（第214～216図：616～619）　石刃核1点、石刃1点、剥片1点で構成される。1）亜円礫から大型厚手剥片を剥離。2）大型厚手剥片の小口面に作業面を設定し、上端部に打面を作出。3）小口面から石刃（617～618）を剥離。

**P2b**（第217図：620～622）　新稜石刃1点、石刃1点で構成される。1）石刃剥離ののち、おそらく石刃剥離痕の末端部にヒンジ、あるいはステップにより凸部が形成。2）その凸部を除去するために、作業面の下部にたいして新稜調整。3）石刃（621）剥離（背面の末端左側のごく一部に、新稜調整面を取り込む）。4）新稜石刃（622）の剥離。

**P2非接合資料**（第217～219図：623～629）　623は、新稜石刃である。背面下部に、左方向からの打撃による新稜の作出が認められる。624～625は、石刃である。626は、神山型彫刻刀形石器である。627は、無調整面彫刻刀形石器である。628は、細石刃である。629は神山型彫刻刀形石器の彫刻刀スポールである。

**P3**（第40図、第219～226図：630～648）　P3は、総数102点。その内訳は、石刃6点、打面作出剥片1点、打面調整剥片1点、稜付き石刃1点、稜形成剥片1点、自然稜石刃1点、剥片61点、チップ30点。接合資料は4例。

**P3a**（第219～223図：630～638）　石刃核1点、石刃1点、打面調整剥片1点、剥片5点で構成される。扁平な楕円形の亜円礫を素材。1）亜円礫の小口、短軸側に打面を作出（634）。ただし、打面作出の以前に、石核成形が行われている可能性がある。2）小口の長軸側を作業面に設定し、石刃（636～637）を剥離。3）再度、打面側に調整を施す（635）ものの、剥離は終了。

**P4**（第41図、第227～232図：649～669）　P4は、総数39点。その内訳は、裏細部調整切り面彫刻刀形石器1点、無調整面彫刻刀形石器1点、彫刻刀スポール2点、石刃19点、剥片13点、二次加工チップ2点、チップ1点。接合資料は5例。

**P4a**（第227～228図：649～653）　裏細部調整切り面彫刻刀形石器1点、石刃3点で構成される。素材は不明。1）右方向からの打撃による稜調整。2）上設打面の調整。3）下設打面から稜付き石刃を剥離。4）上設打面から第2稜付き石刃（650）を剥離（打面調整を挟む）。5）上設打面からの石刃（651～653）剥離（打面再生、打面調整を挟む）。6）幅広石刃を素材に、裏細部調整切り面彫刻刀形石器（652）を製作。

**P4非接合資料**（第231～232図：667～669）　667は、無調整面彫刻刀形石器である。668は、神山型彫刻刀形石器の彫刻刀スポールである。669は、石刃である。背面末端側に、下設打面からの剥離痕が認められる。

**P5**（第42図、第232～233図：670～677）　P5は、総数33点。その内訳は、ナイフ形石器2点、石刃6点、彫刻刀スポール1点、剥片21点、チップ3点。接合資料は1例。

**P5a**（第232図：670～672）　石刃2点で構成。石刃の単設打面からの連続剥離を示す資料である。

**P5非接合資料**（第233図：673～677）　673～675は、石刃である。676～677は、ナイフ形石器である。ともに欠損しており、676はナイフ形石器の先端部で、677は基部である。

**P6**（第43図、第234図：678～680）　P6は、総数2点。その内訳は、神山型彫刻刀形石器ブランク1点、双面彫刻刀形石器1点。ただし、前者は、2点の折れ面接合によって、1点としている。接合資料は1例。

**P6a**　神山型彫刻刀形石器ブランク1点、双面彫刻刀形石器1点で構成される。上設打面から石刃を剥離。

そのうち、側面観が比較的直線的で、背面が縦２稜で、かつ中間部で１稜に収斂する石刃にたいして、双面彫刻刀形石器（679）を製作。同じく、側面観が比較的直線的で、背面が縦１稜で構成される石刃にたいして、神山型彫刻刀形石器ブランク（680）を製作。ただし、両者は、基部側の加工状況から、本来は杉久保型ナイフ形石器であった可能性がある。神山型彫刻刀形石器ブランクは、中間部で２つに欠損し、そのうち上半部側は被熱して、焼けはじけや黒色変化が生じる。

**Ｐ７**（第 234 図：681 ～ 682）　Ｐ７は、総数 41 点。その内訳は、石刃６点、剥片 24 点、チップ 11 点。

**Ｐ７非接合資料**（第 261 図：681 ～ 682）　ともに、石刃である。

**Ｐ８**（第 44 図、第 235 ～ 246 図：683 ～ 705）　Ｐ８は、総数 157 点。その内訳は、石刃 13 点、石刃核１点、打面再生剥片１点、稜付き石刃３点、自然稜石刃１点、打面調整剥片１点、剥片 102 点、チップ 35 点。接合資料は３例。

**Ｐ８ａ**（第 235 ～ 239 図：683 ～ 691）　石刃核１点、石刃１点、打面調整剥片１点、打面再生剥片１点、剥片４点で構成される。素材は、凹凸感のあり、かつ厚みのあるやや扁平な亜円礫。１）礫の小口面にたいして、下設打面を作出。２）礫の小口の長軸方向にたいして作業面を設定し、下設打面から石刃を剥離？。３）下設打面の再生（684）。４）下設打面から、再度石刃を剥離。５）下設打面の調整（685）。６）上設打面の作出？（688）。７）上設打面から石刃核の側面調整（689）。８）上設打面から、数点の石刃（686）を剥離。９）さらに大型で末端が肥大した厚手の石刃（687）を剥離（作業面の更新を目的としていたのか？）。10）上設打面から、石刃（690）を剥離。

**Ｐ８ｂ**（第 240 ～ 242 図：692 ～ 696）　稜付き石刃１点、稜形成剥片１点、剥片１点で構成される。Ｐ８ａの稜の作出段階か？。右方向からの打撃（693）を中心にして稜を調整。稜付き石刃（696）は、一度の打撃で剥離できず、少なくとも４度の打撃（694 ～ 695）によって剥離に至る。稜付き石刃は、バルブ付近で折損する（事故による折損）。

**Ｐ８非接合資料**（第 246 図：703 ～ 705）　703 ～ 705 は、石刃である。703 ～ 704 は幅広で、705 は細身の石刃である。また、704 は中間部で折損し、705 は少なくとも打面部、中間部、末端部が欠損している。

**Ｐ９**（第 45 図、第 247 ～ 252 図：706 ～ 712）　Ｐ９は、総数 13 点。その内訳は、石刃４点、石刃核１点、剥片８点。接合資料は１例。

**Ｐ９ａ**（第 247 ～ 252 図：706 ～ 712）　石刃核１点、石刃４点、剥片１点で構成される。素材は、厚みのあるやや扁平な亜円礫。１）礫の小口面にたいして、対向する２面に打面を作出。２）礫の小口の長軸方向に作業面を設定し、下設打面から厚手で幅広の石刃（707）を剥離。３）上設打面から厚手で幅広の石刃（708 ～ 710）を剥離。４）下設打面からの石刃（711）剥離（ただし、整った形態の石刃を剥離するには至っていない）。その後 707 のみ被熱によって、赤色変化する。

**Ｐ 10**（第 46 図、第 253 ～ 259 図：713 ～ 721）　Ｐ 10 は、総数 12 点。その内訳は、石刃５点、石刃核１点、打面作出剥片１点、稜付き石刃１点、剥片４点。接合資料は２例。

**Ｐ 10 ａ**（第 253 ～ 257 図：713 ～ 717）　石刃核１点、石刃２点、打面作出剥片１点で構成される。素材は、楕円形で扁平な亜円礫。１）礫の短軸、一端部側に打面を作出（714）。２）小口長軸にある自然稜を利用して、自然稜付き石刃を剥離？。３）小口面から石刃（715 ～ 716）を剥離。

この母岩は、上半部が細粒で緻密であり、下半部からがやや粗粒で緻密さに欠ける、上半部と下半部で石質の異なるものである。石刃剥離は、上半部の良質な部分のみで行われている。

**Ｐ 11**（第 47 図、第 259 ～ 260 図：722 ～ 727）　Ｐ 11 は、総数 18 点。その内訳は、彫刻刀スポール２点、石刃２点、稜付き石刃１点、細石刃２点、剥片９点、チップ２点。接合資料は１例。

**Ｐ 11 非接合資料**（第 260 図：725 ～ 727）　725 は、稜付き石刃である。726 は石刃で、被熱による赤色、および黒色変化が認められる。727 は石刃で、幅広で厚手の

石刃となる。

**P 12**（第 48 図、第 261 ～ 267 図:728 ～ 742）　P 12 は、総数 32 点。その内訳は、石刃核ブランク 1 点、剥片 31 点。接合資料は 1 例。

**P 12 a**（第 261 ～ 266 図：728 ～ 739）　石刃核ブランク 1 点、剥片 10 点で構成される。素材は、扁平な亜円礫であるが、滑らかな表面の円礫状態の部分を併せ持つ。1）小口の長軸面にたいして稜を形成（729 ～ 734）。2）小口一短軸面に打面を設定（735 ～ 737）。

この母岩は、円礫部が粗粒で、かつ緻密さに欠け、亜円礫部が細粒で、緻密である。稜形成は亜円礫部の方で行われ、打面作出は円礫部で行われている。なお、形成された稜は、あまり直線的ではない。

**P 13**（第 49 図、第 267 ～ 269 図：743 ～ 754）　P 13 は、総数 81 点。その内訳は、無調整面彫刻刀形石器 1 点、石刃 2 点、剥片 62 点、チップ 16 点。接合資料は 4 例。

**P 13 a**（第 267 ～ 268 図：743 ～ 745）　無調整面彫刻刀形石器 1 点、剥片 1 点で構成される。厳密には折れ面接合であるが、トゥールと折損片との接合資料であることから、記述する。745 は、素材剥片が剥離されたときに、縦割れを起こして折損した折損片。744 が、無調整面彫刻刀形石器に製作されたのちに、左側縁中央部に裏面からの打撃によりノッチが入れられる。

**P 14**（第 50 図、第 270 ～ 272 図:755 ～ 763）　P 14 は、総数 33 点。その内訳は、石刃 2 点、新稜石刃 1 点、稜形成剥片 1 点、作業面更新剥片 1 点、細石刃 6 点、打面調整剥片 2 点、剥片 20 点、チップ 4 点。接合資料は 2 例。

**P 14 a**（第 270 ～ 271 図：755 ～ 760）　新稜石刃 1 点、稜形成剥片 1 点、作業面更新剥片 1 点、剥片 1 点で構成される。素材は、右側面が平担な節理面、左側面が自然面で覆われた分割礫を素材としている。1）石刃核成形、石刃剥離？が行われる。2）作業面の下部にたいして、左方向からの打撃により新稜を形成（758）。3）打面より、新稜石刃（756）を剥離。4）作業面方向からの打撃により打面再生剥片、および打面調整剥片（757）を剥離。5）打面からの石刃剥離が数回行われるが、ヒンジを起こして作業面中央部に大きな段が形成。6）打面から作業面方向へ打撃を加え、厚手の剥片（759 ～ 760）を剥離し、作業面全体を更新させる。

**P 15**（第 51 図、第 272 ～ 273 図:764 ～ 774）　P 15 は、総数 19 点。その内訳は、細石刃 6 点、石刃 1 点、剥片 8 点、チップ 4 点。接合資料は 2 例。

**P 15 a**（第 272 図：764 ～ 766）　細石刃 1 点、石刃 1 点で構成される。素材は、不明。細石刃 1 点とヒンジを呈した石刃 1 点の接合資料であるが、細石刃、石刃ともに背面構成から、細石刃の連続的な剥離が認められる。

**P 15 非接合資料**（第 273 図：771 ～ 774）　771 ～ 774 は、細石刃である。それぞれの背面構成からも、細石刃が連続的に剥離されているのが認められる。

**P 16**（第 52 図、第 274 ～ 276 図:775 ～ 784）　P 16 は、総数 34 点。その内訳は、打面再生剥片 1 点、剥片 30 点、チップ 3 点。接合資料は 3 例。

**P 16 b**（第 275 図：779 ～ 781）　打面再生剥片 1 点、剥片 1 点で構成される。素材は、大きく凹みのある亜円礫。P 16 b は、打面調整剥片と打面再生剥片の接合資料である（2011 年度寒河江市教育委員会による、当該地点の学術調査で出土した石刃核と接合）。

**P 17**（第 276 図：785 ～ 788）　P 17 は、総数 85 点。その内訳は、彫刻刀スポール 3 点、細石刃 1 点、剥片 56 点、チップ 25 点。

**P 17 非接合資料**　785 は、自然面除去も意図している石刃である。786 は、彫刻刀スポールである。787、788 は、神山型彫刻刀形石器の彫刻刀スポールである。

**P 18**（第 53 図、第 277 ～ 278 図:789 ～ 808）　P 18 は、総数 68 点。その内訳は、彫刻刀スポール 16 点、細石刃 1 点、剥片 24 点、二次加工チップ 2 点、チップ 25 点。接合資料は 1 例。

**P 18 a**（第 277 図：789 ～ 792）　彫刻刀スポール 3 点で構成される。P 18 a は、神山型彫刻刀形石器の 3 つの彫刻刀スポールが接合した資料である。スポール剥離のための稜成形をしながら、スポールを剥離する過程が認められる。

**P 18 非接合資料**（第 277 ～ 288 図：793 ～ 808）　793

～795は、石刃である。793は、打面が欠損し、794と795は、打面部以下が欠損する。796～801は、神山型彫刻刀形石器の彫刻刀スポールである。802～806は、細部調整切り面彫刻刀形石器から剥離された彫刻刀スポールである。807、808は、二次加工チップである。

**P 19**（第54図、第279図：809～811） P 19は、総数13点。その内訳は、石刃2点、剥片9点、チップ2点。接合資料は1例。

**P 20**（第55図、第279図：812～819） P 20は、総数8点。その内訳は、神山型彫刻刀形石器ブランク1点、彫刻刀スポール4点、石刃2点、剥片1点。接合資料は1例。

**P 20 非接合資料**（第279図：815～819） 815は、神山型彫刻刀形石器のブランクである。上部以下が欠損する。816～818は、神山型彫刻刀形石器の彫刻刀スポールである。819は、二次加工チップである。

**P 22**（第56図、第280～281図：820） P 22は、総数5点。その内訳は、石核1点、剥片4点。接合資料は1例。

**P 22** 素材は、凹凸感のある亜円礫。節理面や潜在割れ、夾雑物が発達。上面の中央部に打撃が加えられ、1撃のうちに5分割となる。試し打ちとも考えられるが、上面に見える節理面による筋上を打撃しており、節理面によってバラバラに砕けることを見越して、打撃された可能性もある。

**P 23**（第282図：821～827） P 23は、総数9点。その内訳は、細部調整切り面彫刻刀形石器（小坂型彫刻刀形石器）1点、彫刻刀スポール5点、剥片2点、二次加工チップ1点。

**P 23 非接合資料** 821は、細部調整切り面彫刻刀形石器（小坂型彫刻刀形石器）である。822、823は、神山型彫刻刀形石器の彫刻刀スポールの可能性がある。824は、彫刻刀スポールである。ただし、825と826は、神山型彫刻刀形石器の彫刻刀スポールの可能性もある。827は、二次加工チップの可能性がある。

**P 24**（第282～283図：828～835） P 24は、総数10点。その内訳は、神山型彫刻刀形石器ブランク1点、彫刻刀スポール1点、石刃3点、二次加工チップ5点。

**P 24 非接合資料** 828は、神山型彫刻刀形石器のブランクである。上部以下が欠損する。829～831は、石刃である。829は、両側縁の縁辺に微細剥離痕が認められる。830は、石刃核上の凸部の除去を意図して剥離された石刃である。831は、打面部が欠損する。832～835は、二次加工チップである。

**P 25**（第283図：836） P 25は、総数2点。その内訳は、石刃核1点、剥片1点。

**P 25 非接合資料** 836は、石刃核である。節理面や潜在割れが発達する亜円礫を素材。亜円礫の小口面に作業面を設定して、石刃を剥離。左側面に稜成形の際の剥離痕が、右側面にヒンジを呈し、左側面の大半を除去する剥離が見られる。打面は平坦で、作業面は石刃剥離の後半段階でヒンジを呈した石刃・剥片を剥離して終了。

**P 26**（第284図：837～838） P 26は、総数21点。その内訳は、細石刃1点、剥片18点、チップ2点。

**P 26 非接合資料** 837は、細石刃である。ただし、彫刻刀スポール、ないし縦後を調整する際の調整剥片である可能性がある。838は剥片である。二分の一以上を自然で覆われており、初期段階で剥離された可能性がある。

**P 27**（第57図、第284～285図：839～843） P 27は、総数10点。その内訳は、石刃2点、稜付き石刃1点、稜形成剥片1点、細石刃1点、剥片4点、二次加工チップ1点。接合資料は1例。

**P 27 非接合資料** 842、843は、二次加工チップである。

**P 28**（第285図：844～845） P 28は、総数5点。その内訳は、石刃1点、細石刃1点、剥片2点、チップ1点。

**P 28 非接合資料** 844は、石刃である。背面右側に自然面が認められるため、石刃核の整形を意図して剥離された石刃である可能性がある。845は、細石刃である。ただし、彫刻刀スポール、ないし縦後を調整する際の調整剥片である可能性がある。

**P 29**（第 285 図：846 ～ 847）　P 29 は、総数 6 点。その内訳は、石刃 1 点、細石刃 1 点、剥片 2 点、チップ 2 点。

**P 29 非接合資料**　846 は、石刃である。下半部がやや厚くなり、側面観が歪んでいる。847 は、細石刃である。下半部は欠損している。

**P 30**（第 286 図：848）　P 30 は、総数 1 点。その内訳は、原石 1 点。

**P 30 非接合資料**　848 は、原石である。ただし、右側中央部に 1 枚だけ剥離面がある。P 30 は、表面上にはクラック痕や凹凸が著しく、石刃製作には決して最適な石材であると言えない石材である。そのため、一打だけ打撃して製作をやめた、あるいは石材採取時に試し割りをして、石質的に問題がなかったために本地点に持ち込んだものの、製作時には石刃製作には不向きと判断した、ということが想定される。

**P 31**（第 287 図：849）　P 31 は、総数 1 点。その内訳は、杉久保型ナイフ形石器 1 点。

**P 31 非接合資料**　849 は、杉久保型ナイフ形石器である。

**P 32**（第 287 図：850）　P 32 は、総数 1 点。その内訳は、杉久保型ナイフ形石器 1 点。

**P 32 非接合資料**　850 は、杉久保型ナイフ形石器である。

**P 33**（第 287 図：851）　P 33 は総数 1 点。その内訳は細部調整切り面彫刻刀形石器（小坂型彫刻刀形石器）1 点。

**P 33 非接合資料**　851 は、小坂型彫刻刀形石器である。

**P 34**（第 287 図：852）　P 34 は、総数 1 点。その内訳は、剥片 1 点。

**P 34 非接合資料**　852 は、剥片である。転磨した際に生じたコーンが見られるため、自然面付近を剥離したものであるが、表面の風化度が他の石器資料に比べて低く、さらに鉄製工具との接触を示すガジリ痕とそれに重複する褐鉄の付着が認められる。P 34 が単独母岩であることも合わせると、P 34 は新しい時期のものの混入品である可能性が高い。

**母岩未特定資料**　今回、1,294 点のチップについては、母岩分類を行っていない。

## （5）その他

**ハンマーストーン**（第 288 図：854）　ハンマーストーンは、1 点出土している。854 は、石英安山岩製のハンマーストーンである。やや細粒、かつやや緻密な扁平な円礫を素材とし、重さは 474.63 g ある。表面を触っても崩れることがなく、経験的には硬石製ハンマーに相当する。薄い縁辺上に敲打痕と剥落痕が認められる。表面の中央、断面形の最大厚付近にも敲打痕が認められる。

**被熱石器**（第 287 図：853、第 32 図）　接合関係が認められず、母岩が特定できなかった被熱石器は、184 点となる。接合しているものを含めると、190 点となる。元の素材面が確認できるものを観察すると、被熱は、剥片類（777、778）と石刃（655、707、726）、折損した神山型彫刻刀形石器ブランクの上半部（680）などであり、特定の器種だけが被熱しているのでない。逆に、石刃核と石核には、被熱の痕跡がない。

被熱石器の平面分布は、ブロックの東側に集中する（第 32 図）。2011 年の学術調査でも、被熱石器の集中部に隣接した被熱石器の密集が確認されている（寒河江市教委 2012）。

### 引用・参考文献（第１～３節）


可児通宏　2004 「文様・施文具・施文法」『月刊考古学ジャーナル　11月号　特集縄文土器の文様施文具』　ニューサイエンス社
西川博孝　2004 「竹管文・爪形文の施文原体」『月刊考古学ジャーナル　11月号　特集縄文土器の文様施文具』　ニューサイエンス社
熊谷仁志　2004 「特殊な施文具」『月刊考古学ジャーナル　11月号　特集縄文土器の文様施文具』　ニューサイエンス社
戸沢充則　1994 『縄文時代研究事典』　東京堂出版
酒井清治／伊藤博幸　1995 『須恵器集成図録　第四巻　東日本編Ⅱ』　雄山閣
加藤晋平／小林達雄／藤本強　1994 『縄文文化の研究５　縄文土器Ⅲ』　雄山閣
白鳥良一　1989 「前期大木式土器様式」『縄文土器大観１　草創期　早期　前期』　p.315 ～ p.318　小林達雄編集　小川忠博撮影
小鳥俊彰　1989 「十三菩提式土器様式」『縄文土器大観１　草創期　早期　前期』　p.335 ～ p.338　小林達雄編集　小川忠博撮影
丹羽　茂　1989 「中期大木式土器様式」『縄文土器大観１　草創期　早期　前期』　p.346 ～ p.352　小林達雄編集　小川忠博撮影
中島庄一　1989 「称名寺式土器様式」『縄文土器大観４　後期　晩期　続縄文』　p.258 ～ p.261　小林達雄編集　小川忠博撮影
藤沼邦彦　1989 「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観４　後期　晩期　続縄文』　p.318 ～ p.324　小林達夫編集　小川忠博撮影
早瀬亮輔　2008 「前期大木式土器」『総覧　縄文土器　小林達雄編』　p.226 ～ p.233 『総覧　縄文土器』刊行委員会　小学館
赤塩　仁　2008 「十三菩提式土器」『総覧　縄文土器　小林達雄編』　p.304 ～ p.311 『総覧　縄文土器』刊行委員会　小学館
中野幸大　2008 「大木７ａ～８ｂ式土器」『総覧　縄文土器　小林達雄編』　p.352 ～ p.359 『総覧　縄文土器』刊行委員会　小学館
森　幸彦　2008 「大木９・10式土器」『総覧　縄文土器　小林達雄編』　p.360 ～ p.367 『総覧　縄文土器』刊行委員会　小学館
中島庄一　2008 「称名寺式土器」『総覧　縄文土器　小林達雄編』　p.578 ～ p.585 『総覧　縄文土器』刊行委員会　小学館
加納　実　2008 「堀之内式土器」『総覧　縄文土器　小林達雄編』　p.586 ～ p.593 『総覧　縄文土器』刊行委員会　小学館
藤沼邦彦・関根達人　2008 「亀ヶ岡式土器」『総覧　縄文土器　小林達雄編』　p.682 ～ p.693 『総覧　縄文土器』刊行委員会　小学館
宮城県教育委員会・日本道路公団　1978 「上深沢遺跡　東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ」　宮城県文化財調査報告書 52 集
宮城県教育委員会・宮城県土木部　2003 「嘉倉貝塚」　宮城県文化財調査報告書第 192 集
山形県教育委員会　1979 「熊ノ前遺跡発掘調査報告書」　山形県文化財調査報告書第 16 集
山形県教育委員会　1984 「水木田遺跡発掘調査報告書」　山形県文化財調査報告書　第 75 集
山形県・山形県教育委員会　1992 「平野山古窯跡群第 12 地点遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書 178 集
山形県長井市教育委員会　2003 「右撚り－左撚り－縄文の土器文様と紐の撚り－」
(財）山形県埋蔵文化財センター　1994 「西ノ前遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第１集
(財）山形県埋蔵文化財センター　1996 「野新田遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 40 集
(財）山形県埋蔵文化財センター　1998 「平野山古窯跡第 12 地点遺跡第２次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 52 集
(財）山形県埋蔵文化財センター　2000 「北柳１遺跡第２次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 76 集
(財）山形県埋蔵文化財センター　2001 「高瀬山遺跡（ＳＡ）第２・３次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 94 集
(財）山形県埋蔵文化財センター　2003 「砂子田遺跡２・３次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 113 集
(財）山形県埋蔵文化財センター　2003 「かっぱ遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 114 集
(財）山形県埋蔵文化財センター　2004 「高瀬山遺跡（１期）第１～４次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 121 集
(財）山形県埋蔵文化財センター　2004 「遠磨寺遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 127 集
(財）山形県埋蔵文化財センター　2005 「高瀬山遺跡（ＨＯ地区）発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 145 集


### 引用・参考文献（第４節）


秦　昭繁　2011 「山形盆地の挂貝首岩の原石調査」『山形考古』第９巻第３号　p.16 ～ p.26　山形県考古学会
ルロワ＝グーラン，アンドレ（荒木　亨訳）　1973 『身ぶりと言葉』　新潮社
山中一郎　2007 「「動作連鎖」の概念で観る考古資料」『古代文化』第 58 巻第Ⅳ号　p.30 ～ p.36　古代學協会
Inizan, M. L・Roche, H.・Tixier, J.（大沼克彦・西秋良宏・鈴木美保訳）　1998 『石器研究法』　株式会社クバプロ
Tixier, J.　1967　Procédés d' analyse et questions de terminologie concernant l' étude des ensembles industriels du Paléolithique récent et de l' Epipaléolithique dans l' Afrique du Nord-Ouest'.*Background to Evolution in Africa* p.771 ～ p.820 eds. W.W. Bishop and J.D. Clark Chicago: University of Chicago.


### 引用・参考文献（第５節）


寒河江市教育委員会　2012 『寒河江市内遺跡発掘調査報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 32 集（刊行予定）
加藤稔・佐藤祐宏　1963 「山形県横道遺跡概報」『石器時代』第６号　p.22 ～ p.36　石器時代文化研究会
山中一郎　1994 『石器研究のダイナミズム－ボルドー型式学のために－』　大阪文化研究会
山中一郎　2007 「「動作連鎖」の概念で観る考古資料」『古代文化』第 58 巻第Ⅳ号　p.30 ～ p.36　古代學協会
Inizan, M. L・Roche, H.・Tixier, J.（大沼克彦・西秋良宏・鈴木美保訳）　1998 『石器研究法』　株式会社クバプロ
Tixier, J.　1967　Procédés d' analyse et questions de terminologie concernant l' Etude des ensembles industriels du paléolithique récent et de l' épipaléolithique dans l' Afrique du Nord-Ouest'.*Background to Evolution in Africa* p.771 ～ p.820 eds. W.W.Bishop and J.D. Clark Chicago:University of Chicago.

表2　出土土器・土製品観察表

※口径値が括弧付で表されたものは、図上復元による値である。器厚は、最大値を示す。所属時期に関しては、明確に特定できるものを表記した。

縄文土器

| 挿図番号 | トレンチ名 | 遺構名 | 登録番号 | 器種 | 残存状況 | 計測値（mm） | | | | 時期 | 文様構成・備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 器厚 | | |
| 7 | F区 | SK 132 | RP 73 | 深鉢 | 完形 | 225 | 252 | 82 | 8 | 大木10式 | LR縦。口縁部無文。 |
| 8 | F区 | SK 119 | RP 72 | 深鉢 | 胴～底部 | － | － | 110 | 19 | 中期末 | RL縦。 |
| 9 | C3・D | SK 53 | RP 15 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 興津Ⅱ式 | 横位にX字状の沈線区画内に櫛歯状工具による刺突。外面に煤状付着物。 |
| 10 | A上部西 | SK 91 | | 深鉢 | 口縁部 | (250) | － | － | 10 | 大木7a式 | 口唇部刻目。横位に沈線4条で区画。横位に波状沈線。結節回転文（L縦）。 |
| 11 | A上部西 | SK 91 | | 深鉢 | 頂部 | － | － | － | 10 | 大木7b式 | 縦・横位に沈線5条。結節回転文（LR縦）。 |
| 12 | B | SK 109 | RP 69 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 16 | 大木6式か | 上半に結節平行押引き。<br>下半に粘土紐貼付隆帯文。 |
| 13 | B | SK 114 | RP 68 | 深鉢 | 底部 | － | － | 132 | 15 | 大木7式 | 網代痕（網代底土器）。 |
| 19 | B | 遺構外 | RP 17 | 深鉢 | 口～胴部 | 161 | － | － | 9 | 大木7a式 | 口唇部刻目。口縁部に平行沈線3条。下部に刺突。結節回転文（L）。刻目が走査された隆沈線により区画。 |
| 20 | B | 遺構外 | RP 46 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 不明 | L斜縄文。 |
| 21 | B | 遺構外 | RP 48 | 深鉢 | 口縁部 | (220) | － | － | 11 | 大木7式 | 波状口縁。地文の上に3条の沈線。 |
| 22 | B | 遺構外 | RP 53 | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 12 | 大木7b式 | 口縁が内湾する。2条の沈線・隆沈線がV字状を呈する。 |
| 23 | B | 遺構外 | RP 63 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 中期か | L縦。 |
| 24 | B | 遺構外 | | 深鉢 | 口～頸部 | (440) | － | － | 15 | 大木5式 | LR横。細粘土紐貼付隆帯文を鋸歯状に施文。 |
| 25 | B | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 22 | 大木7式か | 山形状口縁。多方向に沈線。<br>内面に押引き沈線文。 |
| 26 | B | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 大木7a式 | 隆起線文。沈線内に交互刺突。 |
| 27 | B | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 11 | 大木6式 | 結節状沈線文による渦巻文。<br>十三菩提式に類似。 |
| 28 | B | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | (300) | － | － | 12 | 大木6式 | 口唇部頂上はRL横。<br>口縁部はRL横走。波状沈線。 |
| 29 | B | 遺構外 | | 深鉢 | 口～頸部 | － | － | － | 13 | 大木7式 | 口唇外面に瘤状隆起、爪形の刺突。 |
| 31 | A上部西 | SX 90 | RP 37－1 | 深鉢 | 口～頸部 | (280) | － | － | 11 | 大木6式 | 口縁部無文。刻目・沈線による頸部との区画。RL縦。 |
| 32 | A上部西 | SX 90 | RP 37－2 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 12 | 大木7式 | 上半部に横位の隆帯文。把手。沈線区画内にRL縦。渦巻文、交互刺突。<br>縦位に2条の沈線文。 |
| 33 | A上部西 | SX 90 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 14 | 大木7式 | L縦。縦位の波状貼付隆起線に交互刺突。 |
| 34 | A上部西 | SX 90 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 11 | 大木7b式 | LR縦。横位にX字状の隆沈線。 |
| 35 | A上部西 | SP 94 | RP 38 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 11 | 大木7式 | 横位に粘土紐貼付隆帯文。<br>上部に4条の押引き。 |
| 37 | A上部西 | 遺構外 | RP 20 | 深鉢 | 口～胴部 | (150) | － | － | 7 | 前末～中初 | 波状口縁。胴部無文。 |
| 38 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 11 | 大木7a式 | 口縁部を横位の平行沈線文で区画。<br>LR縦。 |
| 39 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 18 | 大木7a式 | 縦位に波状の粘土紐貼付隆帯文1条、横位に沈線3条。 |
| 40 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 14 | 大木7a式 | 口唇部に刻目。沈線による区画、間に刺突を充填。 |
| 41 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木7a式 | 横位に隆起線、5条の結節状沈線文。 |
| 42 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 口～頸部 | (300) | － | － | 15 | 大木7a式 | 口唇部に横位の粘土紐貼付隆帯文。<br>縦位に2条の粘土紐貼隆帯文。横位に粘土紐貼付隆帯文。LR横。 |
| 43 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | (200) | － | － | 10 | 大木7a式 | 沈線を2条ずつ施し、間に交互刺突。 |
| 44 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 後期前葉 | 多方向の沈線。LR縦。 |
| 45 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | (200) | － | － | 10 | 大木6式 | 口唇部刻目。 |
| 46 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 大木7a式 | 刺突。縦位の結節状沈線文。 |
| 47 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 12 | 十三菩提式 | 結節状沈線文（平行・渦巻き）、押引による刻目。 |
| 48 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | (220) | － | － | 9 | 大木7a式 | 波状口縁。口唇部頂上に刻み。隆沈線の間に刻目を充填。 |
| 49 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 13 | 大木7式 | 山形状口縁。波頂部に刻み。粘土紐貼付により楕円形の突起を形成。 |
| 50 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 口～胴部 | (160) | － | － | 10 | 大木7a式 | 折返口縁。口縁部押圧縄文。胴部に斜行縄文（L か）。 |
| 51 | A上部西 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 9 | 大木7a式 | 内湾、キャリパー状。沈線、刻目。 |

| 挿図番号 | トレンチ名 | 遺構名 | 登録番号 | 器種 | 残存状況 | 計測値（mm） | | | | 時期 | 文様構成・備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 器厚 | | |
| 52 | A上部西 | 遺構外 | | 浅鉢 | 胴部 | － | － | － | 7 | 大洞A式 | 横位に沈線5条。 |
| 54 | B | S X 116 | R P 61 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 13 | 大木7 a式 | 多方向の沈線。沈線文内に交互刺突。 |
| 55 | B | S K 127 | R P 55 | 深鉢 | 口～胴部 | 112 | － | － | 9 | 大木7 a式 | 折り返し口縁。口唇「W」字状，胴部「V」字状の粘土紐貼付隆帯文。L R L横・縦。 |
| 56 | C 4 下部 | S X 23 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 10 | 大木10式 | R L R縦。磨消縄文。 |
| 57 | C 4 下部 | S X 23 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 中期末か | 隆起線文。 |
| 58 | C 4 下部 | S X 23 | | 深鉢 | 口縁部 | (260) | － | － | 8 | 大木9 b式 | L R縦。 |
| 59 | C 4 下部 | S X 23 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 18 | 大木9 a式 | 把手。突起上に渦巻文。 |
| 61 | F区 | S K 140 | R P 74－1 | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 12 | 大木7 a式 | 横位に粘土紐貼付隆帯文。縦位に連続した刺目。 |
| 62 | F区 | S K 140 | R P 74－2 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 12 | 大木7 a式 | 横位に粘土紐貼付隆帯文。縦位に連続した刺目。 |
| 63 | F区 | S X 141 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 8 | 大木7 a式 | 口唇部頂上に刺目。隆起線文を施し，半裁竹管による刺突。 |
| 65 | F区 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 10 | 大木7 b式 | L縦の連続擦糸圧痕。 |
| 74 | H 5 | E L 499 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 大木10式 | R L R縦。磨消縄文。 |
| 75 | H 5 | E L 499 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 後期前葉 | 縦位に沈線。 |
| 76 | H 5－11 | E U 514 | R P 147 | 深鉢 | 口～胴部 | (268) | － | － | 12 | 大木10式 | R L縦。磨消縄文。 |
| 77 | H 5－11 | E U 515 | R P 148 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 7 | 大木10式 | R L R縦。磨消縄文。 |
| 78 | H 5－11 | E U 517 | R P 153 | 深鉢 | 口縁部 | (160) | － | － | 15 | 大木10式 | 無文。 |
| 79 | H 7－7 | S T 242 | R P 100－1 | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 27 | 大木5式 | 口唇部側面に粘土紐貼付隆帯文。口唇頂上に刺突。細粘土紐を格子状に貼付。 |
| 80 | H 7－7 | S T 242 | R P 100－2 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 中期末 | R L R縦。 |
| 81 | H 7－7 | S T 242 | R P 103 | 袖珍土器 | 胴～底部 | － | － | 37 | 8 | 中期末 | 無文。外面にミガキを施す。黒色を呈する。 |
| 82 | H 7－8 | S T 242 (E U 262) | R P 88 | 深鉢 | 口～胴部 | 196 | － | － | 13 | 大木10式 | L R縦。磨消縄文。 |
| 83 | H 7－8 | S K 243 | R P 99 | 台付鉢 | 台部 | － | － | 71 | 18 | 中期末 | 4単位の円孔。 |
| 84 | H 7 | S T 242 | | 深鉢 | 口～胴部 | (170) | － | － | 12 | 後期前葉か | 多方向からの条縄。 |
| 85 | H 7 | S K 243 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 18 | 大木7 b式 | Y字状隆起線文，押引き。 |
| 86 | H 7 | S K 243 | | 深鉢 | 口縁部 | (240) | － | － | 11 | 大木10式 | 円形を呈する隆線による区画。口縁部ミガキ。円孔。 |
| 93 | H 7 | E L 247 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木9式 | R L縦。磨消縄文。 |
| 94 | H 7 | E L 247 | | 深鉢 | 口縁部 | (220) | － | － | 10 | 大木10式 | ミガキを施す。95と同一個体。 |
| 95 | H 7 | E L 247 | | 深鉢 | 口縁部 | (230) | － | － | 13 | 大木10式 | ミガキを施す。 |
| 96 | H 7 | E L 247 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 11 | 大木10式 | R L R縦。磨消縄文。 |
| 97 | H 7 | E L 247 | | 深鉢 | 口縁部 | (216) | － | － | 12 | 大木10式 | 無文。 |
| 98 | H 7 | E L 247 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 7 | 大木10式 | L R縦。磨消縄文。 |
| 99 | H 7 | E L 247 | | 鉢 | 胴部 | － | － | － | 11 | 中期末 | R L横。磨消縄文。101と同一個体。 |
| 100 | H 7 | E L 247 | | 小型土器 | 底部 | － | － | 44 | 10 | 中末～後初 | 縦位に条縄。 |
| 101 | H 7 | E L 247 | | 鉢 | 口～胴部 | (124) | － | － | 13 | 中期末 | L R縦。磨消縄文。 |
| 102 | H 7 | E L 247 S K 249 | | 小型深鉢 | 口～胴部 | － | － | － | 8 | 中期末 | 波状口縁。R L縦。遺構間接合。309と同一個体。 |
| 104 | G 3－3 | E U 211 | R P 86 | 深鉢 | 胴～底部 | － | － | 104 | 11 | 中末～後初 | L R横走。 |
| 105 | H 7－8 | E U 244 | R P 93－1 | 深鉢 | 口縁部 | 206 | － | － | 15 | 大木10式 | 撚糸文L縦。磨消縄文。 |
| 106 | H 7－8 | E U 244 | R P 93－2 | 深鉢 | 口縁部 | (258) | － | － | 13 | 大木10式 | 多方向への撚糸文R。磨消縄文。 |
| 107 | H 7－8 | E U 244 | R P 93－3 | 深鉢 | 口縁部 | (310) | － | － | 20 | 大木10式 | 撚糸文。磨消縄文。 |
| 108 | H 7－11 | E U 269 | R P 90 | 深鉢 | 胴～底部 | － | － | 134 | 13 | 後期初頭 堀之内1式 | L R多方向。多方向の沈線。 |
| 109 | H 7 | S K 254 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 8 | 後期前葉？ | L R横。 |
| 114 | H 7 | S K 268 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木10式 | L R横走。充填縄文。 |
| 115 | H 7 | S K 268 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 11 | 後期前葉 | 撚糸文（L）。 |
| 116 | H 7 | S K 268 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 後期前葉 | L R横。縦位に沈線4条。 |
| 117 | H 7 | S K 268 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 後期前葉 | 撚糸文（R）。磨消縄文。 |
| 123 | H 2 | S K 330 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 大木10式 | R L横。磨消縄文。 |
| 124 | H 2 | S K 330 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 後期前葉 | 沈線文。 |
| 125 | H 3－2 | S K 355 | R P 129 | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 12 | 大木7式 | 横位に沈線による区画。上半に交互刺突，下半にL R縦。 |

| 挿図番号 | トレンチ名 | 遺構名 | 登録番号 | 器種 | 残存状況 | 計測値（mm） | | | | 時期 | 文様構成・備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 器厚 | | |
| 126 | H３－２ | ＳＫ３５５ | ＲＰ１２８－２ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 11 | 大木７式 | 縦位に結節回転文（ＬＲ）。 |
| 127 | H３－２ | ＳＫ３５５ | ＲＰ１３０ | 深鉢 | ほぼ完形 | 172 | 270 | 88 | 13 | 大木７ａ式 | 山形状口縁。Ｙ字状の隆起線。交互刺突による区画。上半に円形の隆線下半に隆線文。ＬＲ・ＲＬ結束羽状縄文、ＬＲ・ＲＬの結節回転文。補修孔。 |
| 128 | H３－２ | ＳＫ３５５ | ＲＰ１２８－１ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 12 | 大木７ａ式 | ＬＲ縦。胴部から粘土紐貼付隆帯を２条垂下（懸垂文）。 |
| 129 | H３－２ | ＳＫ３５５ | ＲＰ１３９－１ | 深鉢 | 底部 | － | － | 160 | 15 | 大木７式 | 網代痕（網代底土器）。 |
| 130 | H３－２ | ＳＫ３５５ | ＲＰ１３９－２ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 13 | 大木１０式 | ＬＲ横走。隆起線文による区画。 |
| 131 | H３－２ | ＳＫ３５５ | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 8 | 大木７ａ式 | 口唇刻目。平行沈線文の間に交互刺突文。 |
| 132 | H３－２ | ＳＫ３５５ | | 深鉢 | 口縁部 | (440) | － | － | 9 | 大木７ａ式 | 折り返し口縁。縦位の押引きを施す。ＲＬ縦。 |
| 133 | H３－４ | ＳＫ３５８ | ＲＰ１２１ | 深鉢 | 口縁部 | (250) | － | － | 11 | 大木１０式 | ＲＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 134 | H３－４ | ＳＫ３５８ | ＲＰ１３７ | 深鉢 | 口～胴部 | 280 | － | － | 11 | 中期末か | ＬＲ横・ＬＲ多方向。 |
| 135 | H３ | ＳＫ３５８ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 大木７ａ式？ | 無文。 |
| 136 | H３ | ＳＫ３５８ | | 深鉢 | 口縁部 | (400) | － | － | 8 | 大木１０式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 138 | H８－５ | ＳＫ３６４ | ＲＰ１２７ | 深鉢 | 胴～底部 | － | － | 144 | 14 | 中期 | 網代痕（網代底土器）。 |
| 139 | H３－６ | ＳＫ３６４ | ＲＰ１２３－１ | 深鉢 | 口～胴部 | (160) | － | － | 10 | 大木７ｂ式 | 結節状沈線文。縦位にＬ結節回転文。 |
| 140 | H３－６ | ＳＫ３６４ | ＲＰ１２３－３ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 大木７式 | 結節回転文（Ｌ）。 |
| 141 | H３－６ | ＳＫ３６４ | ＲＰ１２３－２ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 大木１０式？ | ＬＲ縦・横。<br>上半に粘土紐貼付隆帯文。 |
| 142 | H３－６ | ＳＫ３６４ | ＲＰ１２２ | 深鉢 | ほぼ完形 | 168 | 264 | 102 | 10 | 大木７ａ式 | 折り返し口縁。ＬＲ横・ＬＲ縦結節回転文。頸部に波状の粘土紐貼付３単位。 |
| 143 | H３ | ＳＫ３６４ | | 深鉢 | 口縁部 | (80) | － | － | 10 | 大木７ａ式 | 折り返し口縁。縄文原体は不明。 |
| 144 | H３ | ＳＫ３６４ | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 13 | 大木７ａ式 | 横位に刺突を施した隆起線文。 |
| 147 | H４ | ＳＫ３９７ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木９式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 148 | H７ | ＳＫ２７０ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 中末～後初 | Ｌ縦？磨消縄文。 |
| 149 | H７ | ＳＫ２７０ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 後期初頭 | 沈線文区画内に縄文（ＬＲ）を充填。磨消縄文。 |
| 151 | H７－９ | ＳＫ２４６ | ＲＰ９５ | 深鉢 | 口～胴部 | 250 | － | － | 10 | 大木１０式 | ＬＲ多方向。磨消縄文。 |
| 152 | H８－８ | ＳＫ３０２ | ＲＰ１１２－１ | 鉢？ | 口縁部 | (324) | － | － | 27 | 大木９式 | 粘土紐貼付隆帯による渦巻文。 |
| 153 | H８－８ | ＳＫ３０２ | ＲＰ１１２－２ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 12 | 大木９式 | 沈線文区画内にＲＬＲ縦を充填。区画外に刺突。充填縄文。 |
| 154 | H８－８ | ＳＫ３０２ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 大木１０式 | ＲＬ横。磨消縄文。 |
| 155 | H８－８ | ＳＫ３０２ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木１０式 | ＬＲ多方向。磨消縄文。 |
| 156 | H８－８ | ＳＫ３０２ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 7 | 大木１０式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 157 | H８－８ | ＳＫ３０２ | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 9 | 大木９ｂ式 | ＬＲ縦。沈線渦巻文。磨消縄文。 |
| 158 | H８－８ | ＳＫ３０２ | | 深鉢 | 口～胴部 | (220) | － | － | 12 | 大木９式 | ＲＬＲ縦。刺突。 |
| 159 | H８－８ | ＳＫ３０２ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木１０式 | 隆起線文。 |
| 160 | H８－８ | ＳＫ３０２ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 大木１０式？ | ＬＲ縦。隆帯文。 |
| 161 | H８－８ | ＳＫ３０２ | | 深鉢 | 口～胴部 | (240) | － | － | 10 | 後期初頭 | 山形状口縁。口縁強く外反。<br>口～頸部無文。<br>胴部上半に横位の隆起線１条。 |
| 162 | H８－８ | ＳＫ３０２ | | 深鉢 | 口～胴部 | (140) | － | － | 8 | 後期初頭 | ＲＬ縦。磨消縄文。 |
| 163 | H８－８ | ＳＫ３０４ | ＲＰ１１４－１ | 深鉢 | 口～底部 | 224 | 305 | 70 | 10 | 中末～後初 | ＬＲ縦。 |
| 164 | H８－８ | ＳＫ３０４ | ＲＰ１１４－２ | 浅鉢 | 口縁部 | － | － | － | 22 | 中期末 | 粘土紐貼付隆帯文による区画。<br>内部に突起２ヶ所。 |
| 166 | H８－８ | ＳＫ３０４ | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 13 | 大木１０式 | ＲＬ縦。磨消縄文。 |
| 167 | H８－８ | ＳＫ３０４ | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 9 | 大木１０式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 168 | H８－８ | ＳＫ３０４ | | 深鉢 | 胴～底部 | － | － | (100) | 10 | 大木１０式 | ＲＬ縦。 |
| 169 | H８－８ | ＳＫ３０４ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 大木１０式 | ＬＲ縦。磨消縄文。渡とう文。 |
| 170 | H８－８ | ＳＫ３０４ | | 深鉢 | 口～胴部 | (320) | － | － | 15 | 中期末 | ＬＲ縦。 |
| 172 | H８－９ | ＳＫ３１０ | ＲＰ１０７ | 深鉢 | 胴～底部 | － | － | 75 | 15 | 後期前葉 | 撚糸文Ｌ縦。<br>胴部下半は被熱より褐色。 |
| 173 | H８－９ | ＳＫ３１０ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 大木１０式 | ＲＬ縦。磨消縄文。 |
| 174 | H８－４ | ＳＫ３２９ | ＲＰ１１３ | 深鉢 | 口～胴部 | 259 | － | － | 12 | 後期初頭 | 波状口縁。方形区画文内にＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 175 | G２ | ＳＸ２０３ | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 13 | 大木７ａ式 | 山形状口縁。口唇・口縁が肥厚する。多方向の押引き。横位に粘土紐貼粒貼付・交互刺突。 |

| 挿図番号 | トレンチ名 | 遺構名 | 登録番号 | 器種 | 残存状況 | 計測値（mm） | | | | 時期 | 文様構成・備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 器厚 | | |
| 176 | H８－３ | ＳＤ２８２ | ＲＰ１１０－２ | 深鉢 | 底部 | － | － | 87 | 9 | 中末～後初 | 無文。ナデを施す。 |
| 177 | H８－３ | ＳＤ２８２ | ＲＰ１１０－１ | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 7 | 後期初頭 | ＬＲＬ縦。磨消縄文。 |
| 178 | H８－３ | ＳＤ２８２ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 17 | 大木９ａ式 | ＲＬＲ横。磨消縄文。 |
| 179 | H８－３ | ＳＤ２８２ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木１０式 | 磨滅しているため原体不明。磨消縄文。 |
| 183 | H１ | ＳＸ２４１ | | 深鉢 | 口縁部 | (240) | － | － | 8 | 大木１０式 | ＲＬ縦。磨消縄文。 |
| 184 | H１ | ＳＸ２４１ | | 深鉢 | － | － | － | － | 10 | 中期末 | 土器の把手部分。赤彩あり。 |
| 185 | H１ | ＳＸ２４１ | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 8 | 後期前葉 | 撚糸文Ｒ。<br>縦位に半截竹管による沈線２条。 |
| 186 | H１ | ＳＸ２４１ | | 深鉢 | 口縁部 | (190) | － | － | 13 | 大木７ｂ式 | 山形状口縁。横位に有節沈線２条 |
| 187 | H１ | ＳＸ２４１ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 11 | 大木６式 | 横位に浮線文１条・半截竹管による押圧２条。 |
| 188 | H１ | ＳＸ２４１ | | 深鉢 | 口～頸部 | － | － | － | 8 | 大木１０式 | 隆起線区画内。磨消縄文。ＲＬ。 |
| 189 | H１ | ＳＸ２４１ | | 深鉢 | 口～頸部 | － | － | － | 18 | 大木６式 | 波状口縁。<br>口縁に沿う粘土紐貼付隆帯文。 |
| 190 | H１ | ＳＸ２４１ | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 13 | 後期前葉 | 撚糸文Ｒ縦。 |
| 191 | H４－７ | ＳＫ４０６ | ＲＰ１４１ | 深鉢 | 口～胴部 | 304 | － | － | 8 | 後期前葉 | 上半に横位のＬ無節縄文押圧。 |
| 192 | H４ | ＳＫ４０８ | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 18 | 後期初頭 | 山形状口縁。把手。ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 193 | H４ | ＳＫ４０８ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木１０式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 194 | H４ | ＳＫ４０８ | | 小型台付鉢 | 台部 | － | － | 41 | 16 | 中期後葉 | 無文。 |
| 197 | H４ | ＳＫ４１１ | | 深鉢 | 口～胴部 | (320) | － | － | 12 | 大木１０式 | ＲＬ縦。磨消縄文。 |
| 198 | H４－７ | ＳＫ４１２ | ＲＰ１４３ | 深鉢 | 口～胴部 | 234 | － | － | 9 | 大木１０式 | ＲＬ縦。口縁上半はナデ。 |
| 199 | H４ | ＳＫ４１２ | | 深鉢か | 把手 | － | － | － | 24 | 後期前葉 | 刺突文。 |
| 200 | H４ | ＳＫ４１２ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 7 | 大木９式 | ＲＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 202 | H４ | ＳＫ４１３ | | 深鉢 | 口～頸部 | － | － | － | 10 | 後期前葉 | 横位に条線文。 |
| 203 | H４ | ＳＰ４１４ | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 10 | 大木１０式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 204 | H４ | ＳＰ４１４ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 7 | 大木１０式 | ＬＲ縦。磨消縄文。赤彩有り。 |
| 205 | H８ | ＳＸ２７７ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木１０式 | 斜行縄文。磨消縄文。<br>磨滅のため原体不明。 |
| 207 | H８ | ＳＸ２８８ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 後期初頭 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 208 | H８ | ＳＸ２８８ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 後期前葉 | ＬＲ横。沈線。 |
| 211 | H５－４ | 遺構外 | ＲＰ１３５－１ | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 37 | 後期前葉 | 山形状口縁。把手。<br>刺突孔や透かし彫りを施す。 |
| 212 | H５－４ | 遺構外 | ＲＰ１３５－２ | 深鉢 | 口縁部 | (210) | － | － | 8 | 後期初頭 | 波状口縁。ＬＲ横走。 |
| 213 | H５－４ | 遺構外 | ＲＰ１３５－３ | 深鉢 | 口縁部 | (300) | － | － | 9 | 後期前葉<br>称名寺式併行 | ＲＬ横。磨消縄文。 |
| 215 | H５－３ | 遺構外 | | 台付鉢 | 脚部 | － | － | － | 7 | 中末～後期 | 無文。 |
| 216 | H５－３ | 遺構外 | | 小型深鉢 | 胴～底部 | － | － | 43 | 7 | 中末～後期 | 無文。撚糸文Ｌ？ |
| 217 | H５－３ | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 16 | 後期前葉 | 無文。外面は指ナデ。<br>内面は多方向の沈線。 |
| 221 | H５ | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 10 | 大木４式 | 口縁部は無文。口唇部に波状の粘土紐貼付。胴部上半に粘土紐貼付文を波状に施す。 |
| 222 | H５ | 遺構外 | | 深鉢 | 口～胴部 | (160) | － | － | 7 | 大洞Ａ式 | 波状口縁。横位に結節回転文ＬＲ。 |
| 231 | H１０－７ | 遺構外 | ＲＰ１４９ | 深鉢 | 口～胴部 | 303 | － | － | 11 | 後期前葉<br>堀之内Ｉ式 | 波状口縁。撚糸文Ｌ縦。沈線を描く５条を１単位とした沈線渦巻文。 |
| 232 | H１０－９ | 遺構外 | ＲＰ１５２ | 深鉢 | 口～底部 | 284 | 315 | 90 | 14 | 後期前葉<br>堀之内Ｉ式 | 波状口縁。口縁直上部に２単位の刺突。撚糸文Ｒ。沈線文。 |
| 233 | H１０－９ | 遺構外 | | 深鉢 | 口～頸部 | (220) | － | － | 22 | 後期前葉 | 口唇部上部・口縁部上半に円孔。<br>磨消縄文。縦位に沈線。 |
| 234 | H１０－１０ | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 9 | 後期か | 横位に１条の沈線。235と同一個体。 |
| 235 | H１０－１０ | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 9 | 後期か | 多方向の沈線。 |
| 240 | H１ | 遺構外 | | 深鉢 | 頸部 | － | － | － | 9 | 大木９式 | ＬＲ。充填縄文。 |
| 241 | H１ | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 13 | 大木９式 | 粘土紐貼付隆帯による渦巻文。 |
| 242 | H１ | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木９式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 243 | H１ | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 7 | 大木９式 | ＬＲ多方向。 |
| 248 | H２ | ＳＸ３３１ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 大木１式 | ＬＲ横・ＲＬ横の羽状縄文。 |
| 249 | H２ | ＳＸ３３１ | | 深鉢か | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木１式 | 斜行縄文。ＬＲ横・ＲＬ横の羽状縄文。 |
| 251 | H２ | ＳＫ３３７ | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 中末～後初 | 沈線区画内にＬＲ縦。 |
| 252 | H３ | ＳＸ３４９ | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 10 | 後期前葉<br>堀之内Ｉ式 | 山形状口縁。円孔と沈線。 |

| 挿図番号 | トレンチ名 | 遺構名 | 登録番号 | 器種 | 残存状況 | 計測値（mm） | | | | 時期 | 文様構成・備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 器厚 | | |
| 253 | H 3 | S X 349 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 9 | 大木７ａ式 | 半截竹管による沈線と刺突。 |
| 254 | H 3 | S X 349 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 7 | 大木７ａ式 | 半截竹管による押引き。 |
| 255 | H 3 | S X 349 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 32 | 大木10式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 256 | H 3 | S K 360 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 9 | 後期前葉 | 撚糸文Ｒ。 |
| 258 | H 3 | S K 366 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 8 | 大木７ａ式 | 沈線区画内に交互刺突。 |
| 259 | H 3 | S K 366 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 8 | 大洞Ｃ式またはＣ₂式 | 網目状撚糸文Ｒ。粗製土器。 |
| 260 | H 3 | S K 367 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 8 | 後期前葉 | 撚糸文Ｒ。磨消縄文。 |
| 262 | H 3 − 8 | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 16 | 大木５式 | 山形状の粘土紐貼付隆帯文。 |
| 263 | H 3 | 遺構外 | | 深鉢 | 脚部 | − | − | − | 24 | 大洞Ａ式 | 底部に脚付きの土器。 |
| 265 | H 4 | S X 384 | | 深鉢 | 口〜胴部 | − | − | − | 11 | 大木10式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 266 | H 4 | S X 384 | | 深鉢 | 口縁部 | (230) | − | − | 11 | 大木７ａ式 | Ｌ縦。横位の隆起線文内に刺突。 |
| 267 | H 4 | S P 390 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 6 | 大木９式 | ＲＬ縦。磨消縄文。 |
| 268 | H 4 | S K 392 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 8 | 大木９式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 269 | H 4 | S K 392 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 7 | 大木10式 | ＲＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 270 | H 4 | S K 396 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 9 | 大木９式 | ＲＬＲ縦。充填縄文。 |
| 271 | H 4 | S K 396 | | 深鉢 | 口縁部 | (180) | − | − | 9 | 大木10式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 272 | H 4 | S K 400 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 9 | 大木10式 | 磨滅しているため原体不明。磨消縄文。 |
| 273 | H 4 | S X 401 | | 深鉢 | 口縁部 | (220) | − | − | 11 | 大木10式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 274 | H 4 | S X 401 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 19 | 後期前葉 | 突起。口唇部から逆Ｙ字状に隆起線を施し、両側に刺突。 |
| 275 | H 4 | S X 401 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 9 | 中期後葉 | ０段多条Ｒ縦。磨消縄文。 |
| 278 | H 4 | S P 402 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 10 | 中期 | ＬＲ縦。 |
| 279 | H 4 | S P 402 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 7 | 大木９式 | 隆沈線文。大木９式古段階。 |
| 280 | H 4 | S K 416 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 14 | 中期末 | ＬＲ縦。 |
| 281 | H 4 | S K 416 | | 深鉢 | 口縁部 | (290) | − | − | 12 | 大木10式 | 隆起線文。 |
| 282 | H 4 | S K 416 | | 深鉢 | 口縁部 | (200) | − | − | 16 | 大木10式 | 山形状口縁。楕円形の円孔。ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 283 | H 4 | S K 416 | | 深鉢 | 口縁部 | (260) | − | − | 10 | 中末〜後期 | 撚糸文Ｒ。 |
| 285 | H 5 | S K 439 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 10 | 大木10式 | Ｌ縦？ |
| 286 | H 5 | S K 466 | | 深鉢 | 口縁部 | (320) | − | − | 11 | 大木10式 | 撚糸文Ｒ。 |
| 287 | H 5 | S K 466 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 8 | 中期後半 | ＲＬ縦。 |
| 288 | H 5 | S P 479 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 9 | 大木10式 | ＬＲ？ |
| 292 | H 5 | S X 493 | | 深鉢 | 口縁部 | (220) | − | − | 11 | 大木10式 | ＲＬ縦。磨消縄文。 |
| 293 | H 6 | S X 219 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 21 | 大木９式 | 隆帯による渦巻文。 |
| 295 | H 6 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 12 | 大木７式 | 結節回転文ＲＬ |
| 296 | H 6 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 8 | 大木９式 | ＲＬＲ縦。 |
| 297 | H 6 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 6 | 大木９式 | 口縁が内湾する。ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 298 | H 6 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 11 | 大木10式 | 上半は無文。下半は１条の沈線。 |
| 299 | H 6 | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 9 | 後期前葉？ | 多条の沈線。 |
| 300 | H 6 − 4 北壁 | 遺構外 | R P 108 − 1 | 深鉢 | 口〜胴部 | − | − | − | 15 | 大木９式 | 口縁部は粘土紐貼付隆帯による渦巻文。胴部は沈線による楕円形区画内にＲＬＲ縦を充填。 |
| 301 | H 6 − 4 北壁 | 遺構外 | R P 108 − 2 | 深鉢 | 口〜胴部 | (362) | − | − | 11 | 中期後葉 | ＬＲ多方向。口縁上半ナデ。 |
| 302 | H 7 | S X 228 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 10 | 大木10式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 303 | H 7 | S X 228 | | 深鉢 | 口〜胴部 | − | − | − | 9 | 後期前葉？ | ＬＲ多方向。半截竹管による連続押圧。 |
| 307 | H 7 | S K 249 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 13 | 大木10式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 308 | H 7 | S K 249 | | 深鉢 | 口縁部 | (210) | − | − | 8 | 中期末 | 口縁部が内湾する。ＲＬ縦。 |
| 309 | H 7 | S K 249 | | 小型深鉢 | 口〜胴部 | − | − | − | 6 | 中末〜後初 | 波状口縁。ＬＲ縦。 |
| 310 | H 7 | S K 249 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 9 | 後期 | 沈線を同心円状に施す。 |
| 311 | H 7 | S X 252 | | 深鉢 | 口〜胴部 | (200) | − | − | 7 | 大木10式 | Ｌ縦。磨消縄文。 |
| 312 | H 7 | S X 252 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 14 | 後期初頭 | 橋状把手。 |
| 313 | H 7 | S K 253 | | 深鉢 | 口縁部 | (190) | − | − | 8 | 大木７式？ | 結節回転文ＬＲ縦を３条施す。 |
| 314 | H 7 | S K 253 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 9 | 大木10式 | 隆起線区画内に縄文を充填。 |
| 315 | H 7 | S K 253 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 6 | 中末〜後初 | 隆沈線文による施文。 |
| 317 | H 7 | S X 255 | | 深鉢 | 口縁部 | − | − | − | 9 | 大木10式 | 粘土紐貼付による把手。ＲＬ縦。赤彩あり。 |
| 318 | H 7 | S X 255 | | 深鉢 | 胴部 | (310) | − | − | 8 | 大木10式 | ＲＬ縦。磨消縄文。 |
| 319 | H 7 | S X 255 | | 深鉢 | 胴部 | − | − | − | 8 | 大木10式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 321 | H 7 | S X 255 | | 深鉢 | 口縁部 | (310) | − | − | 14 | 中末〜後初 | ＬＲ縦。口唇部肥厚。 |

| 挿図番号 | トレンチ名 | 遺構名 | 登録番号 | 器種 | 残存状況 | 計測値（mm） | | | | 時期 | 文様構成・備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 器厚 | | |
| 325 | H 7 | ＥＵ 262 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 11 | 中期末 | ＬＲ縦。 |
| 326 | H 7 | ＳＫ 272 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木 10 式 | 隆起線文によるＹ字状区画。 |
| 329 | H 7 | 遺構外 | | 壺 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大洞Ａ式 | 沈線による匠字状の文様。 |
| 330 | H 8 | ＳＫ 274 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木 10 式 | 横位に隆沈線。 |
| 333 | H 8 | ＳＫ 276 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 7 | 大木９式 | ＬＲＬ縦。縦位の沈線。 |
| 334 | H 8 | ＳＫ 276 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 11 | 大木 10 式 | ＲＬ縦。磨消縄文。 |
| 335 | H 8 | ＳＫ 278 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 8 | 後期前葉 | 口縁上半に横位に隆沈線。下半に渦巻状の沈線文。 |
| 336 | H 8 | ＳＫ 278 | | 深鉢 | 口縁部 | (280) | － | － | 9 | 大木 10 式 | ＬＲ縦。口縁上半にナデ。 |
| 338 | H 8 | ＳＸ 279 | | 深鉢 | 口～胴部 | － | － | － | 11 | 中期末 | ＲＬＲ縦。 |
| 339 | H 8 | ＳＸ 279 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 10 | 中末～後初 | 横位の隆起線文。ＬＲ。 |
| 340 | H 8 | ＳＸ 279 | | 深鉢 | 口縁部 | (140) | － | － | 9 | 後期前葉 | ＬＲ縦。沈線による入組状の文様。 |
| 345 | H 8 | ＳＸ 289 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 8 | 後期前葉 | 撚糸文Ｒ縦。沈線文。 |
| 346 | H 8 | ＳＰ 294 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 7 | 後期前葉 | 網目状撚糸文Ｒ。 |
| 347 | H 8 | ＳＫ 295 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 後期前葉 | 撚糸文Ｒ。２条の沈線。 |
| 348 | H 8 | ＳＸ 292 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木 10 式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 350 | H 8 | ＳＫ 296 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 14 | 大木９式 | 隆帯による渦巻文。 |
| 351 | H 8 | ＳＫ 296 | | 深鉢 | 口縁部 | (160) | － | － | 7 | 後期前葉 | 波状口縁。円孔、刺突が施された ボタン状貼付文。 |
| 352 | H 8 | ＳＰ 297 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 6 | 大木９式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 353 | H 8 | ＳＫ 299 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木 10 式 | ＲＬ横。磨消縄文。 |
| 354 | H 8 | ＳＫ 300 | | 台付鉢（浅鉢） | 台部 | － | － | － | 13 | 中期末 | 縄文。磨滅のため原体不明。 |
| 355 | H 8 | ＳＰ 308 | | 深鉢 | 口縁部 | (220) | － | － | 9 | 中期末 | ＬＲ縦。 |
| 356 | H 8 | ＳＫ 314 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 後期前葉 | 沈線。竹管による円形刺突。 |
| 357 | H 8 | ＳＸ 322 | | 深鉢？ | 口縁部 | － | － | － | 14 | 大木 10 式 | 隆沈線区画内に刺突。 |
| 358 | H 8 | ＳＸ 322 | | 深鉢 | 口～頸部 | (210) | － | － | 10 | 大木 10 式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 359 | H 8 | ＳＸ 322 | | 深鉢 | 口縁部 | (180) | － | － | 7 | 大木 10 式 | 山形状口縁。中央部に直径 25mm の円孔。 |
| 360 | H 8 | ＳＸ 322 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 7 | 大木 10 式 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 361 | H 8 | ＳＸ 322 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 9 | 大木 10 式 | 縄文。磨消縄文。磨滅のため原体不明。 |
| 362 | H 8 | ＳＸ 322 | | 浅鉢 | 口縁部 | (240) | － | － | 13 | 大木 10 式 | 隆線区画内にＲＬ。 |
| 363 | H 8 | ＳＸ 322 | | 深鉢 | 口縁部 | (210) | － | － | 8 | 大木 10 式？ | ＬＲ縦。 |
| 364 | H 8 | ＳＸ 322 | | 深鉢 | 口～胴部 | (310) | － | － | 13 | 中期末 | ＲＬＲ縦。 |
| 370 | H 9－6 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | (260) | － | － | 17 | 後期初頭 | 波状口縁。縦位にヒレ状の隆起線文。 |
| 371 | H 9 | 遺構外 | | 深鉢 | 口～頸部 | － | － | － | 9 | 後期前葉 | ＬＲ横走。口縁部無文。横位に沈線。 |
| 372 | H 9 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 8 | 後期前葉 | 波状口縁。５多方向。沈線文。 |
| 373 | H 9 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 7 | 後期前葉 | 半截竹管による沈線。 |
| 374 | H 12－7 | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 大木９式 | ＲＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 375 | H 12 | 遺構外 | | 深鉢 | 口縁部 | － | － | － | 10 | 大木６式 | 波状口縁。横位に半截竹管による刺突。 |
| 376 | H 12 | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 10 | 大木 10 式 | 隆起線文。 |
| 385 | I 6 | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 6 | 大木 10 式 | ＬＲ縦。 |
| 389 | J 8 | 遺構外 | | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | 8 | 後期前葉 | 沈線文、撚糸文。原体は不明。 |

土製品

| 挿図番号 | トレンチ名 | 遺構名 | 登録番号 | 器種 | 計測値（mm） | | | 重（g） | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 長 | 幅 | 厚 | | | |
| 36 | Ａ上部西 | ＳＰ 94 | | 円盤形土製品 | 42 | 41 | 6 | 11.67 | 後期前葉 | 撚糸文（Ｒ）の上に沈線。 |
| 118 | H 7 | ＳＫ 268 | | 土製耳飾り？ | 29 | 28 | － | 16.63 | 中期 | 丁寧な調整。 |
| 195 | H 4 | ＳＫ 408 | | 土偶？ | 45 | 46 | 20 | 30.06 | 不明 | 指ナデ。 |
| 214 | H 5－4 | 遺構外 | ＲＰ 130 | 土製耳飾り | 50 | 50 | 25 | 48.91 | 不明 | 滑車型。 |
| 218 | H 5－6 | 遺構外 | | 円盤形土製品 | 50 | 46 | 11 | 23.44 | 後期初頭 | ＬＲ縦。磨消縄文。 |
| 219 | H 5－6 | 遺構外 | | 円盤形土製品 | 43 | 42 | 9 | 20.46 | 後期前葉 | 撚糸文（Ｒ） |
| 220 | H 5－8 | 遺構外 | | 腕輪状土製品 | 45 | 42 | 11 | 20.45 | 後期前葉 | 隆沈線。 |
| 289 | H 5 | ＳＰ 479 | | 円盤形土製品 | 45 | 41 | 8 | 17.77 | 中期後葉 | ＬＲ縦。 |
| 290 | H 5 | ＳＰ 479 | | 円盤形土製品 | 41 | 40 | 7 | 11.82 | 後期？ | 外面摩滅。 |
| 316 | H 7 | ＳＫ 253 | | 円盤形土製品 | 32 | 31 | 9 | 9.35 | 後期か | 無文。 |
| 320 | H 7 | ＳＸ 255 | | 円盤形土製品 | 43 | 40 | 5 | 12.81 | 中期～後期 | ＲＬＲ縦。 |
| 327 | H 7－8 | 遺構外 | | 土製耳飾り？ | 30 | 28 | 25 | 14.20 | 後期か | 器面全体に指ナデ。 |
| 328 | H 7－10 | 遺構外 | | 円盤形土製品 | 62 | 54 | 9 | 38.16 | 後期前葉？ | ＬＲ。 |

## 土師器・須恵器

| 挿図番号 | トレンチ | 遺構名 | 登録番号 | 種別 | 器種 | 残存状況 | 計測値（mm） | | | | 色調 | 外面調整 | 内面調整 | 底部・天井部成形 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 器厚 | | | | | |
| 1 | C 4 下部 | S T 3 | R P 4 －1 | 土師器 | 壺 | 口～底部（復元） | 104 | 70 | 154 | 6 | 7.5YR7/6 橙 | ナデ ハケメ ケズリ | ナデ ケズリ | 未築痕 | 焼成不良。 |
| 2 | C 4 下部 | S T 3 | R P 4 －2 | 土師器 | 甕 | 口～頸部 | 188 | － | （74） | 9 | 7.5YR8/6 浅黄橙 | ロクロ タタキ | ロクロ | | |
| 3 | C 4 下部 | S T 3 | R P 25 | 土師器 | 甕 | 口～体部 | 222 | （258） | － | 5 | 5 YR6/6 橙 | ロクロ タタキ カキメ ケズリ | ロクロ カキメ | | 細砂少量。 |
| 4 | C 4 下部 | S T 3 | R P 1 | 須恵器 | 横瓶 | 体部 | － | － | （110） | 13 | 5 Y4/1 灰 N 7/0 灰白 | タタキ（格子） | アテ（青海波文） | | 9 C前～中。自然釉付着。海綿骨針。 |
| 5 | C 4 下部 | S T 3 | | 須恵器 | 坏 | 口～体部 | （144） | － | （30） | 4 | 2.5Y5/2 暗灰黄 2.5Y6/2 灰黄 | ロクロ | ロクロ | | 9 C中頃。火襷痕 |
| 15 | F区 | S X 157 | R P 71 | 土師器 | 甕 | ほぼ完形 | 252 | 105 | 327 | 9 | 5 YR7/8 橙 | ナデ タタキ ケズリ | ナデ | ケズリ | 9 C前～中。 |
| 16 | F区 | S X 157 | R P 71 －1 | 土師器 | 甕 | 口～体部 | 202 | － | （86） | 10 | 10YR8/6 黄橙 | ナデ ケズリ タタキ | ナデ ハケメ | | |
| 17 | F区 | S X 157 | R P 71 －2 | 土師器 | 甕 | 口～体部 | 188 | － | （72） | 12 | 7.5YR8/6 浅黄橙 | ナデ タタキ ケズリ | ナデ ハケメ | | |
| 18 | F区 | S X 157 | R P 71 －3 | 土師器 | 甕 | 口～体部 | 230 | － | （95） | 9 | 7.5YR7/6 橙 | ナデ | ナデ ハケメ | | |
| 67 | H 1 －8 | S T 238 | R P 92 | 土師器 | 鍋 | 口～体部 | 260 | － | 101 | 7 | 7.5YR7/8 黄橙 5 YR6/8 橙 | ロクロ ケズリ | ロクロ カキメ | | |
| 68 | H 1 | S T 238 | | 土師器 | 甕 | 口～頸部 | （188） | － | （52） | 10 | 5 YR6/8 橙 | ロクロ タタキ | ロクロ | | |
| 69 | H 1 | S T 238 | | 須恵器 | 横瓶 | 体部 | － | － | （102） | 9 | N 3/0 暗灰 2.5 Y 5/1 黄灰 | ロクロ タタキ（格子） | ロクロ アテ（青海波文） | | 海綿骨針。 |
| 70 | H 1 －1 | S T 240 | R P 97 | 土師器 | 甕 | 口～体部 | （238） | － | （74） | 7 | 5 YR7/6 橙 7.5YR8/6 浅黄橙 | ロクロ ナデ | ロクロ ナデ | | |
| 71 | H 1 －1 | S T 240 | R P 98 | 土師器 | 甕 | 体～底部 | － | 77 | （123） | 8 | 7.5YR8/6 浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 | ロクロ ケズリ | ロクロ | 回転糸切り | 9 C中頃。 |
| 72 | H 1 | S T 240 | | 須恵器 | 甕 | 肩部 | － | － | （57） | 8 | 2.5 Y 5/1 黄灰 2.5 Y 6/2 灰黄 | ロクロ タタキ（板目） | ロクロ | | |
| 73 | H 1 | S T 240 | | 須恵器 | 高台付坏 | 体～底部 | － | （114） | （29） | 9 | N 5/0 灰 2.5 Y 5/1 黄灰 | ロクロ | ロクロ | 回転糸切り | 海綿骨針。 |
| 165 | H 1 | S K 304 | | 須恵器 | 甕 | 体部 | － | － | （60） | 5 | 5 YR3/2 暗赤褐 N 4/1 灰 | タタキ（板目） | アテ（同心円文） | | |
| 238 | H 1 | E K 259 | | 須恵器 | 坏 | 口～体部 | （140） | － | （23） | 5 | 2.5 Y 6/2 灰黄 5 Y 6/2 灰オリーブ | ロクロ | ロクロ | | 海綿骨針。 |
| 239 | H 1 | E K 259 | | 土師器 | 甕 | 口～体部 | （224） | － | （135） | 9 | 7.5YR6/6 橙 | ロクロ ケズリ | ロクロ | | |
| 304 | H 7 | S X 228 | | 須恵器 | 甕 | 頸部 | － | － | （41） | 6 | N 5/0 灰 | ロクロ | ロクロ | | |
| 383 | I 2 | 遺構外 | | 須恵器 | 甕 | 体部 | － | － | （36） | 7 | 7.5 Y 5/1 灰 N 6/0 灰 | ロクロ タタキ（板目） | ロクロ アテ（同心円文） | | 自然釉付着。 |
| 384 | I 4 | 遺構外 | | 須恵器 | 甕 | 体部 | － | － | （55） | 8 | N 3/0 暗灰 N 6/0 灰 | タタキ（板目） | アテ（同心円文） | | 自然釉付着。 |
| 386 | I 6 | 遺構外 | | 須恵器 | 坏 | 口～体部 | （148） | － | （39） | 4 | 7.5 Y 6/1 灰 | ロクロ | ロクロ | | 9世紀中頃。海綿骨針。 |
| 387 | J 10 | 遺構外 | | 須恵器 | 蓋 | 口～天井部 | （157） | － | （22） | 9 | 7.5 Y 6/1 灰 | ロクロ | ロクロ | 回転箆ケズリ | |
| 388 | J 17 | 遺構外 | | 須恵器 | 甕 | 体部 | － | － | （49） | 10 | N 8/0 灰白 N 6/0 灰 | タタキ（板目） | アテ（青海波文） | | |

表３　遺構出土石器観察表

| 図版番号 | トレンチ名 | 遺構名 | 登録番号 | 器種 | 長（mm） | 幅（mm） | 厚（mm） | 重（g） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | C４上部トレンチ | ＳＴ３ | | 凹基石鏃 | 27.2 | 13.7 | 3.1 | 0.64 |
| 14 | C３・Dトレンチ | ＳＤ25 | | エンドスクレイパー | 64.8 | 45.8 | 21 | 71.45 |
| 30 | A上部西トレンチ | ＳＫ89 | | 錐形石器 | 23.4 | 18.5 | 7.4 | 2.16 |
| 53 | Bトレンチ | ＳＫ110 | | 凸基石鏃 | 21.8 | 13.4 | 3.9 | 0.78 |
| 60 | C４上部トレンチ | ＳＸ23 | | ヘラ形石器 | 90.5 | 42.6 | 26.5 | 106.3 |
| 64 | F区 | ＳＫ146 | | 横形石匙 | 58.7 | 91.1 | 12.8 | 55.65 |
| 66 | F区 | 遺構外 | RQ78 | ハンマーストーン | 83.3 | 77.7 | 54.7 | 512.75 |
| 87 | H７トレンチ | ＳＴ242 | | ハンマーストーン | 48.8 | 45.2 | 24.8 | 42.87 |
| 88 | H７トレンチ | ＳＴ242 | | 錐形石器 | 36 | 16.1 | 7.9 | 4.37 |
| 89 | H７トレンチ | ＳＴ242 | | エンドスクレイパー | 35.5 | 22.7 | 5.6 | 4.57 |
| 90 | H７トレンチ | ＳＴ242 | | 単刃スクレイパー | 63.8 | 34.5 | 10.9 | 22.81 |
| 91 | H７トレンチ | ＳＴ242 | | 石核 | 55.1 | 84 | 51.2 | 252.65 |
| 92 | H７トレンチ | ＳＴ242 | | ハンマーストーン | 53.5 | 46.5 | 37.2 | 93.62 |
| 103 | H７トレンチ | ＥＬ247 | | 半両面加工石器 | 68.6 | 61.3 | 23.8 | 89.6 |
| 110 | H７トレンチ | ＳＫ254 | | 単刃スクレイパー | 35.7 | 37.1 | 10.6 | 13.47 |
| 111 | H７トレンチ | ＳＫ254 | | 石刃 | 45.9 | 16.2 | 4.1 | 2.93 |
| 112 | H７トレンチ | ＳＫ254 | RQ104 | 棒状礫 | 301 | 89.1 | 83.5 | 3687.58 |
| 113 | H７トレンチ | ＳＫ254 | RQ111 | 石皿 | 125.7 | 194.3 | 58.9 | 1268.36 |
| 119 | H７トレンチ | ＳＫ268 | RQ102 | 石錘？ | 93.8 | 97.8 | 54 | 328.2 |
| 120 | H８トレンチ | ＳＫ286 | | 錐形石器 | 51.7 | 19.3 | 10.4 | 10.99 |
| 121 | H７トレンチ | ＳＰ271 | | 錐形石器 | 48.5 | 47.4 | 8.3 | 16.59 |
| 122 | H７トレンチ | ＳＰ271 | RQ91 | 石皿 | 250.4 | 250.9 | 94.4 | 7300 |
| 137 | H３トレンチ | ＳＫ358 | | 半両面加工石器か、短形剥片石核 | 61.8 | 44.3 | 16.3 | 47.39 |
| 145 | H３トレンチ | ＳＫ364 | | 円盤形石器 | 39 | 39.3 | 15.3 | 23.55 |
| 146 | H３トレンチ | ＳＫ364 | | 短形剥片石核 | 46.1 | 43 | 19.3 | 36.35 |
| 150 | H７トレンチ | ＳＫ270 | | 半両面加工石器 | 88.4 | 37.3 | 20.5 | 69.21 |
| 171 | H８トレンチ | ＳＫ304 | | 石錐状石製品 | 61.3 | 142 | 19.2 | 152.78 |
| 180 | H８トレンチ | ＳＤ282 | | 尖頭スクレイパー | 63.3 | 27.1 | 6.8 | 12.02 |
| 181 | H８トレンチ | ＳＤ282 | | 単刃スクレイパー | 52.6 | 47.2 | 12.2 | 25.22 |
| 182 | H８トレンチ | ＳＤ282 | | 短形剥片石核 | 54.5 | 69 | 19.9 | 62.28 |
| 196 | H４トレンチ | ＳＫ407 | RQ146 | 扁平礫 | 160.8 | 180.1 | 57.1 | 1921.42 |
| 201 | H４トレンチ | ＳＫ412 | | ヘラ形石器 | 44.3 | 17.7 | 14.1 | 12.01 |
| 206 | H８トレンチ | ＳＸ277 | RQ105 | 扁平礫 | 104.5 | 119.6 | 117.9 | 2220 |
| 209 | H８トレンチ | ＳＸ288 | | 鋸歯縁石器 | 93.3 | 29.5 | 21.1 | 45.2 |
| 210 | H８トレンチ | ＳＸ288 | | 石刃 | 37.2 | 22.4 | 6.6 | 4.86 |
| 223 | H５トレンチ | 遺構外 | RQ117 | 磨形石匙 | 53.3 | 16 | 5.6 | 4.1 |
| 224 | H５トレンチ | 遺構外 | RQ119 | 磨形石匙 | 65 | 22 | 9.9 | 10.38 |
| 225 | H５トレンチ | 遺構外 | | 棒状礫？ | 133.4 | 148.7 | 37.2 | 785.05 |
| 226 | H５トレンチ | 遺構外 | RQ133 | 凹石 | 70.5 | 62.2 | 35 | 116.21 |
| 227 | H５トレンチ | 遺構外 | RQ116 | 凹石 | 256.4 | 160.2 | 87.8 | 1966.43 |
| 228 | H５トレンチ | 遺構外 | RQ118 | 凹石 | 123.5 | 71.3 | 33.9 | 211.98 |
| 229 | H５トレンチ | 遺構外 | | 石核 | 120.3 | 120.8 | 110.8 | 1839.03 |
| 230 | H５トレンチ | 遺構外 | RQ131 | 棒状礫 | 104.8 | 61.5 | 53.6 | 565.88 |
| 236 | H 10 トレンチ | 遺構外 | RQ150 | 凹石 | 107.4 | 103 | 48.6 | 536.23 |
| 237 | H 10 トレンチ | 遺構外 | RQ151 | 棒状礫 | 145.1 | 91.7 | 78.5 | 1383.38 |
| 244 | H１トレンチ | 遺構外 | | 石刃 | 58.9 | 25.8 | 10.6 | 16.03 |
| 245 | H１トレンチ | 遺構外 | | 楔形石器 | 37.2 | 43.2 | 12.7 | 20.78 |
| 246 | H１トレンチ | 遺構外 | | 短形剥片石核 | 74.5 | 88.7 | 39.1 | 230.59 |
| 247 | H１トレンチ | 遺構外 | | 半両面加工石器 | 84.1 | 61.8 | 22.3 | 98.11 |
| 250 | H２トレンチ | ＳＫ331 | | 横長剥片石核 | 33.4 | 56.6 | 19.1 | 29.14 |
| 257 | H３トレンチ | ＳＰ362 | RQ138 | ヘラ形石器 | 70.2 | 33 | 8.8 | 21.13 |
| 261 | H３トレンチ | ＳＫ368 | | 加工痕を有する石刃 | 76.8 | 34 | 14.7 | 39.15 |
| 264 | H３トレンチ | 遺構外 | RQ124 | 磨製石斧 | 79.2 | 52.6 | 33.8 | 198.99 |
| 276 | H４トレンチ | ＳＫ401 | RQ140 | 凸基石鏃 | 27.8 | 14.2 | 6.7 | 2.21 |
| 277 | H４トレンチ | ＳＫ401 | | 尖頭スクレイパー | 52.1 | 20 | 5 | 5.34 |
| 284 | H４トレンチ | 遺構外 | RQ115 | 凹石 | 109.1 | 59.1 | 28.6 | 128.71 |
| 291 | H５トレンチ | ＳＰ478 | | 短形剥片石核 | 67.6 | 29.9 | 24.1 | 41.53 |
| 294 | H６トレンチ | ＳＫ222 | RQ96 | 両面加工石器 | 85.7 | 33.6 | 20.9 | 58.77 |
| 305 | H７トレンチ | ＳＸ228 | | 石刃 | 68.4 | 33.1 | 12.5 | 24.46 |

| 図版番号 | トレンチ名 | 遺構名 | 登録番号 | 器種 | 長（mm） | 幅（mm） | 厚（mm） | 重（g） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 306 | H７トレンチ | ＳＸ 228 | | 短形剥片石核 | 42.3 | 58.3 | 19.1 | 46.52 |
| 322 | H７トレンチ | ＳＸ 255 | | 短形剥片石核 | 32.3 | 51.4 | 17.2 | 22.98 |
| 323 | H７トレンチ | ＳＸ 255 | | 短形剥片石核 | 65.3 | 39.8 | 18.5 | 37.8 |
| 324 | H７トレンチ | ＳＤ 256 | | 石刃 | 74.6 | 17.8 | 8.7 | 11.91 |
| 331 | H８トレンチ | ＳＫ 274 | | 鋸歯縁石器 | 54.7 | 48.2 | 11.4 | 33.59 |
| 332 | H８トレンチ | ＳＫ 274 | | 楔形石器 | 39.2 | 60.7 | 16.1 | 37.27 |
| 337 | H８トレンチ | ＳＸ 278 | | 鋸歯縁石器 | 51.8 | 32.3 | 15.6 | 24.12 |
| 341 | H８トレンチ | ＳＸ 279 | | エンドスクレイパー | 51.6 | 34.2 | 13 | 25.18 |
| 342 | H８トレンチ | ＳＸ 279 | | 半両面加工石器 | 73.9 | 48 | 15.2 | 46.58 |
| 343 | H８トレンチ | ＳＸ 279 | | 石刃 | 63.3 | 20.3 | 7.3 | 8.61 |
| 344 | H８トレンチ | ＳＸ 279 | | 短形剥片石核 | 68.5 | 75 | 35.1 | 187.83 |
| 349 | H８トレンチ | ＳＸ 292 | | エンドスクレイパー | 40.9 | 22 | 7.8 | 7.53 |
| 365 | H８トレンチ | ＳＸ 322 | | 単刃スクレイパー | 75.6 | 46.8 | 16.9 | 55.26 |
| 366 | H８トレンチ | ＳＸ 322 | | 複刃スクレイパー | 73.2 | 35.1 | 14.9 | 40.99 |
| 367 | H８トレンチ | ＳＸ 322 | | 石刃 | 86 | 29 | 8.8 | 4.29 |
| 368 | H８トレンチ | ＳＸ 322 | | 石刃 | 76.2 | 13.9 | 5.8 | 16.81 |
| 369 | H８トレンチ | ＳＸ 322 | | 短形剥片石核 | 70.9 | 72.2 | 20.8 | 84.53 |
| 377 | Ｊ５トレンチ | ＳＸ 527 | RQ159 | 短形剥片石核 | 77.5 | 87.4 | 60.1 | 442.52 |
| 378 | Ｊ５トレンチ | ＳＸ 527 | RQ160 | 棒状礫 | 255.7 | 105.7 | 80.3 | 4520 |
| 379 | Ｊ 16 トレンチ | ＳＫ 694 | RQ163 | 凸基石鏃 | 23.1 | 14.8 | 4.6 | 1.24 |
| 380 | Ｊ 14－５トレンチ | 遺構外 | RQ157 | ヘラ形石器 | 72.8 | 34.5 | 15 | 98.68 |
| 381 | ＫⅠ区 | 遺構外 | RQ155 | 縦形石匙 | 78.7 | 31 | 11.9 | 24.02 |
| 382 | ＫⅠ区 | 遺構外 | RQ156 | ヘラ形石器 | 115.8 | 48.3 | 19.2 | 37.8 |
| 390 | Ｊ３－10 トレンチ | 遺構外 | RQ158 | 半両面加工石器 | 128.6 | 95 | 30.2 | 352.88 |

表４　ＳＸ２４１出土石器観察表

| 図版番号 | 接合番号 | 器種 | 長（mm） | 幅（mm） | 厚（mm） | 重（g） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 391 | | 石鏃未製品 | 27.3 | 22.5 | 5 | 1.95 |
| 392 | | 石鏃未製品 | 20.1 | 23.4 | 4.1 | 2.22 |
| 393 | | 凸基石鏃 | 41.4 | 15.5 | 3.6 | 2.06 |
| 394 | | 錐形石器 | 40.1 | 27.3 | 10.5 | 6 |
| 395 | | エンドスクレイパー | 69 | 14 | 12.8 | 12.4 |
| 396 | | エンドスクレイパー | 35 | 31 | 6.5 | 5.89 |
| 397 | | 槍先形尖頭器 | 75.9 | 39.6 | 8.7 | 23.86 |
| 398 | | 尖頭スクレイパー | 46.4 | 23.4 | 7.7 | 15.08 |
| 399 | | 複刃スクレイパー | 49.8 | 35 | 17.1 | 28.3 |
| 400 | | 単刃スクレイパー | 32.5 | 61.9 | 12.2 | 18.92 |
| 402 | J1－1 | 石刃核成形剥片 | 55.8 | 71.5 | 20 | 62.87 |
| 403 | J1－2 | 石刃核成形剥片 | 60.6 | 58.7 | 26.9 | 76.45 |
| 404 | J1－3 | 石刃核成形剥片 | 54.9 | 43 | 11.5 | 17.97 |
| 405 | J1－4 | 石刃核成形剥片 | 53 | 35 | 8.3 | 12.54 |
| 406 | J1－5 | 石刃核成形剥片 | 45.8 | 37.9 | 7.1 | 12.97 |
| 407 | J1－6 | 石刃核成形剥片 | 44.9 | 57.3 | 11.9 | 29.3 |
| 408 | J1－7 | 石刃核成形剥片 | 35.1 | 43.9 | 9.8 | 15.01 |
| 409 | J1－8 | 石刃核成形剥片 | 33.1 | 56.5 | 12.3 | 27.23 |
| 410 | J1－9 | 石刃核整形剥片 | 40.4 | 30.7 | 11.2 | 16.23 |
| 411 | J1－10 | 石刃核整形剥片 | 56.7 | 26.7 | 8.4 | 10.57 |
| 412 | J1－11 | 打面再生剥片 | 51.2 | 49.8 | 12.1 | 30.23 |
| 413 | J1－12 | 打面再生剥片 | 44.7 | 17.9 | 12.6 | 6.93 |
| 414 | J1－13 | 打面再生剥片 | 28.7 | 39.2 | 13.5 | 9.02 |
| 415 | J1－14 | 打面再生剥片 | 36.4 | 39.9 | 11.1 | 13.22 |
| 416 | J1－15 | 石刃核 | 74.4 | 54.4 | 45.4 | 187.8 |
| 418 | J2－1 | 稜成形剥片 | 42.9 | 55.1 | 13.9 | 20.13 |
| 419 | J2－2 | 稜成形剥片 | 36.9 | 36.2 | 9.5 | 10.22 |
| 420 | J2－3 | 石刃 | 58.7 | 21.3 | 5.9 | 6.75 |
| 421 | J2－4 | 機付き石刃 | 109.5 | 27.1 | 13.6 | 23.66 |
| 422 | J2－5 | 石刃 | 77.5 | 36.2 | 13 | 26.29 |
| 424 | J3－1 | 石刃核成形剥片 | 62.7 | 73.4 | 22 | 81.02 |
| 425 | J3－2 | 石刃核成形剥片 | 57.7 | 81.1 | 20.3 | 85.81 |
| 426 | J3－3 | 石刃核成形剥片 | 18.9 | 50.5 | 4.5 | 3.05 |
| 427 | J3－4 | 石刃 | 61.6 | 17.9 | 7.7 | 4.95 |
| 428 | J3－5 | 石刃 | 58 | 31.4 | 9.9 | 12.98 |
| 430 | J4－1 | 石刃核成形剥片 | 40.3 | 70.5 | 15.1 | 32.33 |
| 431 | J4－2 | 石刃核成形剥片 | 87.9 | 68.5 | 39.5 | 144.04 |
| 432 | J4－3 | 石刃核成形剥片 | 42.8 | 47.3 | 11.9 | 22.01 |
| 433 | J4－4 | 機付き石刃 | 97.9 | 39.8 | 22.7 | 57.62 |
| 435 | J5－1 | 石刃 | 37.8 | 18.3 | 9.7 | 5.09 |
| 436 | J5－2 | 石刃 | 69.6 | 24.2 | 11.1 | 19.45 |
| 437 | J5－3 | 石刃 | 47.4 | 19.8 | 9.1 | 8.46 |
| 439 | J6－1 | 石刃 | 65.6 | 28.6 | 6.8 | 7.36 |
| 440 | J6－3 | 機付き石刃 | 70.6 | 23.7 | 9.1 | 9.8 |
| 441 | J6－2 | 縦形剥片 | 39.1 | 29 | 7.8 | 5.89 |
| 443 | J7－1 | 打面再生剥片 | 52.5 | 44 | 13.4 | 17.63 |
| 444 | J7－2 | 打面再生剥片 | 58.7 | 70.1 | 17.5 | 58.27 |
| 446 | J8－1 | 打面再生剥片 | 32.9 | 31.9 | 9.4 | 7.33 |
| 447 | J8－2 | 打面再生剥片 | 44 | 39.8 | 10.6 | 11.58 |
| 448 | | 石刃核 | 81 | 73.1 | 56.6 | 405.48 |
| 449 | | 石刃核 | 71 | 60.7 | 64.4 | 236.41 |
| 450 | | 石刃核 | 71.3 | 46.7 | 35.3 | 119.04 |
| 451 | | 石刃核 | 72 | 71.6 | 35.9 | 188.87 |
| 452 | | 機付き石刃 | 92.5 | 42.5 | 22.7 | 45.09 |
| 453 | | 機付き石刃 | 79.1 | 28.5 | 21 | 35.42 |
| 454 | | 機付き石刃 | 59.9 | 22.8 | 9.6 | 13.75 |
| 455 | | 打面再生剥片 | 69.7 | 48.3 | 24.6 | 50.84 |
| 456 | | 打面再生剥片 | 63 | 59 | 17.4 | 46.09 |
| 457 | | 打面再生剥片 | 81 | 63.4 | 19.4 | 90.55 |

| 図版番号 | 接合番号 | 器種 | 長（mm） | 幅（mm） | 厚（mm） | 重（g） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 458 | | 石刃 | 69.9 | 26.4 | 3.8 | 15.65 |
| 459 | | 石刃 | 59.3 | 16.5 | 13.1 | 12.42 |
| 460 | | 石刃 | 86.1 | 29.9 | 8 | 20.77 |
| 461 | | 石刃 | 65 | 25.5 | 5.1 | 8.37 |
| 462 | | 石刃 | 55.9 | 17.4 | 4.1 | 3.32 |
| 463 | | 石刃 | 28.1 | 16.1 | 4.5 | 2.17 |
| 464 | | 石刃 | 35.9 | 28.1 | 7.4 | 7.1 |
| 465 | | 石刃 | 29 | 23 | 6.5 | 3.92 |
| 467 | J9 － 1 | 厚手剥片 | 44.7 | 51.7 | 17.9 | 33.39 |
| 468 | J9 － 2 | 同時剥れ剥片 | 31.7 | 17.3 | 12 | 3.9 |
| 469 | J9 － 3 | 厚手剥片 | 44.7 | 53 | 13.4 | 33.42 |
| 470 | J9 － 4 + 5 + 6 + 7 | 厚手剥片 | 84.7 | 65.8 | 25.3 | 127.96 |
| 471 | J9 － 4 | 厚手剥片 | 51.4 | 40.5 | 25.5 | 56.19 |
| 472 | J9 － 6 | 短形剥片石核 | 66.3 | 50.8 | 21.4 | 53.2 |
| 474 | J10 － 1 | 短形剥片石核 | 54.3 | 45.2 | 17.7 | 48.65 |
| 475 | J10 － 2 | 厚手剥片 | 65.7 | 55.8 | 26.4 | 66.92 |
| 476 | J10 － 3 | 打面作出剥片 | 40.8 | 32.1 | 13.6 | 18.87 |
| 477 | J10 － 4 | 短形剥片石核 | 66.2 | 57.4 | 28.4 | 78.02 |
| 479 | J11 － 1 | 分割剥片 | 42.2 | 73.6 | 44.8 | 72.82 |
| 480 | J11 － 2 | 厚手剥片 | 54.4 | 28.9 | 16.9 | 27.02 |
| 481 | J11 － 3 | 短形剥片石核 | 45.4 | 34.6 | 18.7 | 24.95 |
| 482 | J11 － 4 | 石核 | 60.6 | 34.6 | 39.8 | 87.73 |
| 484 | J12 － 1 | 厚手剥片 | 38.5 | 56.9 | 23.5 | 41.34 |
| 485 | J12 － 2 | 打面作出剥片 | 38 | 37.9 | 20.7 | 25.56 |
| 486 | J12 － 3 | 短形剥片石核 | 52.9 | 50.4 | 26.4 | 47.19 |
| 488 | J13 － 1 | 厚手剥片 | 49.4 | 41.3 | 25 | 35.5 |
| 489 | J13 － 2 | 横長剥片石核 | 91.1 | 54.9 | 26.5 | 136.9 |
| 491 | J14 － 1 | 折損片 | 36.4 | 31.2 | 10.9 | 7.6 |
| 492 | J14 － 2 | 折損片 | 16.8 | 46.2 | 12.6 | 9.48 |
| 493 | J14 － 3 | 短形剥片石核 | 53.3 | 44.6 | 16.3 | 27.62 |
| 494 | J14 － 4 | 短形剥片石核 | 54.6 | 48.3 | 19.1 | 44.24 |
| 495 | J15 | 短形剥片石核 | 50.7 | 45.6 | 19.5 | 43.17 |
| 496 | J15 － 1 | 短形剥片石核 | 31 | 43.1 | 18.1 | 21.28 |
| 498 | J16 － 1 | 短形剥片石核 | 82.9 | 42.5 | 24.7 | 70.18 |
| 499 | J16 － 2 | 短形剥片石核 | 45 | 43.8 | 15.3 | 28.58 |
| 501 | J17 － 1 | 短形剥片 | 27.2 | 22.1 | 7.5 | 3.51 |
| 502 | J17 － 2 | 短形剥片石核 | 42.6 | 50.8 | 17.5 | 30.02 |
| 504 | J18 － 2 | 打面作出剥片 | 26.4 | 46.9 | 13.6 | 13.55 |
| 505 | J18 － 3 | 打面作出剥片 | 28.4 | 40.3 | 9.2 | 7.88 |
| 506 | J18 － 4 | 短形剥片石核 | 69.9 | 69 | 23.9 | 120.59 |
| 508 | J19 － 1 | 打面作出剥片 | 60.1 | 41.1 | 10.6 | 19.4 |
| 509 | J19 － 2 | 打面作出剥片 | 55 | 47.2 | 14.9 | 35.38 |
| 510 | J19 － 3 | 短形剥片石核 | 79.4 | 67.8 | 46.5 | 214.18 |
| 512 | J20 － 1 | 短形剥片 | 19 | 28.9 | 9.9 | 4.73 |
| 513 | J20 － 2 | 短形剥片 | 19.1 | 25.4 | 7.1 | 2.38 |
| 514 | J20 － 3 | 短形剥片 | 20.4 | 20.8 | 7.1 | 1.49 |
| 515 | J20 － 4 | 短形剥片 | 19.2 | 24.4 | 5.3 | 2.58 |
| 517 | J21 － 1 | 厚手剥片 | 54.4 | 63.1 | 18.9 | 50.1 |
| 518 | J21 － 2 | 厚手剥片 | 56.9 | 44.2 | 27.3 | 48.85 |
| 520 | J22 － 1 | 短形剥片石核 | 50 | 61.9 | 17.8 | 35.67 |
| 521 | J22 － 2 | 短形剥片石核 | 67.7 | 68.8 | 28 | 111.32 |
| 522 | J23 － 1 | 厚手剥片 | 96.2 | 59.9 | 27.3 | 141.41 |
| 522 | J23 － 2 | 厚手剥片 | 78.6 | 91.7 | 22.3 | 144.46 |
| 522 | J23 － 3 | 厚手剥片 | 61 | 74.9 | 11.3 | 67.02 |
| 523 | J24 － 1 | 剥片 | 29.2 | 27.3 | 8 | 6.7 |
| 523 | J24 － 2 | 厚手剥片 | 62.4 | 78.1 | 24 | 83.67 |
| 523 | J24 － 3 | 厚手剥片 | 94.6 | 82.3 | 29.3 | 188.59 |
| 523 | J24 － 4 | 厚手剥片 | 102.5 | 76.9 | 31 | 230.53 |
| 524 | J25 － 1 | 厚手剥片 | 93.7 | 75.4 | 15.9 | 68.93 |

| 図版番号 | 接合番号 | 器種 | 長（mm） | 幅（mm） | 厚（mm） | 重（g） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 524 | J25－2 | 厚手剥片 | 78.2 | 64.6 | 17.1 | 53.39 |
| 524 | J25－3 | 厚手剥片 | 61.6 | 59.8 | 19.9 | 66.23 |
| 525 | | 短形剥片石核 | 66.8 | 87.5 | 36.3 | 175.15 |
| 526 | | 短形剥片石核 | 80.3 | 55.2 | 13.7 | 68.35 |
| 527 | | 短形剥片石核 | 44 | 57.6 | 15.9 | 35.34 |
| 528 | | 短形剥片石核 | 79.9 | 78.6 | 33.1 | 143.57 |
| 529 | | 短形剥片石核 | 56 | 60.8 | 20.1 | 58.86 |
| 530 | | 短形剥片石核 | 66.3 | 65.2 | 18.6 | 69.56 |
| 531 | | 短形剥片石核 | 89.2 | 44.4 | 19.4 | 57.3 |
| 532 | | 短形剥片石核 | 73.9 | 39.8 | 15.3 | 55.66 |
| 533 | | 短形剥片石核 | 38 | 55.3 | 22.1 | 31.92 |
| 534 | | 短形剥片石核 | 39.1 | 44.3 | 16.3 | 21.24 |
| 535 | | 短形剥片石核 | 43.6 | 17.2 | 15.3 | 8.02 |
| 536 | | 短形剥片石核 | 83.6 | 26.4 | 28.1 | 40.11 |
| 537 | | 短形剥片石核 | 78.4 | 21.8 | 17.5 | 32.2 |
| 538 | | 短形剥片石核 | 70 | 39 | 18.1 | 41.66 |
| 539 | | 短形剥片石核 | 33.1 | 56.3 | 20 | 33.51 |
| 540 | | 短形剥片石核 | 26.8 | 34.9 | 25.8 | 21.91 |
| 541 | | 短形剥片 | 29.4 | 29.9 | 6.6 | 4.72 |
| 542 | | 短形剥片 | 27.9 | 24 | 6.7 | 4.2 |
| 543 | | 短形剥片 | 29.1 | 45 | 7.1 | 7.17 |
| 544 | | 短形剥片 | 24 | 26.8 | 6.7 | 4.47 |
| 545 | | 短形剥片 | 25.7 | 39 | 5.6 | 3.99 |
| 546 | | 短形剥片 | 22.5 | 26.1 | 5.4 | 1.62 |
| 547 | | 短形剥片 | 17.5 | 29.9 | 6.8 | 2.86 |
| 548 | | 短形剥片 | 35.8 | 24 | 13 | 8.61 |
| 549 | | 短形剥片 | 29.4 | 19.7 | 7.8 | 3.82 |
| 550 | | 短形剥片 | 38.8 | 20.1 | 9.7 | 11.21 |

表5　J 15 出土旧石器資料・母岩観察表

| 母岩 No. | 色調 | 自然面 | 内部石質 |
|---|---|---|---|
| P 1 | 10YR 6／2 灰黄褐色～5／2 灰黄褐色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。風化層が約 35mm。 | 部分的に珪化が著しく、細粒で緻密である。部分的に夾雑物が多く、若干節理面がある。 |
| P 2 | 10YR 5／1 褐灰色～25Y 6／2 灰黄色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。風化層が約 2 mm。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密で、やや光沢を帯びる部分が多い。部分的に石英の貫入、節理面が見られる。 |
| P 3 | 25 Y 6／1 黄灰色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。風化層が約 15mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密であるが、節理面が大きく発達している。 |
| P 4 | 25 Y 5／2 暗灰黄色 | 亜角礫？。滑らかであるが、クラック痕が見られる。風化層が約 0.5mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密である。 |
| P 5 | 10YR 6／2 灰黄褐色 | 自然面が残存しない。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密。とくに節理面は見られない。茶褐色と灰白色の粒状の模様が若干入る。 |
| P 6 | 10YR 7／2 にぶい黄橙色 | 自然面が残存しない。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密。均質的である。とくに節理面は見られない。 |
| P 7 | 10YR 5／1 褐灰色 | 自然面が残存しない。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。若干節理面が見られる。 |
| P 8 | 25Y 6／1 黄灰色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。風化層が約 2 mm。 | 珪化が弱く、若干粗粒でやや緻密。灰褐色の筋状の模様が見られる。 |
| P 9 | 25Y 5／2 暗灰黄色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。クラック痕が若干顕著。風化層が約 3 mm。 | 若干珪化が弱く、やや細粒でやや緻密。とくに節理面は見られない。 |
| P 10 | 25Y 5／1 黄灰色～25Y 7／2 灰黄色 | 亜円礫。若干凹凸のある滑らかな部分と、クレーター状の凹凸部分とが見られる。風化層が約 2 mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密の部分と、珪化が弱くやや粗粒で緻密さに欠ける部分とがある。部分的に石英の貫入、節理面が見られる。 |
| P 11 | 25Y 7／2 灰黄色 | 亜円礫？。クラック痕が若干顕著。風化層が約 20mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。とくに節理面は見られない。 |
| P 12 | 25Y 7／1 灰白色 | 亜円礫。非常に滑らかな面と、若干凹凸のある滑らかな面に分かれる。風化層が約 1 ～ 17mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密の部分と、珪化が弱くやや粗粒で緻密さに欠ける部分とがある。部分的に、節理面が見られる。 |
| P 13 | 10YR 5／2 灰黄褐色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。風化層が約 15mm。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密で、やや光沢を帯びる。淡黄橙色の粒状の夾雑物が多量に入る。 |
| P 14 | 10YR 6／1 褐灰色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。クラック痕が若干顕著。風化層が約 1.5mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。節理面が見られる。部分的に暗褐色と灰白色の粒状の模様が見られる。 |
| P 15 | 10YR 6／1 褐灰色～10YR 3／1 黒褐色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。クラック痕が若干顕著。風化層が約 0.3mm。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密で、部分的にやや光沢を帯びる。石英の貫入が見られる。灰褐色と黒褐色の境界付近は、マーブル状の模様となる。 |
| P 16 | 10YR 4／1 褐灰色～10YR 6／1 褐灰色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。風化層が約 35mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。節理面が見られる。 |
| P 17 | 10YR 6／2 灰黄褐色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。風化層が約 25mm。 | 一定程度珪化し、細粒で緻密である。茶褐色と灰白色の粒状の模様が多量に見られる。 |
| P 18 | 10YR 4／1 褐灰色 | 自然面が残存しない。 | 一定程度珪化し、細粒で緻密である。暗褐色の粒状の模様がわずかに見られる。 |
| P 19 | 10YR 5／2 灰黄褐色 | ほとんど自然面が残存しない。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密で、やや光沢を帯びる。暗褐色の筋状の模様が見られる。 |
| P 20 | 10YR 7／1 灰白色 | 自然面が残存しない。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密。均質的である。とくに節理面は見られない。 |
| P 21 | 欠番 | | |
| P 22 | 10YR 5／1 褐灰色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。クラック痕が若干顕著。風化層が約 1 mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。節理面、夾雑物が顕著に発達。 |
| P 23 | 25Y 6／1 黄灰色 | 自然面が残存しない。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密。若干灰白色と暗褐色の筋状の模様が見られる。 |
| P 24 | 25Y 6／1 黄灰色 | 自然面が残存しない。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密。P23 よりも灰白色と暗褐色の筋状の模様が少ない。若干節理面が見られる。 |
| P 25 | 25Y 4／1 黄灰色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。クラック痕が顕著。風化層が約 1.5mm。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密。均質的である。節理面が発達している。暗褐色の粒状の模様が若干見られる。 |
| P 26 | 25Y 6／2 灰黄色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。クラック痕がわずか。風化層が約 11mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。節理面が見られる。淡黄橙色の粒状の夾雑物がわずかに入る。 |
| P 27 | 10YR 5／2 灰黄褐色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。クラック痕が顕著。風化層が約 12mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。淡黄橙色の粒状の夾雑物が少量に入る。暗褐色の筋状の模様がわずかに見られる。 |
| P 28 | 10YR 5／1 褐灰色 | 亜角礫？。クラック痕がある。風化層が約 5 mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。淡黄橙色の粒状の夾雑物が少量に入る。P19 よりもざらつきがある。 |
| P 29 | 10YR 5／2 灰黄褐色 | 亜角礫？。クラック痕がある。風化層が約 5 mm ？。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。P19、P28 よりも珪化が弱い。暗褐色の筋状の模様が顕著に見られる。 |
| P 30 | 5 Y 8／2 灰白色 | 亜角礫。凹凸が顕著。クラック痕が顕著。風化層が約 12mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。 |
| P 31 | 10YR 5／2 灰黄褐色 | 自然面が残存しない。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密。やや光沢があり、均質的である。部分的に暗褐色と灰白色の粒状の模様が見られる。 |
| P 32 | 10YR 4／1 褐灰色 | 自然面が残存しない。 | 珪化が著しく、細粒、かつ緻密。やや光沢があり、均質的である。 |
| P 33 | 10YR 5／3 黒褐色 | 自然面が残存しない。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。均質的である。 |
| P 34 | 10YR 5／2 灰黄褐色 | 亜角礫。滑らかであるが、若干凹凸がある。クラック痕が顕著。風化層が約 12mm。 | 一定程度珪化し、やや細粒で緻密。風化が浅い。 |

表6　J 15 出土旧石器観察表

| 図版番号 | 母岩番号 | 登録番号 | 器種 | 長（mm） | 幅（mm） | 厚（mm） | 重（g） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 568 | P1a Ⅰ－1 | RQ202 + RQ221 + RQ465 | 剥片 | 76.9 | 42.6 | 35.1 | 61.11 |
| 569 | P1a Ⅰ－2 | RQ442 | 剥片 | 33.7 | 49.7 | 8 | 8.09 |
| 570 | P1a Ⅰ－2 | RQ222 | 剥片 | 88 | 69.3 | 25.2 | 99.45 |
| 571 | P1a Ⅰ－3 | RQ1122 + RQ1028 | 剥片 | 81.9 | 58.5 | 15.4 | 46.87 |
| 572 | P1a Ⅰ－4 | RQ228 | 石刃 | 84.5 | 21.1 | 9.6 | 11.16 |
| 573 | P1a Ⅰ－5 | | 剥片 | 30.4 | 16.8 | 7.44 | 2.38 |
| 574 | P1a Ⅰ－6 | RQ302 | 剥片 | 44.5 | 17.3 | 6 | 2.92 |
| 575 | P1a Ⅰ－7 | RQ1067 | 剥片 | 20.1 | 11.6 | 2.33 | 0.59 |
| 576 | P1a Ⅰ－8 | | 石刃 | 68.2 | 29.5 | 9.15 | 16.32 |
| 577 | P1a Ⅰ－9 | RQ224 | 石刃核 | 80.6 | 76.2 | 62.4 | 371.7 |
| 579 | P1a Ⅱ－1 | RQ357 | 剥片 | 26.4 | 22.8 | 7.5 | 2.86 |
| 580 | P1a Ⅱ－2 | RQ207 | 剥片 | 59.3 | 36.1 | 14.7 | 23.15 |
| 581 | P1a Ⅱ－3 | RQ376 | 剥片 | 26.8 | 9.86 | 3.3 | 0.59 |
| 582 | P1a Ⅱ－4 | RQ324 | 剥片 | 54.6 | 23.3 | 5.5 | 4.99 |
| 583 | P1a Ⅱ－5 | RQ674 + P1a Ⅱ-5 イ | 剥片 | 69.8 | 47.5 | 8.8 | 27.44 |
| 585 | P1b－1 | RQ257 | 剥片 | 21.2 | 26.2 | 3.7 | 1.12 |
| 586 | P1b－2 | RQ212 | 剥片 | 88.7 | 47.2 | 14.3 | 66.75 |
| 587 | P1b－3 | | 石刃 | 68.9 | 24.5 | 10.1 | 11.99 |
| 588 | P1b－4 | RQ489 | 石刃 | 67.3 | 19.6 | 6.5 | 7.58 |
| 589 | P1b－5 | RQ608 | 石刃 | 84.5 | 25.2 | 13.5 | 18.81 |
| 590 | P1b－6 | RQ229 | 石刃 | 65 | 33.3 | 10.5 | 20.72 |
| 592 | P1c－1 | RQ231 + RQ719 | 剥片 | 53.3 | 46 | 19 | 31.88 |
| 593 | P1c－2 | RQ1429 | 剥片 | 30.1 | 18.8 | 6.3 | 1.53 |
| 594 | P1c－3 | RQ1018 | 剥片 | 10.9 | 16 | 4.2 | 0.44 |
| 595 | P1c－4 | RQ979 | 剥片 | 12.7 | 13.9 | 6.3 | 0.84 |
| 596 | P1c－5 | RQ225 | 剥片 | 59.1 | 43.5 | 17.25 | 32.04 |
| 597 | P1c－6 | RQ1411 | 剥片 | 24.9 | 37.5 | 10.4 | 8.73 |
| 598 | P1c－7 | | 剥片 | 39.4 | 15.7 | 9.4 | 3.7 |
| 600 | P1d－1 | RQ1441 | 石刃 | 60 | 15.6 | 3.1 | 2.91 |
| 601 | P1d－2 | RQ205 | 石刃 | 42.3 | 19.3 | 5.1 | 3.43 |
| 603 | P1e－1 | RQ470 | 石刃 | 21.1 | 8.7 | 2.7 | 0.56 |
| 604 | P1e－2 | RQ295 | 石刃 | 28.9 | 14 | 2.7 | 1.1 |
| 606 | P1f－1 | | 石刃 | 58.7 | 35 | 7 | 10.14 |
| 607 | P1f－3 | RQ1088 | 剥片 | 12.1 | 28.1 | 9.7 | 2.15 |
| 608 | P1f－2 | RQ1258 | 打面再生剥片 | 96.6 | 45.1 | 33.7 | 172.99 |
| 610 | P1g－1 | RQ723 | 剥片 | 19.9 | 19.6 | 4.8 | 1.79 |
| 611 | P1g－2 | RQ233 | 剥片 | 24.4 | 29.3 | 6.2 | 3.99 |
| 612 | P1－1 | RQ1404 | 彫刻刀スポール | 61 | 8.6 | 7.2 | 2.17 |
| 613 | P1－2 | RQ363 | 細石刃 | 19.9 | 5.4 | 2 | 0.18 |
| 614 | P1－3 | RQ319 | 石刃 | 42 | 26.9 | 9 | 10.58 |
| 615 | P1－4 | RQ1236 | 石刃 | 62.1 | 26 | 9.8 | 11.37 |
| 617 | P2a－1 | RQ1406 | 石刃 | 86.1 | 28.5 | 16 | 24.95 |
| 618 | P2a－3 | RQ1046 | 剥片 | 19.3 | 12.5 | 17 | 0.3 |
| 619 | P2a－2 | RQ607 | 石刃核 | 117.6 | 45 | 49.4 | 205.01 |
| 621 | P2b－1 | RQ1151 | 石刃 | 75.9 | 13.6 | 6.5 | 5.36 |
| 622 | P2b－2 | RQ551 | 新幾石刃 | 101.2 | 19 | 11.5 | 16.36 |
| 623 | P2－5 | | 新幾石刃 | 78.4 | 20.6 | 7.1 | 8.52 |
| 624 | P2－3 | | 石刃 | 83.1 | 16.8 | 5.9 | 8.85 |
| 625 | P2－4 | RQ1426 | 石刃 | 89.3 | 22.2 | 7.9 | 13.53 |
| 626 | P2－1 | RQ1405 | 神山型彫刻刀形石器 | 77.7 | 14.8 | 5.5 | 5.53 |
| 627 | P2－2 | RQ1350 | 無調整面彫刻刀形石器 | 62.1 | 25.5 | 5.4 | 4.87 |
| 628 | P2－6 | RQ772 | 細石刃 | 30.4 | 6.5 | 2.6 | 0.46 |
| 629 | P2－7 | | 彫刻刀スポール | 17.6 | 3.6 | 4.6 | 0.3 |
| 631 | P3a－2 | RQ203 | 剥片 | 62.5 | 52.3 | 24.6 | 46.16 |
| 632 | P3a－3 | | 剥片 | 67.5 | 28.6 | 10.3 | 22.67 |
| 633 | P3a－4 | RQ1425 | 剥片 | 22.5 | 32.4 | 7.4 | 5.76 |
| 634 | P3a－5 | RQ771 | 剥片 | 53.1 | 39.3 | 11.3 | 19.09 |
| 635 | P3a－6 | RQ292 | 打面調整剥片 | 16 | 13.4 | 3 | 0.43 |
| 636 | P3a－7 | RQ1428 + RQ864 | 剥片 | 42 | 13.8 | 7.8 | 3.48 |

| 図版番号 | 母岩番号 | 登録番号 | 器種 | 長（mm） | 幅（mm） | 厚（mm） | 重（g） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 637 | P3a－8 | RQ714＋RQ686 | 石刃 | 68.9 | 22.6 | 5.8 | 8.46 |
| 638 | P3a－1 | RQ201 | 石刃核 | 109.9 | 54.4 | 48.5 | 322.29 |
| 640 | P3b－1 | RQ1421 | 石刃 | 89.4 | 29.6 | 10.7 | 23.54 |
| 641 | P3b－2 | RQ927＋RQ673 | 石刃 | 55.7 | 15 | 4.3 | 2.7 |
| 642 | P3b－3 | RQ1103 | 石刃 | 63.5 | 28.4 | 16.3 | 34.34 |
| 644 | P3c－1 | | 自然稜石刃 | 55.3 | 16.8 | 11.2 | 6.82 |
| 645 | P3c－2 | RQ1060 | 石刃 | 53.1 | 16 | 8 | 4.44 |
| 647 | P3d－1 | RQ854 | 剥片 | 16.2 | 19.7 | 3 | 1.58 |
| 648 | P3d－2 | RQ1032 | 剥片 | 9.5 | 15 | 3.7 | 0.37 |
| 650 | P4a－1 | RQ1292 | 石刃 | 88.2 | 30.7 | 14 | 28.25 |
| 651 | P4a－3 | RQ850＋P4a-3イ | 石刃 | 95.8 | 16.8 | 7 | 8.65 |
| 652 | P4a－2 | RQ542 | 裏縁部切り面彫刻刀形石器 | 93.9 | 31.6 | 13.8 | 25.93 |
| 653 | P4a－4 | RQ515 | 石刃 | 69 | 27.5 | 8.6 | 7.39 |
| 655 | P4b－1 | RQ1392 | 石刃 | 48 | 12.1 | 4.3 | 1.53 |
| 656 | P4b－2 | RQ1359 | 石刃 | 47.2 | 22.7 | 8 | 6.78 |
| 657 | P4b－3 | RQ1182 | 石刃 | 68.5 | 33.5 | 8.5 | 12.01 |
| 659 | P4c－1 | RQ1313 | 石刃 | 97.2 | 31.1 | 8.1 | 18.2 |
| 660 | P4c－2 | RQ1323 | 石刃 | 65 | 14 | 5.4 | 3.3 |
| 662 | P4d－1 | RQ1098 | 石刃 | 69.6 | 22.4 | 7 | 7.31 |
| 663 | P4d－2 | RQ1351 | 石刃 | 59.9 | 18.6 | 5.2 | 4.22 |
| 665 | P4e－1 | RQ1302 | 石刃 | 31 | 13.6 | 3.1 | 1.37 |
| 666 | P4e－2 | | 石刃 | 104.4 | 31.7 | 13.3 | 35.79 |
| 667 | P4－1 | RQ1433 | 無調整面彫刻刀形石器 | 59.4 | 18.1 | 6.6 | 6.44 |
| 668 | P4－2 | RQ730 | 彫刻刀スポール | 20.7 | 4.4 | 3.1 | 0.25 |
| 669 | P4－3 | RQ1285 | 石刃 | 73.6 | 18 | 4.6 | 5.31 |
| 671 | P5a－1 | RQ1414 | 石刃 | 74.7 | 16 | 6.7 | 6.39 |
| 672 | P5a－2 | RQ1128 | 石刃 | 77.1 | 23.8 | 5.7 | 7.43 |
| 673 | P5－1 | RQ1259 | 石刃 | 69.2 | 18.4 | 6.8 | 6.82 |
| 674 | P5－2 | RQ1438 | 石刃 | 61.5 | 12.3 | 5.4 | 4.05 |
| 675 | P5－3 | RQ628 | 石刃 | 65.4 | 23.9 | 6.1 | 6.43 |
| 676 | P5－4 | RQ1397 | ナイフ形石器 | 37 | 14.8 | 5.1 | 2.12 |
| 677 | P5－5 | | ナイフ形石器 | 14.5 | 11.9 | 4.9 | 0.81 |
| 679 | P6a－1 | RQ1407 | 双面彫刻刀形石器 | 68.5 | 19 | 6 | 7.04 |
| 680 | P6a－2 | RQ1330＋RQ1247 | 神山型彫刻刀形石器ブランク | 98.4 | 17 | 5.6 | 8.71 |
| 681 | P7－1 | RQ1291 | 石刃 | 63 | 18.2 | 4.9 | 5.12 |
| 682 | P7－2 | RQ1415 | 石刃 | 62.4 | 17.7 | 5.3 | 4.19 |
| 684 | P8a－1 | RQ488 | 打面再生剥片 | 56.3 | 20 | 8 | 7.23 |
| 685 | P8a－2 | RQ331 | 打面調整剥片 | 24 | 30.8 | 3.6 | 2.88 |
| 686 | P8a－3 | RQ270 | 剥片 | 33.1 | 19.3 | 7.4 | 2.35 |
| 687 | P8a－4 | RQ1139 | 石刃 | 54.4 | 50.8 | 31.2 | 60.57 |
| 688 | P8a－5 | RQ495 | 剥片 | 33.7 | 36.9 | 10.8 | 9.94 |
| 689 | P8a－6 | RQ484 | 剥片 | 33.7 | 25.8 | 4.6 | 2.74 |
| 690 | P8a－7 | RQ256 | 剥片 | 24.5 | 12 | 2.6 | 1.51 |
| 691 | P8a－8 | RQ208 | 石刃核 | 101 | 83.2 | 63.8 | 581.24 |
| 693 | P8b－1 | RQ715 | 楔形成剥片 | 23.9 | 10.1 | 2.3 | 0.51 |
| 694 | P8b－2 | RQ710 | 剥片 | 18 | 11 | 8 | 1.48 |
| 695 | P8b－3 | RQ450 | 機付き石刃 | 36 | 19.9 | 12.2 | 6.17 |
| 696 | P8b－4 | P8b-4イ＋P8b-4ロ | 剥片 | 159 | 49.3 | 28.5 | 177.22 |
| 698 | P8c－1 | RQ420 | 剥片 | 41.5 | 23.7 | 8.2 | 6.19 |
| 699 | P8c－2 | | 剥片 | 60 | 42.4 | 8 | 17.21 |
| 700 | P8c－3 | RQ487 | 剥片 | 87.9 | 74.9 | 21.9 | 74.52 |
| 701 | P8c－4 | | 剥片 | 56 | 73.4 | 9.7 | 27.47 |
| 702 | P8c－5 | RQ482 | 剥片 | 36 | 34.6 | 6.1 | 4.95 |
| 703 | P8－1 | | 石刃 | 99.5 | 44.2 | 15.3 | 49.35 |
| 704 | P8－2 | RQ490＋RQ675 | 石刃 | 65.7 | 31.2 | 10.9 | 12.9 |
| 705 | P8－3 | RQ226＋P8-3イ | 石刃 | 62.6 | 13.5 | 3.4 | 3.72 |
| 707 | P9a－1 | RQ1358 | 石刃 | 115.6 | 42.8 | 31.6 | 122.91 |
| 708 | P9a－2 | RQ1181 | 石刃 | 62.9 | 32.2 | 8 | 13.57 |
| 709 | P9a－3 | RQ1338 | 石刃 | 100.9 | 50 | 42.7 | 88.24 |

| 図版番号 | 母岩番号 | 登録番号 | 器種 | 長（mm） | 幅（mm） | 厚（mm） | 重（g） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 710 | P9a − 4 | RQ367 | 石刃 | 104.5 | 55.4 | 16.5 | 97.71 |
| 711 | P9a − 5 | RQ1399 | 剥片 | 27.7 | 8.6 | 5.8 | 1.16 |
| 712 | P9a − 6 | RQ1265 | 石刃核 | 102.4 | 74.7 | 45.5 | 441.35 |
| 714 | P10a − 1 | RQ371 | 打面作出剥片 | 15.1 | 20.5 | 5.6 | 2 |
| 715 | P10a − 2 | RQ227 | 石刃 | 64.8 | 26.9 | 12.4 | 22.73 |
| 716 | P10a − 3 | RQ328 + RQ966 | 石刃 | 48.4 | 10.3 | 3.8 | 1.45 |
| 717 | P10a − 4 | RQ213 | 石刃核 | 161 | 91 | 59.3 | 791.78 |
| 719 | P10b − 1 | RQ483 | 剥片 | 49.6 | 25.5 | 10.2 | 9.62 |
| 720 | P10b − 2 | RQ211 | 楔付き石刃 | 89.9 | 31 | 20 | 33.31 |
| 721 | P10b − 3 | RQ223 + RQ348 | 石刃 | 47.2 | 19.8 | 9.6 | 7.76 |
| 723 | P11a − 1 | RQ466 | 剥片 | 21.1 | 13.3 | 3.7 | 0.82 |
| 724 | P11a − 2 | RQ1299 | 剥片 | 54.7 | 36.8 | 9 | 12.16 |
| 725 | P11 − 1 |  | 楔付き石刃 | 103.8 | 40.7 | 11.8 | 39.55 |
| 726 | P11 − 3 | RQ1294 | 石刃 | 56.9 | 13.1 | 5.9 | 3.82 |
| 727 | P11 − 2 | RQ1374 | 石刃 | 92.6 | 36 | 14.7 | 43.52 |
| 729 | P12a − 1 |  | 剥片 | 11.5 | 18.3 | 3.8 | 0.75 |
| 730 | P12a − 2 | RQ1215 | 剥片 | 27.6 | 25 | 7.4 | 4.58 |
| 731 | P12a − 3 | RQ1371 | 剥片 | 47.2 | 43.2 | 15 | 19.64 |
| 732 | P12a − 10 | RQ1375 + P12a-10 イ | 剥片 | 37.6 | 49.2 | 10 | 11.22 |
| 733 | P12a − 9 | RQ1156 | 剥片 | 16.8 | 25.1 | 7 | 2.32 |
| 734 | P12a − 8 |  | 剥片 | 11.1 | 16 | 3.5 | 0.27 |
| 735 | P12a − 4 | RQ1112 | 剥片 | 37.1 | 40.9 | 13.7 | 10.01 |
| 736 | P12a − 5 | RQ798 + P12a-5 イ | 剥片 | 25.8 | 30.8 | 7.1 | 3 |
| 737 | P12a − 6 | RQ1301 | 剥片 | 23.6 | 31.8 | 8.6 | 2.04 |
| 738 | P12a − 11 | RQ1272b + RQ783 | 剥片 | 58.1 | 66.5 | 13 | 40.46 |
| 739 | P12a − 12 | RQ1272a | 石刃核ブランク | 143.2 | 99.8 | 46.8 | 559.84 |
| 741 | P12b − 1 |  | 剥片 | 22.1 | 25.7 | 4 | 1.66 |
| 742 | P12b − 2 | RQ925 | 剥片 | 19.9 | 20.3 | 3.9 | 1.09 |
| 744 | P13a − 1 | RQ1237 | 無調整面形刻刃形石器 | 83.1 | 29.6 | 12 | 25.99 |
| 745 | P13a − 2 | RQ630 | 剥片 | 37.2 | 13.5 | 4.7 | 1.58 |
| 747 | P13b − 1 | RQ842 + RQ1090 + P13b-1 イ | 石刃 | 42.5 | 14.6 | 2.7 | 1.49 |
| 748 | P13b − 2 | RQ472 | 剥片 | 21.4 | 16.6 | 3.2 | 0.8 |
| 750 | P13c − 1 | RQ1260 | 剥片 | 20.9 | 19.5 | 4.5 | 1.75 |
| 751 | P13c − 2 | RQ1335 | 剥片 | 31.5 | 37.1 | 7.2 | 5.42 |
| 753 | P13d − 1 | RQ1266 | 剥片 | 25.7 | 30.7 | 4.9 | 3.84 |
| 754 | P13d − 2 | RQ1432 | 剥片 | 20.4 | 25.6 | 4.3 | 1.74 |
| 756 | P14a − 1 | RQ1324 | 新機石刃 | 112.1 | 27.6 | 13.7 | 23.09 |
| 757 | P14a − 4 | RQ1253 | 打面調整剥片 | 20.5 | 25.6 | 4 | 1.88 |
| 758 | P14a − 3 | RQ1280 | 楔形成剥片 | 28.4 | 10 | 4 | 0.71 |
| 759 | P14a − 2 | RQ1373 | 作業面更新剥片 | 79.3 | 35.3 | 28 | 94.83 |
| 760 | P14a − 5 |  | 剥片 | 15.5 | 17.8 | 11.2 | 2.03 |
| 762 | P14b − 2 | RQ1315 | 石刃 | 103.9 | 33.4 | 9.7 | 25.93 |
| 763 | P14b − 1 | RQ1383 | 剥片 | 32.3 | 19.9 | 4.6 | 2.86 |
| 765 | P15a − 1 | RQ494 | 細石刃 | 41 | 8.9 | 2.3 | 0.78 |
| 766 | P15a − 2 | RQ1346 | 石刃 | 33.2 | 17.3 | 5 | 2.18 |
| 768 | P15b − 2 | RQ235 | 細石刃 | 35.9 | 11.2 | 4 | 1.49 |
| 769 | P15b − 3 | RQ491 | 剥片 | 61.4 | 27.9 | 8 | 10.7 |
| 770 | P15b − 1 | RQ668 | 剥片 | 16.3 | 10.9 | 2.2 | 0.28 |
| 771 | P15 − 1 |  | 細石刃 | 29.9 | 11.6 | 2.9 | 0.83 |
| 772 | P15 − 2 |  | 細石刃 | 14.8 | 11 | 3.5 | 0.58 |
| 773 | P15 − 3 | RQ904 | 細石刃 | 22.7 | 10.5 | 3.2 | 0.63 |
| 774 | P15 − 4 |  | 細石刃 | 20.9 | 6.8 | 2.6 | 0.29 |
| 776 | P16a − 1 | RQ1284 + P16a-1 イ | 剥片 | 65.6 | 74.7 | 16.5 | 79.02 |
| 777 | P16a − 2 | RQ1382 | 剥片 | 44.9 | 34.8 | 7.2 | 9.75 |
| 778 | P16a − 3 | RQ1180 + RQ1188 | 剥片 | 25.6 | 16.2 | 7.2 | 3.67 |
| 780 | P16b − 2 | RQ1336 | 打面再生剥片 | 78.8 | 37.7 | 19.8 | 40.76 |
| 781 | P16b − 1 | RQ525 + P16b-1 イ + P16b-1 ロ | 剥片 | 33 | 19.1 | 3.1 | 1.56 |
| 783 | P16c − 1 | RQ1039 + P16c-1 イ | 剥片 | 39.1 | 12.3 | 7.1 | 2.45 |
| 784 | P16c − 2 | RQ1120 + RQ1100 | 剥片 | 58.9 | 28.7 | 7.1 | 8.72 |

| 図版番号 | 母岩番号 | 登録番号 | 器種 | 長（mm） | 幅（mm） | 厚（mm） | 重（g） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 785 | P17－1 | RQ1307 | 剥片 | 88.8 | 35.7 | 9.6 | 20.06 |
| 786 | P17－2 | RQ1312＋P17-2ィ | 彫刻刀スポール | 45.3 | 7.2 | 4.8 | 1 |
| 787 | P17－3 | | 彫刻刀スポール | 16.1 | 5.4 | 3 | 0.18 |
| 788 | P17－4 | | 彫刻刀スポール | 17.4 | 3.6 | 2.8 | 0.12 |
| 790 | P18a－1 | | 彫刻刀スポール | 11.9 | 7.9 | 2.3 | 0.21 |
| 791 | P18a－2 | | 彫刻刀スポール | 17.1 | 8.5 | 3 | 0.4 |
| 792 | P18a－3 | RQ1095 | 彫刻刀スポール | 19.7 | 8.5 | 2.1 | 0.25 |
| 793 | P18－1 | RQ1289 | 彫刻刀スポール | 53.2 | 17.8 | 6.3 | 4.78 |
| 794 | P18－2 | RQ1043 | 石刃 | 17 | 13.4 | 4.9 | 1.07 |
| 795 | P18－3 | RQ1125 | 石刃 | 17.2 | 17 | 6.1 | 1.63 |
| 796 | P18－4 | RQ571 | 彫刻刀スポール | 21.9 | 11.3 | 7.5 | 1.02 |
| 797 | P18－5 | RQ916 | 彫刻刀スポール | 11.3 | 5 | 2.6 | 0.18 |
| 798 | P18－6 | RQ510 | 彫刻刀スポール | 14 | 8.6 | 3.5 | 0.3 |
| 799 | P18－7 | RQ423 | 彫刻刀スポール | 13.5 | 7.2 | 2.2 | 0.17 |
| 800 | P18－8 | | 彫刻刀スポール | 15.6 | 10.2 | 3.8 | 0.6 |
| 801 | P18－9 | | 彫刻刀スポール | 22.9 | 4.7 | 3.6 | 0.39 |
| 802 | P18－10 | | 彫刻刀スポール | 20.4 | 5.6 | 3.6 | 0.49 |
| 803 | P18－11 | RQ1310 | 彫刻刀スポール | 9.8 | 6 | 3.6 | 0.17 |
| 804 | P18－12 | | 彫刻刀スポール | 25.7 | 6.2 | 2.9 | 0.42 |
| 805 | P18－13 | | 彫刻刀スポール | 11.1 | 6.8 | 3.7 | 0.18 |
| 806 | P18－14 | | 彫刻刀スポール | 13.1 | 2.6 | 2.1 | 0.09 |
| 807 | P18－15 | RQ856 | 二次加工チップ | 8.4 | 9.4 | 1.9 | 0.12 |
| 808 | P18－16 | RQ857 | 二次加工チップ | 10 | 10.8 | 3.2 | 0.27 |
| 810 | P19a－1 | RQ1220 | 石刃 | 53.9 | 19.3 | 5.2 | 4.67 |
| 811 | P19a－2 | RQ1240 | 石刃 | 40 | 12.6 | 4 | 1.98 |
| 813 | P20a－1 | RQ1322 | 石刃 | 45 | 17.1 | 4.5 | 2.26 |
| 814 | P20a－2 | RQ1329 | 石刃 | 45 | 20 | 9.4 | 7.35 |
| 815 | P20－1 | RQ895 | 神山型彫刻刀形石器ブランク | 16.4 | 13.8 | 1.9 | 0.62 |
| 816 | P20－2 | RQ1127 | 彫刻刀スポール | 19 | 12.1 | 5.3 | 1.01 |
| 817 | P20－3 | | 彫刻刀スポール | 16.5 | 8.5 | 4 | 0.46 |
| 818 | P20－4 | | 彫刻刀スポール | 18.6 | 7 | 2.8 | 0.36 |
| 819 | P20－5 | | 二次加工チップ | 7.9 | 2.8 | 1.1 | 0.03 |
| 820 | P22－1 | RQ206 | 剥片 | 56.3 | 46.7 | 18.3 | 32.73 |
| 820 | P22－1 | RQ1159 | 剥片 | 84.3 | 70.3 | 37.4 | 271.46 |
| 820 | P22－1 | RQ1455 | 石核 | 90.1 | 121.1 | 55 | 690.74 |
| 820 | P22－1 | RQ481 | 剥片 | 84.3 | 70.3 | 37.4 | 271.46 |
| 820 | P22－1 | RQ1400 | 剥片 | 12.4 | 23.3 | 5.3 | 1.42 |
| 821 | P23－1 | RQ1422 | 細部調整切り面彫刻刀形石器 | 78.6 | 23.8 | 5.3 | 8.87 |
| 822 | P23－2 | | 彫刻刀スポール | 8 | 12.6 | 4.4 | 0.32 |
| 823 | P23－3 | RQ917 | 彫刻刀スポール | 16.7 | 9.4 | 2.4 | 0.29 |
| 824 | P23－4 | | 彫刻刀スポール | 15.4 | 3.8 | 2.2 | 0.15 |
| 825 | P23－5 | | 彫刻刀スポール | 9.9 | 2.9 | 2 | 0.03 |
| 826 | P23－6 | RQ959 | 彫刻刀スポール | 12.2 | 3.5 | 2.2 | 0.1 |
| 827 | P23－7 | | 二次加工チップ | 8 | 15.1 | 3.7 | 0.27 |
| 828 | P24－1 | | 神山型彫刻刀形石器ブランク | 31.9 | 17.3 | 3.7 | 1.98 |
| 829 | P24－2 | RQ1456 | 石刃 | 106 | 25.4 | 7 | 15.01 |
| 830 | P24－3 | RQ1457 | 石刃 | 107.2 | 34.2 | 29.3 | 38.08 |
| 831 | P24－4 | RQ1401 | 石刃 | 70.7 | 19.9 | 6.5 | 8.87 |
| 832 | P24－5 | RQ1086 | 二次加工チップ | 8.3 | 12.5 | 3.9 | 0.34 |
| 833 | P24－6 | RQ873 | 二次加工チップ | 9 | 7.2 | 1.4 | 0.09 |
| 834 | P24－7 | RQ1277 | 二次加工チップ | 8.8 | 8 | 1.6 | 0.08 |
| 835 | P24－8 | RQ909 | 二次加工チップ | 5.9 | 5.7 | 1.3 | 0.05 |
| 836 | P25－1 | RQ209 | 石刃核 | 84 | 87.8 | 47.4 | 449.28 |
| 837 | P26－1 | RQ1410 | 礫石刃 | 39 | 11 | 3.2 | 1.36 |
| 838 | P26－2 | RQ1412 | 剥片 | 40.5 | 47 | 9.6 | 19.07 |
| 840 | P27a－1 | RQ1339 | 機付き石刃 | 76.6 | 28 | 21.5 | 35.21 |
| 841 | P27a－2 | RQ981＋RQ551 | 石刃 | 54.9 | 16.9 | 4.1 | 3.8 |
| 842 | P27－1 | | 二次加工チップ | 12.5 | 9.5 | 2.5 | 0.24 |
| 843 | P27－2 | RQ1089 | 二次加工チップ | 15.4 | 11 | 2.4 | 0.54 |

| 図版番号 | 母岩番号 | 登録番号 | 器種 | 長（mm） | 幅（mm） | 厚（mm） | 重（g） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 844 | P28 － 1 | RQ698 | 石刃 | 55.8 | 28 | 9.4 | 10.62 |
| 845 | P28 － 2 | RQ1107 | 細石刃 | 12.3 | 9.4 | 3.3 | 0.38 |
| 846 | P29 － 1 | RQ1393 | 石刃 | 64.9 | 20.1 | 7.6 | 8.22 |
| 847 | P29 － 2 | RQ1132 | 細石刃 | 13 | 8.3 | 1.9 | 0.27 |
| 848 | P30 － 1 | RQ1381 | 原石 | 115.4 | 125.1 | 38.4 | 661.33 |
| 849 | P31 － 1 | RQ1146 | 杉久保型ナイフ形石器 | 74.5 | 14 | 4.6 | 3.74 |
| 850 | P32 － 1 | | 杉久保型ナイフ形石器 | 44.5 | 13.5 | 3.8 | 2.08 |
| 851 | P33 － 1 | RQ1114 | 細部調整剥り面彫刻刀形石器 | 52.8 | 26 | 8.9 | 11.03 |
| 852 | P34 － 1 | RQ1449 | 剥片 | 41.1 | 45.7 | 17.2 | 29.67 |
| 854 | | RQ1417 | ハンマーストーン | 102.5 | 82.2 | 43.6 | 474.63 |

J 15 トレンチテストピットでの作業風景（東から）

3層上面石器出土状況①（東から）

3層上面石器出土状況②（北から）

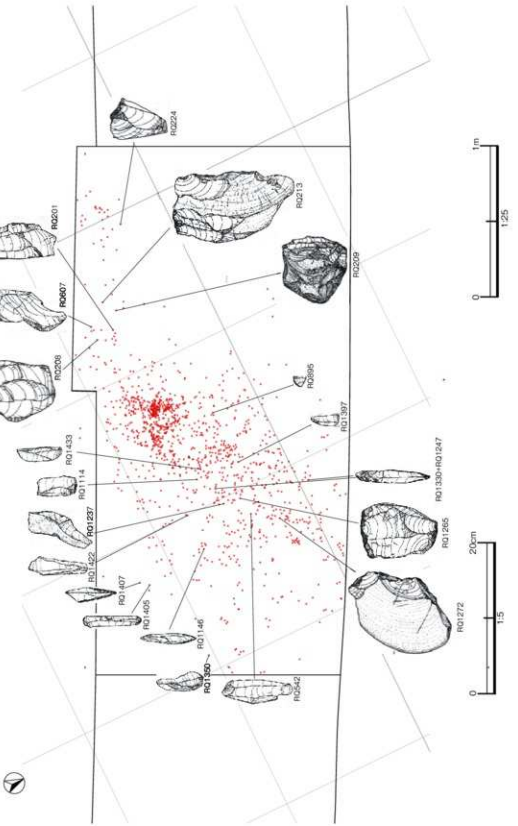
3層中部石器出土状況（東から）

3層中部～下部石器出土状況①（南東から）

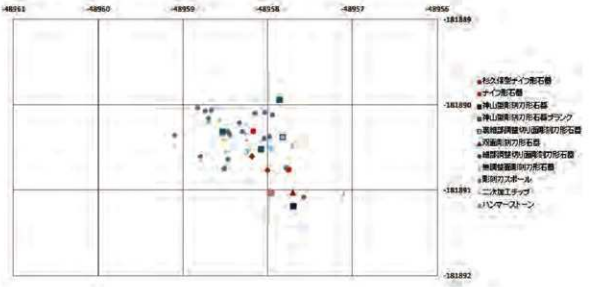
3層中部～下部石器出土状況②（北から）

3層中部～下部石器出土状況③（北東から）

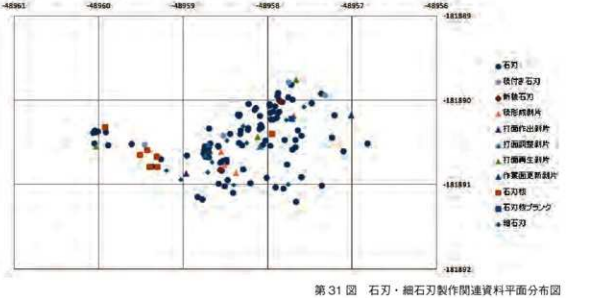
3層下部石器出土状況（南東から）



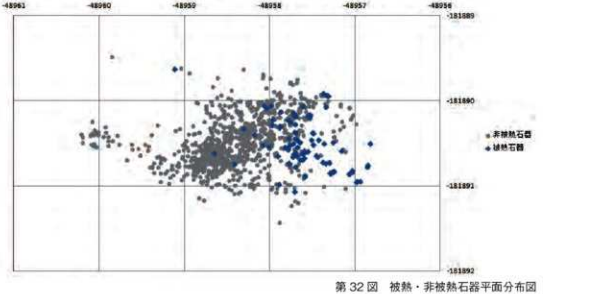

第 29 図　J 15 出土旧石器平面分布図



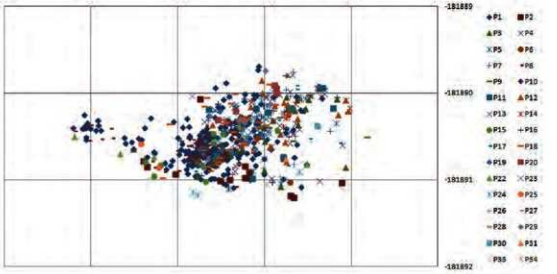

第 30 図　トゥール平面分布図



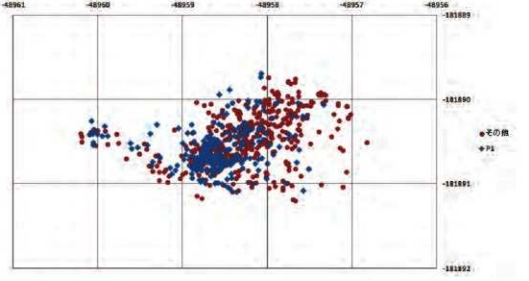

第 31 図　石刃・細石刃製作関連資料平面分布図



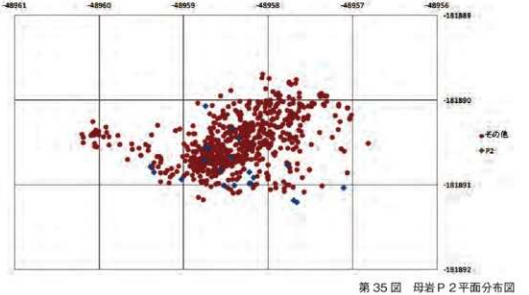

第 32 図　被熱・非被熱石器平面分布図



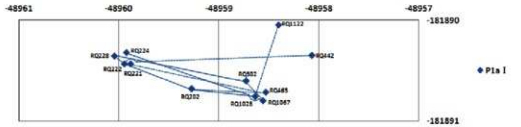

第 33 図　全母岩平面分布図



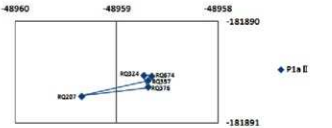

第 34 図　母岩Ｐ１平面分布図



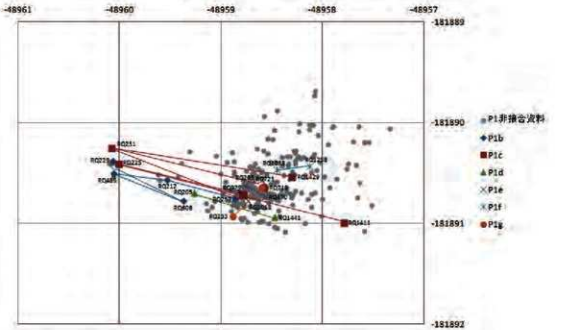

第 35 図　母岩Ｐ２平面分布図



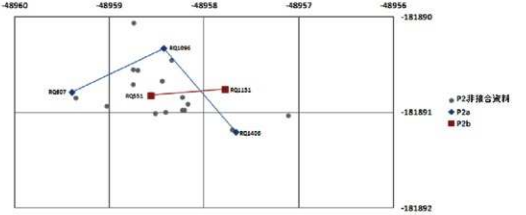

第 36 図　Ｐ１ａⅠ接合関係平面分布図



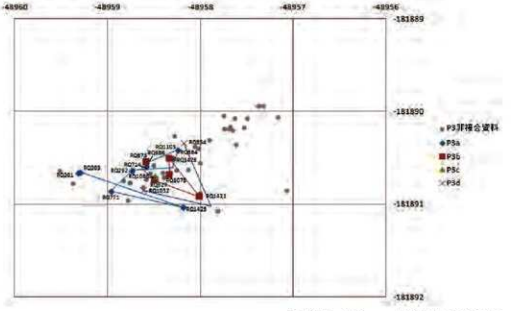

第 37 図　Ｐ１ａⅡ接合関係平面分布図



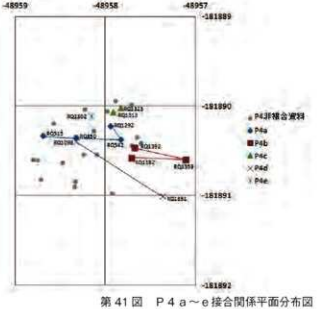

第 38 図　Ｐ１ｂ～ｆ接合関係平面分布図



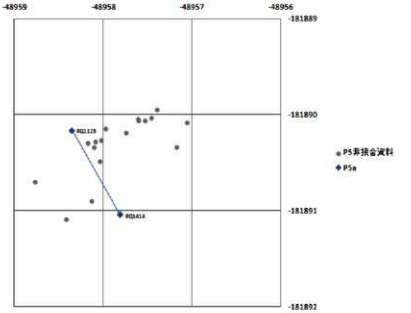

第 39 図　P２a～b接合関係平面分布図



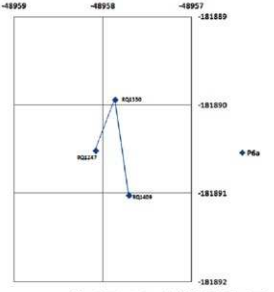

第 40 図　P３a～d接合関係平面分布図



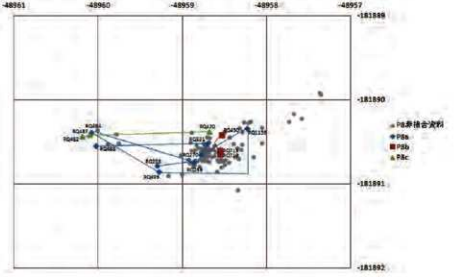

第 41 図　P４a～e接合関係平面分布図



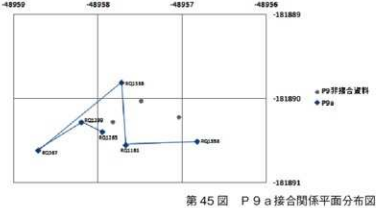

第 42 図　Ｐ５ａ接合関係平面分布図



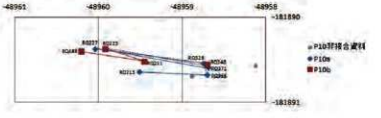

第 43 図　Ｐ６ａ接合関係平面分布図



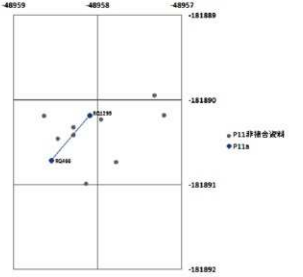

第 44 図　P 8 a～c 接合関係平面分布図



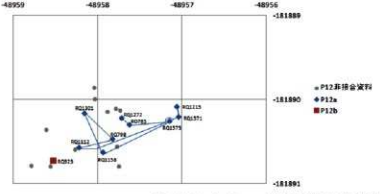

第 45 図　P 9 a 接合関係平面分布図



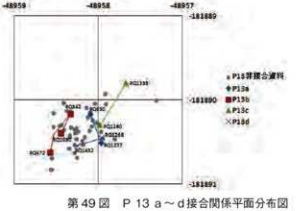

第 46 図　P 10 a～b 接合関係平面分布図



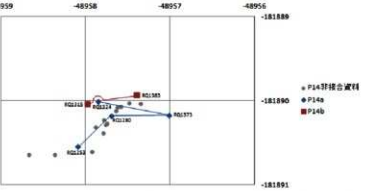

第 47 図　P 11 a接合関係平面分布図



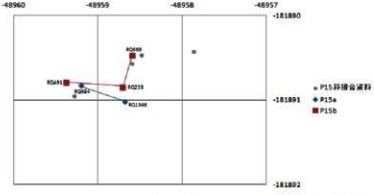

第 48 図　P 12 a～b接合関係平面分布図



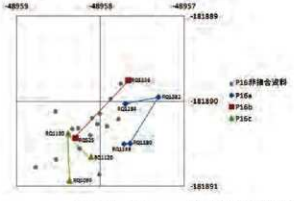

第 49 図　P 13 a～d接合関係平面分布図



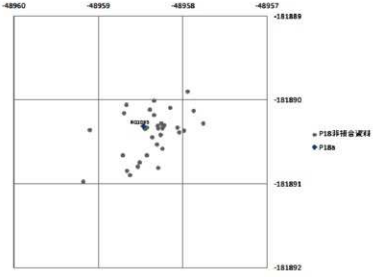

第 50 図　P 14 a ～ d 接合関係平面分布図



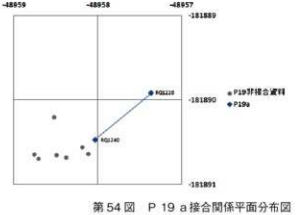

第 51 図　P 15 a ～ b 接合関係平面分布図



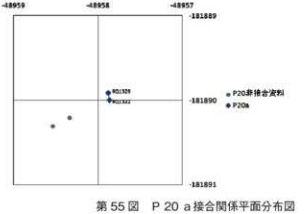

第 52 図　P 16 a ～ c 接合関係平面分布図



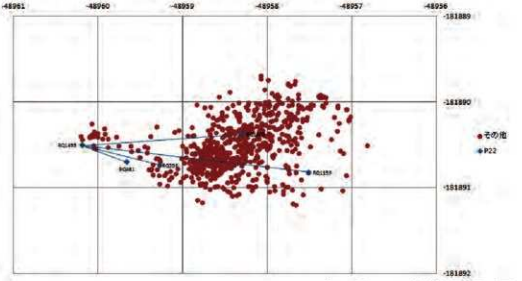

第 53 図　P 18 a 接合関係平面分布図



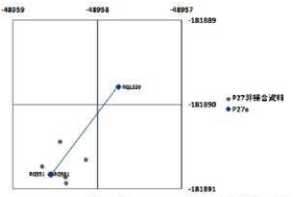

第 54 図　P 19 a 接合関係平面分布図




第 55 図　P 20 a 接合関係平面分布図




第 56 図　P 22 接合関係平面分布図




第 57 図　P 27 a 接合関係平面分布図

# Ⅵ　理化学分析

## 1　土器内白色物質の由来推定

パリノ・サーヴェイ株式会社

### （1）　はじめに

高瀬山遺跡 HO 地区で検出された縄文時代中期の土器では、その内面に白色物質が認められた。この白色物質は、土坑覆土内で他に認められず、土器内のみに認められている点から、人為的にもたらされた可能性もある。そこで、今回の自然科学分析調査は珪藻分析と粉末X線回折を実施し、その素材について明らかにすることにした。

### （2）　試　料

試料は、2次調査Ｈ３トレンチ の袋状土坑ＳＫ358最下層で認められた縄文時代中期中～後葉に属する土器（第92図－134）の口縁～胴部内面で認められた白色物質である。これらが周辺の土壌とともに取り上げられており、黒褐色砂質シルト内に認められる白色を呈する粘土ブロックとして認められる。

### （3）　分析方法

**珪藻分析**

試料を湿重で 2.4g 秤量し、過酸化水素水、自然沈降法（４時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではないが、全面を走査する）。

**粉末Ｘ線回折**

空気乾燥させた試料をメノウ乳鉢で微粉砕した後、アルミニウムホルダーに充填し、粉末Ｘ線回折試料（無定方位試料）とする。作成した粉末Ｘ線回折試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data,Inc. のＸ線回折パターン処理プログラム JADE を用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

| | |
|---|---|
| 装置：理学電気製 MultiFlex | Divergency Slit:1° |
| Target:Cu（K α） | Scattering Slit:1° |
| Monochrometer:Graphite 湾曲 | Recieving Slit:0.3mm |
| Voltage:40kV | Scanning Speed:2°/min |
| Current:40mA | Scanning Mode: 連続法 |
| Detector:SC | Sampling Range:0.02° |
| Calculation Mode:cps | Scanning Range:2 ～ 45° |

### （4）　結　果

**珪藻分析**

土器内容物である灰白色粘土では、種の同定に耐える珪藻化石は全く含まれていなかったが、破片が少量検出された（第59図　写真番号４～６）。これらの破片は、蜂の巣状の隔紋を有することから中心型珪藻の *Coscinodiscus* 属、あるいは *Thalassiosira* 属に相当すると思われる。これらの属を構成する種は、海水生のものが大部分である。また、珪藻化石以外では、動物珪酸体に属する海綿骨針（第59図　写真番号１～３）や植物珪酸体（第59図　写真番号７）が少量含まれている。海綿骨針は、谷田（1965）や宇津川・上條（1980）の分類に準ずると二軸型（diaxon type）に相当するもの（第59図　写真番号１・３）、桿状体に相当するもの（第59図写真番号２）に相当する。前者は海水生で、後者は淡水生の海綿に由来するとされている。また、植物珪酸体は、イネ科植物に由来するが、表面に多数の小孔（溶食痕）認められることから、粘土化などの続成作用の影響を多分に受けていることが推測される。

**粉末Ｘ線回折**

粉末Ｘ線回折図を第59図に示す。なお、文中で（）内に示したものは、粉末Ｘ線回折図で同定された鉱物名である。固溶体やポリタイプを有する鉱物については、

粉末X線回折試験では正確な同定は困難であるため、最終的な検出鉱物名としては、それらを包括する大分類の鉱物名を使用している。

粉末X線回折（無定方位）法では、石英（quartz）およびクリストバライト（cristobalite）、斜長石（曹長石:albite）が検出されたほか、15Å付近にモンモリロナイト（montmorillonite）と判断される反射が確認された。なお、クリストバライトと斜長石の回折強度は弱いものであり、量比的にも少ないと予想される。

さらに、10Åおよび7Åにも粘土鉱物に基づく反射が僅かに認められている。微弱ではあるものの5Åにも反射が現れていることより、10Åの反射は雲母鉱物（白雲母:muscovite）と見られるが、7Åの反射についてはカオリン鉱物の他、緑泥石の二次反射の可能性もあるため、粉末X線回折（無定方位）法では粘土鉱物種を確定することは出来ない。これら粘土鉱物の識別には定方位法による確認が必要である。

## （5）考　察

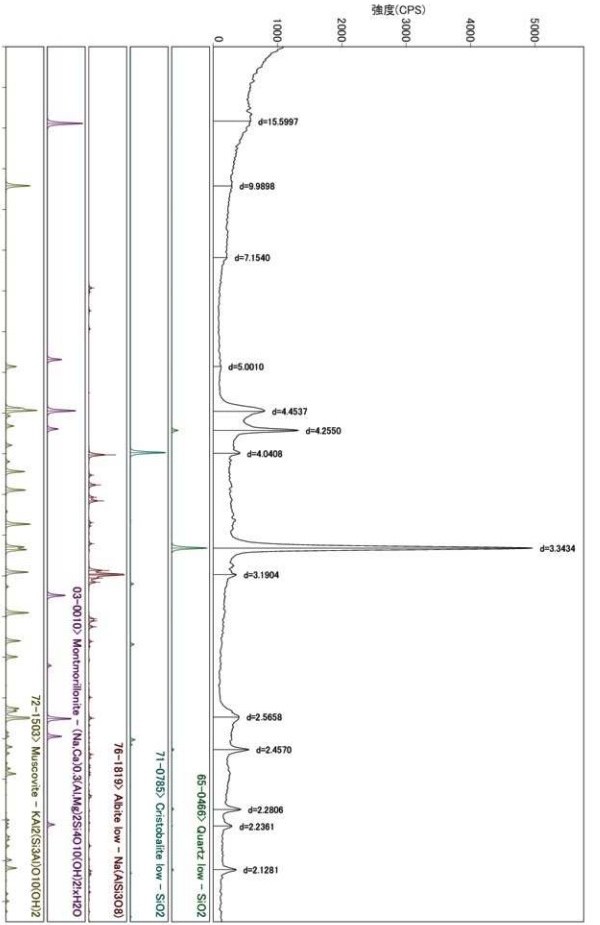
土器内容物の灰白色粘土では、種の同定に耐える保存の良い珪藻化石は全く含まれていない。珪藻化石が少ない理由は、同時に検出された植物珪酸体も保存状態が悪かったことを考慮すると、堆積後の粘土化作用などによって、溶解してしまった可能性が考えられる。

ただし、海水生種と思われる珪藻化石の破片や、海水や淡水生の動物珪酸体に由来する海綿骨針が少量検出された。本遺跡は山形盆地内の最上川によって形成された低位段丘上に位置するが、最上川上流域には海成堆積物の新第三紀の本郷層（山形地学会 1979）に属する憐上砂岩部層や葛沢シルト岩部層などが分布する。また、これら堆積物が分布する場所は、侵食作用が激しい荒砥狭窄部がある（鈴木 2005）。したがって、今回検出された海水生種に由来する化石類は、前記した新第三紀の海成堆積物からの二次堆積と思われる。また、X線回折によって検出された主な鉱物は、石英とモンモリロナイトであるが、クリストバライトや斜長石も量比的には少ないが検出されている。よって、白色物質はモンモリロナイトを主要粘土鉱物とする粘土塊として捉えられる。以上のことから、土器内に認められた白色粘土は、目立った粗粒砂の混入が認められていないことや斜長石に基づく回折強度が弱い状況を考慮すれば、新第三系の熱水変質した凝灰岩類などが風化して粘土化したものに由来する可能性が想定される。

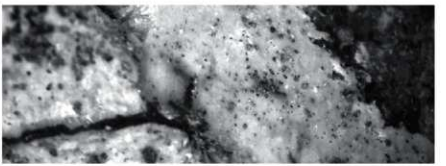
このような珪藻化石の産状は、HO地区基本層序や縄文時代晩期本組遺構西ベルトⅨ層で異地性種として第三紀絶滅種と共に少量産出する点と類似する（パリノ・サーヴェイ株式会社 2005）。したがって、白色粘土ブロックはこれらの堆積物に由来している可能性がある。

### 引用文献

パリノ・サーヴェイ株式会社　2005「高瀬山遺跡の自然科学分析」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集』 p.399～p.486
財団法人山形県埋蔵文化財センター
鈴木康弘　2005「最上川流域の地形」『日本の地形3　東北』 p.225～p.232　東京大学出版会
宇津川徹・上條朝宏　1980「土器胎土中の動物珪酸体について（2）」『考古学ジャーナル　184』 p.14～p.17　ニュー・サイエンス社
谷田専治　1965「新日本動物図鑑」 p.138-p.165　北隆館
山形地学会　1979「荒砥地域の地質」『地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』 p.25　地質調査所



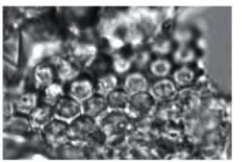

第58図　2次調査H3トレンチSK358出土器(RP137)内灰白色物質の粉末X線回折図

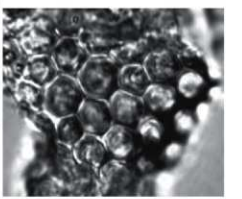


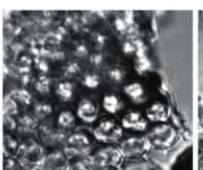
1

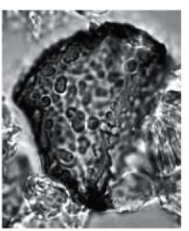
2

3


4


5


6


7

10μm
(1,3)

10μm
(2)

10μm
(4-6)

10μm
(7)

1．海綿骨針
2．海綿骨針
3．海綿骨針
4．珪藻化石の破片
5．珪藻化石の破片
6．珪藻化石の破片
7．植物珪酸体

第59図　珪藻プレパラート中に認められた化石

## 2　J 15出土旧石器資料の機能分析

佐野勝宏・傳田恵隆（東北大学大学院）

### （1）　はじめに

高瀬山遺跡から出土した後期旧石器時代後半・杉久保石器群に属する資料の機能分析をおこなった。当該石器群の使用痕分析例は少なく、指標となる杉久保型ナイフ形石器や神山型彫刻刀形石器の機能は未だ判然としない。これまでおこなわれた杉久保型ナイフ形石器の機能分析では、衝撃剥離の存在から槍先として利用されたと考えられる資料（沢田 1994：岩瀬 2011）と、軟質の対象物を切断するために使われた痕跡を持つ資料（岩瀬 2011）が見出された。一方、神山型彫刻刀形石器は、背面に施された鋭角な彫刀面を特徴とするが、使用痕分析の結果では、この鋭利な彫刀面には使用痕が認められず、逆に隣接する縁辺から使用痕が認められることから、刃部再生の目的で彫刀面打撃がなされた可能性が指摘されている（岩瀬 2011）。

ここでは、高瀬山遺跡から出土した杉久保石器群の機能分析をおこない、高瀬山遺跡でおこなわれた活動について考察する。

### （2）　資料と分析方法

分析した石器資料は、二次加工されたもの、および微細剥離痕を有するものである。具体的な器種名は、ナイフ形石器４点、彫刻刀形石器８点、彫刻刀形石器ブランク３点（内１点は接合資料）、彫刻刀スポール38点、石刃12点、剥片１点、の合計66点である。器種分類及び器種名は、本報告書のそれに従う。石材は全て珪質頁岩である。彫刻刀スポールの内、27点は縁辺の大部分が注記で覆われているため、使用痕の観察が不可能であった。したがって、ここではその資料を除いた、39点の分析結果を報告する（表７）。

分析に当たっては、落射照明付金属顕微鏡（Olympus BX51M）とデジタルマイクロスコープ（KEYENCE VHX-1000）を使用し、主に100倍から500倍で観察した。顕微鏡写真は、全てデジタルマイクロスコープで深度合成をおこなった上で撮影した。使用痕分析は、低倍率法（Odell 1981）と高倍率法（Keeley 1980）でおこない、光沢の分類基準は主に梶原・阿子島（1981）に拠る。着柄痕の評価は、Rots（2010）、衝撃剥離の認定基準は、Sano（2009）、佐野（2011）に基づく。

### （3）　分析結果

石器資料の表面観察の結果、対象資料には石器の全体に拡がる表面変化や縁辺の摩耗は認められず、剥離された直後のような状態を保っていることがわかった。これは、埋没後に石器縁辺や表面に変化をもたらす影響をほとんど被っていないことを意味する。

観察したナイフ形石器４点は、いずれも極めて鋭利な縁辺を保ち（第60図：ａ・ｃ）、使用に伴う連続する微小剥離痕、線状痕、摩耗、光沢といった痕跡は認められない。剥離直後の石器が持つ極微小な鋸歯状の縁辺が残っており（第60図：ｃ）、こういった凹凸は使用時の対象物との接触で直ぐに剥離されてしまうことを考慮すると、縁辺を刃部として使用した可能性は低い。100倍以上の顕微鏡観察で認識できる微小剥離痕は、僅かに、そしてランダムに縁辺に観察されるが、これは剥離直後の試料でも見られるため、使用痕とは考えられない。一方、Ｐ32－１、Ｐ５－４の先端部、Ｐ５－５の中央部の折れは（第60図：１・２・３）、器体に垂直に生じた横断的なベンディング・フラクチャーで、狩猟時の衝撃でも生じるが、踏付けや二次加工時の偶発的な折れとは識別できない。Ｐ32－１とＰ５－５は、背面に僅かに線状の光沢を伴う光沢部があり（第60図：ｂ）、これは投射時に生じる微細衝撃線状光沢（Moss and Newcomer 1982）の一種とも考えられるが、指標的な特徴を示さないため断定できない。以上、横断的なベンディング・フラクチャーを持つ３点のナイフ形石器は、狩猟具の先端部として投射された可能性を排除できないものの、縁辺の損傷が皆無に等しいこと、指標的な衝撃剥離は生じていないことから、その可能性は低いものと考える。Ｐ31－１のナイフ形石器は、連続する微小剥離痕や摩耗の無い鋭利な刃部を保つことから、未使用と解釈した。

彫刻刀形石器に関しても、明瞭な使用痕は認められなかった。彫刀面は、連続する微小剥離痕や摩耗が全くない状態で、鋭い角や鋭利な縁辺をそのまま残している（第60図：ｄ、第61図：ａ）。彫刻刀形石器の場合、彫刀

面よりもむしろ二次加工のない縁辺に使用痕が観察される事例が多くあり（佐野 2011）、長野県上ノ原遺跡でもその傾向が認められるが（岩瀬 2011）、高瀬山遺跡出土彫刻刀形石器は、縁辺も剥離された直後のような、摩耗や表面変化のない状態を保っている（第 61 図：ｂ）。いくつかの彫刻刀形石器には微小剥離痕が認められるが、いずれも単独でランダムに縁辺に生じたもので、使用に伴う連続的な微小剥離痕ではない。これらの傾向は、分析した彫刻刀形石器全点に共通する特徴で、神山型彫刻刀形石器とそれ以外の彫刻刀形石器とも同じ結果であった。以上の観察結果から、分析した彫刻刀形石器は全て未使用と考えられる。

彫刻刀形石器ブランクや彫刻刀スポールも同様の結果で、縁辺は微小剥離痕が散発的にあるのみで（第 61 図：ｃ）、鋭利な縁辺を保ち、使用の痕跡は認められない。

石刃や剥片に関しても、基本的には上記のトゥールと同様の観察結果が得られた。１点、Ｆ１タイプの光沢が認められた石刃があるが、縁辺のごく限定された１箇所に認められただけで、埋没後の表面変化と識別できない種のものである。ただし、今回分析した資料の中で、唯一使用された可能性が比較的高い石刃が１点存在する。この石刃の端部には、背面と腹面に交互に発達した微小剥離痕が連続的に形成されている（第 61 図：ｄ）。これは、刃部に平行する動作で対象物と接した際に生じる使用痕と相似する。ただし、微小剥離痕以外の痕跡はなく、これが使用によって生じた痕跡だとしても、対象物は同定できない。この交互に連続する微小剥離痕が使用によるものだとした場合、何かしらの対象物を切断する行為に用いられ、それは光沢面や磨滅が形成されない程度の、便宜的な使用であったと考えられる。

## （4）　考察

以上、高瀬山遺跡出土杉久保石器群の機能分析の結果を見てきた。使用された可能性のある石器資料は、石刃１点のみで、横断的な折れを持つナイフ形石器３点は投射行為に使用された可能性を排除できないものの、その可能性は高くない。他の全ての石器資料は、その縁辺が極めて鋭利で、表面にも摩耗や光沢の発達がほとんど認められないことから、未使用であったと考える。これらの石器資料が、認識し得る使用痕が発達する以前に作業を終了させるような極めて便宜的な使用に供された可能性は完全には排除できない。しかし、便宜的な作業であっても、縁辺の鋭利な刃部には摩耗や微小剥離痕が生じるが、分析資料は剥離された直後の実験試料と同様な、いかなる損傷も認められない資料が大半であった。したがって、上記４点以外の資料は、未使用と判断して問題ないものと考える。

このように、埋没後の表面変化がほとんどないにもかかわらず、明瞭な使用の痕跡が全くと言っていいほど認識されないことは稀である。石材の原産地で集中的な石刃製作がおこなわれたオランダのアイサーハイデ遺跡でも、やはり使用痕の検出率が低い結果が得られている（Sano 2010）。この遺跡では、骨角牙の加工痕跡はある程度認められたものの、遺跡滞在の主な目的は石刃製作であったと解釈された。高瀬山遺跡も珪質頁岩が採集できる最上川に隣接する。今回の使用痕分析の結果は、高瀬山遺跡の滞在目的が主に石器製作であった可能性を示唆している。Ｊ 15 出土旧石器資料は、何らかの理由で使用されずに遺棄・廃棄された資料であり、高瀬山遺跡で製作された石刃や石刃製のトゥールの多くは、別の地で使用するために製作されたものと考えられる。

### 引用文献


岩瀬　彬　2011「杉久保石器群の使用痕分析－長野県上ノ原遺跡（第２次・町道地点）の分析を通して－」『旧石器研究』第７号　p.37 ～ p.55

梶原　洋・阿子島香　1981「頁岩製石器の実験使用痕研究－ポリッシュを中心とした機能推定の試み－（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その２）」『考古学雑誌』第 67 巻第１号　p. 1 ～ p.36

佐野勝宏　2011「剥器再考：剥刀面打撃の役割に関する機能論的検討」『旧石器研究』第７号　p.15 ～ p.35

佐野勝宏　2011「石器に残される狩猟痕跡認定のための指標」『考古学ジャーナル』第 614 号　p.20 ～ p.25

沢田　敦　1994「第Ⅵ章　まとめ」『上ノ平遺跡Ａ地点』新潟県教育委員会　p.92 ～ p.114

Keeley, L.H., 1980. *Experimental Determination of Stone Tool Uses: A Microwear Analysis*. University of Chicago Press, Chicago and London.

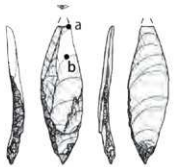
Moss, E.H., Newcomer, M.H., 1982. Reconstruction of tool use at Pincevent: Microwear and experiments. *Studia Praehistorica Belgica* 2, 289-312.

Odell, G.H., 1981. The Mechanics of Use-Breakage of Stone Tools: Some Testable Hypotheses. *Journal of Field Archaeology* 8, 197-209.

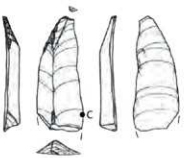
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150
Rots, V., 2010. *Prehension and Hafting: Traces on Flint Tools*: A Methodology. Leuven University Press, Leuven.
Sano, K., 2009. Hunting evidence from stone artefacts from the Magdalenian cave site Bois Laiterie, Belgium: a fracture analysis. *Quartär* 56, 67-86.
Sano, K., 2010. Lithic Functional Analysis, in: Rensink, E. (Ed.), *Eyserheide: A Magdalenian open-air site in the loess area of the Nether lands and its archaeological context*, Analecta Praehistorica Leidensia 42. Faculty of Archaeology, Leiden University, Leiden, pp. 113-125.Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表７　使用痕分析結果

| 連番 | 遺物番号 | 図版 | 器種 | 検出痕跡 | 推定機能 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | P32-1 | 第 60 図：1 | ナイフ形石器 | 衝撃線状光沢？、微小剥離痕、ペンディング・フラクチャー | 不明 | 杉久保型 |
| **2** | **P31-1(RQ1146)** | | **ナイフ形石器** | **埋没光沢、微小剥離痕** | **未使用** | **杉久保型** |
| 3 | P5-4(RQ1397) | 第 60 図：2 | ナイフ形石器 | 微小剥離痕、ペンディング・フラクチャー | 不明 | |
| **4** | **P5-5** | **第 60 図：3** | **ナイフ形石器** | **衝撃線状光沢？、微小剥離痕、ペンディング・フラクチャー** | **不明** | |
| 5 | P6a-1(RQ1407) | 第 60 図：4 | 彫刻刀形石器 | | 未使用 | |
| **6** | **P33-1(RQ1114)** | **第 60 図：1** | **彫刻刀形石器** | | **未使用** | |
| 7 | P4a-2(RQ542) | | 彫刻刀形石器 | | 未使用 | |
| **8** | **P13a-1(RQ1237)** | | **彫刻刀形石器** | **微小剥離痕** | **未使用** | |
| 9 | P2-1(RQ1405) | | 彫刻刀形石器 | | 未使用 | 神山型 |
| **10** | **P23-1(RQ1422)** | | **彫刻刀形石器** | **微小剥離痕** | **未使用** | |
| 11 | P4-1(RQ1433) | | 彫刻刀形石器 | 微小剥離痕 | 未使用 | 神山型 |
| **12** | **P2-2(RQ1350)** | | **彫刻刀形石器** | | **未使用** | |
| 13 | P20-1(RQ895) | 第 60 図：2 | 彫刻刀形石器ブランク | 微小剥離痕 | 未使用 | 神山型 |
| **14** | **P24-1** | | **彫刻刀形石器ブランク** | | **未使用** | **神山型** |
| 15 | P6a-2 (RQ1247 + RQ1330) | | 彫刻刀形石器ブランク | 被熱痕 | 未使用 | 神山型 |
| **16** | **P20-2(RQ1127)** | | **彫刻刀スポール** | | **未使用** | |
| 17 | P18-4(RQ571) | | 彫刻刀スポール | | 未使用 | |
| **18** | **P18-9** | | **彫刻刀スポール** | | **未使用** | |
| 19 | P23-8 | | 彫刻刀スポール | | 未使用 | |
| **20** | **P20-4** | | **彫刻刀スポール** | | **未使用** | |
| 21 | P18a-2 | | 彫刻刀スポール | | 未使用 | |
| **22** | **P18a-1** | | **彫刻刀スポール** | | **未使用** | |
| 23 | P17-3 | | 彫刻刀スポール | | 未使用 | |
| **24** | **P20-3** | | **彫刻刀スポール** | | **未使用** | |
| 25 | P23-5 | | 彫刻刀スポール | | 未使用 | |
| **26** | **P18(RQ1133)** | | **彫刻刀スポール？** | | **未使用** | |
| 27 | P4c-1(RQ1313) | | 石刃 | 微小剥離痕 | 未使用 | |
| **28** | **P2a-1(RQ1406)** | | **石刃** | | **未使用** | |
| 29 | P8-1 | | 石刃 | | 未使用 | |
| **30** | **P11-1** | | **石刃** | **光沢 F1 タイプ** | **未使用** | |
| 31 | P2b-2(RQ511) | | 石刃 | | 未使用 | |
| **32** | **P18-1(RQ1289)** | | **石刃** | | **未使用** | |
| 33 | P1b-6(RQ229) | | 石刃 | | 未使用 | |
| **34** | **P5a-1(RQ1414)** | | **石刃** | **微小剥離痕** | **未使用** | |
| 35 | P24-2(RQ1456) | 第 60 図：3 | 石刃 | 交互微小剥離痕 | 切断？ | |
| **36** | **P4c-2** | | **石刃** | **微小剥離痕** | **未使用** | |
| 37 | P14a-1(RQ1324) | | 石刃 | 輝斑？ | 未使用 | |
| **38** | **P11-2(RQ1374)** | | **石刃** | **微小剥離痕** | **未使用** | |
| 39 | P1aII-4(RQ357) | | 剥片 | | 未使用 | |

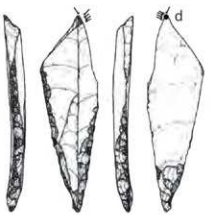



1 (P32-1)




2 (P5-4)

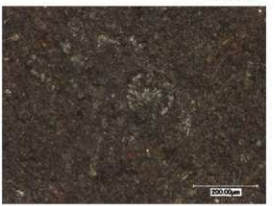
3 (P5-5)



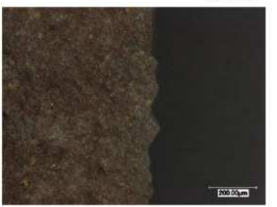

4(P6a-1)

0　5 cm

a (200x)



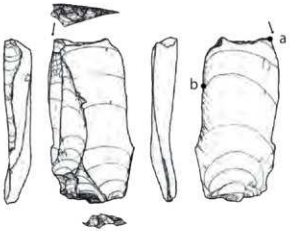
b (400x)



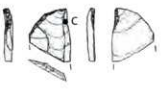
c (300x)

d (200x)

第 60 図　J 15 出土旧石器資料の顕微鏡写真（1）




1 (P33-1)

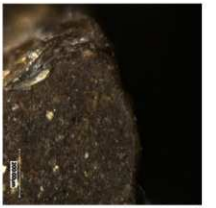



2 (P20-1)

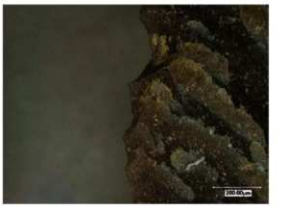
3(P24-2)

0　5cm

刃部に平行する動作



a (300x)



b (300x)

c (200x)

d (200x)

第 61 図　J 15 出土旧石器資料の顕微鏡写真（2）

## 3　放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）

（株）加速器分析研究所

### （1）　測定対象資料

高瀬山遺跡は、山形県寒河江市大字寒河江字高瀬山に所在し、高瀬山（標高122.5m）と最上川（標高90.1m）の中位段丘面（標高113.4m）に立地する。測定対象試料は、高瀬山遺跡（ＨＯ）３期Ｊ15トレンチの旧石器出土層位より出土した炭化物（Ｎｏ.１：ＩＡＡＡ-110490）、高瀬山遺跡2011年寒河江市調査区の旧石器出土層位より出土した炭化物（Ｎｏ.２：ＩＡＡＡ-110491、Ｎｏ.３：ＩＡＡＡ-110492、Ｎｏ.４：ＩＡＡＡ-110493）の合計4点である（表8）。

### （2）　測定の意義

採取地点で検出された旧石器集中ブロック）の製作･使用年代を明らかにする。

### （3）　化学処理工程

（1）メス･ピンセットを使い、根･土等の付着物を取り除く。
（2）酸-アルカリ-酸（ＡＡＡ：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。ＡＡＡ処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１Ｍ）の塩酸（ＨＣｌ）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（ＮａＯＨ）水溶液を用い、0.001Ｍから１Ｍまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Ｍに達した時には「ＡＡＡ」、１Ｍ未満の場合は「ＡａＡ」と表8に記載する。
（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（$CO^2$）を発生させる。
（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（Ｃ）を生成させる。
（6）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### （4）　測定方法

加速器をベースとした$^{14}$Ｃ-ＡＭＳ専用装置ＮＥＣ社製）を使用し、$^{14}$Ｃの計数、$^{13}$Ｃ濃度（$^{13}C/^{12}C$）、$^{14}$Ｃ濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（ＮＩＳＴ）から提供されたシュウ酸（ＨＯｘⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### （5）　算出方法

（1）$\delta^{13}$Ｃは、試料炭素の$^{13}$Ｃ濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表8）。ＡＭＳ装置による測定値を用い、表中に「ＡＭＳ」と注記する。
（2）$^{14}$Ｃ年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中$^{14}$Ｃ濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。$^{14}$Ｃ年代は$\delta^{13}$Ｃによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表８に、補正していない値を参考値として表９・10に示した。$^{14}$Ｃ年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、$^{14}$Ｃ年代の誤差（±１$\sigma$）は、試料の$^{14}$Ｃ年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。
（3）ｐＭＣ（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の$^{14}$Ｃ濃度の割合である。ｐＭＣが小さい（$^{14}$Ｃが少ない）ほど古い年代を示し、ｐＭＣが100以上（$^{14}$Ｃの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も$\delta^{13}$Ｃによって補正する必要があるため、補正した値を表８に、補正していない値を参考値として表９・10に示した。
（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の$^{14}$Ｃ濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の$^{14}$Ｃ濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、$^{14}$Ｃ年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１$\sigma$＝68.2％）あるいは２標準偏差（２$\sigma$＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が$^{14}$Ｃ年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}$Ｃ補正を行い、下一桁を丸めない$^{14}$Ｃ年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要

がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表９に示した。暦年較正年代は、$^{14}$Ｃ年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

## （6）　測定結果

試料の$^{14}$Ｃ年代は、高瀬山遺跡（ＨＯ）３期」15トレンチの旧石器出土層位より出土した炭化物Ｎｏ．１が18230 ± 70yrBP、高瀬山遺跡 2011 年寒河江市調査区の旧石器出土層位より出土した炭化物 No.2 が 2510 ± 20yrBP、Ｎｏ．３が 10210 ± 40yrBP、No.4 が 10150 ± 40yrBP である。Ｎｏ．３とＮｏ．４の値は誤差（±１σ）の範囲で重なり、近い年代を示す。しかし、いずれも旧石器出土層位から出土したものであるにも関わらず、Ｎｏ．１、Ｎｏ．２、Ｎｏ．３とＮｏ．４の各々の間には大きな年代差が認められる。暦年較正年代（１σ）は、Ｎｏ．１が 21974 ～ 21564cal BP、Ｎｏ．２が 2719 ～ 2513cal BP、Ｎｏ．３が 12027 ～ 11825cal BP、Ｎｏ．４が 11965 ～ 11757cal BP の間に各々複数の範囲で示される。Ｎｏ．１は後期旧石器時代、Ｎｏ．２は縄文時代晩期、Ｎｏ．３とＮｏ．４は縄文時代草創期から早期頃に相当し、上層から炭化物が混入した可能性を考慮する必要があると考えられる。

試料の炭素含有率はすべて 50％を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

### 引用文献

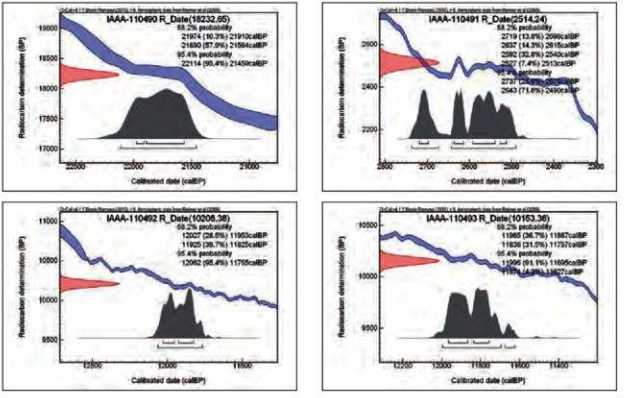
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

表８　処理方法、δ $^{13}$Ｃ値、$^{14}$Ｃ年代値とｐＭＣ

| 測定番号 | 試料名 | 採取場所 | 試料形態 | 処理方法 | δ 13C（‰）(AMS) | δ 13C 補正あり | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | Libby Age（yrBP） | pMC (%) |
| IAAA-110490 | No. 1 | (HO) 3 期　J15 トレンチ | 炭化物 | AAA | -31.91 ± 0.53 | 18,230 ± 70 | 10.33 ± 0.08 |
| IAAA-110491 | No. 2( 登録 79) | 2011 年寒河江市調査区 | 炭化物 | AAA | -27.65 ± 0.38 | 2,510 ± 20 | 73.12 ± 0.22 |
| IAAA-110492 | No. 3( 登録 217) | 2011 年寒河江市調査区 | 炭化物 | AaA | -29.51 ± 0.4 | 10,210 ± 40 | 28.06 ± 0.14 |
| IAAA-110493 | No. 4( 登録 1360) | 2011 年寒河江市調査区 | 炭化物 | AaA | -25.56 ± 0.36 | 10,150 ± 40 | 28.25 ± 0.13 |

表９　δ $^{13}$Ｃ未補正の $^{14}$Ｃ年代値とｐＭＣ、および暦年代（１）

| 測定番号 | δ 13C 補正なし | | 暦年較正用 (yrBP) | １σ暦年代範囲 | ２σ暦年代範囲 |
|---|---|---|---|---|---|
| | Age (yrBP) | pMC (%) | | | |
| IAAA-110490 | 18,350 ± 70 | 10.19 ± 0.08 | 18,232 ± 65 | 21974calBP - 21910calBP (10.3%) | 22114calBP - 21459calBP (95.4%) |
| | | | | 21890calBP - 21564calBP (57.9%) | |
| IAAA-110491 | 2,560 ± 20 | 72.73 ± 0.21 | 2,514 ± 24 | 2719calBP - 2698calBP (13.8%) | 2737calBP - 2676calBP (23.6%) |
| | | | | 2637calBP - 2615calBP (14.3%) | 2643calBP - 2490calBP (71.8%) |
| | | | | 2592calBP - 2540calBP (32.8%) | |
| | | | | 2527calBP - 2513calBP ( 7.4%) | |
| IAAA-110492 | 10,280 ± 40 | 27.8 ± 0.13 | 10,208 ± 38 | 12027calBP - 11953calBP (28.5%) | 12062calBP - 11765calBP (95.4%) |
| | | | | 11925calBP - 11825calBP (39.7%) | |
| IAAA-110493 | 10,160 ± 40 | 28.22 ± 0.12 | 10,153 ± 36 | 11965calBP - 11867calBP (36.7%) | 11996calBP - 11695calBP (91.1%) |
| | | | | 11836calBP - 11757calBP (31.5%) | 11674calBP - 11627calBP ( 4.3%) |




第 62 図　[ 参考 ] 暦年較正年代グラフ

# 4　テフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## （1）　はじめに

寒河江市に所在する高瀬山遺跡は、最上川左岸に広がる河岸段丘上に位置する。高瀬山遺跡付近の最上川は、長井盆地と山形盆地の間に分布する山地を抜けて山形盆地西縁部に流れ込んだ付近に相当する。長井盆地と山形盆地の間の山地は、最上川流域の中でも河岸段丘の発達が特に良好とされている地域であり（小池ほか編 2005）、高瀬山遺跡の位置する段丘もこの流域から連続する段丘として捉えられている（豊島 1977）。その段丘区分に従えば、高瀬山遺跡の位置する段丘は、最も低位の段丘群Ⅴより一段高い段丘群Ⅳに区分されている。山間地の段丘群Ⅳの段丘堆積物中から出土した木片からは、約 25,000BP や約 31,000BP などの年代が得られていることから、高瀬山遺跡の位置する段丘の形成年代も同程度と考えて良い。

今回の発掘調査では、段丘上に形成された褐色土いわゆるローム層より、比較的保存状態のよい石器の出土が確認されている。同層準から出土した炭化材の放射性炭素年代は約 18,000BP を示すとされていることから、旧石器時代の貴重な遺物とされている。本報告では、この旧石器時代の遺物包含層に関わる年代資料を得ることを目的として、遺物包含層を含むローム層中より、噴出年代の明らかな指標テフラを検出し、その産状からローム層層序の年代について考察する。

## （2）　試　料

試料は、J 15 トレンチで作成された断面より採取された、試料番号1から試料番号8までの合計8点の土壌である。断面は、発掘調査所見により上位より1層から5層まで分層され、1層は黒ボク土層、2層は漸移層、3層はローム層、4層および5層は砂質のローム層とされている。なお、調査区内の場所によっては、3層と4層の間に礫層が挟まれている断面も認められている。また、旧石器時代とされる石器は3層中より出土している。

試料は、2層の上部と下部からそれぞれ試料番号1と2が採取され、3層の上部・中部・下部からそれぞれ試料番号3・4・5が採取されている。4層の上部と下部からは、試料番号6と7がそれぞれ採取され、5層上部からは試料番号8が採取されている。

分析時の試料観察により、2層の試料番号1・2は暗褐色を呈するシルト質な黒ボク土、3層の試料番号3～5は明黄褐色を呈する砂分を若干含むシルト質のローム、4層の試料番号6・7は黄褐色を呈するやや砂質のローム、5層の試料番号8は明黄褐色を呈する砂質のロームである。

## （3）　分析方法

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

## （4）　結　果

分析結果を表 10 に示す。8点の試料からは火山ガラスが検出された（第 64 図）。これらのうち試料番号1・2では極めて微量、他の試料には微量含まれる。いずれの試料においても、無色透明のバブル型火山ガラスが多く、これに少量の無色透明の軽石型火山ガラスが混在する。スコリアおよび軽石は、いずれの試料にも認められなかった。

なお、各試料の砂分を構成する主な砕屑物は、細粒砂径の非常に粒径の淘汰度の良好な石英および長石類などからなる白色の鉱物粒である。他に、少量の岩石片と極めて微量の黒雲母片や輝石類などの有色鉱物粒などが混在する。

既に述べたように8試料とも火山ガラスは、極めて微量～微量程度とあまり含まれていない。したがって、各層の

中で火山ガラスが多い試料について屈折率を測定した。各試料の測定結果を第 63 図に示す。レンジは n1.499-1.501 の非常に狭い範囲に集中する。モードはいずれも n1.500 である。

## （5）　考　察

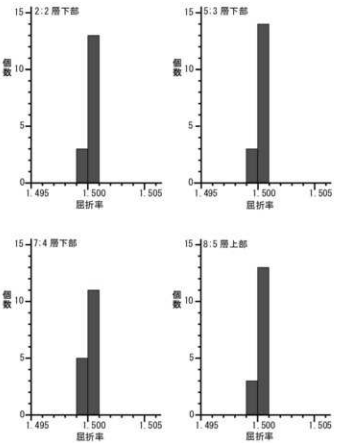
分析により全試料から検出された火山ガラスは、形態も屈折率も同様であることから、同一のテフラに由来すると考えられる。バブル型を主体とする形態と特徴的な屈折率のレンジから、由来するテフラは姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ：町田・新井 1976）に同定される。ＡＴの噴出年代は、80 年代後半から 90 年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば、松本ほか 1987、村山ほか 1993、池田ほか 1995 など）や 2000 年代に行われた放射性炭素年代測定（宮入ほか 2001、Miyairi et al 2004 など）から、放射性炭素年代ではおよそ 2.5 万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおけるＡＴの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ２と３との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は 2.5 ～ 3.2 万年前におよぶとされている(町田･新井 2003)。町田･新井（2003）は、ＡＴの放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく 2.6 ～ 2.9 万年前頃になるであろうとしている。

今回のようなローム層中に微量ずつ拡散した火山ガラスの産状からは、ローム層形成中に ＡＴ が降灰したとは考えられず、５層の形成以前に周辺域に降下堆積したＡＴの火山ガラスが、流水や風などによって再堆積したことが推定される。前述した高瀬山遺跡の位置する段丘の形成年代を考慮すれば、段丘を構成する砂礫層の堆積時期中にＡＴの降灰があった可能性がある。その場合、ＡＴの降下堆積層は、周囲の既に離水していたより高位の段丘上や丘陵

表10　テフラ分析結果

| 試料番号 | 試料名 | スコリア | 火山ガラス | | 軽石 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 量 | 量 | 色調・形態 | 量 |
| 1 | 2層上部土壌サンプル | － | (+) | cl･bw>cl･pm | － |
| 2 | 2層下部土壌サンプル | － | (+) | cl･bw>cl･pm | － |
| 3 | 3層上部土壌サンプル | － | + | cl･bw>cl･pm | － |
| 4 | 3層中部土壌サンプル | － | + | cl･bw>cl･pm | － |
| 5 | 3層下部土壌サンプル | － | + | cl･bw>cl･pm | － |
| 6 | 4層上部土壌サンプル | － | + | cl･bw>cl･pm | － |
| 7 | 4層下部土壌サンプル | － | + | cl･bw>cl･pm | － |
| 8 | 5層上部土壌サンプル | － | + | cl･bw>cl･pm | － |

凡例　－：含まれない、(+)：きわめて微量、＋：微量、＋＋：少量、
＋＋＋：中量、＋＋＋＋：多量。
g：良好、sg：やや良好、sb：やや不良、b：不良。　最大粒径2mm。
cl：無色透明、br：褐色、bw：バブル型、md：中間型、pm：軽石型。




第63図　火山ガラスの屈折率

上および山地斜面上などに分布しており、高瀬山遺跡の位置する段丘の形成過程に伴って、離水直前には河川砂として、離水後は風成塵として周囲から供給され、ローム層中に含まれることになったと考えられる。

なお、ローム層各層の形成年代については、今回のATの産状により、ATの降灰年代以降であることは確実であり、そのことは3層から出土した炭化材の放射性炭素年代とも矛盾はしない。しかし、現時点ではそれ以上の年代指標は得られないため、各層の詳細な年代対比については、今後の課題とされる。

**引用文献**

古澤明　1995 「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』第 101 号　p.123 ～ p.133
池田晃子・奥野充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫　1995 「南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による 14 C年代」『第四紀研究』第 34 号　p.377 ～ p.379
小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編　2005 『日本の地形3　東北』p.355　東京大学出版会
町田　洋・新井房夫　1976 「広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義－」『科学』第 46 号　p.339 ～ p.347
町田　洋・新井房夫　2003 『新編　火山灰アトラス』p.336　東京大学出版会
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗　1987 「姶良Ｔn 火山灰の 14 C年代」『第四紀研究』第 26 号　p.79 ～ p.83
宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎　2001 「姶良Ｔn 火山灰の C -14 年代のクロスチェック ( 演旨 )」『地球惑星科学関連学会合同大会予稿集 (CD-ROM)』2001　Qm-010.
Miyairi,Y.・Yoshida,K.・Miyazaki, Y .・Matsuzaki,H.・Kaneoka,I.,2004,Improved 14C dating of a tephra layer(AT tephra,Japan) usingAMSon selected organic fractions.Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224,555-559.
村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村真・安田喜憲・平朝彦　1993 「四国沖ピストンコア試料を用いたＡＴ火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の 14 C年代－」『地質学雑誌』第 99 号　p.787 ～ p.798.
豊島正幸　1977 「最上川中流部 , 山形・長井盆地間の河岸段丘」『東北地理』第 29 号　p.221 ～ p.228.

1.砂分の状況(J15トレンチ3層下部土壌サンプル;5)

2.砂分の状況(J15トレンチ5層上部土壌サンプル;8)

3.ATの火山ガラス(J15トレンチ3層下部土壌サンプル;5)
Vg:火山ガラス.

4.ATの火山ガラス(J15トレンチ5層上部土壌サンプル;8)

第64図　検出されたテフラ

# Ⅶ　総　　括

## 1　遺構の時期と分布について

今回の調査で検出された遺構は、登録数で第１次調査202基・第２次調査315基・第３次調査195基の計712基を数える。時期は旧石器時代から中世にわたり、主な遺構は石器集中ブロック・竪穴住居跡（炉・カマド跡）・埋設土器・配石（埋石）遺構・焼土堆積土坑・袋状土坑・柱穴・ピット列（柵）・溝跡・周溝（墳墓）・遺物包含層（捨て場）などである。今回の調査は、工事箇所のみに限定された部分的な調査であったため、住居跡や溝跡などの大型遺構や遺構群の全容を捉えるまでには至っていない。しかし、調査範囲は東西350ｍ・南北300ｍに及び、ある程度のまとまりを有することから、これらの区域における遺構分布の広がりを把握するには有効であったと言えよう。ここでは周辺調査区における成果も踏まえながら、遺跡の主要な時期における遺構・遺物の分布の特徴についてまとめておく。

調査区域全体における遺構の分布密度を概観すると、高速道路に近接する北側の調査区は、遺構分布が希薄である。第１次調査のＤ延長トレンチとＣ４・Ｄトレンチ、Ｅ北トレンチとＥ南トレンチ、第２次調査のＧ区、第３次調査のＩ区とＪ区では、遺物を伴出するような遺構はほとんど検出されていない。約600㎡の面調査を実施したＫ区においても、検出された遺構はやや大型の土坑３基のみであった。この結果は、県教育委員会が実施した分布調査（山形県教委 2010）において「遺構遺物の希薄なエリアに相当する」とされた所見を追認する形となっている。また、同調査で深い落ち込みが確認された湿地帯に続くとみられるＨ２・12トレンチでも、遺構は希薄であった。

調査で検出された主な遺構の時期は、旧石器時代・縄文時代・古墳時代・平安時代・中世である。以下に、時代を追って、遺構の分布状況について検討を加えていく。

**旧石器時代**　調査区域の北東に位置するＪ15トレンチから、後期旧石器時代の石器集中ブロック１か所が検出された。2011年には寒河江市教育委員会を主体として、その周辺域を拡張した東西５ｍ×南北10ｍの範囲の調査が行われた（寒河江市教委 2012）。センター調査区を中心とした石器群のまとまりがその周縁でも確認されるとともに、散漫な出土状況ではあるが寒河江市調査区の縁辺まで旧石器の広がりが認められた。近接する高速道路内の高瀬山遺跡１期調査区（１・６区）を始め、これまで多数の旧石器が遺跡範囲で検出されている。旧石器の分布は、原石の頁岩が採取される最上川流域の段丘一円に内在するものと思われる。詳細については、遺物の総括において後述する。

**縄文時代**　縄文時代の遺構・遺物の分布は、第１次調査のＦ区周辺と第２次調査のＨ区が中心となる。前述した調査（山形県教委 2010）でも、「縄文時代の遺構は最上川寄りの縁辺付近に中心がある」との報告がなされている。特にＨ区は、寒河江市による分布調査報告（寒河江市教委 1981）で、有力な遺跡推定地の１つとして「高瀬山の縄文時代を代表する中心遺跡」とされたＤブロック南半部にあたり、今回の調査はそれを裏付ける結果となった。遺構・遺物の主要な時期は、中期前葉・中期末葉・後期前葉の３つに大きく分かれる。中期前葉の分布範囲は位置を隔てた単独的な在り方を示すのに対し、中期末葉と後期前葉では、Ｈ７・８トレンチの隣接する区域を中心として分布が重なる傾向にある。２時期の遺物が覆土から伴出する土坑（ＳＫ254・270・329・330　ＳＸ277・288・310）なども認められる。

**中期前葉**　調査区域の西側中央に分布がまとまっており、Ａ斜面トレンチ（ＳＫ91）～Ｂトレンチ（ＳＫ114　遺物包含層）・Ｈ３トレンチの北半部（ＳＫ355・364）で遺構・遺物が検出されている。特にＨ３トレンチの土坑２基は、袋状土坑から複数の土器がまとまって出土するという特徴を有する。

**中期末葉**　遺構分布は、Ｆ区の西側周辺とＨ区の南西側の平坦面に大きく分かれる。前者は、埋設土器群の集中域で、Ａ上部トレンチ（ＳＸ108）とＦ区（ＥＵ145・171　ＳＫ119・132）で検出されている。後者は、中位段丘面の南西縁辺に沿って立地しており、縄文時代の遺

構が特に密集する区域となっている。当該期の遺構は、Ｈ１トレンチの南端（ＳＸ241）・Ｈ７トレンチ南東部の平坦面（ＳＴ242　ＥＬ247　ＥＵ244　ＳＫ246　ＳＰ265・271）・Ｈ８トレンチ（ＳＫ286・302・304・319　ＳＰ316　）・Ｈ４トレンチの南西端（ＳＫ412）・Ｈ５トレンチの西端（ＥＬ499）から検出されている。さらに、前述したＨ７・８トレンチの隣接する区域においては、多数の焼土堆積土坑（ＳＫ245・267・274・276・278・291　ＳＰ248・298　ＳＸ252・277・279・288）も検出されている。これらの遺構群の構成と配置をみると、段丘縁辺に沿って帯状に延びる遺構集中域の両側に、複式炉を伴う住居跡３棟（ＳＸ241も住居跡か？）が位置している。その間には、埋設土器・配石（埋石）遺構・焼土堆積土坑・袋状土坑などの土坑群が集中する。当該期の集落跡が検出された周辺の高瀬山遺跡（ＳＡＨＯ）・柴橋遺跡・橋上遺跡などでは、段丘縁辺に沿って竪穴住居跡が半円状又は弧状に配置され、その内側に埋設土器などの土坑群が分布するといった類例が報告されている（菅原 2007）。当遺跡の遺構集中域の範囲は80ｍを超えると推定され、同報告において直径120～150ｍとされる当該期の集落規模に相応するものと思われる。ただし、遺構集中域の北東側のＨ４トレンチでは、当該期の主要な遺構の分布は認められない。南西側には、最上川左岸の急峻な段丘崖が接しているが、あるいは河川の浸食作用で削られたことにより当時の生活面が失われてしまった可能性も考えられる。

**後期前葉**　遺構・遺物の分布は、前述したＨ区の南西側の遺構集中域と高瀬山に近接する南側に認められる。前者では、中期末葉の遺物が伴出する土坑が多く、当該期における単一の遺構としては、Ｈ７トレンチ（ＥＵ269　ＳＫ268）とＨ４トレンチ（ＳＫ406）の３基のみである。一方、後者では、Ｈ５・10トレンチの２か所で当該期に属する遺物包含層を検出しており、整理箱で60箱に及ぶ遺物が出土している。地形の落ち込みや山裾に立地することなどから、集落の外縁における捨て場と考えられる。遺構が掘り込まれる層位の違いによるものか、中期末葉に比べて検出遺構が少ない要因は判然としない。しかし、付近に当該期の集落跡が存在することは、遺物量からも容易に推測される。

なお、今回の調査では石棒と石皿を伴出する土坑（ＳＫ254）が検出された。整理時に遺構の検討を行う中で、それに類した棒状あるいは凹みを有する礫石が、焼土堆積土坑の底面付近から出土する事例（ＳＫ268・286）も認められている。今後の調査において注意を要する。

**古墳時代**　調査対象範囲には、群集墳を形成するとみられる２つの領域があり、いずれも低地を見下ろす段丘縁辺に立地する。

調査区が立地する中位段丘の西縁辺、県指定史跡の高瀬山古墳周辺は、明治期には現存する１基以外にも十数基の墳丘があったと言われており、群集墳が存在した可能性が高い。今回の調査では、それを実証することが期待されたが、明確な周溝や関連する遺物などは見つかっていない。ただし、高瀬山古墳の南に隣接するＧ３トレンチのＳＸ218とＣ３・Ｄトレンチの ＳＤ25は、カーブを描いてひと続きの溝跡となり、周溝状を呈する可能性がある。また、Ｃ４上部トレンチで検出された溝状を呈するＳＸ23は、段丘崖の上端に位置し、調査区の壁際で検出されたことから、形状はあまり判然としないが、あるいは、これと関連する遺構であるかもしれない。

一方、段丘北東縁辺に位置するＪ１～３トレンチでは、円形又は隅丸方形に廻ると推定される溝跡４条（ＳＤ560・566・575・658）を検出した。高瀬山遺跡（１期）の調査では、隣接する６区において、同様の周溝を有する円墳・方形周溝墓群が検出されており、これらに属する周溝である可能性が高い（第28図）。

なお、集落跡としては、遺跡西側のＨＯ地区で前期の竪穴住居跡が複数散見されるに過ぎない。

**平安時代**　主な遺構は、第１次調査のＣ４下部トレンチ（ＳＴ３）と第２次調査のＨ１トレンチ（ＳＴ238・240）の竪穴住居跡３棟がある。ＳＴ３は段丘崖の斜面上、ＳＴ238・240はその上端の平坦面という立地の違いはあるものの、いずれも最上川に面する段丘南西縁辺に分布が集中しており、同時期（９世紀中葉）に属するものと判断される。このほか、当該区域では、Ｈ６トレンチで大型の袋状土坑（ＳＫ220）が検出されている。出土遺物はないが、覆土の色調・土質から時期的にやや新しいと判断され、これらの住居跡に付随する貯蔵穴である可能性が考えられる。なお、前述した報告（山形県教委 2010）において古代の遺構の中心とされ、平安時代の竪穴住居跡が多数検出されたエリアは、今回の調査ではＥ

北トレンチ・E南トレンチとDトレンチ・J 10トレンチとの間の空白域となっている。近接する調査区からは、Ⅰ2地点とJ 10トレンチの遺構外から須恵器が出土したのみで、関連する遺構などは検出されていない。

**中世**　調査区域の北東端に位置するJ 2トレンチで、7基のピット列（SP 569～572・654～656）を検出した。柱痕跡などは検出されなかったが、ピットの形状や底面に敷石の痕跡が残ることから、根石を据えた2本組の柱穴列である可能性が高い。列は調査区外へさらに続くものと思われ、柵や塀など区画施設の一部と推定される。出土遺物はないが、前述した古墳時代とみられる溝跡（SD 575）を切っており、新旧関係は矛盾しない。隣接する高瀬山遺跡（1期）の調査区（6区）において、類似する中世の柱穴列（第28図）が検出されており、こちらには集石遺構も伴う。位置的に両者が接続することはないが、高瀬山から続く段丘斜面の等高線に沿って、同方向へ直線的に配列される点で共通性が認められる。高瀬山には館跡や経塚といった中世の遺構が存在することから、これらに関連した施設である可能性も否定できない。

## 2　土器型式から見た「ムラ」の存在

第1次～第3次調査にわたる今回の調査では、各時代、および各時期の土器型式を確認することができた。以下に、型式ごとに集計した結果を示す。

**第1次調査出土の土器型式**　第1次調査では、前期（前葉に属するもの、興津Ⅱ式、大木5式、大木6式）、中期（大木7a式・7b式、大木9a・9b式、大木10式、中期末に属するもの）、後期前葉、晩期末（大洞A式）となる。1次に関して本報告に掲載した縄文土器の数（土製品は除外）は、47点である。なかでも大木7a式は、1次の全体の約36%を占め、第1次調査においてもっとも多く出土した土器型式となっている。

**第2次調査出土の土器型式**　第2次調査では、前期（大木1式、大木4式、大木5式、大木6式）、中期（大木7a式・7b式、大木9式、大木10式、中期末に属するもの）、後期（初頭に属するもの、称名寺式、前葉に属するもの、堀之内1式に併行するもの）、晩期（大洞$C_1$式または$C_2$式、大洞A式）、時期不明のものが出土している。第2次調査に関して本報告に掲載した縄文土器の数は、192点である。第1次調査とは異なり、大木10式は、2次の約39%を占める。第1次調査で多かった大木7a式は、2次の全体の5%に過ぎない。

**第3次調査出土の土器型式**　第3次調査は、第1次・第2次調査に比べ、土器は、縄文のみならず土師器、須恵器を含め、極端に出土点数が減る。縄文土器は、わずかに2点のみである。その型式は、それぞれ大木10式と後期前葉に属するものである。

**縄文中期の土器型式の比率**　本報告に記載した第1次調査から3次までの出土土器数は、241点。その全体のなかでの大木10式が占める割合は、33%となる。その9割以上が、第2次調査で出土したものとなる（全体のうちの31%）。それに続いて、後期前葉に属するものが11%、大木7a式が9%となる。ただし、大木7式と大木9式は、それぞれa式とb式に細分しているものと、a式とb式に明確に区別できないものがある。大別した大木7式と大木9式の割合をみると、大木7式が全体の15%、大木9式が9%となる。一方で、大木8式に関しては、今回の調査では確認できない。

**複式炉とその分布**　以上の集計結果を踏まえ、今回の調査では、中期初頭から後期前葉（大木7式～大木10式）の土器が多数出土し、そのなかでも大木10式が主体を占めていることが判った。

そこで、とくに大木10式に注目すると、大木10式がもっとも多く出土した、第2次調査の調査範囲では、その南東に位置するH 5・H 7トレンチより、それぞれ1基ずつ、計2基の複式炉を検出している。H 5トレンチの複式炉は、EL 499で、その土器埋設部がEU 514となる（第78図－76を参照）。このほか、EL 499に隣接した埋設土器として、EU 515と517がある（第78図－77～78を参照）。H 7トレンチの複式炉は、ST 242内で検出されたEL 243である。その土器埋設部として考えられるのが、EU 262である（第106図－82を参照）。2基の複式炉の概要、および詳細については、Ⅳ章を参照されたい。2基の複式炉、およびそれに隣接した埋設土器は、計4個体であるが、4個体すべて大木10式に属する土器である。

さらに、H 5・H 10トレンチからは、大木10式を主とし、中期末葉から後期前葉に属する遺物包含層を確認している。なお、これらの遺構を検出したH 5・H 7・

Ｈ10トレンチは、最上川左岸近傍と高瀬山西麓との間に挟まれたところに位置する。

**想定される「ムラ」の存在とその時期**　以上の大木10式の比率の高さ、およびその大木10式土器段階に位置づけられる遺構の存在を踏まえれば、最上川左岸近傍と高瀬山西麓の間に位置する第２次調査範囲に、少なからず中期末葉に属する居住空間があったことが想定される。加えて、高瀬山ＳＡ地区とＨＯ地区でも、それぞれ大木10式土器の土器埋設部を持つ複式炉を確認している（山形埋文2001・2004）。その従来の調査成果と今回の調査成果を合わせれば、予想される最上川左岸に隣接する広大な土地空間にあった中期末葉の集落「ムラ」の範囲を、より絞ったかたちで示すことになろう。

もちろん、大木10式以外の土器型式も存在しており、大木10式土器段階以外の時期における、ヒトの何らかの営みがあったことも想定される。しかし、この大木10式が占める比率の高さ、および大木10式土器段階に位置づけられる遺構の存在は、今回の調査のなかでとくに際立っている。

## 3　ＳＸ241出土石器資料

その大木10式土器段階に位置づけられるＳＸ241出土石器資料から復原される石器製作技術は、石刃技術と短形剥片剥離技術である。以下に、両技術についてその概略を述べる。

**中期末の石刃技術**　Ｊ１は、石刃技術を示す良好な資料である（第139図－401）。Ｊ１を基準にするとともに、そのほかの資料を加味すると、石刃技術は、稜や下端部、背部の成形を施したのち、単設打面で打面調整と打面再生、頭部調整と前面角の擦り調整、場合によって新稜成形を繰り返しながら、背面側に湾曲した石刃を剥離していく方式である。方式を進めていく際には、石核成形・整形や打面再生で、硬石製ハンマーによる直接打撃が、石刃剥離で鹿角製ハンマーか軟石製ハンマーによる直接打撃が用いられた可能性が考えられる。

剥離された石刃は、ＳＸ241、および大木10式土器とともに出土した第２次調査Ｈ８トレンチＳＸ292の石刃製エンドスクレイパー（第128図－349）、Ｈ４トレンチのＳＫ384の石刃製の尖頭スクレイパー（第118図－277）、そして大木10式土器段階で石刃製トゥールが出土した同市うぐいす沢遺跡（山形県教委1981）などの関連遺跡を参考にすれば、エンドスクレイパーを中心にし、単刃・複刃スクレイパー、石匙などの素材に供給された。とくに、エンドスクレイパーの量が際立っている（石井1994）。

**短形剥片剥離技術**　一方で、短形剥片剥離技術は、基本的に背面に自然面を大きく残した厚手剥片を用い、打面作出をしながら、厚手剥片の腹面側に作業面を設定して、末端がヒンジとなる短形剥片を剥離していく、石刃技術に比べ、単純な方式である。短形剥片は、硬石製ハンマーによる直接打撃で剥離された可能性が高い。短形剥片とトゥール素材との関係は明らかでないが、短形剥片の形状からは、石鏃の素材となることが予測される。

**短形剥片剥離技術にみられる技能差**　厚手剥片を含む、短形剥片石核には、Ｊ21（第179図－516）・Ｊ22（第181図－519）、短形剥片石核527・539・540（第188・192図）などのように、乱打した痕跡や石核を二分する折損が観られる。特にＪ21の517（第179－516）は、乱打痕が約２cmの範囲で観られ、さらに割れに至らなかったヒビが認められる。明らかに、また石器作りに習熟していないヒトによる打撃の痕跡である。乱打痕の範囲、割れに至らなかったヒビ、短形剥片の大きさと重さを考慮すれば、石器作りに未熟な“コドモ”の存在が想定される。一方で、ＳＸ241出土石器資料からは、複雑な方式で、テクニックに関する一定の技能を要する石刃技術ができる、石器作りの熟練者の存在も窺われる。

**石器資料がＳＸ241に溜められたことの意義**　ＳＸ241出土石器資料は、遺棄ではなく廃棄された可能性が高い資料であることから、より具体的なヒトの構成について言及することが難しい。翻って、ＳＸ241に溜められた可能性の高いＳＸ241石器資料は、集落の中で容易に接することができたことが考えられる。ＳＸ241内の資料をすべて回収していないものの、短形剥片と短形剥片石核との接合例は、Ｊ17（第174図－500）のみであり、その事実からすれば、短形剥片の使用率は高かったことが想定される。つまり、ＳＸ241内に石器資料を溜めていたからこそ、高頻度の消費、すなわち再利用が可能であったのであり、またコドモも容易に石器資料に接することができたと考えられる。

## 4　J 15 出土旧石器資料

**これまでの調査**　本遺跡では、以前から旧石器が確認されている。ナイフ形石器・槍先形尖頭器・ホロカ型細石刃核を含む石器群（山形埋文 2004）、基部整形石器群（寒河江市教委 1987）、石刃石器群（山形埋文 2004）、槍先形尖頭器石器群（山形県教委 1982）、ホロカ型細石刃石器群（寒河江市教委 1986·2001）、縄文草創期石器群（寒河江市教委 2001）である。今回の第３次調査Ｊ 15 トレンチ発見の杉久保型ナイフ形石器群は、高瀬山遺跡において新たな発見であり、かつもっとも古い石器群である。

**Ｊ 15 出土旧石器資料の年代**　Ｊ 15 トレンチで石器ブロックとともに出土した炭化物の AMS 年代測定の結果は、18,350 ± 70yrBP といった、後期旧石器時代後半期の年代である（第Ⅵ章を参照）。2011 年の高瀬山遺跡発掘調査団採集の土壌サンプルによるテフラ分析でも、Ｊ 15 出土旧石器資料がＡＴ火山灰（約 2.5 万年前）よりも新しい結果が得られており、ＡＭＳ年代値の蓋然性の高さを示している。この年代値は、高瀬山遺跡における旧石器編年に寄与するだけでなく、これまで層位学的に、そして型式学的に年代的な位置づけが困難であった、小国町横道遺跡などの山形県内における杉久保型ナイフ形石器群にたいする年代的位置づけにも、大きく貢献することになろう。

**最上川中流域の原産地遺跡**　最上川中流の河川敷は、石器石材に適した良質の珪質頁岩の一大産地である（秦 2011）。上述のように、高瀬山遺跡として設定された範囲では、後期旧石器時代後半期から縄文時代草創期にかけての石器群が多数発見されており、最上川中流域における旧石器の密集地と言えよう。これらの石器群の主要な石材は珪質頁岩であり、かつ多量の石器製作が認められる。また、前述のＳＸ 241 も含め、珪質頁岩が豊富に採取することができる石材環境が、旧石器時代から縄文時代の各時期に、高瀬山の周辺における集中的な石器製作の痕跡が残された大きな要因であったと考えられる。もちろん、単に石材環境だけではなく、多量の石器製作を促した生業などの要因も絡んでいたものと予想される。各時期における石材環境以外の大量の石器製作を促した具体的な要因については、今後の検討課題となる。

**Ｊ 15 出土旧石器資料の石刃技術**　Ｊ 15 出土旧石器資料における石刃製作では、２つの方式と２つのテクニックが認められる。方式では、細身の石刃と幅広の石刃を割り出す２つの方式であり、横道遺跡の石刃技術での傾向と共通する（加藤・会田 1998）。前者は、作業面を幅の狭い面に設定し、基本的に単設打面で石刃を剥離していく。石刃剥離には、鹿角製ハンマーによる直接打撃が用いられた可能性がある。後者は、作業面を幅の広い面に設定し、両設打面で石刃を剥離していく。石刃剥離には、軟石製ハンマーによる直接打撃が用いられた可能性がある。しかし、前者でも幅広の石刃が剥離される場合もあるし、後者でも細身の石刃が剥離される場合もある。

細身石刃と幅広石刃では、トゥールの使い分けがなされており、細身石刃が杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器、双面彫刻刀形石器、幅広石刃が神山型彫刻刀形石器と小坂型彫刻刀形石器となる。神山型彫刻刀形石器が細身と幅広の石刃の両方が使われているものの、ナイフ形石器と小坂型彫刻刀形石器は、その石刃素材を使い分けている傾向がある。

**細石刃技術**　石刃関連資料のほか、Ｊ 15 出土旧石器資料のなかには、石刃に比べて生産量は多くないが、直接打撃で剥離されたと考えられる細石刃が一定量認められる。新潟県津南町向原Ｂ遺跡（津南町教委 2005）などで発見された杉久保型ナイフ形石器群の中には、厚手の小型剥片の小口から細石刃を剥離し、細石刃から小型のナイフ形石器を製作する状況が、一定量看取される。Ｊ 15 出土旧石器資料は、小型のナイフ形石器が含まれていないものの、そうした小型のナイフ形石器を製作するための細石刃技術を有していることも予想される。

**被熱石器**　Ｊ 15 出土旧石器資料には、被熱した石器が含まれている。被熱した石器は、特定の器種のみで構成されるのでない。ランダムに被熱していると言える。石器ブロックの東側に被熱石器が集中し、高瀬山遺跡発掘調査団による調査でも、Ｊ 15 における被熱石器集中の隣接地に、被熱石器の密集が確認されていることから、石器ブロックの東側に隣接して炉が設けられ、その近くに散布していた石器資料が被熱したものと考えられる。

**使用痕分析**　使用痕分析では、676（第 233 図）と 850（第 287 図）について刺突痕の可能性がわずかながらあるものの、１点の石刃（第 282 図－ 829）が何らかの切断に用いられたと判断される以外、ほかはまったく使用

痕が検出されなかった（第Ⅵ章参照）。このことは、当該地点が石器使用の場ではなく、石器製作に集中した場であったことを意味していよう。また、各種の彫刻刀形石器にも使用痕が検出されなかったことは、「トゥールとしての彫刻刀形石器」の意味を考える上で、一考を促すことになろう。

**石器ブロックの保存性**　一方で、使用痕分析により、埋没後に生じる表面変化がほとんど認められなかったことは、石器ブロックは、埋没後に二次的な移動がほとんどなかった可能性が考えられる。加えて、個々の石器資料は、大半が広い面が層理面と並行的、すなわち“寝ている状態”である。さらに、被熱した石器が狭い範囲に集中している。つまり、石器資料の表面観察、および出土状態からは、果樹等の植物根の侵入とごく一部に工作による影響を除けば、石器ブロック全体が二次移動がほとんどなかったという可能性の高さを示している。

なお、平面分布に関する詳細な分析については、今後高瀬山遺跡発掘調査団の資料とを合わせて進めていく必要がある。

**二次移動にかんする微視的観察の有効性**　なお、石器資料の微視的な表面観察は、遺物の二次移動の判定する上で、有効な方法と言えよう。遺物の二次移動の判定する方法は、クリノメーターによって出土時の遺物の走向や傾斜を測って統計を行い、統計データを解釈的に判定するファブリック解析による方法もあるが、石器資料表面の微視的な観察の方も有意な方法と言えよう。

**ＳＸ241出土石器資料との比較**　ＳＸ241の石刃技術と比較すると、方式の面では、石刃核下端部の成形と背部の作り出しの違いが認められる。加えて、ＳＸ241出土石器資料は、基本的に単設打面のみで石刃剥離が行われるが、Ｊ15出土旧石器資料は、両設打面でも石刃剥離が行われる。求められた石刃形態にも違いが認められる。一方、テクニックの面では、両者に違いはみられない。ともに、鹿角製ハンマーと軟石製ハンマーによる直接打撃が認められる。

また、Ｊ15出土旧石器資料には、ＳＸ241出土石器資料のような、厚手剥片の再利用、未熟者による打撃痕が認められない。後者が定住的な生活形態であったのにたいして、前者は遊動的な生活形態のもとに残された資料と言える。つまり、両者に認められる石器製作技術の技術差は、そうした生活形態の違いが大きな要因の一つとなっていると考えられる。

## 引用・参考文献


石井浩幸　1994　「縄文時代中期（大木10式期）の石器組成－寒河江川・最上川流域の遺跡調査から－」『西村山地域史の研究』第12号 p.47～p.60　西村山地域史研究会

石沼浩幸　1998　「寒河江市柴橋遺跡出土の石器接合資料」『西村山の歴史と文化』Ⅲ　p.1～p.20　　西村山地域史研究会

大場正善　2011　「山形県寒河江市高瀬山遺跡－高瀬山西麓に残された杉久保型ナイフ形石器群の全貌解明を目指して－」『第25回　東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』 p.66～p.73　東北日本の旧石器文化を語る会

大場正善・今正幸　2011　「山形県寒河江市高瀬山遺跡－㈱山形県埋蔵文化財センターによる高瀬山遺跡（ＨＯ）３期第３次調査発見の杉久保型ナイフ形石器群－」『第25回　東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』 p.56～p.65　東北日本の旧石器文化を語る会

加藤稔・会田容弘　1998　「山形県小国町横道遺跡の研究」『東北芸術工科大学紀要』第５号　p.100～p.147

寒河江市教育委員会　1981　『高瀬山遺跡群分布調査報告書』 p.42　寒河江市埋蔵文化財調査報告書第１集

寒河江市教育委員会　1982　『高瀬山遺跡群分布調査報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第１集

寒河江市教育委員会　1986　『高瀬山Ｋ・Ｌ遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第５集

寒河江市教育委員会　1987　『高瀬山Ｂ・Ｋ遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第６集

寒河江市教育委員会　2001　『高瀬山（市道駅南高瀬山線・島落ち線）遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第６集

寒河江市教育委員会　2002　『寒河江市内遺跡発掘報告書（９）』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第22集

寒河江市教育委員会　2012　『寒河江市内遺跡発掘調査報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第32集（刊行予定）

菅原哲文　2007　「縄文時代中期後半の集落様相－山形盆地西部の遺跡を中心として－」『さあべい　第23号』 p.1～p.19　さあべい同人会

津南町教育委員会　2005　『町内遺跡試掘確認調査報告書（５）＜谷内地区遺跡群＞槍沢遺跡　向原Ａ遺跡　向原Ｂ遺跡　向原Ｃ遺跡　観音堂原遺跡』津南町文化財調査報告書第48輯

秦昭繁　2011　「山形盆地の往賃頁岩の原石調査」『山形考古』第９巻第３号　p.16～p.26　山形考古学会

山形県教育委員会　1981　『寒河江市うぐいす沢遺跡第１次発掘調査』山形県埋蔵文化財調査報告書第41集

山形県教育委員会　1982　『分布調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第61集

山形県教育委員会　2010　『分布調査報告書（36）』 p.93　山形県埋蔵文化財調査報告書第212集

(財)山形県埋蔵文化財センター　2001　『高瀬山遺跡（ＳＡ）第２・３次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第94集

(財)山形県埋蔵文化財センター　2004　『高瀬山遺跡（１期）第１～４次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第121集

(財)山形県埋蔵文化財センター　2005　『高瀬山遺跡（ＨＯ地区）発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集